

戦姫絶唱・テイルズ・
オブ・シンフォギア

にやはっふー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

やってしまった、初投稿しました。

全てにおいて初が付く作者です。豆腐よりも壊れやすいメンタルですが、間違いの指摘などは募集しております。

この物語はオリ主が色々都合よく暴れる物語。チートだの、なんだのありありです。

とりあえず挨拶などはここまでにします。操作や投稿間違えてないか怯えながら、主人公の物語を語らせていただきます。超怖い。

とある世界に一人の少年はいた。少年の周りでは不思議なことがよく起きた。

少年はついに異世界にやってきた、その世界を壊すために。

とか言われても気にしない少年は、いつの間にか敵と仲良くなり、一緒に世界を救う。あとは気ままに平和を過ごそうと思っていた。だけどそれは許されなかつた。

(途中でタイトルがロイドくん達とかぶっているのに気づく。申し訳ございません)

目次

設定とあらすじ	1
帰る前の下準備	5
楽しい異世界シヨッピング	18
火災現場で始まる物語	26
情報交換、それぞれの立場	41
救世主と歌姫	61
動き出す思い達	77
墜ちた英雄と戦姫	99
思いと想い	124
無双	141
自由の灯火	160
番外編・シリアスはない	175

状況は最悪だというこがわかった	184
謎が謎を引き寄せる	199
連戦、乱入の大騒ぎ	218
龍の過去、絶望の世界で	233
二つのガングニール	255
霧に包まれた真実	271
私はだれ？	286
番外編・嵐の前の静けさ	303
嵐は動き出す	312
闇と狂気と防人	340
真っ白な世界か真っ黒な世界か	361
さあ、終わりを始めよう	388

狂いきった黒と真つ直ぐ過ぎる白の激闘

403

自由の旋律

431

黒の輝き

449

最終回は番外編・オチは決まってる

463

設定とあらすじ

オリジナルキャラ説明（能力隠し）

劍崎・龍（けんざき・りゅう）性別男性、現在16歳。

黒いボサボサ髪に黒目の日本人。いわゆる転生主人公。

物心ついた時から親はなく、孤児院を転々とたらい回しされ続けたが、あまり気にしていない。

たらい回しの理由は、彼の周りに不可思議なことが起き、気味悪がられたりとさまざまな理由が挙げられるからだ。

16になる時、女の子の声を聞き、それを追っていったら次元の亀裂のようなものになり、ついに異世界、ルミナシアにやってきてしまう。

その際、カノン・グラスバレーに出会い、行く当てもないので彼女が所属するギルドに住み込み、この世界で生きようと思っている。

所属するための試験を受けているとき、空から女の子、のちに救世主になる彼女を拾い、世界の命運を賭けた戦いに巻き込まれる。

戦いの中、自分が自分になる前、なんであつたかを知る。

それでも、いまと、前は違う。そう判断して、彼女たちと共に、世界をよき方向に導く手助けに、その『前の自分』の力を使う。

救世主と前の自分の力、そしてカノン、仲間達のおかげで、いまは平和な時を過ごす。はずだった。

主な武器は、剣士の技に、格闘技。

前世が人間でないためか、この世界に来てから飛躍するほど身体能力があがり、だいたいこの言語や文字は、見ただけで理解できる。

魔術も扱うことができるが、専門の方々から邪道と言われるほど、なにが何でも接近専用にかえて使う。

性格は面倒ごと^{ゴト}に首を突っ込むことを嫌うが、一度決めたことは死んでも貫くめんどくさい性格をしている。

彼らの仲間曰く、素直ではない、ツンデレ、鈍い、イノシシ、戦闘狂などなど。

料理など家事はでき、頭はいいはずなのに、面倒と言って力業で仕事する。

★★★★★★

俺の名前は『剣崎龍』。本当なら普通の高校生のはずだった男だ。

だが、自分はどうかやら普通ではない。まあ当然だ。まず異世界に来たんだ、普通じゃ

ねえ。

元々普通じゃない気配や、出来事はよく自分の周りに起きる。これは子供の頃からだが、実は五歳くらい、つまり物心が付いたときから起きるのだ。

そもそも、物心ついたときからおかしい。気が付けば森の中にいて、大人達に発見されたんだ。最初は捨て子扱いだったが、あとから捨て子ではなく『そのとき生まれた』のだろうと推測できる。

そのあとは、色々たらい回しにされた。まあ当然だ。俺は普通の人間じゃない。なんだろう、事実なのにこの厨二病感。

別に不満はない、どうでもいいの一言ですまして過ごしてきた。

そんな日々を送り、ある日、森の中で声を聞いた。

『こっ……ち……僕の……』

これはあとから本人に聞いたが、力が必要だったから君を呼んだと、彼女『ラザリス』から聞いた。

彼女とのやりとりは、この物語にとってはすでに終わった物語。ここで語る必要はないだろう。なによりいまはいない。深い眠りについて、いまは会えない

それでも唯一語るとしたら、彼女は俺という異質を招く際、

『この世界だって、別世界を利用したんだ。それを利用させてもらったよ』

と得意げに言った。それについても、謎のままだった。

さて、そんなことはさておいて、いまを説明しよう。

「……なんだって?」

俺はまた声を聞いて、仲間達に内緒でギルドから抜け出し、声の主に話を聞きに行つた。

俺は森の中を駆け抜け、開けた場所に着くと、それらは現れる。

紅蓮の炎を纏う、上半身だけの魔神。

モグラのようなもの、ダイヤのような鉱物をはやしたもの。

下半身は魚の、身体が液状の女性。

白いワンピースを着た、両腕が翼の、緑ストレートの女性。

彼らは『精霊』と呼ばれる存在。始め消されるか?と考えたが、氷の精霊と知り合いため、それはないと思つたが、そういう話ではないらしい。

だが火の精霊、イフリートは静かに言つた

「汝の世界、いや、汝が生まれた世界に、異変が起きている。故に元の世界に出向き、解決して欲しい」

俺はとりあえず、逃げ出したいと心から思つた……

帰る前の下準備

朝早朝、俺こと龍、こちらではリユウとも呼ばれてる俺は、ギルドマスターに依頼内容を説明する。

まず精霊達についてだが、詳しい内容は元居た世界で異変が起きるとしか聞いてない。

具体的な内容は彼らもわからない。正直受けたくないが、やはり気にはなる。

俺が所属する組織『アドリビトム』を管理するマスターを始め、口が堅い仲間達に説明をした。

その中の一人、クラトスという、俺を始め、若い者が多いこのギルド。メンバーの剣の師匠とも言える人が口を開く。

「お前一人で行く気か？」

それに関しては全員の意見らしいが、俺は静かに頷く。

「俺の世界は特殊だね。『ノイズ』ってというのが、魔物みたいにいるんだ」

「のいず？」

誰かが疑問系で聞き返す。

俺も詳しくは知らないが、特殊指定災害？という名の存在を説明する。

何年前かに世界政府が発表したそれは、触れただけで人を殺すことができる、とんでもない存在だ。

それを聞き、少し信じられない顔をしているメンバーだが、俺は続けることにする。

「ノイズは俺でも、力を展開していなければアウト、だと思う。なにより、メンバー全員がいる前で話持ち込まなかった時点で、精霊達も危惧してるんだろう。他の奴らには悪いけど、ノイズと戦う羽目になれば、俺か彼奴しか、対処できない」

「そもそも、それが世界の異変ではないのか？」

「わからん、少なくとも戦闘を想定して俺か彼奴以外、俺はあの世界に行く気はないし、引いて言えば、彼奴を連れて行く気もないから、こうこそ話し合いを始めてる」

こんなこと話せば、我らが救世主は、異世界も救世しに来るだろう。

それだけならいいが、触れなきやいいだけだと、お節介の固まりとしか言えない仲間達が次々とあの世界に流れ込むことになる。

それを察してか、何名か頭を抱えたり、ため息を吐いたりしていた。

「はあ、それにしてもタダ働きか・・・」

そう、ギルドマスターことアンジュが呟く。

「正直、貴方指名の依頼があるし、あの子達のこともあるから、いなくなられても困るん

「だけどね」

「すみません、準備ができ次第出発と、終わり次第帰ってきますから」

「わかったわ、貴方の長期クエストを承諾するわ」

「はい」

「準備というのは、いったいなにをする気だ？」

クラトスの問いに、俺は簡単に説明するように頷いて、復唱するように伝えた。

「まずは宝石、貴金属関係のアイテムを持つていく。向こうの世界とこちらの世界が同じ時間で動いてるんなら、色々と問題が起きてるはずだ」

まず召喚前、俺の向こうの生活を説明する。

中学を終えたあととは、簡単にバイトばかりして生計を立てていた。正直高校に行く気もないし、孤児院は中学出たらついに独り立ちさせたのだ。

寝る場所は、ネットカフェ、ここでは宿屋ということにして、そこを転々としていたと付け加え、俺は向こうの予測を立てる

「俺がいなくなっても騒ぎにはなっていないが、一年くらいは経ってるから、正直金の問題がある」

前の暮らしに戻ればいいだけだが、なにがどうなるかわからない。資金は欲しいところなので、俺はこちらで稼いだ資金を使い、向こうで金にかえられる宝石、銀食器など

を持って帰ることを説明した。

次の問題は、衣類だが、これはなんと、こちらの世界にある。

というのも、どのネットカフェを拠点にしようか考えている際、こちらに呼ばれたのだ。実は全ての荷物はこちらの世界にある。むしろ研究対象として学者達に盗られた。

「リュウ、気のせいかな誤解のある考えをしてないか？」

「次の問題は」

俺は無視して続ける。

次の問題は、銃刀法違反、つまりこちらの世界で世話になった武器一式を、持ち込めないという事態だ。

俺は仕方なく、腰に下げた剣を仲間達に預けることを説明した。

「次の問題は、本題、異変だけど・・・」

「その、のいず？ だったかしら？ それが関係してるのかしら？」

そう、アンジュの言うとおり。向こうの異変について、俺は精霊達から聞いてない。曰く、わからないらしい。

精霊達の反応からして、知らないのは事実だろうと思い、俺は依頼を引き受けて今に至る。

だが正直に言えば、向こうの世界に異変なんて、ノイズしか思いつかない。

まあ、不思議なことばかり体験してる身としては、向こうになにかあっても不思議じゃない。現に向こうの世界で、俺が生まれたんだから。

「とりあえず子ども、俺の向こうの持ちもん返せ。あとは準備ができ次第、向こうに向く」

「わかったわ」

そう言い、学者達は（明らかに渋々）荷物を返し、俺は準備に入る。

精霊達が指定した場所は『世界樹』の根本、そこで俺は向こうに帰る。

いまいるメンバーは、クラトスとアンジユ。隠れるようにギルド本部を出ていき、いまは世界樹の根本に向かう。

「世界樹……」

それは目の前の大木、世界樹を見つめる。

それは世界を生み出す樹、いまは鉱石のようなものと共存しているように、いま世界を優しく見守るその樹を見つめる。

本来、俺はその鉱石とともに、この世界を害悪として現れたのが、いまはこんな事態になっっている。

なにより、

「服が少しきつい・・・」

「少し背が伸びたんじやない？ それより、その格好があなたの世界の服なの？」

俺はいま、安物の服を着ている。なんと五枚セットで安く売られていた大手のものと説明する。

ズボンや上着なんて、変じやなきやいい。だから俺を基準にされたら、向こうの世界の人達がかわいそうだ。

そんな話をしながら、クラトスは静かに、俺に話しかけた。

「お前は向こうの世界にとどまる気は」

「ない」

それははつきりそう告げた。

向こうに友人も、家族も、なにもない。恨みもなければ、希望もない。だから、

「俺は必ずクエスト達成報告しに帰るよ」

「ええ、それはしてもらわないとね」

ほほえみながら返すアンジュに対して、クラトスは静かにこちらを見つめてくる。

クラトスは何かを考えているか分からないが、俺は俺の世界に興味はない。

という、嘘を見抜いてるんだろう。

正直に言う、俺は向こうの世界が嫌いだ。

いや、滅んだっていいと思ってる。

俺はそう思う、出来事を知っている。俺は向こうの世界がゲスだと思ってる。精霊が頼んで来なきや、無視している。勝手に滅べ、そう思っている。

それを見抜いているような視線を感じながら、ついに根本までたどり着く。

「これが精霊が言ってたもんか」

「光の門、って言った方がいいわね・・・」

感嘆に満ちたアンジュのつぶやきに同意する。

俺たちの目の前に、光り輝く光の道がある。あとはそこを通るだけで、あの世界に向く。

それに若干、俺の力が蠢いた気がしたが、押さえる。

やはり俺は嫌悪している、あの世界が嫌いで仕方ない。

俺は剣などの武器を、クラトスに預けつつ、光の道を見つめる。

「それでは、リュウ・ケンザキ。ただいま精霊の依頼にて、異世界出張に行つてきますマスター」

「はい、受理します。いい結果を待っているので、速やかに帰るように。あと、こちらでできることがあれば、ためらい無く連絡などするように」

「はい」

連絡手段などは思いつかないが、いまはとりあえず、精霊達を信じよう。

搜索届けは出す人なんて思いつかないが、俺はかなりの月日をこちらで過ごしている。まずは情報集めと住処を見つけたいとな。

そう考えていたためか、気づかなかった。

アンジユは俺を見送るため、気づかなかった。

クラトスは俺の心境を見抜くつもりでいたため、気づかなかった

「!!?」

始めクラトスが気づく、二つの影が俺に接近していることに、そのあとアンジユ。俺は気づかなかった。

そういえばこの道の先なんだろう？俺がこちらに呼ばれた場所なら日本だよなと思いつながらだつたため、気づかなかった。

「!?!」

後ろからだきつかれるようにタツクルを食らい、そのまま道に入ってしまった。

「ちよっ」

アンジユの悲鳴を聞きながら、俺は意識は一度ブラックアウトした。

「・・・マジか」

俺はまず現状を把握するために当たりを見渡す。

ここは俺が初めてルミナシアに行つた先の森だ。ならばここは日本だろう。外国じゃないことにひとまず安堵する。

荷物からスマホを取り出し、充電器（手動）で充電して、久しぶりに蘇るスマホを操作する。

「・・・やっぱ、それなりに月日は進んでるな」

予測通り、俺がルミナシアに向いてから、月日が経っている。

っていうか、

「・・・なにこれ」

ニュースなどの見て驚く。なんかクレーターが都内でできてる映像が入る。

「なんだこれっ!?! ミサイルでも撃ち込まれたのかおいつ」

それだけでなく、過去の記事を見ても驚くことばかり。

曰く、月が丸くなくなった。欠けてるっ、なんでやつ!?!

ノイズ殲滅成功、のあとに、生き残りあり? なにがあつた世界よっ

集団変死事件、これもなにつ!?! 全員白髪になってミイラか廃人みたいになつてる。

ノイズじゃないのかよ。

いま一番は都内で起きた爆発によるクレーターのようだ。いまだニュースはそれを

流している。

「えっ、カオスだぞおい。つていうか待て、異変って現在進行形？」

あとは歌姫達の帰還、マリア、翼・・・ああいいやこれ、アイドル関係ないない。

そんなことしながら、俺は空を見た。いまの時期は夏、夏休みという時期か。

簡単に見ただけで、世界がなんか色々あったようだ。こんな短い期間になにがあった

のさこの世界。まあいいや、

「空気が汚染されてるな」

帰って来ての感想は、やはりルミナシアと違って、空気が悪い。

俺はいま地球に帰って来たという実感をかみしめつつ、俺ははまだ目覚めない片方の

頬を突く

「同じ年くらいの少女達、同じ年か年下の美少女二人。

「にやつ」

そんなこと言っても許す気はない。大剣、明らかな刃物を持つ、ピンクの髪の少女、カ

ノンノ・グラスバレーを睨む。

「お前らは・・・」

「りゅ、リュウがいけないんだよっ、どっかに行くつて聞いたから」

彼女はカノンノ・グラスバレー。俺がルミナシアに来た際、始めにあった異世界人。

ポニーテイルの少女は、剣と大きな荷物を持っていて、俺は睨みながら見る。

「誰から話を聞いた」

それに目を逸らしつつ、とあるマッドサイエンティストの名前を口にする。

「ハロルド……」

虚空を睨み、荷物返すのに一番渋っていた学者を思い出す。

「つてことは、カノンノ、お前話の内容は」

「えつと……貴方の世界に、触れてただけで人を殺せるものがない、彼女と貴方以外は危険」

「なら来るんじゃないえッ」

俺は少し怒鳴り声を出し、それにびくつと震える二人。あつ、こつちも起きてる。

カノンノは申し訳なさそうにしている中、俺はため息を深く吐き、まずはと考える。

「とにかく、この世界でお前らの衣服は目立つ。まずは俺が安物の女服買うから、それ着て衣類の買い出し。あとはこの世界の常識を一通り教えるからな」

「はい……」

落ち込むカノンノを無視して、俺は狸寝入りしている救世主の頭を叩く。

「いたっ」

「お前も起きろ、救世主」

「わたしは？」

「セレナは……平気だろ」

「やった」

うれしそうにするセレナに対して、カノンノは泣きそうな顔でこちらを見る。
俺は無視して、町を見下ろす。

少し前、

「ん？」

一人の少女が後ろを振り返る。それにリボンをつけた黒髪の少女が首を傾げた。

「どうしたの響？」

「えっと、なんでもないよ未来」

一瞬光のようなものが見えた気がしたが気にせず、彼女たちは歩き出した。

いま、物語が始まる、少し前……

楽しい異世界シヨツピング

「なんでこうなった・・・」

とあるシヨツピングモール。ベンチに座り、目の前の店、服を選んでいる仲間達を見る。

まず最初に、カノンノには安物でも女物の服を着てもらい、次に普段着を本格的に買うために、大型の店に着たのだ。

ちなみにカノンノは向こう、異世界の格好の上、大きな剣を持っている。剣を土の中に隠し、服は公衆トイレで着替えてもらった。俺が持ってきた服を、有無を言わせずに着ろと言ったため、セレナに睨まれた。

いまは向こうで着ている服の夏服版という格好のカノンノ。セレナも、異世界の服になのか、まあ二人とも楽しそうに買い物をしている。

(女子はどこ行ってもオシヤレは好きなかね)

二人には、この世界のある程度の常識を教えている。車など、カノンノはオーバー過ぎるリアクションをしたが、こちら側の人間にとって、世界中飛び回る、我がが本部分と、飛行船の方が珍しいんだけどね。

セレナも初めての光景にびっくりしているが、前々からこちらのことは話したりしているため、すぐに休みにはしゃぐ少女達と言う反応になった。これは客観的で始め不安だったが、いまは大丈夫だろうと思う。

なぜなら、

「あ、あの、僕はもう大丈夫ですからっ」

「ええ〜〜」

隣の店から大きな声で悲痛の叫びが聞こえる。なんだろうと思いちらつと見ると、金髪の子が泣きほくろ、妹かなにかの少女の服を買っている、女子学生達が居た。

夏服らしき女性の団体、その一人がこれでもかと言わんばかりに彼女に着せようとする服を持っている。

「せっかくのお買い物なのに、買い物しないなんてもったいないよっ。エルフナインちゃんかわいいんだから、もっといっぱい可愛い服着せたいよっ。あつ、この服可愛いっ、エルフナインちゃんにびったりだよっ。次これ着よこれっ」

「ふえっ」

そんなカノンノ達以上にはしゃぐ少女がいるんだ。大丈夫だっと言う心境で、金髪の子はツイテールの黒髪の子と協力して、まだ着せる服を集め、お目付役らしき二人の少女達はその光景を困ったように見ている。

お金あるんだろうな、いいなくとしか思えない。

二人には悪いが、使用する資金に制限をつけて、値札見ながら買い物してもらっている。

まずは宝石を売るため、そう言った店に出向いて宝石を売った。宝石と言っても向こうでも安物で、学生が持つてもギリギリ、これは気迫と演技力でカバーして、日本円に変えた。

むろん、大量な宝石を学生が持ち込めばまずは警察なのは分かり切っているため、それを配慮してだ。

次に、こちらにいた頃貯めに貯めた口座を確認。まだ生きていたため、俺一人なら何も問題なく過ごせただろう。

だが問題は異世界人である二人だ。

俺はともかく、二人には戸籍がない上、女の子だ。ちゃんとした衣食住を配慮しなければ、ギルドマスターに戻ったとき、どんなペナルティーがあるかわからない。

(まずは二人にはホテルなりで寝泊まり、俺はもう公園かどつかで野宿だな)

昔はともかく、向こうでは野宿には慣れた。いまならできる選択肢である。

(問題があるとすれば、自分達はふかふかベットで、俺が草の上に納得するかだ)

そこ向けのお人好しズの仲間である以上、反対するだろう。だが、二つも部屋を借り

るもとい、資金使用は控えたい。

「なら、一緒に部屋にすればいいじゃない」

怖い怖い怖い怖い。いま二人に相談したらそんな返しが来る気がして、ぞつとした。

年頃の女の子二人に男性一人？ 帰ったら慈悲無しで処刑される。比喻なく死ぬ。

ただでさえ、帰ってきたら異常な事件が立て続けに起きている世界に帰ってきたのに、その後も地獄つてどんな話だ。俺は前世でなにかしたか？ いや前世事態、世界に害悪なもんだったんだ。くそつ。

「リュウ、買い物終わったよ」

そう言つて、衣類を買い終えたカノソノが話しかけ、セレナもちよこつと隣の店の騒ぎをちらみしたが、すぐにこちらに振り返る。

「大丈夫？ ずっと難しい顔してたけど・・・」

「セレナ、そう思うならなんのためらいもなく飛び込んでくるなよ」

「はうっ」

二人して凶星をつかれ、すまなそうな顔になる。反省はしているようだ。

正直ここに戻つたら、やることはたくさんあるが、一人ならノープランで問題ないと考えた俺の落ち度だ。

連絡手段、帰還のための術、生活維持、異変への対応等々。考える時間があるのに、まずは現地に着てからと考えた俺のミスだ。

二人にはそう言うが、まだ少し落ち込んでいる。このままではなにも進展しない。

「とりあえず移動するぞ、話はどっかの公園のベンチで、落ち着きながら対処する」

「了解」

そう二人は言い、俺たちはその場をあとにする。

「デス？」

そのとき、三人組の男女を振り返る。持っている服を柵に返そうとしているときだ。

「どうしたの切ちゃん？」

ツインテールの少女が首を傾げ、話しかける。

「あつ、いえ。なんでもないデスよ調っ」

だが一瞬、一瞬とは言え、先ほどの三人組。その中の少女の後ろ姿を思い出す。

「・・・気のせいデスね」

そんな分けない、あるはずがない。そう言い聞かせ、着せ替えは続いた。

どこかの公園のベンチに座り、俺はスマホを操作、カノンノ達はそれを見つめる。

「つていうか、セレナは格好そのまままで平気か？」

「ん〜少し暑いけど、平気だよっ」

「セレナだけ、この世界と違和感ないよね？ いいな〜」

カノンノはこの世界に来て、まず思ったのは季節の違いだったため、いまは夏服使用になっている。あいにくと女性服の知識がないため、夏服で、なるべく前の服をイメージしたという程度の反応。なぜか頬をふくらませ、そっぽ向かれた。

まあそれはいい。ドーセ新しい服ほめなかったことへの不満だろう。

「しっかし、なにがあつたよ世界。月欠けたり、テロあつたり、ノイズ殲滅つてなんだ？ マジか、ノイズどうやって殲滅したんだよ」

俺の知識ではノイズに対抗する兵器は無かつたはずだ。それなのに、ネットではノイズはいなくなつたという話題があるのに、再誕するノイズと言う記事もある。

極めつけは都内の巨大クレーターだ。政府ははまだ詳細を発表してないが、事件の終わりは告げている。

「人が異世界で己の出世やら、異世界の命運賭けた戦いしてる間、こつちじやなにが起きてたんだよ・・・」

異変は終わったのか、終わってないのか、それとも起きるのか。いまだわからない。

「・・・」

思考する。まず自分達はなにをすればいいのか、考えなければいけない。

「……」

そんな中、セレナがふいに、スマフォ画面を見つめる。

アイドル記事で、一人の歌姫が映っているが、俺はそれに首を傾げた。

「どうした」

「えっ、なにが？」

だがセレナはなにか分からず、聞き返す。無意識の反応か？ まあ異世界だから、珍

しいんだろうな。

「まあいい、とりあ」

俺がなにか言おうとしたとき、

そのとき、なにか大きな爆発音が鳴り響く。

「「!?」」

三人はすぐに音のした方を見る。黒煙が上がり、少しずつ騒ぎ声が聞こえ出す。

「とりあえず、力使わずに救命活動するか」

「うんっ」

魔術など、異世界の力は使えない、使わない。と強く言い渡し、三人は駆けだした。

「はい師匠ッ」

四人はすぐさま連絡を受け、一斉に出る。話し相手は同一人物だった。

『都内で謎の爆発事故が起きたっ、原因は不明だが、かなり火の周りが早いっ。我々の出動要請が来たっ、すまないが休みは返上してくれ』

「了解しましたっ」

「チツ、しかたねえな」

「がんばるデスよ調っ」

「うんっ」

そうやって、彼女らも走り出す。そこで未知の出会いがあるとも知らずに・・・

火災現場で始まる物語

「大丈夫ですかっ、急いで外に避難してくださいっ」

近くにいる大人達に声をかけつつ、避難活動を協力するカノンノとセレナ。

ホテルという建物から、多くの人達が悲鳴を上げて出てくる中、炎の勢いが早く、混乱が目立つが、ホテルの人や、救護活動を手伝う人も居て、カノンノ達は指示を出し取り、手を貸したりしている。

（治癒魔術が使えれば・・・）

安全な場所で、できる限りの応急処置しているカノンノは、治癒魔術を使える。セレナもそうだが、この世界に傷を塞ぐ魔法はないと釘をさされている。

自分達にできることは混乱を収め、けが人を安全な場所に運んだり、限られていた。

「つて、セレナ、リュウは？」

「えっ」

だが、そんな行動を自重しろと言った当人は・・・

炎の中、瓦礫が落ち、足をふさがれた老人がいた。

「おじいちゃんっ」

子供は泣きながら、男は老人を見る。

「頼む、孫を助けてくれっ」

「ですけど・・・」

火の周りは早く、急がなければ自分も手遅れになる。

男は迷う、このまま逃げ出したい気持ちと、老人を見捨てるという罪悪感。

だが、それを壊すように、それが現れた。

『戦迅狼破』

そう突然現れた少年、龍は老人の瓦礫を粉々に吹き飛ばした。

男達からすれば、それは異常だ。

オオカミを模したなにかが、瓦礫を吹き飛ばし、龍はよしと頷き、

「この人頼む、俺は奥に用がある」

「えっ、あつ、ああ」

呆然とするが、龍の助けで老人を背負う男。そして龍が通ってきた道にも驚愕する。

邪魔なものは一切無く、炎で道もふさがれていない。これならがんばれば全員助か

る。そう思ったが、龍の言葉を思い出す。

「奥つて、奥はすでに手を」

手を後れと言うよりも早く、彼は炎の中に飛び込んでいった。

某司令室は、謎の火災による被害を検査していた。

「スプリンクラーなどの火災装置が何者かにハッキングされ、機能停止している模様。さらに連絡網にも何者かの痕跡あり、救援は後れると予測されます」

「何者かのハッキングだと?」

Yシャツの男性はそれに眉をゆがめ、映像を見る。巨大モニターはいまも異常な早さで燃えている建物が見える。

「何者かの、人為的な災害・・・にしても、なにが目的で」

この事態を起こした者は、まるで誰かが起こした人為的なものと言わんばかりに、足跡を残している。そう報告を受け考えつつ、いまは切り捨てた。

「俺たちの仕事は人の安否だ。現在の被害現場の状態はッ」

「ホテル従業員が対応している模様、建物内部にはスキャン・・・って」

「どうしたっ!?!」

モニターに映るのは何者かが爆走しているかのように、一人の生体反応が動き回っていた。

本来壁がある道を破壊したのか、通り抜け、避難者達に道を無理矢理こじ開けていた。

「響くん達はっ!？」

そんなことできる人物が思いつかず聞き返すが、

「いまだ外で待機中、いま現場ですッ」

「なんだとっ!？」

こんな荒技ができる人物ではないことに驚愕しつつ、その反応は生体反応を自分以外になくなってても、いまだ建物内にとどまる。というより、駆けていた。

「何者であろうと、放っておく訳にはいくまい。響くんっ」

『はい師匠ッ』

「ちっ、剣があればまだ動けるん、だがなッ」

そう言って、開かなくなった扉を破壊して、部屋の中に入る。

辺り一面炎だが、火山地帯歩いたことがある自分には関係ない。なにより、自分は害である。問題ない。

「お前で最後か」

そう言ってしやがみ込んだ際、頭上に何かがあるのを察する。

「!？」

それは歌だった。誰かの歌が聞こえ、そして、

「お待たせしましたッ、救助ですっ」

そう満面の笑みで、天井を砕いて、現れた。

(・・・なんだ?)

自分くらい、もうストレートに言えばコスプレのような格好の女の子が、そんなことを言つて現れた。

反応を追つて、建物を壊して着たら、黒い髪の男の人がいた。

「にゃー」

その腕には小さな猫がいて、その猫を抱え近づく。

「まあいい、ほれ、こいつでこの建物にいる奴は全部だ。あとは俺らが脱出すればいい」

「そうですか、師匠ッ」

いままで炎の中を駆けていたのに、彼は疲れている様子はなく、通信機からも連絡を受け、少女は頷く。

「それじゃ脱出しましょうっ、失礼しますっ」

「おう?」

疑問を投げかけたが、少女は俗に言う、お姫様だっこして、足に力を込める。

(跳ぶ気か?)

そう疑問に思うが、まさにその通りだった。

(・・・マジか)

謎の少女は高く跳んだ。それはもう、自分がくりぬいた穴から、建物から脱出した。だいの男である自分を抱えてだ。

(しかも高いな)

燃えるホテルは十階以上のフロアがあり、それなりの高さだ。

だが少女はそれよりも高い距離を楽々跳び、いまは直地の動作に入る。安全な場所、この場合、近くの建物の屋上に直地するようだと判断する。

(・・・他にもいるな)

こちらを見る視線を感じる。一人は怒り、これは考えなしの行動を咎めようとする怒りの感情。残り二人は呆れた勘定の視線を感じる。

この子を含めて四人、少なくとも自分を見ている。

そう思ったときだった。

「あいつ、バカはッ」

一人の少女は叫びながら、空中にいる二人組を見る。

「先輩落ち着くデスっ」

「落ち着けるかッ、私らのことは一般人に知られちゃなんねえつてのにつ、堂々と素顔さらしやがってっ」

そう言う怒りを、空中に向けている際、なにかが見えた。

「!?!」

それは、

「狙撃だッ」

遠くから狙撃と言う声が聞こえたとき、すぐに気づいた。

(なっ)

驚愕する、自分に向かって何か放たれたことに。

よけることも防ぐこともできない、まさに絶妙なタイミングでの攻撃だった。

そう、だった。

『刹牙』

少女から離れ、それに高速の蹴りを放ち、砕いた。

「ふえっ!?!」

少女から驚愕の声を聞きつつ、落下していることを知り、少女に着地を任せ、俺は蹴

り砕いたものを見る。

(・・・まさか)

嫌な予感がする。蹴った感触が、とある生物と酷似している。

キラキラ光る鉋石のような矢のかけらを睨みながら、彼らは屋上ではなく、どこか人氣のない道路へと着地する。

「えっと」

「疑問はいいッ、まだ来るぞッ」

そう言われた瞬間、すぐに少女は切り替わる。今度は早さではなく、数で放たれる鉋物の矢。

周りは建物、ビルなどで囲まれているが、いまは人の気配はない。近くで大火災が起されれば当然と言うべきか、人が居ない。

それでも建物を貫きながら、自分らを狙撃しようとする奴に、腹が立つ。

(こりや、人がいたら巻き込まれて死んだ奴いるだろうな)

少女は歌を口紡ぎながら、矢をたたき落とす。俺より前に出て、

だが、少女は歌うのを途中でやめて、顔をゆがませた。

「いった〜いった」

鉋物の矢は砕けず、その場にたたき落とされただけ、少女は拳を押さえながら、涙目

だった。

「つて、シンフォギアでも壊せないのに、壊したんで」

何かに気づき、後ろを振り返るか、そこにいたのは、

「にゃー」

「・・・ね?」

一匹の猫しかいなく、俺は彼女から離れた。

(で、俺かよくそッ)

心の中で舌打ちし、狙撃をかわしながら駆けている。

壁や床、道路を足場に駆け、狙撃者を睨む。まだ距離がある。

(相手はおそらく、こちらが見えている。なにで見てるか分からないが、探知されてるな
おいッ)

建物に隠れながら走るが、それを貫きながら、確実に自分へと定められて放たれる矢
に、心底うんざりしていた。

「剣が欲しいッ、剣ッ剣ッ剣ッ剣ッ」

本来剣を使い戦うのになれている。また大半の技が剣技による。仲間達が使う剣技
は、ほとんど使える自信がある。

格闘技はほとんど剣技の応用で繰り出すため、メイン武器は剣であり、拳や蹴りではない。

そんなことを吠えつつ、

「……だああああ、めんどくせええええ」

ついに堪忍袋が切れた。

急ブレーキし、狙撃者がいる場所へとまっすぐ向かう。むろん、敵がそれを見逃すはずはない。

まっすぐこちらに来る敵に対し、いま自分は狙われているのを感じる。

確実、神速、明確に狙いを定められている。

いま放たれる矢はいままでの攻撃よりも、貫通力も早さも違うだろう。それでもまっすぐ、狙撃者へと走る。

そして感じる、狙撃者の明確な確証。殺したという意志を感じ取った。空気が震え、一瞬の短い音のあと、矢が飛んでくる。

まっすぐ、威力を落とさず、かなりの早さで迫る矢。

気が付いた瞬間、目の前に、命を奪う矢が見えた。

「……」

だが、俺は静かに笑ってやった。

それは確実に殺したと思った。

放った攻撃は確実に頭部を貫き、殺せると自負できる一撃。
だから、

【ナゼダアアアアアアアアアアアアアアアア!!?】

それは叫んだ、矢を防がれたことに、

「!!?」

彼女たちは困惑した、その状況に、

「なっ、なんデスかあれはっ!!」

鉾物のような巨人がいた。二階ほどの大きさで、人のような形をしていた。

その左腕は弓のようになり、口のようなものから叫び声をあげている。

そして、

『アアアア? それは』

その矢をかみ砕き、それは一気に距離を縮めた。

全身が黒い鎧に身を包み、三つの爪痕のような頭部が胸辺りに裝飾されているそれ。

血のような紅い目と、鋭い金色の目を持ち、まるで闇のような喉を持つ口で、矢を食い砕いた。

銀色の刃のような髪を持つそれは、一気に鉱物の側によった。

そのかぎ爪の、黒いもやのような、エネルギーを纏い、

『俺はゲーデツ、俺を殺せるのは救世の光のみッ』

そう叫び、俺は前世の力を一気に解放した。

「!!?」

巨大な負の力に、セレナは気づく。

「セレナっ!」

「うん間違いないっ、リュウのバカっ、力使うなって人には言っておきなながらッ」

二人は叫びながら、救護活動を続ける。帰ったら文句言う、そう決めて。

『オラオラオラオラオラオラアアアアアアアアアッ』

ただ力任せに殴る。それだけで粉々に砕ける肉体に、それは驚愕していた。

【己ゲーデツ、邪魔をするなッ】

『邪魔するさっ、俺は害悪だぜッ』

頭を一度振り上げ、振り下ろす。

『チエーン・ソード』

地面に突き刺さる髪が、その叫びと共に巨人を捕まえ、貫いた。

『フンッ』

地面から這い出る髪をそのまま、地面のコンクリートを削りながら、地面へと引きずりながら、また殴り始める。

その様子に、モニター越しで見ている司令部はもちろん、現場も困惑していた。

「な、なんだありや・・・」

「このキラキラした宝石、ノイズじゃないけど」

「うん、私を攻撃してたの、だと思っ・・・けど」

「あの黒いのなんなんデスカっ!? 聖遺物デス!？」

あの姿を見て思い出すのは、ネフィリムというものが思い出される。

そんな言葉を聞き流しながら、俺はそれに聞いた。

『テメエ、ラザリスの世界、ジルディアと関係あるのかっ!？』

【答えぬわッ】

右手から矢が現れ、また放たれるが、そんなものは片腕で粉々に砕く。

『じゃあいい、消えろッ』

「!？」

両腕から闇が吹き出す。それに先ほどの少女は叫ぼうとした。

「だつ」

だが、遅い。

『夢も、希望も、愛も優しさも、光り輝くもの全て全て全て全て』

格闘により、ラツシユが放たれる。鉋物の巨人が粉々、いや削られながら、最後にアツパーにて胸を殴られ、拳がめり込む。

【がっは・・・】

『儂く、散れッ』

巨大な爆発が起き、巨人は宙を舞う。

それに右腕を大きく振り上げ、左腕を大きく振り下ろす。

右腕と左腕で、ドラゴンの頭部を連想させる。

『秘奥義ッ』

「だつめええええええええええ!!」

少女の叫びを無視するように、それは閉じられた。

『黒喰龍ッ』

まるで未来を閉ざすように、巨人は闇のドラゴンに喰われ、粉々に砕け散る。

悲鳴もまた、わずかに響き、それでも闇はそれを喰らった。

何も残さず、それは巨人を討ち取る。

『ハツ、テメエの命はこんなもんか』

吐き捨てるように告げて、それは何事もなかったかのように、塵を見た。

情報交換、それぞれの立場

(さてと・・・)

戦闘を終わらし、辺りを見渡す。それを見ながら、四人の少女達の反応を見る。

(一人は俺の行動、敵を殺したことに動揺している・・・)

俺を背負い、跳んだ少女はどうしてこんなことするの？という顔でこちらを見て、他の、おそらく同じ能力らしき、少女達は、明らかに異質に対する敵意を向けている。

(まあ当然か、俺のいまの姿は)

周りの人の気配はない。避難済みなのは助かる。

自分はいま、黒い鎧のような姿だが、着ていると言うより一体化していた。装甲と言う感覚ではあるが、身体の一部という感覚もある。頭に至っては、完全に一つの固まりだ。

血のような紅と金色の瞳、銀の刃の髪を伸ばしている。

これを人と呼ぶ？

(呼ばないわ、俺は害悪だしな)

さてどうするか、そう思いながら彼女たちの反応を待つことにした。

「・・・どうして」

始めに言葉を発したのは、なにも武器を持たない少女。茶髪のショートの子だった。「どうして殺したんですかっ!？」

悲痛、動揺、それに対して、

『生き物ではなかったからだ』

三人の少女は返答したことにとまどうものの、敵意は消さず、武器を構え、距離を保っている。

それに驚く少女に、続けて説明した。

『あれはゴーレム？ まあ、ゲームとかで出る、意志を持たない人形のようなものには、ある一定の知識と判断能力を持たせたもんだった。まあ、殴ったりして気づいたからな。アレの人や、生き物のものも知ってるが、あれはそれをベースにした、別のもんだった。まあ、殺したことに変わりないな』

それに困惑する少女に、赤い、銃器のようなものを構える少女が叫ぶ。

「まるであれがなんなのか、知ってるそぶりだな」

『ああ、あれに近いものを知っている。だから、利用されてることに腹が立って殺したんだ』

次にのこぎり、のようなツインテールの武器の少女が、こちらを見ている。

「あなたはなに、人間？ それとも聖遺物？」

『せいじぶつ？ 知らないが、人間じゃないな、人間である気もない』

それに全員が困惑している感情を感じる。まあお互い分からないことばかりだ。

「・・・何者なんだあれは・・・」

とある司令室、モニター越しに見ているそれに、困惑する一同。

「スキヤンの結果はどうだ？」

キーを叩き、オペレーターの一人在、たたき出されたデータに動揺しつつ、結果を報告する。

「高エネルギー反応は感知できません、聖遺物反応はありません。ですが・・・」

口を濁し、静かにもう一つの反応、そのエネルギーに驚きを隠せない。

「あの存在から、『イグナイトモジュール』時の装者達と同じエネルギーを検出されています」

「イグナイトモジュールだっ!？」

それに通信機から聞く装者達も旋律し、それを一斉に見た。

「・・・テメエはなんだ」

急に感情が危険、危機感というものにかわり、引き金に力を込めた少女はそう呟いた。それに対し、戦闘準備に入る。明らかな敵対意識に、構えるしかなかった。

それにすぐに二人、緑の鎌の子、ピンクの子も体制を取るが、

「まつ、待ってクリスちゃんっ」

一人だけ違った。あわててそれを止める茶髪の少女。それにいらだちの感情を向ける。

「お前わかっているのかっ、そいつは敵かもしれないんだぞッ」

「だけど、こうやってお話しできるんだから、話し合いで解決するかもだよっ」

「テメエ、また悪い癖を」

『話し合い？　してくれるのか？』

「「えっ？」」

それを聞き、場の雰囲気崩れるが、俺は気にせず、拳を下ろす。

『話し合いするならするが、どうする？』

「えっ、いいんですかっ!？」

驚く茶髪の子に、俺は頷く。

『お互い、まだ信用できないから、武装状態は維持するが、そちらとこちら、詳しい話を

したほうがお互いのためだろう。俺は構わないが?」

「ほ、本当ですか?」

急に感情が読めなくなり、この子は俺に対して敵意を無くした。さすがにどうかと思うが無視する。

他の子もどうすればいいのかわからず、困惑している。

「お前またそん」

何かを口にしようとした赤い子だが、急に耳を押さえる。それは他の子達も同様、おそらくは通信機で誰かと話しているんだろう。

驚きの声を上げる三人に対し、一人だけうれしそうにする茶髪の子。

すぐに俺の方に振り返り、満面の笑みを浮かべる。

「いま師匠が貴方の話したいから、私たちに付いてきて欲しいのですが、いいですか?」

その言葉に対し、俺は、

『構わないが・・・君は少し、警戒と言う言葉を覚えろバカ』

「ええっ!?!」

それに三人は同意するように頷く。ああ、なにかカノンノとセレナと仲良くなるなど思いながら、俺達は移動を開始した。

すぐ側にある廃屋、瓦礫と化したビルやマンションの中を歩き、指定された場所で待つ一同。三人は俺が変な動きをした瞬間、攻撃するという意志に満ちた目で見て居るんだが、約一名、そんな気配はない。

『お前他の子見習えよ、俺武装解いてないんだから、警戒しろよ』

「えええ〜」

なんで怒られているかわからない様子の子、この子大丈夫かと心配するのも変な話だ。

「それより、私はお前じゃなく、立花響、16歳のO型で」

『あーはいはい、お前もO型か、俺も人間じゃO型だ。話以上』

「えつ、人間じゃつてどういうことですかつ。つていうか名前教えたんだから教えてくださいよ〜」

『保護者つ』

「あたしやはこのバカの保護者じゃねえつ」

赤い子がキレ気味に（いやキレてる）言い、立花をこつちに来いと放してくれた。

そんなやりとりを複雑そうに見ている二人の少女。そんなことをしていると、黒い車がやってきた。

「エルフナインちゃん!」

立花は車から出てきた小さな少女に驚きながら、俺はYシャツの男を見た。

Yシャツ以外は、俺に対して畏怖の視線で見つめ、男は俺がなんなのかという疑惑、思案という視線だ。

エルフナインという少女は、歳相当、おっかなびつくりという視線だろうか？

『あんたは?』

「俺は風鳴弦十郎、国連直轄、超常災害対策機動タスクフォースの司令官をしている」

その言葉を一つずつかみ砕きながら、理解しようとする。

つまり国関係の組織、そして異常な災害に対して、対処する部署と考えながら、まずはどうするか考える。

『・・・俺はゲーデ、まずは仮名で名乗らせてもらう。んで、まずはそちらの質問に答える』

まずは主導権を相手に渡す。そう提案し、こちらの考えを確かめるように、弦十郎は前に出て来る。

「ではまず、君と対峙したものはなんだ?」

向こうも向こうで考えているだろうが、まずは俺と違い、話が見えないものの情報を

得ようと、まずはそちらを聞きに来た。

『すまないが、俺も詳しくはわからない。だが、似ているものを知っている』
「似ているもの？」

『その疑問には、まず俺は何者で、いまから話すことを真実と前提にして聞いてもらわなければ、説明できない。いいか？』

それに腕を組みながら、静かに頷く。それを見てから、俺は説明を始めた。

異世界ルミナシア、世界樹と言う、世界を生み出す大樹により生まれた世界。

世界樹の世界は複数あり、マナという魔法を使うためのエネルギーを世界に満たす樹の説明。俺はその一つの、とある物語を説明した。

その世界と姉妹であり、生まれるはずだった世界、ジルディアの話。

ジルディアの代表とも言うべき存在、ラザリスのことを説明する。

かの世界は本来は生まれることができなかつたが、ルミナシアが姉妹を見捨てたくないため、自分の世界に招き入れる形で助けようとしたこと。

だが、ジルディアの代表であるラザリスは、ルミナシアという世界、その世界で生きているヒトに絶望し、自分ならこんな世界にしなかつたと、乗っ取りのようなことをし始めたことを説明。

その際、すでにいる生物を、自分の世界に生きるものとして変化させた。

『それに似ている。だがあれは違うし、ラザリス、ジルディアはもうそんなことはない。ルミナシアといま共存して、共に生きている。あれは明らかに、ジルディアを元に誰かが作ったもんだ』

吐き捨てるように説明するが、信じることができないのか、まだ半信半疑の感情が見える。約一名は、もう信じながら聞いている。

「ふむ・・・」

弦十郎は考える、まずは目の前にいる彼についてだ。

（声からして男性、それに見た目の背丈からだだが、響くん達とそう違う歳ではないな）

そう考えながら、話を聞き続けことにしている。その様子を見て、次に説明するべきことを考える。

『次は俺の説明だな』

「ゲーデ、と言ったね。話からして本名ではないが、人間なのか？」

『いや、俺は違うと思うが、仲間は人間だって言っている。それはどうでもいい』

そう切り捨てたとき、仲間達のブーイングが頭をかすめた。だが、俺自身、人間じゃなくてもいいと思って居るんだから、別にいいだろう。

ゲーデ、世界にいきるもの達が必ず持つ、負の感情により生まれ出たものをそう呼ぶ。

本来は世界樹が負を取り込み、世界樹の中で生まれ、消える存在と言われている。

『だが、俺はなぜか人として生まれた。少なくとも、かなりの力を持つ、負の存在が、人として生まれたもの。俗に言えば転生者、それが俺だ』

「負の感情か・・・」

それにちらりとエルフナインを見た弦十郎。エルフナインもこくりと頷く。

（本来イグナイトモジュールは、暴走状態を制御するもの。そして暴走の引き金になるのは、負の感情）

いま目の前にいる彼は、その際に装者のエネルギーを軽く上回るほどのエネルギーを秘めている。

（彼の話が真実なら、彼は生まれつき暴走状態、それも装者一人二人を超えるほどの力を持つているということか）

「あの〜」

そう恐る恐る、手を挙げて、立花が会話に参加する。俺を見ながら、

「つまり、ゲーデさんは人間なんですよね？」

『いちおうはな、ルミナシアでこのことを知るまでは人間離れしたもんだと思っていたが、実際違っていた』

ルミナシアに呼ばれた理由は、ジルディアが防衛本能とも言うべきか、ラザリスが無

意識下で、ルミナシアと戦う際の戦力して、俺を呼んだらしい。

この辺りはラザリスがそう言っており、その際、「君は僕のものだよ」と言った。そう言えば、なにか知らないが、あの二人が妙な感情をラザリスに向けていた。

「あれ？ 呼んだり〜とか、呼ばれた〜とか、ゲーデさんって」

『ちなみに、人間として過ごしたのはこの世界だ。事実上、戸籍もあるぞ』

それに全員が驚いた。目の前にいるのがこの世界の人間だということに驚いているのか知らないが、驚愕の感情を感じ取る。

「君は、この世界の人間なのか？」

『違うね。俺はもうルミナシアに永住する気だから、正直ここから俺の本題だ』

弦十郎の問いかけにそう答え、俺はルミナシアからここに戻った理由を言う。

精霊、世界樹と共に世界を見守る存在が、この世界に異変が起きるから、どうにかしてくれと依頼されたと告げる。

『正直、精霊からの依頼じゃなきゃ、この世界に戻る気はない』

「どうしてです？」

立花の疑問に、吐き捨てるように、

『俺はこの世界が嫌いだ。はつきり言えば月が欠けた事件で滅んで欲しかったと思うほどな』

その言葉に、三人の少女ははつきりと憤怒、そして敵意を向けた。どうやら氣に障つたらしい。

それに立花も驚く。

「な、なんでですかっ!?!」

『俺はこの世界にいい印象なんて一切合切絶對的に徹底的にない。家族も、友人も、恩人もなにもない世界だ。どうなるうと知ったことか、むしろ精靈に危惧される事態になるなら、月事件で消えてくれれば助かった』

その言葉に、はつきりと隠す氣はなく、赤い子が前に出た。

「テメエツ、人が大人しく聞いてりや言いたい放題にツ」

「何様のつまりデスカッ」

「勝手に滅べばいいって・・・」

三人が飛びかかろうとするほど、怒りを見せるが、それを弦十郎は制止させる。

赤い子に睨まれるが、抑えろの一言で、渋々後ろに下がった。

その様子見ながら、俺はもういいだろうと切り替えて、弦十郎を見る。

『次は俺の質問だ、あんたらはなんなんだ。国家組織はわかるが、俺は月が欠ける前にルミナシアに行つてたから、その後の事件やら一切知らん』

そう伝え、弦十郎はふむと頷き、こちらを見据える。

「なら、ルナアタック事件から、魔法少女事件まで、説明すればよさそうだな」

少しめまいがした。彼女たち、シンフォギア装者達のこと、その前に起きた数々の事件に、異変すでに起きて終わってないかと、思いたくなる。

弦十郎の指示で、装者達はエルフナインとともに後ろに下がり、こちらを見ている。むろん、三人は敵を見る目で見ている。

『……あの様子だと、狙撃者の目的に気づいてなさそうだな』

「……わかるのか？」

弦十郎がそう聞き返し、その反応にやっぱりかと納得する。

『二射目はともかく、最初の一撃、狙撃は明らかに立花を暗殺するものだ。俺に標的を変えたのは、おそらく一射目を防いだときだ』

それに同意するように、弦十郎も頷く。

俺はあとで知るが、まるで装者達を出すために引き起こされた火災の目的。それは装者暗殺なら頷けた。

あの現状、装者の命を狙う者がいなければ、なんの対策もなく、彼女たちが出て救助活動をしていたのだ。

そしてその命を狙ったのは、ジルディアの民のようなものだった。

『精霊が危惧する異変、装者達と関係あるのか……ちつ、ケンカ売った奴を守らなきゃいけないのか俺は』

「そう思うのなら、あんな言い方をしなければいいだけだろ」

『俺がこの世界を毛嫌いしているのは事実だ。隠しても仕方ないだろ』

そう言う言葉に対して、弦十郎も感情が読めなくなる。彼から敵意が消えた。

(言い方、反応を見て、これは確実に子供だな……)

それが弦十郎が彼に下した結論だった。

力を持った子供、それに頭をかきながら思案する。

「君の目的は、精霊と言う、異変を解決すること。で、いいんだな」

『ああ、それ以外に興味はない』

「なら、君の要求はなんだ？ 要求があるから、話し合いなんかしているのだろう？」

そう言われ、俺は静かに頷く。

彼はこのやりとりの中、俺がこの世界に一切の配慮はする気はないことを伝えていく。つまりなにか問題ごとが起きても無視して、目的をなす意志を伝えている。

だが、自分達に接触するメリットが見えていない。それを聞き出そうとしている。

『実はこの世界に、ルミナシアの救世主と、俺が世話になっている仲間が二人いる』

「なんだと？」

世界樹の救世主、ディセンダーと言う存在を伝える。

世界に危機が迫る際、純粋な心のまま生まれ、世界を救う救世主。

俺からすれば、お節介で、優しすぎる仲間の一人。

それに負けない、優しすぎる仲間の顔を思い出す。

『正直に言う、俺はこの世界がどうなろうと知らない。誰が死のうと傷付こうと知らない。だが俺の仲間達はそれをよしとしない、むしろ傷付かないように前に出るような奴らだ。この世界の問題に関わって欲しくなかったが、ついてきやがった』

そう言いながら、静かに俺は、弦十郎に頭を下げた。

『俺の扱いはどうでもいい、俺の目的は、精霊の異変を解決することと、その二人の安全を確保することだ。この世界の、ふざけた政界の問題に利用されたくない。この用件を飲んでくれれば、俺はあんたらの指揮で活動する』

「……」

弦十郎は少し驚いていた。彼の性格がわからないからだ。

(……少し整理するか)

まず彼はこの世界の安否など考えない子供だ。

彼ならもしかすれば、世界そのものを壊してでも、問題を解決するという矛盾をしそうなほど、この世界に対してなんの配慮はない。少なくとも、本人はそう言うとならえ方

をする発言をしている。

だが、仲間と言う二人はそれをよしとせず、また彼はその二人を大切にしているのを強く感じる。

その仲間に危害を加えるのなら、俺は敵になる。だけど仲間の安全を保証するのならば、こちらの用件を飲むと言っている。

(・・・子供だな)

まさに子供のわがままだった。それに苦笑して、いまだ頭を下げる彼に向かって、「わかった、君とその仲間達の安全は俺が保証する。そのかわり、俺の指示には従ってもらうぞ」

『・・・俺は別にいいんだが』

そう言いながら頭を上げ、それとともに、負の力を消す。

「ま、信頼の証として見てくれ」

「・・・それが人としての君か」

鎧は霧のように霧散し、銀色の髪は黒いボサボサ、肩ほどまで短くなり、オッドアイだった目は、日本人の顔立ちに変わる。

「こつちの戸籍じゃ、剣崎龍だ。生まれが生まれだから、孤児で、親もなにもない。中学で学校やめてるなら、学歴はない」

「わかったわかった。つたく・・・」

まさか本当に子供、16〜7の龍に、少しばかり驚いていた。

「あとで君のことは調べさせてもらう。まあ、君は嘘は言っていないが、そういうものだから気にしないでくれよ」

「お役所は大変だな・・・」

そう言いながら、驚愕している装者達を見る。こちらに気づき、三人ははまだ睨むが、向こうもまた、シンフォギアを解除した。

「とりあえず、俺は仲間達を回収する。いままでゲーデの力使ってたから、デイセンサーである彼奴は近づいてるはずだ」

「なら俺の方は君らのことを伝える準備をしておこう、異世界人は二人分か」

「二人とも女性で、同い年くらいだから、部屋を二つ用意してくれ。むろん、こっちの世界のこと知らないから、まだ話し合う場を設けて欲しい」

「わかった」

こうしていまは話し終え、俺は二人の気配を探ることにした。

「で、なんでお前らもついてくる」

俺の問いかけに、赤い子が睨みながら、

「あたしらはまだ認めてねえからだ」

三人はまだ俺に対して敵意を向け、それにおろおろする立花に対して、そうかいと付け加えて歩いていった。

弦十郎に、カノンノの剣のことも話して、回収してもらいつつ、俺は光を追って歩いていった。すぐに接触するだろう。

「念のため言うが、俺はともかく、あの二人は立花みたいなバカだから、彼奴らには仲良くしてくれ。彼奴らは俺と違って、本当にこの世界の人達のために、働くからな」

「えっと、私みたいなバカってどういう意味ですかっ!？」

その叫びを無視しながら、俺は二人を見つけた。

「おーい」

二人ともすすだらけであり、買ったばかりの衣類が入った袋を持っていた。

こちらの声に気づき、すぐに駆け出す。その空いている手を拳に変えて、

(・・・ひでえ)

そう心の中に思いながら、素直に殴られた。

ごつと以外と深い拳。なにげに最近格闘術でも習っているのか、二人の拳を受けて、その場に座り込む。

「リュウウツ」

頭上から聞こえる不満に対して、悪い悪いと言いながら起きあがる。

「こつちだつて使いたくつて使つた訳じゃねえよ、使わなきゃいけない事態だから」
「うそ」

「リュウのことだから面倒だからつて理由で、ゲーデの力使つたんだよ、間違いない」
セレナの言葉に、凶星のため視線を泳がせる。

二人の視線は三人の視線よりも痛い。正直恨まれたり、憎まれたりするよりも痛い。
立花がおろおろする中、赤い子はなんなんだという顔で、

「ん？」

その後ろ、緑の鎌の子と、ピンクの子が、

(驚愕? 戸惑い?)

謎の感情を、セレナに向けている。なんだと思ひながら、立花に対して、

「とりあえず立花、俺は龍、名字なんて飾りだから呼び捨てでいい。カノンノ、セレナ、こつちの世界でアドリビトムのようにがんばつてる奴らだ。仲良くしろ、俺はしないが」

「リュウっ」

説明不足だが、俺がなにかしら反感を買うことをしたと察するカノンノが説教を始めるが、ひとまず区切らせて、

「私はカノンノ、カノンノ・グラスバレー。リュウは口悪いけど、根はいい人だから、気を悪くしないでね」

「俺のどこが根がいいんだよ」

そう言ったら裏拳が二人から放たれ、腹を押さえる。ひでえ。

「私はセレナ、ルミナシアのデイセンダーです。よろしく」

「えっと、私は立花響、響でいいよっ」

そう自己紹介する中で、目を見開き、セレナを見つめる二人がいた。

(セレ・・・ナ・・・)

(そんなわけ、ないデス・・・けど・・・)

二人は驚きながら、セレナを見つめる。

彼らは知らない。世界と世界、その繋がり。

それを利用する、存在を・・・

救世主と歌姫

この世界に帰還して、初日から色々あった。目が覚めた俺は最初にそう思った。

「……日本か……」

まず始めに、弦十郎、もとい司令官達が一時基本部にしている施設へ来たあと、色々疲れがあったり、用意もあるため、飯食って寝ることにしたのだ。

その際、立花はカノンノとセレナとかなりうち解けていた。どうやらあちらは問題ない様子で、俺は安堵する。

問題があるのは、いまだ自己紹介していない装者の三人だが、そのうち二人は妙だった。

セレナを時折見ていた。少なくとも分かる範囲ではそう言う印象だ。

あとは時間になり、家がある装者達は帰り、俺達は仮眠室で寝る。むろん、すぐ隣だが、同室ではない。

昼下がりの光を感じながら、俺はセレナへと振り返る。

「おはようセレナ、間髪入れずに殴ろうとするやめて」

「早起きしないリユウが悪いんだよ」

そう満面の笑みで、俺は手ひどい一撃を食らう。ひでえ。

「あつ、やつと起きたんですね龍さんっ」

立花がカノンノと仲良く話している頃、俺はセレナに起こされ、朝食を抜いて現れた。

「ねむい……」

「なんでいつもそうなの……」

「あつははは……」

カノンノは苦笑しながら、立花が施設を案内する。強制的に起こされなかったところを見ると、まだ急ぎの用はないようだが、

「いま外国にいる翼さん達と連絡して、もうそろそろでしたから、なんかみんなして話が
あつたそうです」

「立花は？」

「私はセレナやカノンノに、この世界のことを教えたりしてましたっ」

「ヒビキに教えてもらってね、装者の二人、あいどるなんだって」

「リュウは知ってる？」

「俺はそう言うのはな、こつちにいる時は、寝るか働くか飯食ってるかだから」

「ええ、翼さん達を知らないんですかっ!？」

そんな話をしながら、俺達は司令室前へとたどり着いた。

「師匠く龍さん達をつれてきましたっ。連絡、は……」

なぜか司令室は、険悪な雰囲気に含まれていて、立花は声の声も弱々しくなる。

「リュウがいつまでも起きないから……」

「はあ……」

申し訳なさそうにする二人だが、そうじゃない気がする。

とくに三人は、俺を意識してない。俺が悪いのなら、俺にそう言う感情向けているはずだ。だが、そんな雰囲気はない。

「おほん、いま呼びに行くところだった」

指令がそう言い、俺はモニターに映る女性達と眼鏡の男性を見る。

「君達からまず紹介してくれないか、おそらく、前戦で肩を並べると考えられるからな」
「あ、はいっ」

カノンノ、セレナ、俺は自己紹介をする。立花にしたときと同じ、アドリビトムのことや、デイセンダーのこと、ゲーデのことを付け加えること以外、かわらない挨拶だ。

今度は装者、立花が自己紹介する。響って呼んでくださいと言っていたが、仲良くする理由はないので無視する。というよりよけいな情報は多い。

「ほらほらっ、クリスちゃん達も自己紹介自己紹介っ」

「・・・雪音・クリスだ」

「暁、切歌デス・・・」

「・・・月読、調」

赤い子は雪音、鎌の子は暁、ピンクの子が月読と名乗り、俺を睨んだ。

「よろしく、私のことはセレナって呼んでねっ」

「・・・」

セレナの問いかけに、なぜか妙な沈黙をする二人。

複雑な環境で、よくわからない。そして今度はモニターの方の装者、青い髪の装者が話しかけてくる。

「私は風鳴翼、天羽々斬の装者で、いまはロンドンにいる。モニター越しですまないな」
その問いかけに、カノンノ達は元気よく挨拶する。俺は風鳴より、気になるのは、さつきからこちらを見続ける。もう一人だ。

「・・・」

その人はしばらく沈黙したが、視線の先になぜかセレナがいる気がした。巨大モニターのため、確証は得られない。

「マリア」

そう、やっと言えたような、そんな声で、

「マリア・カデンツァヴァ・イブ。よろしく・・・」

そしてあとは、オペレーター達など、裏方の人達自己紹介が始まるのだが、妙な雰囲気のため、少し気後れしている二人。

そんな様子に咳き込む指令、腕を組みながら俺達を見る。

「とりあえず自己紹介と顔合わせを終えたところで、本題に入ろう」

「はい」

俺はそう返事をして、お互いの状況確認をし始める。

まずは俺達、異世界側の事情だが、

「悪い、俺だけだから行き当たりばったりでいいやって思って、精霊達には異変が起きるとしか聞いてない」

「ずいぶん気楽なこったな」

雪音が悪態を付いてくるが、まあ仕方ない。

「ルミナシアの仲間、このことを知っているメンバーには色々と調べたりすることを頼んでる。全部終わったあとと帰ることも考えていたから、向こうは転送装置やら、連絡装置を用意してる話になってる。しばらくすれば向こうから連絡するらしい」

「詳しく話しなかったの？」

「してたらお前からお節介ズが参加するから、詳しく話せずに来たんだ。向こうもどう

やってするのか聞きたかったが、大丈夫って言ってたから、大丈夫だろう」

カノンノを睨みながら俺はそう言い、セレナは嫌な顔をする。

「私たち、邪魔？」

「この世界にはノイズって、触れただけで即死するもんがいたんだ。ゲーデの力使える俺じゃなきゃ、対処できないと思うし、セレナも平気だろうが、俺とセレナだけってのは色々問題があるんだよ」

セレナはなんで？と首を傾げているが、カノンノは納得してくれた。まあ本当に納得してくれているのか不安ではある。

「まあ、実際異変にはあった。ジルディアの民みたいな、鉱石の身体を持った人形」

「ふむ、それが装者、響くんを暗殺しようとしたことだな」

それに立花が驚くが、指令の言葉に納得する。カノンノ達も驚き、確認してくる。

「本当にジルディアの民だったの？」

「ああ、正確にはそれに近い別のもんだ。命の輝きはなかった」

「命の輝き？」

立花は疑問に思い首を傾げ、それにはセレナが答える。

「リユウや私は、人の心、その輝きが少しだけ分かるんだ。だから生き物かそうでないか、少しだけね」

「あれは確かに人形だ。まあ、自我があったから、殺したって言うのは正しいがな」
複雑そうにするカノンノ達。それに対して、その話にまずはある確証だけだが、こちらの意見を伝えることにした。

「指令達には悪いが、俺達はこの件にジルディアの民が関わっているとは思っていない。むしろ悪用されていると思っている」

理由としては、ただの希望論ではあると付け加えておくが、それでも、

「ジルディアの民はもう、誰かを傷付けられるのを率先するはずはない」

セレナ、カノンノもそう信じて欲しいと言う視線に、指令は考慮してくれるだろう。

むろん、彼の立場では完全に捨てきれないが、それでもこちらの意見を聞いてくれる。

正直本当に無茶な行動できないな。

「まあ、事情はここまですだ。装者の命狙われるのだから、考えれば対処できるのがシンフォギアだけだからってという理由で説明がつく」

「ああ。調べた結果、ハッキングなどの足跡ははっきりしているのに対し、何者かがしたか、それだけは分からずじまいだ」

それに重々しい雰囲気になる。つまるところ、敵がはっきりしていない以上、後手に回るしかない。

「まあ仕方ない。いまはなにがあっても対処できるように、情報の交換などを欠かさず、

警戒するしかない」

「わかりました」

カノンノ達全員も頷く中、ああそうだと指令が、

「龍くん、悪いがカノンノくんとセレナくんに、メデイカルチェックを受けるよう、話を付けてくれないか？」

「ああ、はい。ですね、ケガした際の対処とか必要ですし」

「そういうことだ。君も受けておくといい」

「了解です」

「あつ、僕が案内しますね」

「ありがとなエルフナイン。カノンノ達を癒すマスコットになってくれ」

「ふえっ!？」

意味がよく分からないことを言い、エルフナインという少女と俺達は、医務室へと移動する。

「・・・リュウ、メデイカルチェックって、ドキュメントを確認するの？」

「どくめんと？」

「簡単に言えば、魔法でDNAを視覚化する技術のことだ」

「でいーえぬ?」

カノンノのエルフナイン、二人と会話しながら歩いている際、ふと、セレナに振り返る。

「どうしたセレナ」

「・・・」

なぜか黙り込む救世主。セレナは少し考えてから、首を振る。

「なんでもない・・・」

そう言われるが、セレナだけは光が邪魔してよくわからない。だが、

「・・・」

セレナの頭を撫でながら、そうかと伝えておく。カノンノもまた、セレナがなにか隠しているのかわからないが、安心させるため、手を握りほほえむ。

まあいまはほほえましいのだが、まず先になにするか二人の前で血液検査する。青ざめる二人がいるのだが、それはエルフナインをだきしめて癒してもらおう。

途中で男女に分かれて、検査を受ける。

ロンドンのとある一角、マネージャーである緒川と共に見守る。

「マリア、少しは落ち着いたらどうだ」

「落ち着いているわ、私は」

そう言いつつ、彼女はずつと部屋の中をぐるぐる歩いている。モニターで彼女の様子を仲間達もくもつた顔色であり、響もまた事情を聞き、そわそわしている。

「結果出ました」

その言葉に、モニターにかぶりつくマリア。他の装者達もまたモニターを見る。

「それで結果は」

指令の言葉に、オペレーターは静かに、

「・・・現在医学の結果では、セレナさんは間違いなく、セレナ・カデンツアヴナ・イブさんと、同一人物です・・・」

「嘘よッ」

それに叫ぶマリア、それでもエルフナインもまた協力して調べているが、間違いなく同一人物と出ているうえ、

「マリアさんとも関係があります、異世界人だからとは言え、この結果は・・・」

「うむ・・・偶然の一致、にしては、だが・・・」

全員が困惑する中、マリアはまだ叫ぶ。

「あの子は見た限り、14歳くらいだわッ。あの子がもし生きていたのなら、もつと年上よッ」

「そ、そうデスよつ、マリアの言うとおりデス」

そんな騒ぎの中、謎や不可解な点だけが増していく。

（異世界の救世主が、シンフォギア装者と全くと言っていいほどの同一人物、いや）

よく考えればそれだけでなく、すでに龍と言う、異世界のイレギュラーがこの世界で起きている。

（彼のことだ、自分についてなら嘘は言わないだろう。むしろ気にしてないから詳しく調べていないと見ていい。だが）

セレナのことと言い、異世界のゲーデと言う転生者がこの世界と関わりがあると言う事実を見過ごすことはできない。

（彼の話では、いずれルミナシアの仲間から連絡が来るそうだが、できれば早い段階で連絡したいな）

そう考える中で、装者達の同様もまた、彼にとっては悩みの種になり、モニターの緒川と目が合う。

お互い頷き合い、目を光らせるしかない。

（あり得ない・・・）

そう言い聞かせるように、言葉を続ける。

(あり得るはずは、ないっ)

だが、

声が、仕草が、反応が、

心の奥底から、彼女のことを

(違う違う違う違う違う違うッ)

モニター越しから見えた瞳、そのまっすぐな瞳を見て、龍と言う男の後ろに控えている彼女を見れば見るほど、

セレナと、涙を流してしまいそうになる。

間違いなく妹、セレナ・カデンツァ・イブ。

そう感じている、思っている、考えている。

「.....」

頭を抱え、黙り込むマリアに対し、みな言葉が詰まる。

そのとき、

「えっ」

「.....」

息をのむマリア、それは静かに扉を開き、セレナ達が現れた。

「~~~~~♪」

セレナは楽しそうに、歌を歌いながら、お菓子を持ってきた。

「すいません、勝手に台所借りました」

「しつかし、セレナ、カノンノ。ここはギルドじゃねえんだから、おやつ食べたいってただこねるなよな・・・」

龍は呆れながらそう言い、いくつかのパイらしき焼き菓子を持って現れた。

「仲間から教えてもらったピーチパイですつ、みなさんの分もありますからどうぞつ」

そう言い、セレナはまた歌い出す。

龍は頭をかきながら、何かに気づく。

「どうした?」

「・・・」

何人かはお菓子のにおいで和んだはずだが、ある一人の人間の反応に、固まっていた。

マリアが、信じられないものを見る目で、こちらを見ている。

「その歌」

「えっ?」

そんなマリアが口にしたのは、

「その歌はどこで覚えたのっ?!」

マリアの言葉に、セレナは龍の後ろに避難してしまう。視線が龍に突き刺さるが、龍は気にせずに、かわりに答える。

「この歌って、セレナの歌？」

「セレナの癖だよな? 暇なときとか、料理するときから、いつも歌って、みんなを笑顔にしているんだよ」

「そうだな・・・って、ん?」

カノンノの言葉に頷くセレナ、そのときに龍は首を傾げた。

「そう言えばセレナ、お前なんで歌覚えてるんだ?」

「どうということデスカっ?!」

くっつかかるように、切歌達も話を食いつく。それに疑問に思いつつも、龍は答える。

「本来ディセクターは、世界に危機が訪れた際現れ、危機を退けたあと、世界樹の中に眠り付く。その際、記憶をリセットするらしいんだ」

「そう言えば、セレナ、その歌ってどこで覚えたの?」

「えっ、知らないけど・・・」

それに、カノンノ達はあれ?と言う顔になる。

「・・・そう言えば、ディセクターだつて分かる前、セレナは記憶喪失の子として、過

しているとき、歌と名前で身元探してたな」

「だけど、セレナがディセンダーなら、どうして歌を？」

「ん〜戦うことと一緒に、必要だから？」

「いや違うだろそれ」

彼らもわからない顔をしている。

その中で唯一、顔色が悪い者が居た。

「マリア……」

調がそう眩いて、やっと我に返るマリア。

それに龍達も気づく、そのとき、

セレナと目が合った。

「……ごめんなさい」

そう言つて、連絡を切り、その場に座り込んだ。

「マリアっ!？」

翼が駆け寄り、顔色を見る。よほどひどいのか、青ざめていた。

「……あの歌は、いったいなにがあった？」

翼の問いかけに、マリアは、

「・・・あの歌は」

静かに、

「・・・セレナが私によく聞かせてくれた、歌よ・・・」

今後こそ、全員が静かに、黙り込むしかなかった。

動き出す思い達

色々謎が起きる中、結局進展はない。

あるとすれば、マリア・カデンツァヴァ・イブという装者や、指令達がか隠しているということだけだ。

通信をいきなり切られ、困惑するが、結局説明のないまま時間だけが過ぎた。

そして、

「・・・お前か」

異世界の仲間から、連絡が来た。

「カノンノ達の仲間から連絡来たって本当ですかっ!？」

立花達が連絡を受けてやってくる中、俺達はエルフナインを囲んでいた。

「ん?」

立花が首を傾げると、エルフナインの頭の上、緑のふわふわに気づく。

「クイツキ」

「・・・この子は?」

「クイツキーだよ」

そう言われた生物は、挨拶するように前足をあげている。

なぜかエルフナインの頭の上において、とりあえず立花は写メしようとしたので止め
ておく。

「いま、話を聞こうとしてたんだ」

「わかるんですかつ!？」

俺の言葉を防ぐ疑問、まあ立花ではなく、この場にいる装者や、指令達もそうだろう。
カノンノが少しだけずるいと言わんばかりに俺を見ながら答えた。

「リユウはゲーデの力なのか、クイツキーみたいな子の言葉がわかるの。いまからク
イツキーがなんているから聞くから」

「クイツキー」

ちなみにモニターには風鳴とそのマネージャーである緒川もいる。

マリア・カデンツァヴナ・イブだけが、この場にはいない。

クイツキーは手振りそぶりで、クイクイと鳴きながら、俺に話しかけ、説明が始まっ
た。

「ククク、クイツ、クイツキー。クイ、クイイ、クイツ、キー……」

クイツキーが動くたび、エルフナインの頭を動く。その様子を見ながら、響はクリスマス達に話しかける。

「マリアさんは……」

「連絡したみたい……だけど会えないって……」

「顔を少し見たんデスが、元気なかったデスよ……」

そう言いながら、龍はうんと頷き、話を終えたらしい。

「その子はなんて言ってるんですか？」

「……」

難しい顔をしながら、弦十郎の方を見て、全員に話しかける。

「まずわかったことは、いい話と悪い話だ」

「いい話と悪い話？」

弦十郎の問いかけに頷き、まずはと説明し始める。

「ルミナシアという世界には、世界樹っていう、世界を生み出す樹があり、姉妹世界があることは伝えたよな」

「ええつと……はいっ」

響が思い出しながら、クリスマス達も頷く。それを確認しながら、

「その世界の中に『パスカ』という世界があり、その世界が寿命を終えた際、パスカの子

供と言うべき世界を見守るため、異世界に旅立った人がいる」

「ニアタのことだね」

カノンノはうれしそうに呟き、それに頷く。

ニアタ・モナド、パスカのデイセンサーにとつて、父親、家族のような彼らの話。意識を一つに統合し、機械の身体で世界を飛び回る、仲間の一人を説明する。

「ちなみに、そのパスカのデイセンサーはカノンノとそっくりさん。というより、世界樹の世界事態の始まりに、カノンノという少女、言つてしまえばDNAの大元と関わりがあるらしいんだが、まあいまは関係ないな」

「えっと、話が飛躍されすぎてわかりませんっ」

「ごめんねヒビキ、あとで教えるから」

カノンノはそう言い、龍は本題と言わんばかりに話を続ける。

「つまり娘が守った世界の子供達を見守るために、機械の身体で異世界中を旅する者がいる。その名前がニアタつて言う人だよ」

ニアタは世界樹の世界に、自分の意志を伝える機械の身体をいくつも持ち、その一つとルミナシアが接触しているが、本体は別の世界にあるらしい。

「その世界にジルディアの民もどきが出たらしい」

「!!?」

セレナとカノンノが驚き、それは司令室にいるもの達もまた驚いていた。

「そのせいで、向こうもかなり大慌てで対応しててな。仲間のうちには、他ギルドの人や、国に所属する者もいるから、アンジュ、うちのギルドマスターもあわてて集めだして対応し始めている。ニアタの話と俺らの話、関係あると判断して大急ぎで連絡するため、クイツキーだけでも送り出すことにしたらしい。俺とは話せるからな」

クイツキーの話では、向こうでニアタからその話を聞き、急いで通話と行き来を可能にするため動き出したらしい。

学者達が言うには、いくつもある異世界で、目的の世界に行くためにはアンテナが居るが、なぜかそのアンテナがあるらしい。

「・・・絶対に勝手に改造してるよね、それ・・・」

カノンノが呟き、セレナは頷く。

龍は通信機こと、その改造されたものを取り出す。最初に気づくべきだった。知らないうちに、知らないアプリがダウンロードされていたのだ。

「こいつのおかげで、俺らの場所が分かって、あとは通路を開くだけだが、人一人安全に通過させる道の調整に、時間がかかるはずだった」

「ほっっっ」

クリスが聞き返し、それには呆れながら、

「仲間に、その、ドジな子がいてな……」

「……コレットがどうしたの？」

セレナが龍が彼女のことをドジッ子と言っているのを、そう聞き、龍はどうすればいいんだと思いつながら、

「彼奴が転んだ時、偶然、たまたま、通路が安定する数字をたたき出したらしい」

何時間かけて調整する数式を、偶然答えを出すなんて、

「さすがコレット……」

二人は驚く中、他の人達は訳が分からない顔をしている。龍自身もわかんないという顔をしている。

「そういうことがあり、人はすぐには無理だけど、クイツキーくらいなら問題ないから、クイツキーが来たらしい」

「クイツキー」

両足を上げて、エルフナインの頭で胸を張る。

連絡もそう少し調整すればできるらしい。龍はそれを見ながら、アンテナの役割を担っているものをカノンノに渡す。

「分解するのは問題あるからな、カノンノが持つててくれ。司令官、悪いけど連絡つけるように、電話を三台頼んでいいか？」

「ああ、響くん達や、俺達との通信機以外に、そういったものも用意しよう」

カノンノは龍からそれを受け取り、クイツキーは一仕事を終えて、エルフナインの上で休んでいる。

「ところで、どうして僕の頭の上に？」

「・・・気に入ったからだろう、よかったな」

「じゃ、写メろう、エルフナインちゃん、未来に見せるから、こっち向いてっ」

そしてクリスに怒られる様子に、龍はやっぱり保護者じゃねえかと言う一言で、この話は終わった。

クイツキーが来てから、話を聞いた俺だが、正直わからないこともある。

異世界の現れたもどきのことや、マリアと言う装者のことだ。

「・・・ったく」

指令達が本部として活動しているのは、潜水艇だった。なぜか二号と言う文字がついているのに疑問があるが、それはどうでもよかった。我らアドリビトムもまた、飛行船であるのだから、気にすることではない。

いまは港に止まり、多少なら外に出ることができするため、風に当たっているセレナを見つげだす。

「・・・はあ」

セレナは表面上元気だが、生みを暗い顔で見つめるセレナに近づくと。

「おい救世主」

「・・・リュウ」

「お前もなに隠してる」

間髪言わずに聞く、セレナはびくつと全身を振るわせて、静かに近づいてくる。

「・・・変だよね」

「・・・なにが」

下を向いたまま、静かに目を閉じて、一言、

「・・・あの人、マリアさんのこと、知ってる気がするの」

「・・・」

それを黙ったまま聞き、いつの間にかセレナは俺に寄り添うように、体重を預けてくる。

「おかしいよね、最初リュウが使ってた機械で、あの人見たとき、頭の中で、知っているって思ったんだ」

「・・・」

ここに来たとき、ニュース欄を見ていたとき、セレナがのぞき込んでいたことを思い

出しながら、セレナは続ける。

「顔を見たときも、笑顔のあの人がいたの……だけど」

実際あつたら、あの人は悲しそうにしていた。

こちらを見て、悲しそうにしていた。それが凄く、苦しいと思ってしまう自分がいた。

「変だよ、初対面の人に、そんな風に思うの……だけど、私は」

なぜかは知らないが、笑っていて欲しい。他の人以上に、仲間達と同じように。

「だけど、私はあの人を傷付けた……」

泣きそうな声で呟く。それを静かに聞くしかない。

(……どうなってる)

デイセンサーであるセレナに、この世界どころか、過去なんてない。

はずなのに、この感覚。セレナは嘘を言う子ではない。光の所為でセレナの心の動揺

は

わからなくても、それくらいわかる。

(やっぱ、俺だけならともかく、別に何かが関わってるのかこの世界……)

だとしたら、そう思うと舌打ちをしてしまう。

自分はいい、負の象徴、ゲーデ。

世界の害悪であり、滅びるべきものでいい。構わない。

けして良き者ではなく、悪しきモノでいい。

希望も、優しきも、希望も、愛も、いらぬ。必要とも思わぬ。
だが、

(こいつらは違ふ)

そう思ひ、ため息を吐いたあと、行動に出ることにする。

とある日、ロンドンではとあるコンサートが行われる。その楽屋で、一人の歌姫は黙
り込んでいた。

そこに、

「まだ引きずっているのかマリア」

「翼……」

今日、ともに歌い合う者同士。翼はマリアに近づき、マリアは顔を伏せていた。

「……切り替えなきや、だめよね」

「マリア……」

かける言葉を思いつかず、翼はマリアを見つめる。

「わかつてるの、だけど、どうしても、私は……」

そう呟く歌姫達の元に、

「すみません翼さん、マリアさん」

「緒川さん？」

突然楽屋に、翼のマネージャーである緒川が入り、それに、

「こんにちは」

「っ!？」

緒川の後ろから、何かを持った龍がそこにいて、二人は困惑する。

「面と向かって挨拶は初めてだな、龍だ。よろしく風鳴さん、カデンツアヴナさん！」

そう言いながら中に入る。マリアは少しだけ顔を背ける。

セレナは彼に対して、少し、いや、かなり慕っている。

その事実だけで、実は彼のことを嫌っている自分に、腹が立っていた。

「翼でいいよ龍。今後、ともに戦う仲間だからな」

「そうかい、それより渡すもんあるからな。えっと、カデンツアヴナさん」

「・・・マリアでいいわ。それで用事はなに？」

そう言われ、龍は静かにテーブルに持ち物を置く。それに翼は首を傾げながら見る。

「これは？」

「セレナからあんに、マリアへの贈り物だ」

「!!？」

それに驚くマリアを無視ながら、

「彼奴の言葉だ、「先日はすいません。私がなにかしたかわかりませんが、私はあなたに笑顔でいてほしいんです。変なことなのはわかってますが、これを食べて笑顔でいてください」だ」

「……」

「彼奴はなぜかあんたのことを知っているらしい」

驚愕するマリアに対して、翼達も驚いている。

それでも龍は、

「あんととセレナになにか関係あるのか分からない。だけど、いまのセレナの気持ちは伝えた。彼奴は立花達と一緒に、今日のライブを見るらしいぜ」

「……」

それに押し黙るマリア。翼もまた黙り込み、龍を見つめる。

「……龍、ディセNDERというものは、世界樹から生まれるものなのか？」

「例外なんて、あるんだろう。そもそも、俺がそれだ。それで問題ないから、詳しく自分達のことを知ろうとしなかったが、問題が起きたから、俺はセレナのことを調べる気だ。あんたらが黙ったままでもな」

その言葉に、翼は龍と言う人物が分からなくなった。

「君は人のために行動する、少なくとも、雪音達の話ではそう思えないのだが」

「その解釈であっている。他人のためになんて、俺は働かない」
がと付け加え、

「彼奴らは違う、彼奴らが下向いてるのを見たくないだけだ」

「・・・君は変わっているな」

「前世が世界の害悪ですからね」

その言葉聞き、翼はまっすぐに龍を見る。

「害悪、君はなぜそう断言するんだ」

「精霊や、それに連なるもの達からそう言われている。負の感情、それが意識を持った者は、必ず世界の害悪になるならな。俺自身、どうでもいい話だ」

「・・・君はなぜ、この世界を嫌う」

「・・・」

それに黙り込む龍。翼は怒りではなく、ただ真意を知りたい。感情は読めなくても、そういう目で龍を見る。

「・・・知る必要はない」

そう断言して、翼の制止を無視して部屋を出ていく。

残されたのは緒川、翼、マリア。そして、

「……」

黙ったまま見ているマリアに対して、翼はそれを取りだした。

少し冷めてしまっているが、おいしそうな焼き菓子。ピーチパイらしい。

「……食べないのか？」

「……」

静かな静寂の中、緒川だけは時間を気にしている。翼もまた分かっている。

「本番まで時間がある。早くしなければな」

「……」

勝手に食べる準備をし始める翼に対して、マリアはなにも言わない。

「……私、は……」

「そろそろだね、翼さん達のライブ」

白いリボンがトレードの少女、響の友達である小日向未来がそう呟く。

「クイツキ〜」

クイツキーはなでられたりモフられたりして、エルフナインから、未来の肩に避難する。いま女子全員が、クリスの部屋に集まり、テレビを見ていた。

カノンノ達も輪の中にいて、すでに仲良くなり、異世界の話をしたり、軽く治癒魔術

を見せたりと、楽しそうに会話していた。

そして、

(・・・マリアさん)

セレナは、その顔を見て、静かに、

(・・・ありがとう、リュウ)

その顔にもう迷いはなく、まぶしい笑顔の中、歌姫の歌が始まった。

「・・・」

翼から敵意を感じなかった。調子狂う中、俺はライブの外にいた。

その背後から、緒川が気配を消しつつ、話しかけてくる。

「癖かなんかか」

「こういう仕事なんで」

そう言つて現れた緒川は、静かに俺を見ている。彼からも何かも感じない。

「・・・剣崎龍」

そして静かに、自分達が調べた結果を語り出す。

「貴方が孤児院を引越す際、たびたび言われる理由として、気味が悪いと言われているが」

「言葉通りだよ」

俺はけして振りかえず、空を見ながら目を閉じる。

いまロンドンのは夜の時刻、耳を澄ませば聞こえるのは、人の悪意。

「俺は外国の言葉も、文字も、見ただけで意味を理解する」

「それだけではないんでしょ」

「・・・」

その問いかけには、不気味と言われた顔で答えた。

血のような紅と、鋭い金色の瞳。銀色の刃の髪。

ゲーデとしての、自分の姿。

「俺は人の負、それがわかる」

子供の頃から、悪意だけ分かった。

彼奴はああいいながら、こちらを見下している。

愛していると叫ぶ、どうして面倒見なきやいけないかと愚痴る人等々。

嫌になるほど見てきた。それを裏で指摘したり、バレるように動いていた。

そんな問題児であり、現在の自分である。

「変わってるよなあんたらは、数日したくらい、ほとんどの役人から、俺への不満、負を

感じなくなった」

「・・・わかるんですか」

「わかるから、こんな性格になったんだ」

そして元に戻りながら、空を見る。真つ暗な空だと思いながら、

「十の感情だけがわからないからな、なにも聞こえないのはそういうことだ」

その言葉を聞き、考えてしまう。

幼い頃から、人の悪意だけははっきりわかり、人の善意だけわからない日々。

いま彼がなにを考えているか分からないが、彼がこの世界に対して、いい印象を持ってない理由だけはなんとなく察する。

「・・・」

ライブ会場から、熱狂が聞こえる中、アンコールコールが外にまで聞こえる。

「苦手だな、こういうの・・・」

苦笑しながら、元気になったんだろうなと思う。

「マリアから戸惑いが消えた」

そう緒川に告げながら立ち上がる。

「いまならセレナに伝わらない。話してもらうぜ、そっちの事情」

そう言いながら、緒川はしばらく沈黙後、頷いた。

「世界樹に突貫するか」

「世界樹は、ルミナシアにとって神聖なものなんだろう?」

緒川の車の中、翼、マリア、龍が、緒川の運転で移動している時の、龍の感想。

「知ったことか、もしもセレナがマリアの妹なら、どういう経緯で自分らの救世主にしたか聞き出す。ロイド辺りに言えば、すぐに攻め入るだろう」

「戦争を仕掛けるような言い方ですね」

「世界樹になにかあれば、世界犯罪者になるからな、間違いじゃない」

「さすがにやめてくれないかしら」

緒川の言葉に返答し、マリアが止める。

そう言いながら、残しておいたピーチパイを食べている。

「だが、君の意見はどうなんだ? マリアの妹、セレナだと?」

「イレギュラーがあるからな。共通点や歌、俺のこともあるから、全くないとは言えないし、なによりセレナのためにならない」

そんな話をしながら、窓の景色を見ている龍。

食べ終えたマリアは、口元を拭いている。

「悪いが、妹さんの遺体は?」

「・・・見つからなかったわ、あの騒ぎで爆発や炎もあがっていたから、セレナの聖遺物

だけは確保されただけ」

その話を聞きながら、セレナにこのことを言うべきか考える龍。

「マリアはそんな龍に、少しだけ敵意を向ける。」

「話は変わるけど、セレナは、貴方によくなくなっているわね。どういう関係」

「・・・マリアさん、なんで憎しみと敵意と殺意を向けるんですか？」

「向けてないわ、早く答えて」

翼は少しだけほえましく見ているが、龍はそういうものだろうかと翼を見る。

「別に仲間なだけだ。まあ、仕事する際、ルーキー同士なこともあるから、よく依頼を共にしたり、野外キャンプのさ」

言葉が途中で止まる。

「野外キャンプ？ セレナと二人っきりで野宿したの貴方？」

首襟を捕まれる龍。それには翼もあわて出す。マリアは明らかに、機嫌が悪い。

「べ、別に、やましいことはしてないっ」

「・・・二人つきりというのは反論しないのね」

「しまっ」

力が強まり、マリアの瞳から色が消える。

「別にわかっているわ、まだあの子がセレナであることはわからないことも。だからこ

れは違うと分かっているんだけど、もうだめなの、制止が付かないの」

「ギブギブっ」

「ま、マリアアっ、少し落ち着けっ」

「落ち着いているわ、だけど妹と同じ子が、悪い道に入るのは見過ごせないだけ」

「待てッ、なにか勘違いしてるぞッ。俺とセレナはそんな関係じゃないッ」

緒川は安堵していいかどうか思う状態に、苦笑いするしかなかった。

（少なくとも、響さん以外に、彼を受け入れてもらえれば、クリスさん達との仲も良好になるでしょう）

ともかく、マリアが本格的に首を絞めようとしているため、急いでホテル、その後龍を空港に送らなければいけない。

許可を取ったとはいえ、龍はもともとここに長くいる気はないようで、すぐにセレナ達のもとに戻る話になっている。

安全運転をしながら、いま走行しているのは自分達だけのため、少しスピードを上げるか悩んだ瞬間、

『ホーリーランスッ』

光の槍が、車を貫いた。

「……ほう」

車はすぐに爆発したが、緒川を始め、全員がすでに待避していて、襲撃者を見る。

「緒川さん、すぐみたいな動きだなんて……」

襲撃者は敵対しているもの達の動きに感心しながら、翼達は襲撃者を睨む。

「龍、彼を知っているのか」

「……ああ、いや違う……」

一瞬頷きかけたが、首を振る龍。

マリア達はいつでもシンフォギアをまとえる体制であり、龍も負の力を使える体制。

緒川は急いで連絡し、この辺りの通行を止め、戦闘のサポートに回っている。

「……お前は」

「貴様がゲートか、なるほど……お前のいる世界では、私がいたようだな」

「やっぱり、もう一人か」

翼達は敵を睨む。宙に浮く、光の翼を持つ、金髪の子。

「……ユグドラシル」

それはルミナシアにおいて、敵として戦った相手だが、目の前にいる者から、命の輝きを感じず、また、向こうもこちらとは初対面な言い方をする。

「悪いが、恨みはない。それでも、消滅してもらうぞ、負の怨念よッ」
そしてまた、光が放たれ、それが開戦の合図のように、三人は走り出した。

墜ちた英雄と戦姫

ライブが終わり、興奮冷めることもなく、いま響達は司令室へと流れ込む。

司令室の巨大モニターには、シンフォギアを纏い歌う翼。それを援護するマリアと龍。

そして対峙する者に、カノンとセレナは驚いた。

「ユグドラシルっ!!?」

光る羽根で空をとび、武装していない腕で翼の太刀を防ぐそれに、クリス達は驚く。

「知ってるのかあの白タイツ野郎」

「うん」

「天使って種族の人で、危険な人だよ。かなり強いし、だけどロイド達が倒したって聞いてる……」

セレナの答えに、疑問を覚える中、戦い方に切歌が叫ぶ。

「なにしてるデスっ、あの三人はっ!？」

翼一人に相手をさせ、二人は距離を取りつつ、援護している。

何人かも疑問に思ったが、

「いやそれでいい」

弦十郎の一言で、すぐに片づけられる。

「マリアくんと翼なら問題なくコンビネーションはできている。が、相手はノイズや装者ではない。龍くんは向こうの手の内を知っているが、二人との協力戦はいまが初めてだ」

「それだけじゃないよ、リュウの話じゃ、ユグドラシルは一瞬で敵を無効化する術があるから、距離を取らないと一瞬で逆転されちゃう」

二人はそれを聞き、いまの体制で戦っている。

翼に接近戦を全て任せ、龍は手のひらに、負の感情を集めて放つ。『エイミングヒート』という技、マリアもまた中衛からの攻撃をし、翼は歌を歌いながら、ユグドラシルと戦う。

だがカノンノとセレナは焦りの顔で呟く。

「このままじゃまずいよっ」

「龍は元々、全部の技を剣での攻撃でやる、もう前戦攻撃主義だから、サポートなんて無理なんだっ」

「剣?」

「あの男、剣なんって持ってないデスよっ」

「この世界の人、剣持ってたら捕まるから、おいてきたんだってっ」

それを言われ、納得する中、翼達の戦いを見守る。

「翼の攻撃は防がれているが、確実に命中している」

だが、なぜか決定打になっていない。高い攻撃を放とうとすると、見たこともない技、異世界の魔術で隙を狙われる。それにマリア、翼は対処できず、龍が守る形で防いでいる。

逆に龍は、二人の戦い方が分からず、前に出られず、いまの状態だ。

「一撃の必殺が出せずじまいか……いきなりの協力戦では致し方ないとはいえ、歯がゆい」

その弦十郎のつぶやきに、オペレーターの一人が叫ぶ。

「スキヤンの結果出ましたッ、未知の敵から生体反応はありませんっ」

「えっ」

それに驚く二人。セレナはモニターを見るが、モニター越しでは相手が生き物かどうか分からない。それにオペレーターは続ける。

「同時に謎のエネルギーを感じ、それにより攻撃を防がれていると推測されます」

「破ることはできないのか」

「现阶段ではなんとも言えません……」

少なくともただ斬りかかるだけでは致命傷を負わすことはできないのは明確であり、いまはじり貧な戦いが繰り広げられる。

この状態の中、彼らはできる限りのサポート。戦闘による二次災害などを起こさせないようにするのでやつとだった。

「くっ、やはり斬れないか」

ユグドラシルの身体に刃をたたきつけるたび、肉体ではなく、堅い装甲のような音が鳴り響く。

それにより力を込めて攻撃しようとするれば、魔術らしき技が自分や仲間達に襲いかかる始末。

『『ホーリーランス』』

「くっ」

『『エイミングヒート』』

急に現れる光の槍に、龍の黒い炎の弾丸が撃ち落とす。いまはその繰り返しだ。

「接近して一気に畳みかけられないのっ」

『ダメだッ、俺が知っているユグドラシル、あるいはそれ以上の戦闘力だッ。なら彼奴もあの技を持つてるッ』

マリアの叫びに、龍は強く否定する。

戦い始めた際も、龍が最初に言ったのがいまの状況。

曰く、相手は自分達を同時に無力化する術があり、それに巻き込まれないように、距離を取りサポートしなければいけないとのことである。

それがなんなのかわからないが、龍の言葉に従う二人が取ったのはいまの行動だ。

つばぜり合いのような戦いから、距離を取り、後ろを見ずに話しかける。

「だがこのままでは戦いが長引くだけだ」

『悪い、俺があんたらの戦い方を知ってれば、技使うサポートできるんだが』

「仕方ないわ、私たちも敵の出方が分からず、貴方に頼りつきりだから」

必殺の一撃を出せず、いまお互いにらみ合うしかできない両者。

周りは瓦礫と化しているが、人氣が無く、被害はいまのところ出ていない。

「しかし魔術……なんでもありだな」

光の槍や剣、雷まで操る。龍のサポートがなければ致命傷になる一撃もあったが、どれも龍が危惧する術ではないようだ。

「……」

こちらを見通す男、ユグドラシル。静かに見つめるは、

「ゲーテ、なぜ貴様は世界を守る？」

『……』

話しかけるユグドラシルに、龍達はけして警戒を解かず、構えるしかない。

『……お前、俺の知っているユグドラシルじゃないな。お前こそ、なんで戦う?』

それに対して、ふっと自虐的にほほえむユグドラシル。

「お前ならわかるはずだ、ゲーテ。私が生者ではないことを」

そう言い、翼に斬られた箇所を見せる。それは鉱物、宝石のように輝く身体だった。

「何者かは知らないが、偽りの肉体を作り、私と言う人形を作り出した。理由はお前達と戦うためだ。あいにくとそこまでしか知らない」

「なんだと……」

翼は驚きながら、ユグドラシルは鋭い視線で龍を見る。

「次は私の問いだゲーテ。世界の害悪にて、命が抱える矛盾の象徴よ。お前はなぜ、守護する側にいる?」

『……』

黙り込む龍に、ユグドラシルはふんと呟きながら、思索する。

「お前は人の負、人の怠惰、色欲、憤怒、傲慢、強欲。数えればきりがなく感情の固まりだ。醜く、愚かな人の心から生まれ、あまつ生み出した界より、否定された、生まれてはいけない存在。それがお前だ」

「!? なにを」

「実際全ての世界、ゲーデと言う存在は生まれた瞬間に消されている」

「!?」

それに驚くのは、二人だけでなく、それを聞いた全ての人だった。

「お前はいるだけで大罪と定められたモノ、なのになぜ、その世界のために戦う？」

セレナとカノンノは黙り込む。実際そうだ。

龍は、ゲーデは他の世界でも、世界樹の内に生まれ、浄化されている。

意識を持ったゲーデは、龍の他にいるとニアタから聞いた。だが、それで終わっている。

他の世界ではどうなのかわからない。負の感情、その象徴である龍は、

『・・・『チェーンソード』ッ』

ためらい無く、不意打ちをした。

地面から鋭い刃が、チェンソーのように刃を回転させ、ユグドラシルへと襲いかかる。

「!?」

『いまだ二人ともッ』

「ちよつ、それは」

「いくらなんでもっ」

二人も驚くが、すぐに動いた。

翼の剣は太刀から大剣へと変わる『蒼ノ一閃』を放ち、マリアは蛇腹剣を振るう。

「くっ」

さすがに驚いたのか、ユグドラシルの表情がゆがむ。蒼ノ一閃を食らい、腕に亀裂が走る。

「ゲーデッ」

『ハッ、俺が害悪だぜッ。敵を倒すのに手段は考えねえよッ』

話し始めた際、ゆっくりと髪の刃を地面へと伸ばしていた龍。考え込むそぶりをし、視線を集めたりと、こそくな手を使った。

『俺の答えは一つ、知ったことかッ』

「!!?」

ユグドラシルは驚き、龍は接近して、エイミングヒートを零距离で放ちながら、突撃する。

地面にユグドラシルを削るように引きずりながら、その眼光を向ける。

『俺が悪？ 別に構わないッ。世界だが知らん、知っちゃこっちゃねえよッ』

「己を否定する世界、滅ぼそうと思わないのかッ!？」

叫ぶユグドラシル、いつの間にか身体に髪が絡まり、龍は高く投げ飛ばす。

『知るかッ』

その体制は二人は知っている。龍は両腕に負の力を集め、ドラゴンを作り出す。

『俺は俺だッ、世界だろうが神だろうがッ』

拳と脚による打撃の嵐、そして胸にアツパーを放ち、体制を崩させる。

『俺を殺せるのは、セレナ、デイセンダーが持つ救世の光のみッ』

ドラゴンが大きく口開き、ユグドラシルのが見開く。

『希望しか俺を殺せねえよッ、黒喰龍ッ』

ユグドラシルは黒喰龍に喰われ、龍は吐き捨てる。

『俺は壊すだけだ。誰かを守ったりしたことは一切合切絶対的に徹底的にあり得ない』

そう言い、手応えに気づく。

『チッ』

盛大に舌打ちして、口を開くが、そこにユグドラシルはなく、

「なるほどな、それがお前の答えかゲーデ」

別の場所にいるユグドラシル。龍は体制を大きく動かし、かなりの隙を見せるが、二人がサポートの体制であるため、ユグドラシルは攻撃せずに見ている。

「これは」

「黒喰龍は確かに捉えていたはず……」

『瞬間移動かッ、くそッ』

内心そんなことできるのかと驚く二人だが、龍はまた臨戦態勢を取り、ユグドラシルは笑う。

「世界の害悪、矛盾の存在よ。お前はいずれ、仲間達に殺されるだろうな」

『別にそれは構わないが』

「龍っ!？」

翼とマリアは声をあげたが、それにユグドラシルは笑う。

「お前は……壊れているな」

『だからこそ、敵対してるんだろ。災いさん』

ユグドラシルは静かに、龍を見つめながら、亀裂の走った腕を上げた。

「ならばこれに対して、どう行動する?」

瞬間、空が光り出した。龍は、

『(ジャツジメント)』

放たれる光の柱に、すぐに対応しようとするが、

『!?!』

方向は自分らではなく、別の、

「『側の建物っ!?!』」

しかもそこには、

「しまっ」

戦いの様子を見ていた緒川がそこにいた。

三人はすぐに動いた。龍はチェインソード、マリアは蛇腹剣、翼は剣で光の柱を防いだが、

「固まったな」

その瞬間、中心にユグドラシルが現れた。

三人は気づき、龍は髪で緒川だけ距離へとぶん投げた。だが他は無理だった。

「『慈悲をくれてやろう。痛みすら感じぬツ。時を統べる力。タイム・ストップ』」

ユグドラシルを中心に、灰色の空間が三人だけでなく、ギリギリで緒川以外を飲み込んだ。

その瞬間、翼達の思考は停止した。

「これは」

体制を整え、驚愕する緒川。

瓦礫までも宙に止まり、全員が一斉動かない。

「時間を止めた、世界の害悪とて、時の理には逆らえない。いや、その身を人にした時点で、致し方ないことか」

また空間移動し、彼らの斜め上の頭上に現れる。

そして彼らを囲むように、光の魔法陣が現れ、無数の剣が現れた。

!!?

緒川が拳銃を取り出し、ユグドラシルに放つが、微動だにせず、気にもとめない。

「二人の装者、そしてゲーデよ。痛み無く散れッ」

だが、

!!?

地面、翼達の地面から、銀色の刃が生え、翼達に巻き付く。

(あの男をかばうようにしたのは、動きを隠すためか)

髪は動いていたのは知っていたが、まさかタイム・ストップ外まで地面の下に忍ばせて、攻撃に対する防御の術を隠していた。

(こごかしいが、己の身は考慮せずか)

ユグドラシルは自分を守らない龍に対して、渾身の一撃を叫ぶ。

『プリズム・ソード』

「!!?」

ユグドラシルが何か叫んだ瞬間、場面が変わるように意識を取り戻した翼達。

まず全身に巻き付くのは龍の髪であり、それが光の剣を防いでいると感じ取ったときに見たものは、

光の剣で貫かれて、鮮血を流す龍であった。

「龍っ」

だが、

『取ったッ』

「!!?」

タイム・ストップをすれば、必ず力を込めた一撃を放つだろう。

緒川を助けるように投げれば、それに気を取られ、地面に忍ばせたチェーンソードに気づかないだろう。

それがもし翼達を守るように動けば、より気づかないだろう。

ミシツと、地面から何かが吹き出した。

『チェーンソードッ』

本命、チェインソードの一本は、ユグドラシルを貫く瞬間、そう叫んだ。

「ぐっはっ」

身体に亀裂を走らせ、痛みらしきもので顔をゆがませるユグドラシル。

「きゃ、ま」

『翼ッ、マリアッ。あとは任せたッ』

もう自分は追撃はできない。さすがにダメージがでかい。

それに二人は驚きつつ、胸のブローチへと手を伸ばす。

「させるかッ」

ユグドラシルは貫かれたまま、追撃しようとするが、発砲音が鳴り響く。

それを無視して、魔術を使う。はずだった。

「!!?」

一瞬身体が動かず、困惑する。

緒川が撃つたのは、ユグドラシルの影への発砲。

『影縫い』という技が、彼女らの必殺をする隙を生んだ。

「イグナイトモジュール、抜剣ッ」

それを使用したとき、

『(・・・!!?)』

世界が動いた。

「これはっ!!?」

突如司令室にアラームが鳴り響き、弦十郎達は困惑する。

「どうしたっ!!?」

「イグナイトモジュール並び、聖遺物、天羽々斬並び、アガートラームのエネルギーが上昇ッ、尋常じゃないエネルギーですッ」

「イグナイトモジュールの効果じゃないのかっ!!?」

「違いますッ、それどころか、これは・・・」

弦十郎の叫びに、エルフナインは困惑する。

「イグナイトモジュールでの翼さん達に対し、悪影響はありませんッ。パワーだけが尋常じゃないほどあがってますッ」

「なぜそのようなことが」

司令室のアラームはいまだ鳴り響く、モニターの MARIA と翼から、霧を通り越し、光のような柱が立ち上がる。

「なにがあつたのっ!？」

響の問いに、エルフナインは叫ぶように言う。

「龍さんから聖遺物、天羽々斬とアガートラームを感知。龍さんからお二人の聖遺物の力が流れ込んでますッ」

「デスっ!!？」

全員が驚く中、それでも戦局は動き出す。

「龍、これは一体っ!？」

「翼さんッ」

緒川の叫びに我に返り、龍に近づくよりも早く、ユグドラシルを見る。

『『グランドダツシヤー』』

地面が揺れ、津波のように押し寄せてくるが、

「マリアッ」

「わかつてるッ」

龍をかばうように前に出て、剣を一降り、本人は一降りするだけだが、

「なっ」

それは大地を削りきり、グランドダツシヤーを切り裂いた。

(翼じゃないのに、なんなのこの力……)

剣撃だけが飛び、ユグドラシルを捉え、後ろへと後退させる衝撃破。だが自分はそのつもりで振るったわけではない。

二人とも瞬時に自分達、シンフォギアの外装を確認する。だがエルフナインによる強化されたイグナイトモジュール時の格好、姿そのままだ。

変わっているのは、聖遺物の力のみ。

「くっ」

それでも戦局を終わらせることを第一にするため、翼は歌う。

「くっ、はっ」

身体に亀裂を走らせるユグドラシル。弱っていることもあるが、やはり圧倒する翼。

彼女は歌う、ユグドラシルと言う敵を倒すため、

「これが奴が言っていた、イグナイトモジュールか」

そう呟くユグドラシルに、必殺の一手を放つ。

炎を吹き出し、鳥のように羽ばたく翼。

その勢いのままに、ユグドラシルを切り裂いた。

「……見事」

『羅刹霧ノ型』に対して、ユグドラシルはそう呟く。

た。

「龍っ!?!」

シンフォギアを解除した二人は、龍に近づく。

龍は血を流しながらその場に倒れ、緒川が脈を確認する。

「これは少し、早く病院へ運ばないと」

「ええ。 فقط」

マリアは頷くと同時に、自分達の聖遺物を見る。

何事も無いが、明らかに異常なことがおきた。

「マリア感じたか?」

「ええ、とてつもない力が、イグナイトモジュールを通して流れ込んできたわ」

それと共に倒れる龍。なにか関係あるだろう。

「とりあえずいまは」

「日本に戻らねばなるまいな」

そう思いながら、気を失う龍を見ながら、夜は過ぎていった。

エルフナインは少し徹夜した。

「クイツキー」

「ああ、僕なら大丈夫だよクイツキー」

「クイツキー」

昨日のデータを見て、結果を報告する。

いま装者達とカノンノ達はいない。真夜中、というよりもうすぐ朝だが、すぐに報告しなければと、起きている弦十郎達、緒川に連絡したのだ。

「それでなにがわかったんだい？」

弦十郎の言葉に、少しだけ緊張しながら、仮説と推測が混じっていると付け加え、ある可能性を説明する。

「イグナイトモジュールと聖遺物、この異常な強化ですが、おそらく龍さん。ゲーデが関係あると考えられます」

「龍くんが？」

はいとつぶやき、モニターを操作。それは龍と仮定された黒いコマと、装者達、各々の色のコマだった。

「まず聖遺物並び、イグナイトモジュールの機能に関しては、全く問題はありません。ですが、問題があるとすれば龍さん、ゲーデの力です」

キーを叩きながら、コマの龍が黒い力、外装のようなものに包まれる。これはゲーデ

状態の龍を表しているのだろう。

「龍さんやカノンノさん達のお話では、龍さんは自らの負や、世界に存在する負の感情を纏うと言う形で、あの姿になっているということですよ」

そして、今度は蒼と銀、翼とマリアのコマが前に出る。

「イグナイトモジュールは本来暴走状態の装者であるみなさんをサポートする機能です。暴走状態はみなさんが知っている通り、響さん達の負の感情が原因でおきる状態で、ここからは仮説ですが」

そう言い、モニターの中で、蒼と銀が黒い鎧を纏うと同時に、矢印、黒いベクトルが龍へと流れ込んでいるように写す。

「おそらく龍さんは、イグナイトモジュール時のみなさんの負の力を吸収していたと推測されます」

「龍くんが翼達の負の感情を？」

「もつと言えば、聖遺物の力をです」

「!!？」

弦十郎はエルフナインか言おうとすることにいち早く気づき、めまいを起こしそうになった。

龍は聖遺物、シンフォギア装者ではない。

資格無き者が聖遺物を扱うことが自殺行為と言うことは、彼らが一番、よく知っている。

「おそらく負の感情と共に、龍さんは天羽々斬と、アガートラムを取り込み、拒絶反応で倒れたと推測されます」

それならば、イグナイトモジュールを発動させた際、倒れたのに領ける。だが、「だが翼達は？ あの力の強化は」

「それも仮説ですが、龍さんと一時繋がった状態になった聖遺物が、より純度の高いエネルギー源を得て、強化されたと思われまます」

簡単に言えば、龍は百パーセントを超える聖遺物を制御並び、運用できる器がある。

だが、龍は聖遺物を扱うことができないため、器である龍は壊れる。

結果的に言えば、

「それって、装者である響ちゃん達が、龍くんから力を奪い取っているって」

オペレーター男性の不用意な言葉に、女性からにらみで黙らせられる。

だが、エルフナインはうつむいたまま、

「エネルギーのやりとり上、そう言う結論です・・・」

その言葉に司令室に長い沈黙が訪れる。

「・・・ちなみに、彼を配慮しない場合、装者達による負担は？」

聞かなければいけない立場である弦十郎は、渋々訪ねる。

もしもこのことが公になればどうなるか、考えたくない。だが、万が一の場合、どんな事態であつても覚悟しなければいけない。

「響さん達には全くと言つていいほど無害です。むしろ無制限に近いほど、力が強化されると思われませう」

ですがと、付け加え、

「その場合、龍さんは・・・」

静かに、

「確実に絶命します」

はつきり、そう結論づけた。

そこは真つ暗な闇だつた。

なにもない闇の中、それは静かに布を広げた。

銀色の布と、蒼い布。平たく床に広がり、しばらくすると、何かが起きあがる。

「おめでどう」

それは静かに呟いた。

布で全身を隠したそれらは、体を動かし、調子を見ている。

「まだ君らは動かせないよ。まだ手を動かすわけにはいかない、まさかもう精霊達に気づかれるとは思わなかった・・・」

そう言いながら、蒼は静かに、

「笑止、私を早く、ゲーデのもとに」

「あら、抜け駆けする気？」

銀色はそう言い、無言になる蒼色。それにまあまあと落ち着かせる。

「まだ問題があるんだ。橙色の子、あれは不完全だね、君の力を少し使わせてもらおうよ」

「・・・」

銀色は黙り、橙色の布に包まれ、鎖に巻き付かれたそれを睨む。

「まだ焦らなくていい、それに、次動かすのはユグドラシルとは違って、制御できないから、出ない方がいい。よけいな戦闘はしたくないだろ」

それに黙り込み、闇の中にとけ込むように消えた。

静かに見送りながら、それは暗躍する。

「ゲーデ、君と相まみえる日を、楽しみにしてるよ・・・」

それもまた闇のとけ込み、静寂が訪れる。

思いと想い

彼女たちはいま、シヨツピングを楽しんでいた。

「えっと、これがしーでいーなんだね？」

セレナがそう言い、切歌はそうデスとうれしそうに言う。

「それに、昨日のマリア達の歌が記録されてるんデスよ」

音楽が好きなセレナ。お金はまず龍が立て替えてくれたし、こちらが持つ宝石とお金を、弦十郎に頼み交換してもらっていた。

本人は欲しいものがあれば渡すと言ってくれたが、ただでさえ住む場所を用意してもらっているんだ。私物はやはり自分達が稼いだお金だけにしたいと断った。

セレナが欲しいと言った物は、音楽に関係するものだった。

カノンノはスケッチブックとそれに関係するもの。彼女は風景画を描くのが好きなので、シヨツピングのあとは、色々見て守るつもりだが、

「二人とも、元氣ないね」

「うん・・・」

小日向未来、響の友達として彼女たちに紹介した少女。ここにいるのはクリス、切歌、

調とクイツキーだけで、未来が持つバツクの中から、少しでも顔を覗かせている。

話は聞いた。装者達が、ゲードから力を奪うように強化される状態になってしまったらしいことに。

それを聞いて、クリス達はむろん、カノンノ達も青ざめた。

エルフナイン曰く、ゲード状態の龍か、イグナイトモジュール時の装者がそろって起きる現象のため、どちらかがその状態でなければなにも起きない。

だが、龍はゲードの状態でなければ、ほぼ戦えない。獲物と言える武器は、ルミナシアに置いてきた。

そして装者達も、必殺とも言えるイグナイトモジュールと言う切り札が無くなる。少なくとも、今後に関わる事態だった。

いまエルフナインはゲードと装者の関係に安全装置のようなものを視野に、研究と調査をしている。

そしていま龍は目が覚めない。

病院のベットで、外傷もなく倒れている。

調べた結果、聖遺物による拒絶反応が原因であると見られる。

つまり龍に天羽々斬とアガートラムの適正はないということだ。

そしていまは気分転換のため、こうして買物なんだが、

「セレナのこと。カノンノには」

「言つてない、龍さんは向こうで翼さん達に聞いたみたい。すつごく怒つてたつて」

響はそう呟きながら、音楽を聴いてるセレナ。切歌と調が付きつきりであり、クリスはカノンノのほう、スケッチブックなどのお店を案内してた。

「ごめんね未来、色々話聞いてもらつて」

「別にいいよ。それより気になるのは」

「龍さんとクリスちゃん達だよね」

翼から、龍は負の感情、人の黒い部分を生まれた頃から分かる生き方だったと知ったとき、三人の顔色が悪くなる。

三人とも、人の醜さは心底知っていた。

それが生まれた頃から見ていたのなら、世界を嫌う理由はわかる。

わかるが、

「それでも、色々な人が、大切な人達が守つて、愛した世界だから、みんな龍さんに対して、ね……」

複雑になる人間関係に、響は頭を抱え、未来はその様子を見守る。

クイツキーは未来を見つめ、その頭を撫でながら、

「その人、龍さんってどんな人なの？」

いまだ性格がわからないため聞く未来に対して、響はいままで龍を思い返す。

「いい人？ だと思っよ。師匠が言うには、わがままな子供って言った」

「ふむふむ」

「私的には、少しずつるううううって言うこと平気だしちゃう人だけど、本当に悪い人って感じじゃないんだよね」

炎の中、猫を助け出し、自分を助けてくれた龍。

「この世界が滅んでいけばよかつたと言っ龍。

どちらが本当か、少しわからない。

それを話してみると、

「どつちも龍さんなんじゃないかな？」

「えっ」

その答えに驚くが、未来はそのまま、

「私はまだちゃんと会ったこと無いけど、その人、裏表ある人って印象はないよ。みんなのように、きつと事情があるんじゃないかな？」

「事情……」

そのとき、異世界人の買物を手伝う仲間達を見る。彼女たちも事情があり、敵対していた時期がある。

それを考え、よしと前を見て、ほほえんだ。

「やっぱ未来は私の日だまりだよ、おかげでやりたいことがわかった」

「うん、それくらいは手を貸すけど。夏休みの宿題は少しだけだよ」

それに悲鳴を上げながら、響は行動に移る。

とある港付近、海の上でできた大地に、セレナとカノンノ達は驚いている。

「えっと、ここって本当に海の上？ 道路とかわからないよ」

「うん、本当に下って海なの？」

目立たないように驚いているが、そうだよと響が言う。

「ちなみにちゃんと言明できるか？」

クリスが意地悪そうに言うが、えっとと目を泳がせる響。そんな風景に少女達は楽しそうに歩き出す。

近くのオープンレストランでランチしながら、海風を感じつつ、カノンノは空気を吐く。

「なんだか久しぶりな気がするよ、向こうじゃ、海の上が当たり前だから」

「そうだね、バンエルディア号での生活が長いから」

「ああ、それって空飛ぶ船だよねっ」

そんな話の中、ルミナシアでの話が盛り上がる。セレナの話に、切歌や調が詳しく聞く。

異世界ルミナシアでの戦いや、たわいのない話。さまざまな種族や身分の仲間達。そして龍の話。

「……」

三人は複雑そうに、龍の話を聞く。

カノンノやセレナから話される龍は、ツンデレな天の邪鬼のような、それとも、

「ねえ響」

小さな声で未来が聞く。

龍の話をするたび、二人はうれしそうに、頬を赤く染め、優しく語っている。

まるで大切な思い出を話すように、

「うん、だよね……」

そんな二人に、切歌と調は複雑そうだった。

(こ、こんな話、マリアが知ったら)

(絶対に落ち込む……)

そんな感想を思いながら、クリスは静かに、

「……お前は」

少し言いにくそうに、

「彼奴のこと、仲間って思ってるのか」

それに二人は、なにが言いたいかわかっていながらも、

「うん」

「だって龍は」

「私達にとって、大切な仲間だから」

口ではああいいながらも、誰よりも先に前に出る。

その話の中で、

「仲間の中にね、双子の王族、ルークとアツシュって仲間がいるんだ」

兄であるルークは、王位継承権を持つが、彼は双子の弟、アツシュが王にふさわしいと思っている。

なにより、許嫁であるナタリアは、アツシュと総意相愛なものも知っていた。

それでも口が悪く、それを素直に言えない男。

アツシュもまた、素直ではなく、ルークにお前が王だと告げながら、王の資格が無いルークに苛立ちを募らせている。

そんな中、ナタリアが何者かにさらわれた。

二人の猛攻を退けつつ、二人は叫ぶ。

「お前になにが分かるツ、俺だつて、俺だつてアツシユが王にふさわしいのが、ナタリアにはアツシユがいいのはわかつてるツ。けど、どうすればいいんだツ」

「それをなげいま口にするツ、己の真意を分かかっていながら、なぜあらがおうとしな
いッ。助けを求め、手を伸ばし、悩み、選ぼうとしなかつたツ」

剣をはじめながら、ルークを牽制している。そこにアツシユが割り込んでくる。

「貴様も貴様だ。王の資格を持ちながら、弟を苦しめている自覚がありながら、なによ
り、愛する者を苦しめていると知りながら、なぜ行動しない」

「貴様のような者に知る必要はないツ」

「語らぬか、愚か者よ。なら語ってやろう、それは兄の安否を気にしているのだろう」
「黙れツ」

弟であるアツシユの発言が強まれば、ルークの立場が悪くなる。下手をすれば内乱の
恐れが起きる。

それがあるため、ルークの影になることを選んだアツシユ。

それを剣士はあざ笑うように砕く。

「アツシユ・・・お前」

「愚か、実に愚かだツ。だからこそお前達は何も得られず、全てを失う。ならば、いまこ

ここで刈り取るッ」

「黙れッ」

ルークとアツシユの連携に、剣士は静かに叫ぶ。

「貴様達は分かかっていないッ、その選択、その先にある未来に、希望も、夢も、愛も、優しさも無い。己の自己満足がために、多くの者からそれらを奪うというのならッ」

剣士は剣を強く握りしめ、

「いまここで散れッ」

「散らないッ」

「俺達にはまだ」

「やるべきことがあるんだッ」

「で、その剣士の正体は龍だったんだよね」

「えええ〜」

ちなみにこのことは一部のメンバーしか知らない上、ヴァンも一つ囁んでいた。

知らない者達は躍起になって龍に挑み、倒された。

ヴァンにいたっては「カノンノ達が近くにいるんだ、殺す気で来てくれ」と言われ、龍はその言葉通り、致命傷を与え、ルーク達の本音を引きずり出した。

「いま思えば、女性と男性で、攻撃も違ってたよね・・・」

「あのあと大変だったよ、ヴァンさんは三日間寝たきりだし、龍はやりすぎで他のみんなの仕事やったり、他のみんなも龍の所為で医務室行きだしって」

翌日には回復したが、アンジュは話も聞かずに飛び出した罰と言って、龍ほどではないが仕事を回される。ヴァンもまた、よけいな話を龍にしたため、よけいな仕事を回されたい。

だが、いまは少しずつだが、双子の王族の関係や、内情が少し良くなっている。

少しだけ素直になった二人に、ナタリアは礼を言いに龍のもとに言ったが、

「ならば本当に問題解決したときにしろ」って言って、仕事に出かけてね」

「まあ、ナタリアさんも、それに納得したんだ」

そんなことを言うが、実は龍は二人の技や、他のメンバーの戦いで傷を負っていた。

アンジュ曰く「やせ我慢をやめたら、休ませてあげる」とのこと。

だが龍は結局そのやせ我慢を貫いた。全くと呆れる二人。

「男の子ってどうしてこう、自分の本音とか言わないんだらう?」

「私たちの、アドリビトムの人達だけなのかな?」

「それは私たちにも分からないかな?」

響はよく考えると、歳の近い異性の友人はいない。クリス達はまた振られても困る

と、そつぽをむく。

そんな話の中、三人は険しくなる。

「わざわざ悪役受け持って、相手はなにがしてえんだ」

「それはわからないよ、だけど」

「龍は自分が悪者でもなんでもいい、いつもそう思ってるの確かだよ」

セレナの言葉に、クリスは黙り込む。

昼下がり中、セレナはそれに、

「だけどね」

うれしそうに、どこか恥ずかしそうに、

「だけど、いつも助けに来てくれる。他の仲間達みたいになにがなんでも駆けつけるし、一番は、大事なことの前に、絶対に現れてくれるんだ」

彼女は話す、静かに、カノンノもまた、静かに聞く。

「私は最初、記憶喪失で、歌と名前しかわからないとき、カノンノやみんなと一緒に、龍もいてくれた」

そして知った、自分が救世主、生まれたばかりの存在であり、龍の敵だと、

「精霊、初めてであった氷の精霊、セルシウス」

彼女は言う「その男はゲーデ、世界に仇なす、害悪。デイセンサー、貴方の敵ですッ」

と叫び、ともにいたりヒターと、龍へと襲いかかる。

自分の言葉でその場が収まったが、それでも変わらない。

ディセンダーとゲーデは敵同士であり、救世と害悪。その関係はかわらない。

だが本人は、

「で？」

その一言で終わらした。

「ばかばかしいよ、私、すつつつごく悩んだんだよつ。セルシウスには、彼は敵だから仲良くなるなって言われ続けたりしたりして、なのにて終わらすんだもん」

そして結局、関係は変わらなかった。

なにより、

「・・・始め、私が世界を救うって言われても、わかんないし、怖かった」

私にできるのだろうか、私でいいのだろうか、そう悩み、考えているとき、龍が、

「龍が私を支えてくれた」

うれしそうに、恥ずかしそうに、思い出を思い出す。

救世主だろうが関係なく、セレナとしてしか見なかった。それは、

「みんな一緒、私がディセンダーでもなんでも関係なく、あの世界で生きる、一人の女の子だって、龍やみんなが教えてくれた」

それを複雑そうに聞く響達。もしかすれば、そうじゃないかもしれないからだ。うれしそうなセレナを、切歌と調は見られない。

「だから守る」

そうセレナは言う。

「龍は口ではああいうけど、この世界だって、守るのなら守る」

それは龍を知るカノンも頷く。

「そうだね、ああ言うけど、きつと」

「その事件を目の前にしたら、きつと守るために戦う。この世界で関係ない、火災現場に一番先に駆けだしたときのよう」

それに三人は驚く、そうだと。

火の中で一番早く、その中に飛び込んでいた龍。

(・・・だけど)

彼奴は。パパやママが、自分達が守っている世界を否定した。

(ママが守ってくれた世界です・・・)

(それを、あの人は・・・)

なにも知らずに否定した。

それが釘のように刺さり、彼を避ける壁となっている。

「セレナってすつごく、龍さんのこと好きなんだね・・・」

響がそう、そう、なにげなく言うのと、

「・・・」

徐々に真つ赤になりながら、静かに、

「・・・うん、大好き・・・人だったら・・・恋人になりたい・・・」

それはいままでの重々しい雰囲気を消し飛ぶほどの言葉だった。

「!!?」

マリアが飲もうとしたカップが、突如ひびが入った。

「なぜっ!!」

響達は真つ赤や真つ青な顔でセレナを見る。

正直いまの話、マリアには絶対にできない。話を知る装者達が考えたことだ。

それにカノンノは、

「・・・人だったらとか言うのなら、絶対に渡さないよ」

ぼそつとつぶやき、沈黙が訪れる。

小さな声で、隣にいる未来に助けを求め。

「こ、これってどうすればいいの未来っ」

「わ、私に言われても。こういうのは、ちよつと」

「なんでこんなことになってるんデスカつ、いまの話、絶対にマリアには言えないデスよっ」

「うん、そうだね切ちゃんっ」

「つていうか、カノンノもか、彼奴もか、彼奴もなのかつ」

「装者達があわてふためく無く、カノンノ達は真つ赤になる。いまになって、発言したのが恥ずかしくなったのだ。」

そして、

「!!?」

近くから、爆発と共に炎があがった。

港倉庫街、一人の警備員が拳銃を構え、不審者に向ける。

「て、手を挙げろッ」

それは片腕で斧を持ち、片腕で機材を破壊した男。

なんとも言えない恐怖を感じつつ、男は肩をならし、フーと息を吐く。

「あー……」

静かに、

「今日の俺は・・・紳士的だあ」

そう言った瞬間、拳銃を持つ男の上半身は無くなった。

「だから、楽うに殺してやる・・・」

空を見ながら、彼、狂戦士バルバトスは、近くに動くもの達へと、ゆつくりと近づいていった。

無双

走り出す響達。すでにシンフォギアを纏っている。

走る彼女たちとともにいるのは、丸腰のセレナ。カノンノは未来と共に、避難誘導ぐらいの手伝いしかしていない。

「大丈夫なのか、丸腰で」

クリスの問いかけに、ほほえむセレナ。

「うん平気、来て、『輝く光器・レイディアント・騎士』」

そう言った途端、セレナの姿が光包まれて変わる。

青を基調にした、剣と盾を持つ、ドレスの騎士姿。セレナはそれを纏いながら、

「それって」

「輝く光器レイディアントっていう、ディセクターだけの鎧と武器。これは私がよく使うスタイルに特化した姿かな」

「聖遺物みたいデスっ」

そしてたどり着いた先は、地獄だった。

「・・・そんな・・・」

響は絶句して、みんな青ざめる。人が上半身、綺麗な吹き飛ばされている。

いまは港の倉庫、コンテナもなにも粉々であり、火の手が上がりながら、それはいた。
「テメエかこれをやったのはッ」

「アン？」

その姿に、セレナは戦慄する。

「バルバトス……」

構えて睨む相手は、片腕で巨大な戦斧を肩に担ぎ、辺りを見渡す。

他に人がいないのを確認して、今度はセレナを見た。

「ふむ、お前えがあ、ディセンダーかあ……」

肩をならして、いつでも戦える、そんな素振りを見せている。

「どうしてこんなひどいことするのっ」

「そうデス、なにが目的デスっ!？」

調と切歌に言われ、それは少し考え込む。

「目的か？ あいにくと、俺にはそんなものは、ない……」

「……ない？」

クリスの言葉に、それはセレナしか見ずに、静かにつぶやく。

「俺は奴らに敗北して死に、なにかによつてえ、この身体、鉱物の人形を与えられたあ。」

それは理解できる」

「誰かって・・・それに、やっぱりあなたは、私のことを知らない・・・」

「アアア・・・そいつが言っていたな、別の俺えがあ、お前と戦い、敗北したらしいな・・・」

響達は喉が渴きだし、構えを解こうとしない。

(ただ目の前にいるってだけで、なんてえプレッシャーだこいつ・・・)

(少しでも気を抜けば)

(殺される・・・デス・・・)

そんな三人に相手、バルバトスは続ける。

「なにをしているかだったな。暇あ、潰しだ」

「・・・ひまつぶし・・・」

響が信じられないと言わんばかりに言葉を振り絞る。それにああと頷く。

「ただそこにいた、今日の俺はあ紳士的だあ。苦しまずに全員、殺して、やったあ・・・」

「そんな、理由で・・・この人達を殺したって言うんですかっ!？」

激昂する響に、セレナが前に出る。

「冷静になつて響ツ、この人は私の知っているバルバトスと同じツ。ただ殺し合いをしたいだけみたいっ」

「そんな、殺し合いしたいなんて・・・」

「事実だよ、この人は力を示したいとか、憎いとかじゃなく、ただ殺し合いたい。それだけしか考えていないツ。リュウが言っていたの、バルバトスから悪意はないってツ」

「!!?」

いまだ驚愕する響に対して、バルバトスはせてと呟く。

「あいにくと、奴は俺を御しれないと判断してか、この世界のことや目的はああ、まるつつきリイ、わからんツ。だが、俺のすることは一つ・・・英雄と戦い、殺すこと」
そしてセレナを見ながら、

「異世界の救世主、お前を殺して、まずは手始めに、この世界の英雄を皆アア、殺そう・・・」

「そんなことツ」

「させるかデスツ」

そして装者と救世主、凶戦士との戦いが始まった。

二人のデュエットが響き、みなが動き出す中、バルバトスは静かにたたずんでいた。

調はローラーで攪乱しようとして動いているが、まるで見向きもせず、彼女の技の一つ、鋸を放つ『 α 式・百輪廻』を放つが、

「・・・」

防御もなにもせず、それが身体を切るはずだった。

「!?」

歌いながらも驚愕する。本来は攪乱や牽制を目的とした技だが、それが命中しても威力無く、身体にめり込み、回転が止まった。

だが切歌は裏に回っており、いつの間にか二つ持つ鎌を合わせて使用する技『双斬・死uデRえら』で切り刻もうと、はさみのように使うが、

(デッ、デスッ!?)

それは身体に食い込むが、それ以上深く切らず、離れようとしても、食い込んで離れない。

「・・・はあああ」

長いため息の中、ちらつと響を見る。

響の全体重を乗せた蹴りが、顔に命中する。バルバトスの足場がめり込むが、バルバトス自体は、微動だにしない。

「そんなっ」

響が驚くが、バルバトスはやつとなにかに反応する。

『瞬迅剣』

槍のような鋭い突きが放たれ、セレナの攻撃だけは、斧を使い防ぐ。その瞬間、切歌や響はその場から離れ、セレナもまた離れた。

「むっ」

そう言えば歌が変わっている。それはいつの間にか、全砲門を展開するクリスの存在に気づいた。

「くられ、威力マシマシだッ」

放たれたあとの叫び『BILLION MAIDEN』が放たれるが、

「・・・」

それを静かに見ているバルバトスに、全弾命中した。

煙が立つ中で、全員が一カ所に集まりながら、その中心を見る。

「やったデスか？」

「切ちゃん、それはやってない時の台詞だよ」

「そうだね、きつとまだだよ」

セレナの言葉に、煙が離れていく中で、無傷のバルバトスがそこにいる。

「マジかよ・・・」

「人間の身体じゃないからって、シンフォギアの攻撃が効いてない・・・」

セレナの分析だが、それは違うと呟く。

事実、刃は食い込み、僅かに傷らしい傷はある。

ただ、

「威力が足りない．．．この姿じゃ、彼奴に致命傷を与えられない．．．」

調が悔しそうに言い、それは装者全員の気持ちだ。

唯一バルバトスが警戒した攻撃は、セレナの攻撃だけであり、その攻撃も、

「軽い、な．．．これえが、救世主．．．デイセンダーの、力かああ．．．」

「．．．」

セレナは考えながら、しばらく沈黙後、

「ごめん、ここは私に任せて」

「セレナッ」

「なに言ってるデスッ」

「そんなことさせないよッ」

「テメエ一人に任せられるかよッ」

響、切歌、調、クリスの順に叫ぶが、セレナは首を振る。

「翼さん達と同じ、私はあなた達の攻撃方を知らないし、その逆も．．．それに、私の武器なら、あの身体には有効みたい」

「どうやら、そのようだな．．．」

攻撃を防いだ斧に、少しの亀裂が入っていた。バルバトスもまた、それを肯定する。

出す。

「相手の方が強いときは、小技で力そいで、行こうぜ」

人のいやがる戦法をよく考え思いつく人。どうして自分はこんな人好きになったのか、わからない。

けどいまは、これがベスト。

(このまま、ダメージを乗せ続ければ)

双剣士、忍者、または狩人など、技を変え、スタイルを変え、バルバトスに切り傷を与え続けるセレナ。

いまある作戦の下準備、そのために戦っている。

そんな二人の様子を見るしかない装者達は、歯がゆい思いをしている。

「くっそ、見てることしかできないのかッ」

「落ち着くデスよ先輩っ」

「落ち着けるかッ、セレナだつて致命傷を与えられねえじゃなえかッ」

ヒット・アンド・ウェイを繰り返すセレナに、どうすればいいか考える装者達。

「待つて、エルフナインちゃんの話じゃ、龍さんがゲーデじゃなきや」

「チッ、そうだな。こいつを使うしかないッ」

「一気に逆転デスッ」

「行くよッ」

「……ん」

「!？」

バルバトスはこちらではなく、四人が立つ方を見た。

四人は胸元にあるブローチへと手を伸ばしている。

「あれは……なん」

疑問に思ったバルバトスが口になると同時に、

「「「イグナイトモジュール・抜剣ツ」」」

四人が叫ぶと、イグナイトモジュールが展開する。セレナはそれを知っているため、好機と捉えたが、バルバトスの様子に、はつとなる。

「……まさか」

イグナイトモジュールの闇を纏い、向かってくる装者達。バルバトスは下を向く。

「もらったッ」

「畳みかけるデスッ」

「一気に」

「終わらすッ」

向かってくる装者達。だが、

「・・・それは」

彼女たちはすぐに、戦慄した。

「・・・アイテムか・・・」

顔を上げたバルバトスの目に、凍り付く。

「アイテムなんてッ」

バルバトスは地面に向かって、拳を振り下ろす。そして、

「・・・響・・・」

人気がない安全地帯で、カノンノと共に響達の帰りを待つ。

剣を持っていないため、カノンノはここにいるしかない。

「クイツキー・・・」

未来の肩に、心配そうにしているクイツキー。その頭を撫でる未来だが、

「!!?」

素人でも分かる、轟音が響き、次の瞬間、

「うそっ!!?」

コンクリート、大きさからしてグラウンドくらい、倉庫がある場所の地面が、持ち上がった。

「!!」

響達はなにがあつたかわからない。

地面が急に、持ち上げられたのだ。

身体が宙につき、そして、地面だったものがたたきつけられる。

セレナを始めとした装者達の悲鳴が響く中、響だけはそれを粉々に砕いた。

そのおかげで致命傷にはならなかったが、

「!」

亀裂の中から、バルバトスが現れた。

斧を振り、その一撃がめり込み、血を吐かせ、骨を砕きかけた。

次の瞬間、バルバトスの姿が消え、切歌、調、クリス、セレナが自分にぶつかり、地

面へと落下した。

地面を削る中、なにが起きているか理解するため、空を見た瞬間、

バルバトスが巨大な戦斧を両腕で振り上げていた。

響は拳を握りしめた。

セレナは剣士になり、盾を構えた。

クリスはまだ目を開けていない後輩達をかばうように、背を向けた。

「アイテムなぞッ、使ってるんジャネエエエエエエエエエエエエエエエエッ」

次の瞬間、大地を砕き、振るわす振動が、放たれた。

「しゃがんでッ」

未来をかばうように、カノンノが前に出る。

地面にしゃがみ込んだ瞬間、轟音と振動がやってきて、近くにある建物の窓ガラスが吹き飛び、自然に生えている木がなぎ倒れ、悲鳴が聞こえ出す。

「いまの……」

「響ッ」

未来が起きあがったとき、荷物が飛び散るが無視して、駆け出す未来の手を掴む。

「落ち着いて」

「けど響がッ」

「クイツキーツ」

未来も分かっているが、カノンノを見てすぐに収まる。一番駆け出したのは彼女だと、未来はすぐにわかるから。

「……みんな……」

祈るように、戦いの方角を見るカノン。

「……クイ?」

そのとき、クイツキーはあるものに気づいた。

爆音が響いた戦場、バルバトスは煙でも吐き出すように、息を吐く。

「くっ……」

セレナは片腕を押さえる。折れていると判断して、立ち上がる。

「セレナッ」

響は立ち上がるが、イグナイトモジュールが解除されている。あまりの攻撃に、解除されてしまった。

「先輩っ」

切歌の叫びに、シンフォギアが解除され、頭から血を流すクリスが視界に入る。切歌も調も、イグナイトモジュールが解除されている。

だが一番のダメージは、クリスだった。

「……」

セレナは盾を構え、剣士の姿のまま、響に、

「ヒビキはみんなをつれて、ここから離れて」

「セレナっ!？」

セレナの左腕がたれていることに、響も気づいている。もう片腕が使えないことに気づかれるが、いまは、

「だめ、このままじゃみんな死んじやうつ。だからヒビキ」

「ならなおさら、セレナを置いていけないっ」

「俺はお前らを逃がす気はないぞ」

それに切歌も調も体を震わせ、バルバトスは斧を見る。

「ディセンダーはともかく、拳の女ああ、お前はあ、おもしろい……」

斧に亀裂が入っている。セレナの所為ですでに傷付いていたとはいえ、亀裂を大きくしたのは響の一撃だ。

「いまのうち、殺して、おくか……」

そして一歩、前に出る。

切歌達も立ち上がろうとするが、その瞬間激痛が走る。

「これって……」

「シンフォギアを保つので……限界……」

二人もまともに立ち上がることはできない。響は構え、セレナは盾を構えた。

斧を持つバルバトスは、静かに、

「ここで死ぬ」

その瞬間、前にいたはずのバルバトスは、

「先輩っ」

「セレナっ」

後ろにいた。

「又オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

振り払われる斧に、二人は防御できない。

「先輩ッ」

「セレナッ」

装者二人、切歌と調の叫びを聞きながら、振り返るがもう遅い。

響は一瞬、未来の顔を思い出した。

地面ごと削る一撃が放たれ、煙が立ち上る。

それを見て、切歌達は泣きそうな顔になるが、

「・・・ん？」

バルバトスは、疑問符を呟いた。

「これ・・・!!?」

光の槍が降り注ぎ、その場から離れた。

「えっ……」

「……あれ？」

響が気が付くと、切歌達の隣に、誰かに抱えられていた。それはセレナも一緒だった。

「みんなっ」

カノンノが駆けだしてやってきて、その現状に驚愕、するに治癒魔術をしようする。

「悪いな、少し後れた」

そう言つて、長髪の男は響とセレナを下ろし、もう一人誰かが駆け寄る。

「カノンノ、この子を頼む。出血はひどいが、君の治癒術なら問題ない」

「うん、二人ともバルバトスをお願いっ」

「あいよ」

「了解した」

金髪の、白い甲冑。いかにも騎士と言つた男は剣を握り、返答して歩き出す。

「……お前達は」

バルバトスはそれを見ながら、長髪の男はお土産の木箱を置いて、自分の愛刀を取り

出す。

「あとはお願ひ・・・」

治癒術のため、僧侶の力を使うセレナに対して、

「まったく、うちの救世主様も無茶するぜ。リユウ大先生がいたら、やばいなこりや」

「ああ、彼が駆けつける前に終わらせないとね」

そして二人の仲間は、バルバトスに叫ぶ。

「ギルド・凜々の明星（ブレイブヴェスペリア）メンバー兼、ギルド自由の灯火（アドリビトム）メンバーユーリ・ローウエル」

「同じく、ギルド自由の灯火メンバー兼、ガルバンゾ国騎士団隊長、フレン・シーフォツ」

二人は叫び、明らかな敵意をバルバトスを放ちながら、

「テメエは俺らの仲間を傷付けた」

「彼の世界でのこれ以上の悪事、見過ごす気はないッ」

その戦士の登場に、邪悪な笑みを浮かべるバルバトス。

「さあ、第2ラウンドを始めるかッ」

こうして彼ら、アドリビトムも戦いへと参加した。

自由の灯火

ユーリは辺りを静かに見つめる。切り傷だらけ、鉈石ではたバルバトス。頭から血を流し、気絶している女の子が、年下の子二人に見守られている。

「カノンノ、頼むな」

「うん」

カノンノも駆けつけ、クリスに回復魔術をかけているのを見て、次に格闘家らしき子と、我らが救世主を見る。二人ともボロボロだ。

「こりや、ホントリユウには見せられないぜ」

「というわけだ二人とも、後ろに下がっててくれ」

格闘家の子はなにか言おうとするが、その前にセレナとともに下がり、殺る気のバルバトスを見る。

「・・・」

その姿、様子を見て、ニヤリと笑う。

「よし、セレナの作戦でいくぜフレン」

「ああ」

そして二人はかけだした。

「・・・デス？」

切歌は驚いていた。

なぜならば、目の前で無謀にも、よくて鎧を着ているだけの男達が、バルバトスと互角に戦っていた。

「これってなんなんデスカ？」

それには調達も驚き、クリスも、意識を取り戻してみている。

セレナ、僧侶の力と、カノンノの治癒のおかげだ。

「どーなってやがる」

攻撃が当たらなければいい、そんなことをしているとしか思えないほど、攻撃をよけているだけだ。

ユーリはスピードを、フレンは技を駆使して、攻撃をかわしている。

「ヌツオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

「ハツ、さすがに凶戦士ツ」

「だが、魔神剣ツ」

バルバトスが放つ、炎の固まりや、暗闇の槍。それらをはじく、フレンの剣や魔術。そ

の隙にユーリが畳みかけている。

「それでも軽いデスッ」

「致命傷にはなつてない……」

調の一言には納得できる。だが、

「大丈夫だよ」

カノンノはほほえみながら、

「私は、私の仲間を信じる」

そしてもう一人、彼もまた、来る。

(……だから)

早く倒して、そう願ひ、彼らが持つてきた木箱を側に置く。

「ちっ、やつぱり前より堅いなおいッ」

ユーリはそう言いながら、バルバトスは笑う。

「なかなか楽しいが、この程度か」

「……なら」

ユーリは剣を構え、そろそろやばいと思ひ、力を増す。

「そろそろ終わらすかッ」

その瞬間、彼は消えた。

「デースッ!？」

切歌が驚く中、コンベアを始め、周りにある足場を使用して、彼は光速で斬りかかる。バルバトスはすぐに、目などの箇所だけの防御態勢に入った。

「開け、鮮烈なる刃ッ。無辺の闇を鋭く切り裂き、仇なすモノを微塵に砕くッ」

そのスピードは、装者達ですら捉えられないほど速く、鋭く、凄まじい。

「前よりあがつてる」

「ユーリ」

セレナ達も驚く、ユーリが知らないうちに、力を増している。

でやああああああああああああという叫びを聞きながら、バルバトスを刻む。

「きまった『漸殻狼影陣』」

前よりも多くの斬撃のあと、その剣は光り輝き、それをバルバトスへと投げけるが、

「まだだッ」

その一撃を片腕ではじき、笑うバルバトスだが、

「僕がいるぞ」

「!？」

フレンもまた、追撃を始める。

「炎よ、この剣に宿れッ」

「!!」

二人は驚く、フレンが見たこともないほど、炎を刃に宿らせた。

「紅蓮剣っ!!? けど熱量が違う」

「焼き尽くすッ」

炎の斬撃を放ち、そして放つ。

「『炎覇鳳翼翔』ッ」

紅蓮の炎の鳥、鳳凰が放たれるが、フレンはまだだと言わんばかりに、剣に光を集め、放つ。

「『光竜滅牙槍』」

無数の竜が迫るが、バルバトスはその一匹を掴み、食いかかる竜同士を、ぶつけた。

「くっ」

「なかなかおもしろおもしろおもしろいいいいいいいいいいッ」

「そうかいッ」

すでに剣を取り戻し、剣撃を放つユーリ。

「おもしろいッ、面白いぞお前らッ」

「・・・」

バルバトスのその反応に、

「お前、気づかないのか」

「なに・・・」

それにニヤリと笑う、それは、

「うちの救世主がピンチになるとな」

蒼破刃を、木箱に放つ。それが木箱だけを破壊して、中身を空へと取り出す。

「なんのまねだ」

バルバトスもわからないユーリの行動。だが、無視して続ける。

「世界の悪意が牙を向けるんだよッ」

空中で、誰かが空気を蹴った。

それは木箱から出てきた愛剣を手に取り、そして、

「殺す」

それは不適に笑った。

「リュウ」

二人の少女の叫び、空から突如現れたそれに、バルバトスは驚いた。

「オラオラオラオラオラオラオラオラアアアアアアアアアアアアアアアア」

剣撃の嵐だった。紅蓮、雷撃、疾風、凍傷による剣撃の嵐。

技という技、劍技と言う劍技を放つは、なぜかいる龍であった。

「どこから来たゲージェツ」

「空飛んで来たんだッ」

全ての攻撃手段を劍へとかえた男はそう叫び、叫ぶ。

「閉ざせッ『ネガティブ・ゲート』」

地面に劍を刺すと、闇の球体がバルバトスを捉える。その瞬間を逃さない。

「一気に決めるぞフレンツ」

「ああッ」

龍はすぐに紅蓮劍を放ち、その炎で姿をくらます瞬間、二人は劍を地面に刺し、魔法陣を展開。

それに捕まったバルバトスに斬撃を繰り出し、空高くへと飛ぶ。

『『武神双天波』』

二人から放たれる衝撃波は、巨大な光へとかわり、バルバトスを貫く。
はずだった。

「ふんッ」

身体に力を込める。身体に亀裂が走ることを無視して、そして、

「武神双天波がッ」

「防いだかッ」

ユーリ達はそう叫び、二人の技が二つに裂け、バルバトスは耐えているが、
「読み通りだ」

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ』

そのバルバトスで、暗闇を纏う龍がいた。その姿はゲーデそのものだった。

「!? 貴様、耐えるの見込んで後ろにいたかッ」

『殺す殺すコロス殺すッ』

口のない口が開き、刃へと噛みつく。

それを引きずるように刃を無理矢理、負の力で研ぐ龍。

刃には、邪悪な、禍々しい力が宿る。

『魔竜・滅神剣ッ』

ただそれだけで斬りつける。だがその刃には禍々しい、命が触れただけで穢れ、壊れ、
碎かれる負が宿った刃の斬撃。

それを後ろから斬りつけられた。

バルバトスは背後から闇、真正面から光の一撃を食らいながらも、耐えていた。

「この程度で、俺を殺せ」

だが、バルバトスは気づかなかつた。

三人はすでに、別の攻撃のために、体制を整えている。

「きさっ」

「本命は」

「ハハ」

「からだッ」

三人は同時に、多方面から、

「二爪竜連牙斬」

フレンは剣技の冴えによるもの、ユーリは格闘術を混ぜたもの、龍は荒々しい斬撃の嵐を放つ。

「グアアアアアアアアアアアアアアアア」

それにバルバトスは放たれるが、三人は同時に背後を見せる。

「まずいデスッ」

だが、三人は笑う。

バルバトスはすぐに片腕を振り上げたが、それに気づく。

「ナニ!？」

それは、亀裂が入りすぎて、斧を持つ腕が砕け散った。

「これは、ナン、ナンダああああアアア」

カッ」

「それはまずくないかい？ この世界でも、外交があると思うんだが？」

ユーリと怒鳴り会う龍。フレンは深く考え込むが、そちらは報告していたので問題ないと付け加える。返事待ちはしてなかったが。

「俺らなんか、異世界だぞ異世界。ついさつき、こひなた？ って子とカノンと一緒にいたところ、いま来たんだよ」

「未来のことですね」

響にカノンがうんと頷き、龍は愛剣を見ながら、全員の様子を見る。

「とりあえずフレンも回復回れ」

「わかった、君達、傷を見せてくれ」

切歌と調へとしゃがみ込み、治癒術を使用し出すフレン。

彼らはシンフォギアらしい装備はなく、自分の能力だけで戦っていたことに、全員が驚いているが、いまは気にしない。

「セレナ、悪いな、遅く」

「リュウツ」

うれしそうに龍にだきつくセレナ。カノンがなにか言いかけたが、いまは見逃すのか大人しく、治癒術をクリスに使い続けた。

龍はあーと呟きながらも、

「バルバトスに亀裂入れたの、よく思いついたな、えらいえらい」

「うん、確実に、誰も傷付かないように勝ちたかったから・・・だけど」

少し沈むセレナ。それにだきしめながらこつんと叩く龍。

「仕方ないだろ、相手は相手だ。気にするなどは言わないが、教訓として糧にしろ」

「・・・うん」

うれしそうに龍に頭を撫でられるセレナ。その様子にユーリはにやにやししながら、

「ま、なにはともかく」

「ここからがアドリビトムの本格活動だな」

「むろん、協力するよ、リユウ」

フレンやユーリが、龍に接するたび、クリス達は少しだけ顔を曇らせる。

仲間から強い信頼を得ている龍。だが、彼はこの世界に対する態度。

なにより、

(・・・なにもできなかったデス・・・)

(あの人達が来なかったら、今頃・・・)

(・・・くそ・・・)

装者達は険しい顔をしながら、こうして一つの戦闘が終わりを告げた。

「・・・」

そして誰もいないところで、ぐったりしているところに、弦十郎がやってくる。

「なるほど、ゲーデの力も、使いすぎればこうなるのか」

龍はなにも答えず、道路の上で意識があるが無言でいる。ユーリもフレンもいて、あ

あと同意する。

「まったく、いくらなんでも使いすぎだよ。カノンノやセレナは気づいているけど」

「けどま、セレナがこの世界の住人、ねえ・・・」

ユーリもフレンもつい先ほど話を聞き、険しい顔になる。

「お前といい、セレナのこと、無関係じゃないな、すぐに連絡するか」

「できるのか?」

「君が持っていた通信機や、僕らが渡された通信機を弦十郎氏に渡した。あとは彼らが調整すれば」

「エルフナインくんがいま作業中だ。必ず異世界と交流できるようにする」

それを聞き、まだ回復しきっていないが起きあがる龍。

「いまだ謎が残るなか、その顔にユーリが食いつく。」

「なに考えてる?」

「敵さんの行動理由と、俺とセレナのこの世界の関係性」

ユーリの問いかけに答える中、龍は考えている。

「・・・セレナは間違いなく、マリアの妹だ」

「なぜそう思う？」

弦十郎が疑問に思うが、龍は静かに、

「・・・俺がこの世界にいて、この世界の住人が、ゲーデを滅ぼす存在、デイセンドーだから。じゃ、まだ弱いかな？」

それでも、ゲーデである自分がささやく。そう言っている。

「世界は何を考えている」

その問いかけには誰も答えない。

ユーリもフレンも、ただ一つ言えることは、

「いくら命尽きる人だったとはいえ、異世界の子を救世主にするのは、僕は納得できない。むしろ、君が負の感情の転生体だから、滅びるべきものとも思っていない」

「同感だ。ま、その辺も暴いてやろうぜ。お前もそうだろう？」

悪い笑みを浮かべるユーリに、まあなと同意する。

「俺はいい、俺はもう害悪だろうがなんだろうが、気にすることじゃねえが」

ただ一人、救世主として仲間と共に、笑顔の未来を目指す少女。

「彼奴らの笑顔を曇らせる気なら、その名の通り、世界を滅ぼす害悪になるだけだ」
それに苦笑するフレン。同意するユーリ。

その様子を見ながら、彼らの絆を見ながら、弦十郎は決意する。

（俺もまた、気を引き締めなければな）

こうして、異世界の戦いは、幕を開けた。

番外編・シリアスはない

『モニター越し』

『リユウつ』

モニターでは龍にだきつくセレナ。

「・・・」

マリアは静かに、瞳から光を失いながらそれを見た。

『CDショップにて』

「翼さんとマリアさん、あとはえつと？ しんぐる？」

セレナが音楽を聴くために、買い物しているが、少し手持ちが無くなり、しばらく悩んだあと、一つだけ棚に戻した。

「!？」

それに切歌達は顔を固めた。だが、それを知らずに、会計をすますためにセレナ達はレジへと向かう。

「マリアと翼の歌を買うセレナだが、一つだけ買い物するのに悩み、一つだけ諦めた買い物なのだが、

(なんでマリアじゃなく、翼先輩のを買うのデスかあああああああ)

デュエット曲は買ったが、一人ずつで歌うものに対して、セレナはマリアではなく、翼の歌をうれしそうに買う姿を見ながら、青ざめた。

『出会い』

妹と思われる少女。空港にて出会い、いま対面する。

「こんにちは始めまして、セレナです。デイセンサーしてます」

「マリア・カデンツァヴァナ・イブ。よろしく」

正面上はそう言い、軽い握手をするマリア。

後ろには龍を始めとした、カノンを除く知っている人達がいる。

その手を握り、微笑むセレナが、妹と酷似していた。

(・・・やっぱり)

心の中で思ってしまう。セレナだと、泣き叫び、だきしめなくなる気持ちを押し殺し、その手を放す。

「風鳴翼だ、よろしく」

「はいっ、よろしくお願ひします翼さんっ」

と、

なぜかさつきより元気いいセレナ。両手で翼に握手するセレナ。それを横で見るマリアに対して、後ろの方々は小声で、

「おい、マリアさんから光が無くなってるとんだけど、どうにかしてくれ」

「りゅ、龍さんこそ、なんとかしてくださいよっ」

「わ、私たちには無理デスよ、ゲーデであるあなたならどうにかできないデスかつ」

「つていうか先輩、気づいて、隣のマリアに気づいてっ」

ここうして装者は全員揃った。

『異世界人＋αの寢床』

「とういうわけで、セレナとカノンノ達の寢床。司令が用意してくれたらしいからこのまま行くぞ。隣俺の住処だし」

「はーい」

「私たちもいくのか？」

クリスの問いかけに、ああと頷く。

そして、

「つて、私ん家の隣かよっ」

「その隣が俺の寝床だぞ」

クリスは知らずに、その隣に異世界人が引つ越してきた。

さらに、

「はいこれクリスちゃん家の合い鍵だよっ」

「おいこら待てッ、なんでお前がカノンノ達に合い鍵渡すっ!？」

響から合い鍵を受け取るカノンノ達。龍はあーあと言う顔で、響はさらにと、

「まだまだくクイツキーの分っ」

「クイツキー」

「なんでクイツキーもだよっ!？」

クイツキーも受け取る中、響はさらに、

「さらに、龍さ」

「それはやりすぎだッ」

二人に怒られる響であり、結局もう一つの合い鍵は予備としてクリスが所持するので

あった。

『クリスとクイツキー』

「あのバカ……まさか男にまで持たせようとしやがって……」

「クイツキー」

「って」

不意の声に驚くと、クツシヨンの上にいるクイツキーに驚く。

「お前もう来たのかよ、あつ、こら勝手に眠るなつ。ここよりカノンノ達のほうで、あ
あ……」

結局クイツキーはクリスの場所で眠り、クリスはタオルを用意する。

『クリスとクイツキー・2』

「おーい、入るぞ〜」

ノックする龍。クリスからの返事を聞き、中に入る。

「飯の時間だから来てくれってカノンノ達が」

「つたく、いつからこんなことになったんだ」

「ギルドじゃ、飯は当番制で、大所帯だから、作るにしても大勢の方に慣れてるんだ。な

によりご近所だし、クリスだって問題ないだろ」

「お前がたびたび来ることに關しては文句ねえよ」

「はいはい、それはまあわかるけどな〜」

知り合いだからって、一人暮らしの女の子の部屋に来るのはなと同意しながら、クリ

スも準備すると少し片付けを始めている。

龍も呼んだんだからいいかと思ひ、出ていこうとしたとき、

「・・・」

クイツキー専用と思われる寢床を発見して、少し考える。

(クイツキーに情が出なきやいいが)

いずれいなくなったとき、クリスが落ち込まないか、あとで適任者に相談しようと思ひに決めて、彼はセレナ達の元に出向く。

『これからの方針』

「それで連絡できるのか」

「ああ、とりあえず連絡しよう」

オペレーターの人達と共に、弦十郎、緒川、ユーリ、フレン、そして龍。他の子達は交流会のように外に出ている。

「難しい話するんだ、彼奴らはいいだろう」

「リュウ先生は相変わらず過保護だな」

「それは君もだろ、風鳴司令官、お願いします」

「わかったよフレンくん」

弦十郎の指示に、オペレーターの人達は通信機を操作して、少しずつ画像と音声は調整される。

そして、

『聞こえるか、リュウくん』

「聞こえるよ、ニアタ」

ニアタ、彼を通し、ルミナシアとの連絡は成功した。

全員が安堵に包まれると同時に、ニアタに緊張が走る。

『むっ』

「!? どうしたニアタっ!？」

『いや』

一気に雰囲気は固まる司令室。だが、

『異世界には俺が行くッ、いいだろ、王族が出ないでどうするんだッ』

『ふざけるなッ、お前は王位継承権が高い自覚はあるのかッ。異世界には俺が出行くッ、

お前は国の維持しているッ』

『よっしゃ、世界樹にこれで出向くぞッ。行きたい奴は手を挙げるッ』

『アツハハハハ、楽しくなってきたぜッ』

『歌姫ちゃん達、俺様がいまいくかんね〜』

なぜか後ろから、暴走しているもの達がいることに、あーあと頭を痛める。

『それじゃ、私たちは世界樹に殴り込みに行きましょうか』

『応ッ、セレナのこと、とっちめてやるッ』

『待てお前達、それはセルシウスが、待てお前達ッ』

「・・・ニアタ切るぞ」

『待つてくれリユウッ、気持ちは分かるが待つ』

『だあああああああああああ、ボクのバンエルティア号で世界樹に突貫は』

『』『』『』『』『』『』『』『』『』『』『』『』『』『』『』

しばらく沈黙が訪れた。

オペレーターの話では通話が切れた模様と、龍はとりあえず、いい顔で、

「よし、また明日にしよう」

「ああッ」

「それでいいのか君達はっ!？」

「僕を巻き込まないでくださいッ」

フレンの悲痛な叫びは、意味無くこえました。

『龍とマリア』

「それであなた達の関係を知りたいの」

追いつめられた龍は目を背ける。マリアの目に光はない。

「セレナとどういう関係」

「仲間です」

「仲間にしては少し馴れ馴れしいわよね」

「仲間です」

「仲間にしては慣れ慣れしいわね」

「助けて」

響達は目を背けた。

終わりです。

状況は最悪だというこがわかった

司令室にはシンフォギア装者関係者、組織の人達が勢揃いの中で、龍は紹介する。

「我がアドリビトムのマッドサイエンティストハロルドと、比較的常識人リタだ、よろしくしてくれ」

まずリタからは躊躇無く殴られたが、ハロルドに関しては気にせずよろしくねうと言

う。
状況説明として、アドリビトム側で来られるのは数名にしておくことにしたマスターアンジユ。

なぜかと言えば、人手不足であるギルドの上、この世界では武器を所持していれば捕まるのだから仕方ない。

いまいるアドリビトムメンバーは、龍、カノンノ、セレナの他に、ユーリとフレンとクイツキーと、新たに来たリタとハロルドだ。

「あっちも色々大変なのよね」

「ディセンダーの戦いに関してはごく一部の人しか知らないけど、やっぱりセレナのことが他国や他ギルドにも知られてるし、まだ種火のように戦火もあるから」

セレナは申し訳なさそうな顔をする。いまだルミナシアは問題を抱えている。別世界であるこの世界に、救世主がいる時点で問題な気がする。

「まあ、気にするな。それよりお前らがいれば、色々と考えられるだろ」

「と言っても、情報が装者つて子の命狙われたこと以外で、相手さんの目的なんてわからないわよ?」

ハロルドの言葉に、うむと弦十郎も頷く。

いまだ敵と想定されるもの達の目的もなにもわからない現状下、はつきりいえば後手以外に選択肢はない。

「だが、気になる点はいくつかある」

「バルバトスが私のこと知らなかったことだね」

セレナの言葉に頷く龍。それはユグドラシルもそうだ。

「彼は確かに、最後の言葉。それは少年のような声だった」

翼はそう言い、ユグドラシルの反応も不可解だ。それにハロルドは言う。

「それに関して、ニアタと相談して一つの仮説を立てたわよ」

「それは?」

弦十郎の問いかけに、全員が耳を傾けて、推測、仮説と付け加えておいてから言う。

「あのユグドラシルとバルバトスは、私たちが知る彼らではなく、別世界のユグドラシル

とバルバトスという、別軸の彼らという可能性があるわ」

「別軸の彼ら？」

響が首を傾げたとき、エルフナインが付け加えて驚く。

「というと、別次元の同一人物ということですか？」

「そうね、その可能性が高いわ」

この世界によく似ていて、全く違うと言う世界。その可能性を告げるハロルド。

「つまり敵さんは、バルバトス、ユグドラシルと言う人物で、もつとも強い意識を持つ彼ら呼びだして戦わせたという可能性があるわ。まあ、バルバトスは強すぎて制御できてないって、本人が言ってたし、ある程度制御できないみたいね」

「別可能性の自分か・・・」

信じられない翼に対して、龍はカノンノを見る。

「別可能性の人なら、カノンノだな。別世界にカノンノはいるし」

「そうなんデスカ!？」

世界樹がある世界に、ニアタから聞いた話では、まずパスカのデイセンダーカノンノの他に、グラニデの少女カノンノ・イヤハート。そしてルミナシアのカノンノだ。

「それだけじゃなく、グラニデにもアドリビトムがあつて、ほとんどが似ているらしいな、ニアタから聞いた話じゃない」

「それと、オリジナル、世界樹の始まりにも、カノンノは関わってるから」
それにみんなが驚くが、龍はあまり気にするなと付け加える。

「カノンノや、別の世界のカノンノは、結局別人だ。んなかわないだろ」

「まあ、お話ししてみたいとは思うけどね」

「グラニデのディセンダーにも会ってみたいな、女の子だから話が合いそう」

話が脱線し出すので、龍が元に戻し、ハロルドの仮説の続きをする。

「つまりあれだ、俺らが戦ったのは、死んだ一番強いバルバトスやユグドラシルというこ
とだよな？」

「でしようね〜」

とりあえず敵の能力は、

「多次元への干渉と仮説を立てるけど、シンフォギアでそんなこと可能なものはある？」

それにはエルフナインはしばらく黙り込むが、

「難しいですね、少なくとも、別可能性軸の世界に干渉すること事態不可能です」

「まあ、やっぱりいまのところ、撃墜するしかないわね、現れたら」

「身も蓋もないが、どうあっても後手に回るしかない状況に、クリスを始め嫌な顔をす
る一同。」

そして弦十郎は話の続きをする。

「敵との交戦だが、君ら側、アドリビトムとしての君達から、どう思うう？」

「装者邪魔」

ユーリと龍はあつさり言い、フレンは苦虫な顔、カノンノは驚き、セレナは理解できない顔をする。

「そりやいつたいたいどういう了見だあ？」

クリスの問いかけに、単純に、

「聖遺物が敵と相性が悪い。威力不足過ぎるんだ」

「同感だな」

ユーリは少しだけ聖遺物、装者と手合わせしている。そして下した結論だ。

「ノイズを倒すのには聖遺物、装者は問題ないが、今回の敵に対して圧倒的に経験がなさ過ぎる」

それがユーリと龍、フレンという、実際今回の敵と戦ったもの達の答えだ。

マリアと翼は黙り込みながら、クリス、切歌、調は不満な顔をしている。

「・・・君達はどう思うう？」

それを察して、弦十郎は翼達に話題をする。すると難しい顔のまま、

「彼らの判断が正しいと思います」

「ちよっ」

「そうね」

「マリアっ!？」

驚く装者達だが、翼達は続ける。

「私たちの攻撃は対して効かないことに対して、彼らは対処できていた。単純に慣れというわけではなく、私たちの場合、致命傷に威力が足りないということだな」

翼の言葉に黙り込む、だが切歌は、

「それなら、イグナイトモジュールを」

「それは彼に死ねと言うこと?」

「・・・」

イグナイトモジュール、彼女たちの一撃必殺の機能。

だがそれを使えば、龍は死ぬ。

「デスけど、それはこの人がゲーデの力を使っていない場合デス」

「冷静な判断をすれば、彼が一番戦いやすいのよ。その彼の戦力を削って、私たちが優先するほど、戦局は甘くないわ」

翼とマリアの答えに、三人は黙り込み、響だけは困惑する。

(色々まずいな・・・)

三人が龍に対して好印象がないのは分かっていたが、翼、マリアは別だった。

だが、それがよけいな溝を作り出していることに、弦十郎は頭を痛める。

「セレナ、ディセンダーがこの戦いの鍵だな。セレナの攻撃に対して、異常なまでにダメージが入ってるし」

「うん、がんばるよっ」

セレナはそう言うが、龍達は実はそれがかなり引つかかる。

そういう話をしながらも、いまは現状維持。なるべく固まって動き、各自対処という名目の元、話を終える。

そのあとは、セレナ、カノンノを外しての、大事な話だった。

二人の他に、翼とマリア以外の装者も外れ、リタはマリアに近づく。

「それじゃ、ドキュメントを見せさせてもらおうわ。気分が悪くなったら言っつてね」
「わかったわ」

マリアのドキュメント、魔術によるDNA視覚化を始めるリタ。

ハロルド達はすでにセレナのドキュメントを見ていて、マリアと合わせて確認する。

それは、

「はつきり言うわ」

ハロルドは疲れて座るマリアに対して、

「貴方とセレナは姉妹よ、少なくとも、私たちの世界の技術でもそれは立証されたわ」
記憶、医学的、別世界の技術。数多の酷似する話、それにマリアはそれで倒れそうになる。

死んだ妹が生きている。だが、

「けどあの子は成長してないわ・・・」

疲れた顔で呟くが、リタは難しい顔をして説明する。

「それでもセレナはデイセンダーとしてのドキュメントも持っているわ。実際どうなのか私たちがじゃわからない」

「世界樹、デイセンダーを生み出したのなら、会話する意志はないのか？」

それにはアドリビトゥム側は難しい顔をする。

「実際できるといえばできるが、できる人間がな」

カノンノと龍とセレナ、正確には龍とセレナはオマケに近い、カノンノは世界樹の意志と対話したことがある。

だがその際、彼女は体調を崩したり、心のありようでは死んでいたという話。

「もしもこの話をすれば、彼奴は間違いなく動揺する。その状況で世界樹と対話は自殺行為だ」

それを聞き、全員が黙り込む。

「これも仮説だけど、やっぱりセレナは貴方の妹だと私個人は思うわよ」

ハロルドはそう言う、なにを言ってるんだと龍は顔に出す。

「どういう仮説でそんなこと言うの」

「かなり外道の外道な考え方だけど、それでも聞く?」

何か引つかかる言い方だが、ハロルドは確信に近い何かがあるらしい。

マリアを見る一同は、静かに頷く。それを見ながらハロルドは龍を見た。

「はつきり言えば、リュウの所為よ」

「・・・俺?」

龍はそう聞くと、ハロルドは説明する。

「まずセレナって、貴方が持つアガートラームの元の持ち主でしょ?」

「ええ」

マリアは胸のペンダント、聖遺物アガートラームを握りしめる。

「つまり、あのセレナもまた、装者として戦える可能性が高いわ。っていうか使えわね、エルフナイン」

「!!?」

全員が一斉に見る中で、エルフナインはしばらく黙り込み、静かに頷く。

「んで、イグナイトモジュールでの、ゲードからのエネルギー吸収による力の強化。こゝこゝ」

まで言えばわかるかしら?」

その問いかけに、全員が戦慄する。

「まさか、セレナがディセンダーとして生きているのは」

「・・・彼を、殺すため?」

全員が龍を見る。本人はしばらく考え込みながら、

「それなら、納得できるな」

「なにさらつと受け入れてるのよあんた?!」

それに頭をかく弦十郎。それはそうだ。

「つまり、聖遺物を使える者を、相対する者に変えて、いざゲーデである龍くんを殺害する際に使用する、それがセレナくんがディセンダーになった経緯かつ!」

「同じ世界ですもの、可能性としてはかーなり高いわね」

「ふざけた話だなおいつ」

ユーリが舌打ちするように言い放ち、マリアは青ざめている。

「だがそれなら同じ世界のセレナがディセンダーで、ゲーデである俺も同じ世界なら納得できる。順番的にも俺が先に生まれたんだ、その対処としてセレナが選ばれてもおかしくない」

「おかしいわよッ」

「マリアは受け入れている龍に対して激昂するように怒鳴る。だが龍は気にしない。

「俺はルミナシアの精霊達からも最初、命を狙われたんだ。世界がどう俺を見ているのかはいやでもわかる」

「だからってなんでセレナなのよつ、あの子を人殺しにする気なの世界はっ!?!」

「人殺しじゃない、救世主だ」

「!?!」

それに対して翼達も少し怒り気味で見てくる。

ユーリ達、慣れたいるもの達も怒っていた。

「君が前々から人として自分を勘定に入れてないのは知っているが、そろそろ改めてくれないか」

「俺が人間？ ハッ、人の負に敏感な奴が人間かよフレン?」

そんな言葉にフレンが何かを言う前に、ユーリが止める。

「やめておけよ、人の価値観なんか変えられないっての」

「だけど」

「こいつが人間だろうがなんだろうが、仲間なのはかわんねえだろ」

「!?!」

フレンはそれに黙り込み、龍はため息を吐く。

「とりあえず話はこれ以上進展しないだろ。あるとすれば」

「はい、聖遺物による拒絶反応。少なくとも龍さんにそれが起きないよう、システムを作り上げるそうすれば装者である響さん達は戦えますっ」

エルフナインの言葉に、リタとハロルドは頷く。現状のパワーアップはそれしかない。

その様子を見て、龍はその場から去る。もうようなしと言わんばかりにどこかに向く。

「彼はいつもああなんですか？」

オペレーターの一人在訪ねる中で、

「考えても見なさい。生まれた頃から人の悪意がわかっていて、人の善意だけがわからない人生だなんて、きつとろくなもの人生じゃないわよ」

ハロルドの言葉を聞き、弦十郎達は黙り込む。

「・・・けど、セレナがディセンダーという可能性は」

「仮説だからまだ決定じゃないわよ。まあそれが本当なら、運命つてのは、よほどひどいもんよ」

マリアは仮説の話を信じたくない。それはセレナが龍を殺すためにいま生きていると言う事実。それが本当なら、自分はどうすればいいかわからない。

「だけど現実味がある話だ。なににより、自分はすでにセレナのことを妹としか見えていないのも事実だ。」

「全く、セレナも好きな相手を殺すためにいるなんて知ったら、どうなることやら」
「……」

「マリアはえつと言う顔で顔を上げた。」

「まあだよな、つていうか、彼奴らまだ放置してるのか？」

「ええ、少なくとも、まだカノンノとセレナの告白の返事してないわよりユウ」

「……はあ？」

「マリアはもういっばいいいっばいだった。」

「だけど立ち上がり、何か黒いもやを出している。」

「どういうこと……」

「……」

「まずつという顔のアドリビトムチーム。だがユーリだけは、」

「ああ、俺らの最終決戦のとき、あの二人リユウ先生のこと好きって伝えてるからな。まありユウの奴、いまだ返事せずに、二人も答え聞かずに現在にいた……」

「追いかけた。マリアは龍を追いかけて出ていった。」

「翼も止めるために出ていき、ユーリだけがおもしろおかしく、」

「あーあ、彼奴、どうなるんだろうな」

「わざとかいユーリ・・・」

フレンは頭を痛めながら、ユーリは微笑した。

「なにか巨大な殺意を感じる今日この頃」

そんなことを呟きながら、人気の無い場所にいる。

「ここなら何も聞こえない。やっと落ち着けると思い、空を見た。

「月が欠けたり、色々かわろうが、悪意だけかわんねえな」

あざ笑う。もう笑うしかない。変わらない悪意の声に、龍は笑うしかない。

「ゲーデだからか、よくわかるんだよな悪意って」

小さなものから大きなものまで、人の悪意に敏感な自分。

人は気味悪がって離れたり、時には利用して貶めたりとさまざまにこの特性を使う。

だから人から嫌われる。問題ない。自分は人が嫌いだ。

「・・・」

そう言えばと思う。そんな自分を好きと言う少女達。悪意の欠片も感じない、まつすくな想い。

「・・・まつたく」

苦笑する。龍は知らないと言って、いまは寝っ転がる。

寝ている時が一番静かだ。だから寝るのが好きだ。

だから、

「寝ようとしているのを邪魔されるのが嫌いだ」

それを見た。

まっすぐ、自分に、殺意を向けるそれを見た。

「誰だテメエ」

それは金髪ストレート、見たこともない異世界の服装。

放たれる光に身に覚えがあり、剣もまた、同じ輝きを放つ。

「・・・私は」

それがなんなのか知っている。しかも本物であることも分かる。

その女性、二十歳くらいのそれから、魔力を感じながら、本能が言う。

こいつは対極の存在だ。

「ディセンダーツ、貴様を滅ぼす者だゲーデツ」

(・・・ほんと、どの世界でも、俺は害悪か)

苦笑しながら、不を纏い、相対峙する。

戦局は、世界はいつだって、唐突に変わるんだよなと苦笑した。

謎が謎を引き寄せる

CDショップにて、内心冷や汗を流す切歌達。

セレナは少ないお小遣いで私物を買う。それが翼の音楽だけで、マリアのものは手に取ってない。マリアの曲も好きと言うが、翼の数が多いからと言っている。

(お願いだからマリアの曲を一番にしてください「デスーーー」)

そのとき、手に持つものを全て棚に戻し、あわてて外に出ていく。

それを見て驚き、装者達は駆ける。

「どうしたのセレナっ」

「響っ、ゲーデの力っ。リュウが戦ってるっ」

「!!?」

セレナの言葉に、全員が駆けだしながら、翼達にも連絡する。

負の自分は、まさに怪物だ。人気がないから使用したとかではない。

元々人気がない場所に来ている自分。だからなのは知らないが、

「『ファイヤーボール』ッ」

彼女はためらいなく、魔術を使用するし、技も使う。

この世界の人に対する、遠慮なんてない。

あるのはただ、己の使命を果たすことしか頭にない。

『(・・・おかしい)』

頭の中で何かが引つかかるが、自分の言葉なぞ耳に入らない。そんな殺気を感じて疑問が強くなる。

『(本来ディセクターは記憶も何も無い、真っ白だと言う話だ)』

龍が知るディセクターは一人、話で数名ぐらいだった。

まずはセレナだが、初めてあったとき、セレナは歌、名前、戦い方ぐらいいしか覚えていなかった。

次にニアタから聞いたディセクターは、名前と戦い方しか知らないが、ここである疑問がある。

セレナと普通のディセクターの違いは、すでに知っているのと、まるつきり知らないと言う違いだ。

セレナは料理を見て、料理だと知るのに対して、ディセクターは初めて知ると言う解釈をする。そう言う認識で間違いないとニアタから聞いている。

ディセクターは白い、何者の影響でどんな色にもかわる、純粋な力だ。

だからこそ、悪にもなると聞く。現にパスカのデイセンドーカノンは、苦い思いをしたらしい。それ以上は追求はしない。

話を戻そう。いま相対するのは間違いなくデイセンドーで間違いはないのだが、

『(こいつは根本が違う)』

彼女の攻撃は、建物も物を破壊するほど強力な技と魔術を使用して、自分を消しかかっている。

そこに正義があるか？ 答えは否。

『(このデイセンドーはゲーデだけを消すために生み出された)』

そう、都合が良すぎるほど、自分だけを消すために、彼女はここにいる。

なぜと聞きたいが、彼女の瞳には迷いなんて無い。必ず、ここで、ゲーデを、消す。

それしか彼女から感じない。

『「ロックトライ」ッ」

地面から石の槍が三本放たれるが、チェーンソードで砕きつつ、刃と化した髪の毛を見る。やはり砕けていた。

救世の光を持つ、自分を消すために特化したデイセンドーの出現。

敵側からすれば、なんとも都合が良すぎる。

「覚悟しろ、世界の害悪ッ」

彼女は疑問にすら思っていない。

『(とはいえ、俺の言葉には聞く耳はないな絶対)』

もう消す対象しかない自分の言葉には耳を傾けない。だから、

「はあああああああああ」

斬りかかる剣に対して、それが前に出る。

「なっ」

デイセNDERは初めて驚愕した。

先に現れたそれに、龍も驚いている。ってきりセレナが来ると思っていたからだ。

「おませしましたッ」

とびつきの笑顔でそう宣言するのは、撃槍ガングニールの装者。立花響だった。

「あなたは何者ッ!? なぜゲーデを助けたのッ!?!」

困惑するデイセNDERに対して、響は構えながら、その人を見る。

「龍さん彼女は」

『デイセNDERだろうが、どこの世界かは知らない。本人に聞くしかないが頼めないか?』

「はいッ、わかりましたッ」

元氣いいなと龍は思いながら、彼女を見る響。彼女は困惑していた。

「どきなさいッ、それはゲーデ、負の怨念ッ。この世界から消えるべき存在よッ」

「そんなことできませんッ、彼は私たちの仲間ですッ」

「なにを言っているのっ!?」ゲーデは世界の害悪よっ、存在するだけで世界に仇なす存在なのよッ。いまここで消えるべき存在、それがゲーデよッ」

それに響は驚いている。

「なんでそんなこと言うんですかッ!?」龍さんがなにをしたって」

「ゲーデはいるだけで消えるべきモノよッ」

「デイセンダーははつきりと告げた。」

響はそれが理解できない。

「いるだけって・・・そんな、そんな悲しい理由、あんまりですッ」

「悲しい? なにを言っているのっ!?」ゲーデは負の存在、いるだけで消えなければいけない世界の敵よッ」

「そんなことないッ、消えていい人なんて、いるはずないですッ」

「それは人ではないわッ」

はつきり言うデイセンダーに対して、響が口を出そうとする前に、怒鳴り叫ぶ。

「それはいるだけで世界に仇なす、いるだけで命を不幸にする、有るだけで争いを生み出

す、ただの害悪ツ。存在自体消えるべき存在よツ」

はつきり、そう言うデイセクターに対して、響は叫ぶ。

「違うツ」

「違うないわツ」

「まあそうなんだけど」

本人はいつの間にか人の姿になり、響を止める。響では求めている質問をしないと判断して、止めた。

「お前はいま言い争うのはそこじゃない、俺が聞きたいのは、お前はどこの世界のデイセクターだ」

「私がどこの世界の?」

殺気を向けながら、響はとまどう。

(・・・どうして)

どうして自分がいなければいいと言う言葉を受け入れているか?という顔を向けられるが、気にしても仕方がないので、龍は無視する。

「貴方は世界の敵よ、どの世界であろうと、それはかわらない」

「確かにそうだが、いまは違うんでな。お前がどこの世界のデイセクターだ、いや違う、どこの世界が、この世界の厄介ごと無視して俺を消せと願ったツ!? 俺が腹立つのはそ

「こだッ」

デイセクターは首を傾げながら、剣を構える。

「そんなことはどうでもいい、私は貴方を消す」

「話にならないかくそ」

もう彼女の中には、ゲーデを消す。それしかない、それ以外にない、そう判断する。

「都合が良すぎる」

そのタイミングで、自分を消す存在なんて、敵対するもの達にとつて都合が良く、また精霊の頼み、ルミナシアからの頼みできている自分が、いま世界の敵として敵対するのにもおかしい。

(このデイセクターは、まさか)

そう考えているとき、剣を握りしめ迫るが、響が反射的に動き、それを止める。

それと共に、

「デスッ」

「やらせないッ」

切歌と調が現れ、それに続くように装者、セレナが現れる。

「戦える奴ら全員か」

「その装備はッ!?!」

セレナを見て驚愕する彼女。それにクリス達も、

「黙って聞いてりや好き放題言いやがってっ」

「この人が気に入らないのは同意デスが、限度があるデスっ」

「いなくていい人なんて、いないよ」

クリス、切歌、調。まだ龍にいささか溝があるもの達がそう言いながら、龍は気にしないでいんだけどとつぶやき睨まれる。

そして、

「あなたもデイセクター!? なぜゲーデを助けるの?」

「貴方こそ、どうしていまゲーデ、ううん、リュウを消そうとするの?」

セレナはいま騎士の姿、本気で戦う際一歩手前の姿で、彼女見る。

彼女はようやく、驚愕していた。

「なぜ? そんなことはそれがゲーデだから、負の感情、世界の害悪よツ。それだけで消す理由になるわッ」

「そんなの理由にならないッ」

「!?!」

何を言っているか分からない顔をするが、一番分からないのは、

「お前、本当にどの世界のデイセクターだ? いまルミナシアのデイセクターは俺と協

力して、この世界の異変に対処して欲しい。俺はそうルミナシアの精霊に頼まれた」

「!?!」

「いまあなたはその邪魔をしているんだぞ？　この世界にとつて、いま害悪なのはお前なんだ」

それこそ信じられない顔をする彼女に、翼達は龍に駆け寄る。

「これはいつたい」

「彼女はおそらく、デイセンダーの本質を利用して作り出されたデイセンダーだ」

何も無いデイセンダーはふれあう人によつて、考え方、思考などがかわる。

セレナの場合、そんなそぶりはなかったから分からないが、ニアタが言うにはそうらしい。

だが、そんな白い紙のようなデイセンダーに、何者かが、

「ゲーデを消す。その明白な理由を書き込めるだけ書き込んだのが彼女だ。彼女はそれ以外に何も無い。下手をすれば、世界救済というデイセンダーの本文すらなくなるほど、ゲーデだけ消すために存在するデイセンダーだ」

「私が、そんな存在……」

始めて戸惑う彼女に対して、やはりと頷く。

「おそらく生まれてまだ時間すら経ってないなこりゃ」

「えっ」

全員が驚く、そう全員。彼女自身、龍の言葉が理解できない。

「お前は誰だ」

それに冷たく聞く。

「私は・・・デイセンサー・・・ゲードを消す存在・・・」

怯えながら、震えながら呟くが、それに冷たく、

「なぜ?」

「なん・・・で・・・」

「なぜ」

「・・・やめて」

「なぜ」

「やめて」

「な」

「やめてッ」

名前すらないデイセンサーは、その場に座り込み、耳を塞いでいた。

セレナがその様子を見ながら、側による。

「どうして・・・」

セレナに彼女は、泣きそうな顔で見た。

「どうしてゲーデをかばうの・・・私の知るゲーデには間違いない・・・それは世界の害悪よ・・・」

その言葉に、セレナは悲しそうに頷く。

「ああそうだ。たとえ人に転生していても、魂の本質はゲーデ、俺は世界の害悪、負から生まれた忌々しいモノだ」

それを受け入れている龍に、セレナは悲しそうな顔をする。

それに響達も驚いていた。

「なんでです・・・」

響がこちらを見ながら、

「なんでそんなこと受け入れるんですかッ」

叫んでしまう響。龍はいつもとかわらず、

「・・・俺は人が嫌いだからだ」

はつきりと言う。

「俺は人の負を見た、世界の、命の、ありとあらゆる存在の裏を知った。だから」

はつきり、

「そんなもの達の仲間なんてごめんだ」

負の存在であることを受け入れたのではなく、人であることを拒んでいる。

龍ははつきりとそう、装者達に告げた。

自分は人なんて者になりたくない。はつきりそう告げたのだ。

セレナ達はそれを悲しそうに受け入れ、装者達はその発現に目を見開く。

モニター越しで弦十郎は静かに、目を閉じた。

それ以来、黙ったままのデイセンサーに、周りは武装したまま、待機している。

いま装甲車やらなんやら、色々と人が動き回っていた。

龍がいた場所は木々が生えた山付近、人気のない場所とはいえ、魔術や武器の痕跡を

消すのに、人手が多くいる。

龍は苦々しい顔をしながら、弦十郎を見ていた。

「なにか言いたいんですか？」

根負けしたのは龍だった。

弦十郎はしばらく沈痛な顔のまま、

「……君はいつ、人であることをやめた……」

そう聞かれ、龍は、

「……この世界で、魔が差した。人を助けた。結果……」

その先を、言う気にはなれない。歯を食いしばりながら、思い出す。

「……結果なんだ」

「……あなたには関係ない」

そう言つて黙り込む龍に、弦十郎はこれ以上は無理かと思ひ、沈黙する。

「……」

響達に囲まれている彼女は、黙り込んで座り込んでいた。

何もせず、否、することがないのだ。

ゲーデを倒すこと以外、やることがないのだ。

「調べただけで、貴方は確かにデイセクターね」

「……」

リタの言葉に、いまだ静かな彼女。

「名前は」

「……知らない」

「貴方を生み出した世界は？」

「……知らない」

「そう」

リタはそう告げて、彼女はいまだに座り込む。

龍の予測通り、彼女はおそらくつい最近生まれ、ゲーデを倒すためだけに生み出されたデイセンサーであることが立証された。

「・・・ねえ」

彼女はセレナを見つめながら、小さく聞いた。

「どうしてゲーデをかばうの・・・」

彼女にとって、ゲーデは滅ぼすべき敵だ。なのに、同じ存在がかばったことに、それほど驚いていた。

セレナはそれに視線を合わせて、

「大好きだから」

まっすぐに答えた。

「大好きってなに？」

それすら知らない彼女に対して、セレナは続けた。

「あの人はゲーデの力を、けして壊すだけに使わない。壊すのは、誰かが傷付く未来だけだよ」

その言葉に耳を疑う彼女に、話しかける。

龍と言うゲーデのやり方。

暴君のような騎士が、仲間達を傷付ける際、駆けつけて倒した話。

病人の人を治療する場所へ連れて行くため、魔物の群れで囹を引き受けた。

人で無くなり、絶望した人達に生きているんだからまだ絶望するなど怒鳴ったり。

自分達の身勝手な願いを、デイセクターに押しつけるなど激昂したり。

誰よりも先に前に出て、仲間の危機に向かつていったり。

危険と分かっているにも、仲間が出向くと言うのなら、躊躇いもなく進んでいったり。

仲間のために、悪役になったり。

仲間のために、世界を賭けた戦いに、単身で出向いたり。

その戦いの中ですら、戦う相手を思う世界のため、その願いの叶えるために戦う。

「彼はそんな人・・・私がデイセクターだって知っても、誰が誰でも同じにしかみない。

私を私として見てくれた。彼を彼として見ていて、彼女を彼女としか見ない人」

仲間達と同じ、だからこそ、

「私達も同じ、ゲーデでもなんでもいい、彼が彼だから、家族で仲間だから、彼と共にいるんだよ」

それに近くにいるリタもまた、複雑そうにだが微笑む。

カノンノも、ハロルドも、ユーリも、フレンも、いや、アドリビトムの仲間達は全員
気持ちは同じだ。

「なにより、私にとって、大切な人。大好きな、人だよっ」

満面の笑みでそう告げるセレナに、彼女はわからないという顔をする。

そしてしばらく顔を伏せたあと、

「・・・ゲーデを消すのが私の使命」

そう静かに呟くが、

「けどいまじゃない、それだけはわかった・・・」

そう呟いたまま、もうなにも喋られない。

「・・・」

カノンノは複雑そうにその光景を見つめている。

「・・・負けないもん」

そうつぶやき、小さくガッツポーズを取った。

「しっかし、生粋のデイセンダーまで用意できるなんて、ますます敵がなんなのかわからないな」

「そうだな・・・ん？ マリアくん」

「!？」

その顔から光が無く、そのよどんだ瞳で龍を見る。

あまりの負に、龍は立ち上がり警戒した。

「な、なにがありました?」

「・・・」

マリアは龍をじつと見ていて、ただそれだけで怖い。

弦十郎も深く追求せず、ごほんとせきをする。

「なにしたらんだろう俺・・・」

そんなことを呟くと、

「・・・」

それに、気づいた。

「!?!」

マリアにも光が戻り、弦十郎も気づく。

緑色の布と、ピンク色の布の二人が、こちらを見ていると、

「非戦闘員は下がれッ」

マリアは装者として前に出て、他のもの達はすぐにそれから離れたが、

【遅いです】

そう言つて緑色の者が、布から出て、龍へと斬りかかる。

その姿をすぐに捉え、さすがに驚いた。

「なっ」

その所為で一瞬、反応が送れ、鮮血が少し舞うが、

【浅いです】

【任せて】

二つの丸鋸を取り出し、回転させながら斬りかかるピンクの子。

やっとな姿を確認して、周りも驚くが、それよりもすぐに動くマリア。

蛇腹剣が舞い、それをよけて、姿を現す。

「みなさんッ、無事……」

「……デス……」

「なん、で……」

その場にいる全員が驚愕する。

斬りつけた鎌についた血を、ペろりとなめて、うつとりとおいしいですと呟く緑の戦士に対して、丸鋸の子も少しなめた。

【ゲーデの血、おいしい……】

【やっぱ元が同じですからね、もつと食べたいです……】

軽くだが血を流し、すぐに負でコーティングするように塞ぐ龍。

その二人を見ながら、敵がなんなのは知りたくて仕方ない。

「テメエら、誰だ」

龍の言葉に、にやつと笑う。

【イガリマです】

【シユルシャガナ】

切歌に似ている紅い目の子はイガリマ、調に似ている紅い目の子はシユルシャガナと名乗り、武器を構えた。

連戦、乱入の大騒ぎ

歌が響く、同じ歌、同じ声、同じ姿の装者二人が二人と対峙する。

「この偽物っ、同じ歌を歌うなデスっ」

【私はイガリマですっ、貴方の偽物なんだから仕方ないのですよ。オリジナルはあほな子です】

「切ちゃんをあほな子じゃないっ」

【ちたまの時点であほな子だよオリジナル】

「どうして知ってるんデスカああああああああああ」

他の戦えるもの達は非戦闘員の安全確保のため、牽制するように武器を構え、龍はいえば、矢面近くで力を使えず、攻撃をよける。

「さつきから俺ばっか狙ってるなおいっ」

先に受けた傷は無理矢理治療済みであり、負の力は解除。切歌、調並び、イグナイトモジュール使用の条件を整えておく龍。

その龍の叫びに、二人は口元をつり上げる。

【私たちは偽物です、ですが本物でもあるんですよ】

「貴方ならわかるはず、私達が本物のなにを元に作り出された偽物か」

そして下をぺろりと口もとをなめる。イガリマはそれだけで思い出す。

「だから、本物を越えるには、貴方を食べたんですよゲーデ・・・」

【さっきのおいしい・・・もつと貴方を食べたい・・・】

「その姿でっ」

「変なこと言わないでっ」

二人の武器が激突する中、龍自身もヤンデレに好かれたようで背筋に寒気が起きる。

その様子にセレナ、カノンも武器を強く握るが、リタを始め、冷静なもの達はそれを知り、青ざめる。

「装者の負から仮ゲーデを生み出したのっ!？」

「ディセンダーと言い、今度はゲーデ。それに」

「装者の負の感情と言うことは」

装者達も弦十郎の言葉に戦慄する。

つまり、

「私や雪音、マリアや立花もまた」

「出てくるってことかよっ!？」

そのとき、頭上からの攻撃を察して、翼は剣を構え飛翔する。

その技を見て、顔を歪める。

「言っている先からかッ」

それは『千ノ逆鱗』が迫る中、『蒼ノ一閃』で防ぎ、その巨大な剣を駆け抜け、翼を見ずに、まっすぐ龍へと走り付ける。

【天羽々斬つ、押し参るッ】

「待てッ」

「また偽物かつ」

それと共に、まだまだと言わんばかりに、ミサイルの雨が頭上に見える。

「なにあれっ!?!」

リタが叫ぶが、クリスは苦々しくそれを見て、撃墜するが、ミサイルの中に、発射した存在がすぐに龍へと迫る。

【悪いが、お前は私のだゲーデッ】

「ミサイルに乗ってきたか偽物っ」

ユーリが急いで動こうとするが、その前に、セレナとデイセンダーの彼女に迫る者に感じ取り、そちらへと歩を進める。

それは二人を捕縛、もしくは殺すかのように、蛇腹の剣を振るっていたため、剣撃で切り払う。

「セレナ、リュウのことで我忘れすぎだぞ」

「ユーリっ!？」

「!？」

そしてイチイバルとともに現れそれは、セレナを見ながら顔を狂気に歪めている。

【私はアガートラーム・・・ゲーデの前に、貴方達の用事を済ませる気なのよ。邪魔するのなら、死んで・・・】

「なら、やってみなッ」

混戦だった。同じ鎌使いの少女達、翼と天々羽斬が剣をぶつけ合い、イチイバルが迫ってきて、アガートラームのもとにマリア、ユーリ、セレナが対峙する。

そして敵の方は周りを気にせず、力を振るうため、他の戦闘員は非戦闘員を守るので手一杯。

龍は持ち込まれた剣を振るい、イチイバル戦、クリスと共に戦う。

「ちっ、援護射撃してやるよっ、前出る龍っ」

「わかってるッ」

【お前が前に出てくれるのかっ、うれしいぜゲーデっ】

弾幕を切り払いながら、目の赤いイチイバルへと斬りかかる。

「テメエに聞きたいがある、あのディセンダーは」

「私たちが知るかよつ、あれは私達は知らない。まあ彼奴なら勝手に動いてそうだが、その前に私に食われるゲーデつ。お前は私のだツ」

クリスは顔を赤くしながら、その間に割り込む。

「私の顔で妙なこと言ってるんじゃないねえツ」

「妙なこと？　妙なのはお前だオリジナルつ」

銃撃の雨の中、二人が対峙するが、向こうは周りを気にしてないだけに、クリスが押されていた。

「どうしてパパとママを殺した世界を守る？　こんな世界ぶつ壊してやる、それが私の始まりだろ？」

「それは昔の話だつ、いまは違うツ」

「なら悪いが、私はそこから作り出されたんだ」

「!!？」

その言葉に装者達は驚愕する。翼の目の前、天々羽斬もまた、口元をつり上げた。

「ああそうだオリジナルよ、私はお前、剣として身を研磨し、防人として戦場をかけた日々、友を助けられず、その感情のまま走り駆けた負より生まれしモノだ」

「昔の私か・・・」

「だからと言って、いまのオリジナルより劣るわけではないぞ」

それに対して、イガリマとシウルシャガナは微笑む。

【ゲーデを取り込めれば私たちは貴方達を越える】

【口の中に含んだときの甘さ、この身体に染みこむ力……オリジナルを越えることとか関係ないし、ゲーデを食べたいです……】

二人して身を合わせ、微笑むイガリマとシウルシャガナ。それに切歌と調は同じように隣り合わせに立ち、睨む。

「言い方を考えろデスっ」

【ちたまに言われたくないです】

「だからどうして知ってるんデスっ」

混戦状態、それに色々と焦るのはこちら側だった。

まず非戦闘員がすぎる、その状況では装者達もユーリ達も戦いづらい。

弦十郎はギリギリの中で指示を飛ばしながら、傍らにエルフナインを抱え、ハロルドも難しい顔をする。

「まずいわね、向こうのスペックもオリジナルよりも上のようよ」

「ああ、このままでは」

押し負けるまでまだ時間がある。だが結果は少しずつ近づいてくる。

そんな中、それを破るバカはいた。

「戦局変えるッ」

「「やめろッ」」

アドリビトムの何人かが叫ぶ中、龍はゲーデ化してイチイバルを取り押さえる。だがイチイバル、いや達は顔をつり上げた。

「(一)イグナイトモジュール、抜剣ッ(二)」

そのとき、本物達と同じ位置にあるイグナイトモジュールに手を伸ばしたが、

『全員ッ』

アドリビトムメンバーは即座に動いた。

カノンノは両手剣を握りしめ、セレナは騎士の剣をアガートラムへ。

ユーリはそのスピードでイガリマ達へ。

フレンは天々羽斬へ。

そしてバカはすぐにゲーデを解く。

まさかの強化後すぐにそれを解くというあほなこと、龍は無防備な体制をさらしているが、それよりも早く、彼らが動く。

『獅子戦吼』

無防備になったアガートラムを吹き飛ばし、セレナはそれに斬撃の連撃を放つ。

「はあああああああああああああ」

「くつあああああああああああああ」

セレナの攻撃を受けるたび、外装のように肌が砕け、ヒビが走る。

ユーリは二人の間に割り込み、『義翔閃』をたたき込み、目くらましをする。

その瞬間、二人も武器をたたき込むが、致命傷にはならないが、体制を整えた。

フレンの乱入に天羽々斬は苦々しく見て、イチイバルは、

【邪魔するなッ】

リタの魔法が壁になり、イチイバルが無防備になった龍に発砲した弾丸は全て防いだ。
いた。

リタはすでに別の詠唱を始め、いつでも放てる体制であるし、

「あんたの相手は私じゃないわよ」

その瞬間、龍は岩壁ごと、イチイバルを吹き飛ばす蒼破刃で吹っ飛ばす。

「よしどうにかなった」

「なったじゃねえバカッ」

「君は相変わらずだな・・・」

メンバーからの苦情を無視しつつ、体制を整えた戦局を静かに見る弦十郎。

いまの騒ぎにハロルドは非戦闘員を守る体制に入っていた。リタの魔法も自分へ

と向けられる攻撃ではなく、非戦闘員を守れるようにするために展開していた。
(自分への攻撃は、龍くんが相手すると信じての行動か)

アドリビトムの絆とも言うべき連携と言うよりかは、無茶なことするメンバーへの援護になれている彼らに、呆れていいのかほめるべきか考える弦十郎。

非戦闘員を守る中には、もう響とマリアもいる。これならば、

【ゲーデ・・・】

名残惜しそうにシウルシャガナがそうつぶやき、彼女らは後退する。

「逃がさないデスっ」

シウルシャガナはピンク、イガリマは緑の布を全身に巻き付けた。それと共に空間が歪み、切歌の鎌が触れる前に消えた。

「デスっ!?!」

その様子に天羽々斬もまた名残惜しそうに見て、イチイバルも舌打ちする。

【アガートラーム、お前も下がれ、身体が維持できてないぞ】

【わかってているわよ】

その瞬間、各々の布が現れ、追撃するべきかと考えたが、いまは見逃すしかない、全員が察する。

【では戦場でまた相まみえよう】

【・・・】

【またなホンモン】

天羽々斬、アガートラーム、イチイバルはその場から消え、やつと一息つくのであった・・・

暗闇の中、布にくるまれているアガートラームは、ため息をつく。

【私だけ身体の修復に時間がかかるわね・・・デイセンサーか、私たちの身体じゃ、相性は悪すぎね】

【そう言うなアガートラーム、お前の分のゲーデは残してやる】

【アア？ 天羽々斬は残すのか、あれは全部私のだつ】

【ゲーデはイガリマとシウルシャガナのモノですつ】

【二人で分けて食べるんだ】

うれしそうに話し合う二人に、イチイバルは苦々しく見て、天羽々斬は面倒なという顔で見ている。

【私たちの性格もオリジナルとほぼ一緒のようだな。思考パターンが似ている】

【まあ、元だからじゃないの？】

座り込むアガートラーム、天羽々斬は静かにそうだなと納得する。

【しかし・・・うまかったか？】

天羽々斬の一言に、イガリマもシユルシャガナは、うっとりしながら頷く。

【おいしかった・・・全部、身体に染みこむ・・・】

【あれが純度の高い負・・・私たち力の源・・・もつと仲良く分け分けして食べたいです・・・
彼女たちの刃が光る。もつと切り刻みたい、身体を裂く感触も、それで舞う鮮血も味
わいたいと、彼女たちは想い続けた。

【心臓はどうする？ イガリマ？】

【シユルシャガナが欲しかったらシユルシャガナにあげるですよつ。そのかわり、部位
分けは私にやらせてです】

【じゃ、血をまき散らすのは私がするねイガリマ】

そのときは一緒にやるですと、楽しそうに雑談する様子を見ながら、天羽々斬を始め
とした彼女たちも求めている。

本能が、純度の高い負を求めているのだと、確信を得ながら。

【そういえば、デイセンダーが増えてたわね？ あの方に詳しい話を聞かなくちやいけ
ないわね】

【確かガングニールをどうするか思案していたはずだ。まあお帰りを待とう】

「寒気がする今日この頃」

「夏場だぜリユウ」

ユーリの言うとおりに夏場だが、寒気がしたのは事実なので、龍達は集まり一休みしていた。

彼女だけは別の場所、隔離された部屋で何もせずぼーとしているらしい。

「あの装者ゲーデも、デイセンダーの力にもろいな」

「ああ、元がって言ってたけど、まあ仕方ないね」

フレンの言葉に、装者達は認めたくないものを見せられ、黙る。

自分の負、過去の出来事のこととは詳しくは話していない。だがアドリビトムの人達は知っている。どんな人にも負の面があるのだから仕方ない。

「一番の問題は、我々の連携と力不足か」

翼の言葉に、全員が頷く。

ここにいるもの達は、あまりに経験の違いが目立つ。

「歌歌いながら戦うって、俺らからすれば考えられないしな」

「魔術も同じだ。リタやハロルドにはいつも驚かされる」

ユーリと翼の言葉に、真ん中の龍ははつきり言う。

「俺からすれば、全部ファンタジーじみてるんだが」

「お前はそのど真ん中だろ」

クリスの言うとおりだが、龍は気にせず、

「やっぱ連携とイグナイトモジュールだな。装者はもうイグナイトモジュールが前提で戦わなくちゃいけない」

「向こうも使おうとしてましたよね・・・」

響の言葉に頷く一同。彼女たちは龍がゲーデ化した瞬間、イグナイトモジュールを発動させようとした。

その隙を生み出すためだけに使ったが、まさかの結果だった。

「これは、俺ゲーデ使えないな。剣所持していたい・・・」

「拳使え」

「剣じゃなきゃ勝てるかつ」

ユーリにそう返す中で、セレナ達はどうすればいいか色々ありすぎて疲れ始めてくる。

デイセクターにゲーデの存在。そんな中で力のやりとり。

「なんか話が混沌しすぎだ。これ以上混乱する事態にならなきゃいいが」
「だな」

ユーリも同意する中だったが、それは無情にも警報でうち消されるのであった。

弦十郎の話では、立ち入り禁止区域にガングニールの反応があるらしい。

元リディアン女学院があつた場所、龍からすればなにがあつたんだろうと思ふような事態であり、未知の建物があつた。

モニターに映るそれを見ながら、リタはセレナを見る。

「セレナ、龍、貴方達が捜査隊よ」

「二人だけか？」

ユーリがそういう中、装者達が驚いている。弦十郎はその様子はわかっていた。

「装者達は向こう側、ルミナシアの魔術に対抗する術がないからだ。鍛錬すれば解決することだが、いまはそう言っていられない」

「俺とセレナの連携で対処か」

「頼む」

「了解、このことは任せませ」

全員は仕方ないや、納得できないと言う顔で話を終わらし、二人は急いで駆けだした。

「二人とも気を付けて」

「任せてカノン」

「行つて来る」

龍の過去、絶望の世界で

リディアン女学院、名前はまあまあ知ってはいたが、音楽家関係の学園程度だった龍は、少しばかり変わり果てたそれを見て、内心驚いていた。

周りは荒野と言つていいほど何も無い。少し手入れをして、荒野にしたらしいが、妙な建物はあるし、色々と元の世界の価値観が変わる。

まあ関係ないと、すぐに切り替えた。

側にいるセレナは忍者の格好で、周りに敏感になり、カメラ回線の方に手を振る。

「そういうのいいから、いくぞ」

「うん」

いまの龍の格好は、この世界の安物の衣類に、小手と両刃の両手剣と言う格好。小手はユーリ達を持ち込んだ装備の一部であり、龍のスタイルは、軽装で動き、思い一撃を放つ。

だからか、セレナはスピードで手数で戦うスタイルを得意とする。

余談であるが、カノンノは二人と組む際は魔術主体で戦うというのが、異世界での彼らの活動内容だ。

(カノンノ不在だが、このスタイルが一番頼りになる)

そう思いながら、建物の中、壊れ、ヒビが入り、いつ崩れてもおかしくない建物へと見るが、ふいに気づく。

(地面が揺れる・・・)

セレナと顔を合わせ、お互いに頷く。

どうやら来る。何かが来るとお互いに思い、後ろへ後退し、外で待機。

「通信機、敵さんは向こうから来てる気がするが、反応は？」

『藤堯です、ガングニールの反応が近づいてま』

そのとき、言葉を区切った。

『そんなバカなッ』

「リュウッ」

地面の揺れが強まる。複数の数が地面から飛び出る感覚。二人は背中合わせになり、戦闘態勢にはいるが、

『ダメです逃げてくださいッ、この反応は』

それは現れ、龍は驚いた。

『ノイズですッ』

「ノイズだとツッ!？」

弦十郎の叫びに、司令室全員が戦慄していた。モニターの二人はノイズに囲まれていた。

さすがにユーリ達も驚いていた。

「ノイズって、あんたらが倒したんだろっ、なんでまだ」

「これも敵側の戦力かつ!? まずいつ、龍くんはゲーデの力を使わなければ」

「リュウっ」

カノンノが急いで司令室へと飛び出そうとするのを、リタとフレンが止める。

「待つんだカノンノっ、君だつて触れれば死んでしまうんだぞっ」

「放してっ、このままじゃ」

「仕方ない、俺が出るっ」

「君もだユーリッ」

「装者達をすぐにむかわ」

「ガングニール接近、もうすぐ視認しますっ」

「ちツ、こんなときにつ」

ノイズが現れ、さすがに苦笑する龍。ゲーデの力を使おうか考えた瞬間、

剣を構え、それは炎を纏う。

『紅蓮剣』

紅蓮の刃を放ったあと、続けざまにそれは鳥になる。

『鳳凰天駆』

炎をおいやがれ、その側にいるノイズもまた炎で焼かれるのを確認して、少しばかり大技を放つ。

『タイダルウェイブ』

剣を振り回すと同時に、海流が刀身から放たれる。ノイズと共に巻き込み、吹き飛ばす龍の魔術剣技。

リタ達から外道と言われる。威力も範囲も狭く、その上魔力を本家より使うというが、その分本家より早いのが売りの龍の魔術。

「周りも邪魔だッ 『サンダーブレード』」

辺りに雷の刃を乱射する。ノイズもガングニール、特にガングニールに連打する。

だがそれはマントで全て防ぎながら、突進してくる。

【ゲエデエエエエエエエエエエエエエエエエ】

「早いッ」

剣と槍が交差し、激突するが、ガングニールは片腕で巨大な槍を振るっている。

「離れろッ」

そう言うって GANG ニールに特大の一撃を食らわしたのは、本物だった。

「立花すまん」

「大丈夫ですか龍さんっ!？」

すでに他の装者達もノイズを倒している。龍の側に駆け寄り、様子を見る。

「女の子怖い」

真顔で感想を告げるが、あまりは場違いなことを言ったためか、何言ってるんだと呆れている。

「出血は平気か」

「肉体を強化したからな、血が出る程度だ。他のところもな」

内心、そこを舌でなめられたりしたとか言うべきか、いやセクハラかと思い、やめておく。

獣のような GANG ニールの容姿を見ながら、側の響を見る。

「似てるようで似てないよな、あれ」

「ですよ、髪長いですし・・・」

「・・・あのマント、私が GANG ニールのマントね」

「？」

マリアの言葉にセレナが首を傾げたが、翼は剣を構えながら、

「マリアはガングニールを纏っていたことがある。それに似ているということだ」
流れ出る血を治癒系の体術で治し、剣を構え直す。

口元の血をすすり飲むガングニールに、響はうへと嫌な顔をする。

「ゲーデ装者にとつて、貴方つて食べ物のようね」

「言わないでくれ」

マリアに言われたとおり、ガングニールはすぐに胸のブローチに手を伸ばす。

【イグナイトモジュールウウルウウルウウルウウルウウル】

黒い柱が立ち上がり、その姿はまさに、イグナイトモジュール時の響である。

【ゲエエエエエエエエエエエエエエエエ】

「それしかないのかあれは」

「来るぞッ」

ノイズもまた迫る中、全員が全員走り出す。

龍は必然的にガングニールと対峙する。戦場が歌で満ちるが、獣の咆哮がかき消している。

「立花達のように歌わないのにないつ．．．『サイクロン』」

風の刃が調の丸鋸のように回転しながら、ガングニールに迫り、それを片腕で掴んで

いる。

キユユユユユユと言う音が鳴り響くが、それを投げ飛ばすガングニールに、嫌になる龍ではあるが、気にせずに剣と槍がぶつかり合う。

「龍さんっ」

それにサポートとして、乱入する響。ガングニールはそれにも対処するが、(行き当たりばったりだが、やるしかないかッ)

響の歌を邪魔せずに、うまく身体を動かす龍。

槍と拳、片腕同士なのに、二人を圧倒するガングニール。それに驚きながら、響の顔が歪みつつある。

(私もイグナイトモジュールを使う・・・)

響が押されている中で、内心そう思う。

そのとき、ガングニールと目があつた。

【ドウジデ】

それは初めて喋った。

【ドウジデゼガイをニグマナイ】

そう言いながら、ガングニールは槍の矛先を回転させながら、響へと振り下ろす。まずいと龍は察して、剣をたたきつける。

『剛・魔神剣』

ガングニールの槍をはじき返し、響はそれを見て、

「借りますッ」

そう言つて龍の肩を踏み、勢いを付けて拳をガングニールにたたき込む。

その顔に向かつて、だが、

【ガアアアアアアアアアアアアアアアアア】

「なっ」

ガングニールはその拳を口で噛み防いだ。

響は驚いた瞬間、マントが響にまとわりつく。

「響っ」

龍もまたそれに斬りかかろうとするが、ガングニールの手が、響のイグナイトモ

ジュールに触れた。

【ヨコセ、オマエの負ヲおおおおおおおおお】

そのとき、ガングニールは響のイグナイトモジュールを発動させた瞬間。

世界は闇に覆われた。

「……あれ？」

響は突然のことに驚き、そして状況もかわっているので驚いていた。

自分の周りが森になっていて、辺りを見渡しても誰もいない。

シンフォギアを纏っていて、ガングニールと龍も、他の人達もいない。通信機も使うが、返答はない。

「いったい、なにが……って」

響が再度辺りを見渡すと、そこに一人の少年がいた。年齢は4〜5歳くらいだろうか。黒い髪に黒いぼろ切れを着込んでいるだけの、虚ろな子供だった。

「君大丈夫っ、どうしてここにいるのっ?!」

子供に話しかけてもなにも言わず、そこに大人の人達がやってくる。

「わわっ、えっと」

いまの姿を見られたと思ったが、大人達はこちらに気づいていない。

「あれ?」

そう思った瞬間、大人達が響をすり抜けて、子供の方を見る。

驚きながら子供を見て、何か話し合っていた。

「これって……映像?」

大人や周りのものに触れようとしても、触れずに通過する。

この状況に困惑しながらも、子供は大人達に連れて行かれた。

「立花っ、龍っ」

翼達は黒い柱を見る。空すら真つ黒に染める闇が立ち上る中、戦場に五つの布が現れ、それを払い現れた。

【出遅れたッ】

【ずるいですッ、ゲーデは私とシルシャガナが切り刻むつもりなのにつ】

【まだ食われ終えていないはずだ、その前に残りでも取り出すぞッ】

ゲーデ装者達は焦りながら、その光景を見て走り出す。

目まぐるしい変化の中、響は吐き気を抑えていた。

『はあ、面倒。どうして子供の面倒みないといけないのよ』

『あの子不気味だわ、なに考えてるかわからないんですもの』

『金欲しい、金金金金』

ずつと頭の中に響く声、それは人の負。

子供はそんな世界をずつと見続けていた。巡るように孤児院をたらい回しにされながら生き続けた。

ずつと聞き続ける声、響は倒れそうになる。

「この子は……」

子供は少年へと成長する。それは面影がある。龍だ。

「龍さんの子供時代……」

そんな人より距離を置きながらも、嫌ってほど人の裏を知り続ける日々。

響はそんな中、ボランテアで彼は病院にいる。

これで孤児院関係だが、龍しかいない。他の人は他の人の用事という名のサボりだ。

そんな声を聞きながらも、龍はめんどくさそうに病院にいる。

「……あれ？」

その病院に心当たりがある。そして病院のカレンダーを見て、青ざめた。

「この日、翼さんと奏さんのライブ……」

その一言で、病院があわただしくなる。

ノイズの災厄、ライブ会場の事件。それは響の心に亀裂を走らせた。

あの日、自分が死にかけてあの事件の当日だった。

『すいません通してくださいっ』

そのとき、自分がいた。

ベットで横になり運ばれる自分。それに呼びかける家族。

ああ間違いない……あの時だ

響は思う。あの日、自分はノイズの戦いの中で死にかけ、奏に助けられたことを思い出す中、

「血が足りないっ、誰かつ、この中にO型の方はいますかっ!？」

「・・・えっ」

響はそれを聞いて、心音が強くなる。

それを聞いたのは、たまたまいた龍だった。

「あつ、自分O型です」

「お願いしますっ、手術のために血が足りないんですっ」

「お願いしますっ、響を、娘をお願いしますっ」

突然のことに龍は驚いていた。父親が龍の手を取り、泣きながら頭を下げていたのに驚くが、龍はいままで負の中にいた。

純粋に助けたいと言う感情がわからず戸惑いつつ、彼は頷き、血を提供した。

それから、間をおいてはあるが、血を提供し続けた。自分にもわからないが、なんとなくだった。

そして少女は目を覚ました。両親らしき人から涙を流しながら感謝された。心がわからず気持ち悪かったはずだった。

『ごめんな響……』

あの父親が娘達を置いて出ていった。

はあ？ あんたは娘が助かった泣いて喜んでいたじゃねえかよ。

『あああああああああああああああああああああ』

少女の嘆きが頭を叩く。ハッ、なんだこれ？ これが俺がしたことか？

結局変わらない声、前よりもひどく聞こえる声。

苛々する。

これが世界、これが日々、これが人。

こんなことのために、俺は行動した？ ははっ

それは笑いそうになりながら帰路につく。その際、不良グループを見つけては憂さ晴

らしに暴れていった。

何度も壊れそうになる。痛みより、血が流れるより、何より、痛いと言う意味がわか

らない。

いつからか、それが楽しくなった。

壊すことが楽しい、それが頭の中の声がひどくなっても……

「ああそうか……はき出せばよかったんだ」

口元がつり上がる。

もうどうでもいい。何かが目覚ます感覚の中、龍は自分と相手の血の中で狂ったように笑う。

その日から学校に通うこともなく、なんとなく日々を過ごす日常が彼の人生になったのだった。

響はその場に座り込んだ。

その事実を知り、目の前で自堕落な日々を過ごす光景を見せつけられて、首を振るしかない。

唇が振るえるが、声が出せない。

【これがお前の負だ】

背後からガングニールが迫る。それに気づかない。

【お前が引き起こした、負だ。飲まれろ、そして私によこせ……】

飲まれかけようとしていた。響は何もせず、ただ光景を見ていたが、

「ぎっけるな」

そう言つてガングニールを蹴り飛ばした者に、恐る恐る顔を上げた響。

「龍……さん……」

「……あのときの子だったんだな」

龍も複雑そうに響を見ながら、響は静かに顔を伏せる。

「私のこと、龍さんにもひどいことしてたんですね・・・」

力無く笑うが、それに対してどうすればいいか考える龍。

仕方ないと前を向きながら、

「もう気にしても仕方ないだろ、お互い」

「・・・」

龍の言葉に響は黙り込む、その様子を見ながら、

「確かに俺はあの日からこの世界を完全に見切った。世界なんて、人なんて、無い方がいいといまでも思う」

その言葉は、やはり自分の事件が全てのきっかけ、龍が人を見きるきっかけだと宣言していた。

「だけどな」

龍は響の頭をわしわしと撫でながら、笑う。

「だけど俺はいまは違う」

「・・・龍さん」

壊れたような笑いではない、前を向いて笑う龍がそこにいた。

「俺はあのと、アドリビトムと出会った。カノンノに、仲間達に出会った」

そして仲間と共に過ぐす世界を知り、龍は前を向く。

「だからって壊れていい理由にもならないってわかった。お前はそのままか？」

「私、は……」

そう言つて手を差し出す龍。

その手を見ながら、響は満面の笑みで掴み、立ち上がる。

「私のお父さん、あのあと時間はかかりましたけど、いまみんなで暮らしてます」

それを聞いて、少し驚くものの、そうかと苦笑する。

「もう平気か？」

「はいっ、平気、へっちゃらですっ」

その様子に、ゲーデの響は困惑して叫ぶ。

【ナゼダっ、ナゼ】

「知るか、お前が決めるな」

「それじゃここから」

「脱出しますか」

そして向かつてくるガングニールへ、響は歌い、龍は剣を振るう。

そのたびに世界が砕けていく。光り輝く、光が、

「ん？」

現れた女性は肩に槍を置き、響を見た。響は呆然とその人を見た。

「あなたは……」

「ん？ ああ、私は奏『天羽奏』まあ、記憶やらなんやらかき集めたから、本物かどうか自分でも判断できないけどね」

苦笑する奏に、全員が驚いているが、奏だけ槍を振り回し、ノイズを吹き飛ばす。

「なにしてるんだ翼っ、ほうけてるとやられるぜっ」

「なっ」

「話はあとだっ、ゲーデの奴はやばいっ」

「!？」

そう言われれば、龍はさっきから地面に寝っ転がっていた。

それに気づくイガリマとシウルシャガナが駆け出す。

それに響が前に出るが、

【邪魔です】

【そこをどけッ】

「絶ッ対にどくもんかッ」

響はイグナイトモジュールに手を置く。

一瞬だけ龍の顔を思い出す。

（私は、まだ龍さんと話がしたいんだッ）

そう決意して、叫ぶ。

「イグナイトモジュール、抜剣ッ」

そのとき、黒い闇が吹き荒れる。

「!？」

黒い竜が現れ、飛翔して、砕け散り、響へと纏われた。

両腕は強く、堅く黒い装甲に覆われ、マフラーのようなものが首に巻かれた。

いつものイグナイトモジュールではない、より黒いドラゴンを模した装甲が増えた、撃槍ガングニールがそこにあった。

二つのガングニール

モニター越しにその光景を見ていた弦十郎は驚愕して、開いた口がふさがらない。死んだはずの少女と、その少女に助けられた子の歌が、戦場に奏で響く。

「この歌……やっぱり奏……」

そう翼が唾然となる中、天羽々斬は見逃さないが、響の片手に両足を置き、響にぶん投げてもらい、天羽々斬に斬りかかる。

「くっ、ガングニール……違っ、失敗した意識、オリジナルかっ!」

「へえ、あんたらからしたら私もホンモンか。まあ話は後々だ」

後ろで驚きつつも構え、奏を見る翼。

それに苦笑しながらも、

「私のことはあとだ、ノイズやこいつらを倒すぞ翼っ。久しぶりのツヴァイウィングだぞ、気を抜くなっ」

「あっ、ああっ」

うれしそうに返答し、歌を重ね合う。

その様子に、弦十郎は一瞬司令としての立場を失いかけたが、すぐに取り戻して、響

を見る。彼女のいまの姿、そして、その力だった。

「貫けエエエエエエエエエエエエエエエエ」

黒いドラゴンが戦場を駆け、その余波だけでノイズが消し飛ぶ。

その威圧だけで、クリス達も空気がピリピリと振動しているのが分かる。

「なんだよありゃ、響の身体は無事なのかっ」

司令室に連絡すると、エルフナインがコンソールなど、響の状態を見ながら叫ぶ。

『問題ないのが問題ですつ、なんでこんなに力が上がるのに、響さんが無事かわかりませんつ、ああつ、まだあがる』

『響さんのバイタル正常値つ、ですがそのほか、聖遺物関連のエネルギーの底上げは止まりませんつ』

『まずいですつ、スキヤンがこれ以上、機材オーバーヒート寸前、計測不能計測不能つ』
司令室ではかなり混乱しているようであり、クリス達も近づけない。

【本物のくせに、ゲーデの力を取り込んでますつ、ずるいですつ】

【あれは私とイガリマのつ、これ以上その力使うなオリジナルつ】

イガリマの『切・呪りaツTお』とシウルシャガナの『 α 式・百輪廻』が放たれるが、

マフラーが尻尾のように動き、全て防ぐ。

布のようなものだが、瞬間硬化したように、攻撃を防ぐだけでなく、黒い炎を吹き出して、突撃力を上げて響の一撃を重いものへとかえた。

【ですっ】

【イガリマッ】

その一撃で吹き飛ぶ。身体に亀裂が入り、敵は顔を歪める。

【ここは引くわよっ、もともとガングニールの独り占め止めに来ただけなのよっ、これ以上は持たないわっ】

【くっ、わかりましたですよアガートラムっ】

【逃がさないッ】

響が駆けようとするが、ノイズがまた大量に出てくる。

それを見ても、響は止まらない。

【龍さんっ】

その言葉に、響の目の前に林のように、刃の森が生えて、ノイズを貫く。

【ですすっ!?!】

それはまさに、ゲーデ時の龍が使う、チエーンソード。

髪と瞳だけが変わった龍は、倒れながら顔を上げ、ニヤリと笑う。

【気絶してなかったっ】

響の拳が、イガリマを捉えた。

その一撃が深く深く食い込む。

【イガリマああああああああああああ】

イガリマよりも悲鳴を上げたシユルシヤガナ。イガリマは下半身が砕け散るが、だが、まだ動いた。

【でっすっ】

だがその鎌は、奏と龍が防ぐ。それに合わせて、緑の布がイガリマを包み、消えた。

「ちっ」

その瞬間、他のゲーテ装者達もその場から逃げていった。

「はあ、やっと終わったか」

奏はそう言い、シンフォギアを解く。するとコートを羽織って、ズボンをはいた、普通の女子の服装。上着はシャツだけのようだが、下着はあるなど奏は呟く。

「とりあえず、起きろよ龍、いい加減に」

「だめだめ、倒れてる。立つの無理」

横になる龍は、実はさっきの姑息な技で体力がないのだ。

セレナが近づき、すぐに座り込んで頭を膝に乗せた。マリアから負を感じた。

「大丈夫リユウ？」

「あー体力と魔力がないだけだ、問題ない」

「えっと、とりあえず」

響は自分の姿を確かめる。身体がもの凄く軽く、少しの力加減で難くなんでもこなせる。そう思うくらい自分が強くなっているのに気づいている。

ともかくと、いつもの感覚で解除すると、元に戻って、響は安堵した。

「あれはなんだったんでしようか？」

「あれについてや、私については、まあ旦那んところで説明するよ」

奏はそう言い、装者達も奏を見る。みな、前ガングニール装者である自分を知っていることを知り、あーと空を見ながら、難しい顔をする。

「機材の修理と響くん達の回収を急げッ」

弦十郎の指示に、いま司令室は大慌てで動いており、モニターの全員を見る。

ハロルド達もまたそれを見ながら、難しい顔をしていた。

「なにがなんだかわからないけど、あの姿は」

響の様子は、その感覚だけで分かるアドリビトム。弦十郎もそれに耳を傾ける。

ゲーデの力、響は間違いなくその力を正常に使用していた。

「まあ、普段から本人の側で見てたからな、それくらいの判別はできる」

ユーリの言葉を聞くが、エルフナインはそれに異議、もとい異論を言う。

「ですが、龍さんと聖遺物の相性は悪いはずですよ。チェーンソード、ゲーデの力を使ったところを見る限りは」

「なにもなかったか・・・まあ、本人達が帰ってきたら、また話し合いねって」

ハロルドがそう言っていると、ある連絡が入る。

「ニアタから、ルミナシアがグラニデでなにか進展でもあったかしら？」

いい方がいいわねと言いながら、リタ達は息をのむ。

「よお旦那っ、久しぶりっ。っていうのも変かっ」

あつはと苦笑するのは奏であり、いまは途中で買った衣類を着ている。

龍はソファでぐったりして、全員が落ち着きを取り戻していた。

「お前はかわらんな」

「・・・まあ、実際人間かどうかかわからないだけだね」

苦笑しながら、少しだけ暗い顔になる奏。

それに翼や響も心配そうに見る。

弦十郎だけは確かめるために、代表して訪ねた。

「自分がなにか、まずはわかるか？」

天羽奏は死んでいる。誰も、いや、本人も知っている。そう領き、奏は言う。

「記憶的には、絶唱歌ったあとは、真つ暗な闇の中で、記憶はそこで途切れてる。そのあとの記憶が、私は一度死んで、ゲーデとデイセクターみたいな方法で作りに出されたまがい物だっという記憶で、いまここにいます」

まず最初はガングニールを元に、負の感情を集め、疑似ゲーデを作り出すのが目的だったらしいが、まさかの力不足。そのために、負以外の感情も使ったうえ、ガングニール関係者の負まで使ったの、あの不完全暴走ゲーデ装者だった。

「私はゲーデというより、デイセクター側に近かったらしいから、むしろ封印、拘束されてた。始め、装者を殺そうとしてただろ？ あれは装者を殺すのが目的じゃなく、装者の負の感情を集められればよかっただけだ」

そのあとの襲撃はまさにそれだ。イグナイトモジュールで負の感情を集め、ゲーデ装者を生み出した。

ノイズ、ジルディアの民もどきもまた、それらの負から生み出したまがい物と説明し出す奏。

「強い負でできた奴は、どうも奴に操られたり、賛同したりするから事実上敵の味方だ

な。私はまあ、意識的には天羽奏だから、翼達の敵になる気なかつたから、あんなにされた」

それらの言葉を聞きながら、リタは訪ねた。

「奴つてのに、心当たりは？」

「ごめん、もう視界も身動きも取れないようにされたから、記憶で自分になにが起きたくらいしかわからない。とりあえず目的だけしか、向こうのことはわからない」

「目的？」

弦十郎は聞き返すと、静かに頷く。

「全ての世界の負を集める。そのために、全世界で最も純度の高い負を殺す、それが目的らしい」

「全世界で最も純度の高い負？」

「そいつだよ剣崎龍」

全員が龍を見る。奏の言葉を聞く限り、龍は最も強いゲーテらしい。

「まあ、精霊が間髪入れずに攻撃するレベルなのは知ってたが・・・」

「それ以上は、なんか色々してるみたいとしかわからない」

奏はそう言い、リタは前に出る。

「あとでドキュメントやこの世界の医学技術で身体を調べるわ、いいわね？」

「ああ、それでやつこさんに一泡吹かせられるなら問題ないよ」

笑う奏だが、リタはハリセンでバンツと叩く。

「ばっかじゃないのつ、あんたが人間で、ちゃんとした暮らしてできるか調べるってことよつ。まあ確かに、それもあるけど」

「つて言われても、私が死んで数年経ってるし、翼が同じ年とかだし．．．私自身、天羽奏としての記憶があるだけで、本人かどうか言われると自信ないよ?」

あまり気にしていないそぶりだが、もう少し気にしろと言いたくなる。

「負の感情は、自由人すぎる．．．」

「リタ、この人の場合元だと思うぞ俺は」

「それは否定できないな」

弦十郎もはあとため息を吐く。仕草、考え方が奏であり、その様子に初めてばつが悪そうな顔で辺りを見る。

「本当に天羽奏でいいのかな? 死んだ記憶あるし、人間じゃないかもしれないんだぜ?」

「私に聞かないでよ奏．．．」

翼がそう悲しそうに呟く。翼もそんなこと言われれば悲しい。

なぜならば、自分はもう一度、奏に会えた。そう思っているのだ。

「ともかく、次は響くんのことだっ。あれについて説明できるか？」
「えっ、私ですかっ!？」

響は驚き、ハロルドは頷きながら、説明する。

「あれは明らかにゲーデ、龍の力を完全に取り込んだ GANG ニールのイグナイトモジュールね。なんかはないの？ パワーアップしたきっかけとか？」

その瞬間、響は目線で「言うなよ」と言う意志を感じる。

龍からの視線に冷や汗流しながら、響は、

「私、龍さんと仲良くなりたいたいと強く思いましたッ。だからですッ」

「……えっ……」

カノンノ、セレナが急に振り返り、龍を見る。その目は笑ってない。

響はいつもの笑顔満点であり、カノンノは静かに龍へと近づく。

「なにが……あつたの？」

笑ってない。

「あ、あなの、カノンノ」

「なにがあつたの……」

「……」

昔あつたことを説明する、その様子をアドリビトムメンバーは、

(あいつかわならず、変な方向で弱いよなりユウ先生は)

(あつはははは……)

しかし、あまり笑えない話である。

話す相手はなぜかカノンノとセレナに土下座しているものの、内容が龍が世界もとい、人間嫌いになるきっかけであり、響も少しだけ暗い顔になり、顔を伏せていた。

二人も怒る気はなくなり、響は話し終えて、穏やかに微笑みながら言う。

「だから私、龍さんや奏さん、色々な人に助けてもらって。龍さんとはちゃんとお話したいって、強く思いました。その気持ちでイグナイトモジュールを発動させただけです」

「ふむふむ、そういうこと……」

ハロルドとリタが考え込む。

その様子を見ながら、アドリビトムだけは察する。

「その様子じゃ、仮説くらいはあるんだな」

「まあね」

ユーリのつぶやきに頷くリタ。エルフナインは驚きながら、ハロルドは続ける。

「まあ話は簡単よ、もともと装者がゲーデの力を使えないのは、龍が聖遺物と拒絶反応出すだけだから使えないだけだから、使わなきゃいいのよ」

「えっと、よくわかりませんっ」

響が元気よく答えるが、リタが細くするように続ける。

「力のやりとりは、ゲーデの負を、イグナイトモジュールが回収して貴方達装者へ流し込む。ゲーデもまた同じように、聖遺物の力ごと、装者の負を取り込む。そのときに聖遺物の拒絶が出るの」

そう言われ、エルフナインはあつと声を上げる。

「それじゃ、あのときの響さんと龍さんは、そんな関係ではなかったと」

それに二人は頷き合う。

「おそらく、ヒビキの負の吸収が発動せず、ヒビキにだけに力を渡す形での、力のやりとりになった結果がああのだよ」

「ならば我々も」

「それはわからないな」

翼が食いついたが、龍はすぐに否定する。

話の内容はつまり、龍が装者の負の感情を取り込まなければ、装者達だけを強化できるといふ話だが、龍ははっきりと、わからないと言った。

「どういふことだ？」

「負の感情は誰にでもある。ああのだときは、大小関係なく、負を取り込んでるんだ。な

んで響やアドリビトムのメンバーからは起きないか、俺自身制御不可能なんだよ」
「そうなの？」

マリアの言葉に、セレナが頷く。

セレナことデイセンサー以外だと、精霊からですら負を取り込む龍。アドリビトム前は取り込んでいたらしいが、最近は全くないらしい。

だが理由はわからないと龍は言う。

「立花も確かに完全に取り込めなくなってる。他の装者だと、翼以外は、マリア、3人は論外だ」

その言葉に、響とカノンノ、セレナは首を傾げたが、他はマリアをジッと見た。

マリアは龍に含むところがあるので、顔を背けた。

3人は論外なのは、嫌われているからだ。

「まあこればかりは変えられないわね。んでと」

ハロルドは少し間をおき、有る話をする。

「ニアタから連絡はあったわ、しかもカーナーリやばめのね」

「これ以上あるのか」

広い空間、外で装置の用意をするリタ達、少しばかり機材の調整をして、準備する。

エルフナインは興味津々に手を貸して、クイツキーはクリスの肩にいた。

「異世界、グラニデか：確か、負が蔓延して、浄化が追いつかず、ゲーデが生まれて、
ディセンダーがどうかしたんだよな」

「うん、それで私みたいに、使命を終えてもまだ滞在してる子なんだよね？」

「来て欲しくないな、ゲーデを敵として戦ったんだろ？」

「ニアタの話じゃ、分かり合えたらしいよ。向こうの私が、貴方とお話ししたいって、
ディセンダーの子と一緒に言ってたって」

カノンノヤセレナの話聞きながら、それでも嫌な顔をする。

奏達も苦笑しながら、奏の方は吹っ切れた。自分は自分として生きると決めた。

「まあ、このあとどうするかはあとで考えないな。人かどうかもわからないし、実際死んでるし」

「とりあえず、いまは異世界の来訪者を待つしかないよ奏」

翼の言葉に頷く。

いまグラニデで問題があり、何人かそっちに送る話になっている。

そのための門を作る中、準備が終わった。

「んじゃま、スイツチオンっ」

その瞬間、光り輝き、感電する地面。

響達が驚き中、突如爆音が響き、龍はそれを見て、

「死んだか」

「早い早い」

「ユーリも違うだろ」

フレンが呆れながら、煙から咳き込む声を聞きながら、何人が現れ、一人を見て嫌な顔をする龍。カノンのはびっくりする。向こうもだ。

「あなたが」

「あつ、始めまして『私』っ、私もカノンノ、カノンノ・イヤハートっ」

そう言つて、カノンノに近づくカノンノに、龍は苦手な人が増えたことにいやがる。

「それで、あとのほだれだ」

龍が煙がはれると、彼らが現れた。知らないアドリビトムかと思つたが、

「彼らは違うらしいわよ、グラニデとは違う世界から、この事件に関わり合うから来たつていう異世界人」

「異世界で異世界人つてもうわけわからん」

呆れながら、彼女たち、デイセクター以外の子を見る。

一人は髭を生やし、スーツ姿に剣と拳銃を持つ男性。

喋るピンクの人形と、ピンクを基調にした衣類の少女。

ボーイッシュな格好で、鞆を提げて、ロットのようなものを持つ短髪の少女。白衣を着ていて、格闘家らしき武器を装備している黒髪の男性。

エルフナインくらいのも、大きな猫とともにいるツインテールの小さな少女。

「つて、エルつ、どうして君もいるのっ!？」

「あれ、お留守番じゃなかったのっ!？」

「おいおい、異世界行きに巻き込まれたときといい、さい先悪すぎだろ・・・」

「あつははは、どうしよう・・・」

小さな子は向こう側にも驚く内容であるらしく、その様子を見ながら、空を見る龍であり、そう言えばと、

「あのディセンダーはなにしてるんだろう。話し合いくらい顔出させないな」

そう思いながら、異世界の奴らにやにやと笑いながら挨拶する。

「こんにちは異世界の人、俺がゲーデだ、よろしくな」

こうして、異世界から来た者達、グラニデのカノンノとディセンダーが現れた世界。

その出現に、色々な思惑が交差するとも知らず、少しずつきこえない音が鳴るのであった。

霧に包まれた真実

司令室で弦十郎達は彼らを歓迎し、みんながみんな、彼らを見る。

「貴方がゲーデ？」

12〜3くらい、銀髪のシヨートの子、服装はふりふりなどが目立つが黒を基調にしたワンピース姿。だが腰にナイフと拳銃を下げた少女が話しかけてきた。

「ああそうだけ、グラニデのデイセンサー」

「私の名前、ノワール」

ほっぺをふくらませる少女。デイセンサーの輝きはセレナと全く変わらず、本能が近づくなと二重の意味で言っている。

ノワールはしばらくしてから、腰に張り付いてきた。

「なっ、こら放せ」

「知ってるゲーデに似てる、友達になるっ」

「はあ？ 断る離れるデイセンサー」

「や」

ゲーデとしてデイセンサーに近づくなと言う勘と、身に降りかかる理不尽な勘が働

く。もうすでにセレナとカノンノ（ルミナシア）が、不機嫌モードに移行しつつある。

「だ、だめだよノワールっ、そうくつついちゃ」

「ゲーデ、逃げる。名前聞くん」

「俺の名前は別にいいだろゲーデで」

「あつ、この人は龍さんって言うんだよノワールちゃんっ」

「立花ああああああ」

勝手に名前を教えられ、ノワールはリユウと認識して頬スリし始める。イヤハートも苦笑するが、カノンノとセレナは少しだけ睨みを龍へと向ける。

響は響と呼ぶようにと、周りにつきまとうようになり、話が脱線しかけている。

弦十郎がそれを止める中、ノワールは龍にはりついたままだが、話を進めることにした。

「えーそれでは、異世界側の、君達の話の詳細を聞かせてくれ」

「はい」

それに白衣を着た青年が前に出て、やっと本格的な話が始まる。

ある世界に、精霊が住まう世界、人が住む二つの世界。この三つが共存する世界がある。自分達はその世界の出身者であると説明した。

その世界の、精霊達の王もとい、原初の精霊『オリジン』がいる。

彼は時の精霊『クロノス』と共に、負を押さえ込む責務をしていたらしい。

「らしい？」

「本来なら、負を抑えているはずのオリジンが、僕らの前に現れたんです。『負が盗まれた』と言って」

彼らは、ジュード。アルヴィン。レイア。エリーゼと、他にもいる仲間達にテレパシーのようなもので話しかけ、まとまったところでその話をしたらしい。

「世界にとって、あんたらってどんな奴だ？」

「まあなんていうの、厄介ごと片づけたもんとか、精霊に知り合いが多いとか、んなところかな？」

「友達なんだよ」

アルヴィンがそう言い、エリーゼの人形のティポが喋りながら説明。龍は気にせず、負の感情について考えた。

「負に関してはなら、押さえ込むんじゃなく、浄化したほうが早いだろ。テメエら精霊にとって、俺らは邪悪でしかないんだから」

「そう言う言い方、知ってるゲーデみたい・・・やっぱ、リユウとも友達になるっ」
だきつく力が強まりつつ、ジュードはそれに首を振る。

「君の言いたいことは分かるけど、オリジンはそれをよしとしなかったんだ。僕らのためにね」

「はっ、他の世界じゃ一目置かずに害悪なんだがな。変わり者だなあんたらの原初の精霊は」

オリジンは人の、魂の昇華を期待している。だがオリジンの話を聞く限り、無駄だと龍は言う。ゲーデとして、そんなことはあり得ないと否定する。

「お前、自分のことなのに否定的だな」

「世界が変わろうが、人の本意はかわらないのを知ってるからな。俺ら負は害悪、それ以上でも以下でもない。それが絶対でかわらない事実だ、人は人のままだ、無駄骨だよオリジンって言っておけ」

そう言うが、それにジュードはこちらを見て、まっすぐな瞳で龍を見る。その瞳に負は感じず、内心感心している。

「確かに、魂の昇華なんてことはどうなるかわからないよ。けど、世界をよくする、僕らがすることはそれだけだよ。その思いだけはなにがあつても、ゲーデである君に否定されても変わらない」

「・・・」

腕を組み、なにも言わない。弦十郎は咳をして、話を戻す。

オリジン、クロノスが言うには、何者かが一つの世界に、負を集め始めていると言う、次元、時間、空間、世界。考えられる可能性という可能性を飲み込む準備をしているとわかるらしい。

「そういえば、妙なことも言っていたな、オリジン達」

アルヴィンがひげに触れながら考え込む。翼はそれに首を傾げながら聞く。

「妙なこと?」

「ああ、負の原初がないというのに、誰がそんなことをしたのかわからないってな」

「負の原初」

そのとき、一瞬考え込む龍。まさかと思う。

胸に顔を埋めるノワールが気づき、顔を上げた。

「どうしたの?」

「奴らは俺のことを、最も純度の高い負と言っていた。まさか原初の負は俺のことか
なって思ってたな」

それを聞きながらリタ達も考え込むが、まだ憶測であり、だからどうしたというのも
事実。そのままジュードは話を続けた。

「ともかく、僕らはオリジンから、近くの世界に向いて、この事態がなんなのか調べて
欲しいと言われて、まずはグラニデに来訪しました」

「まあ、そのときからも、俺らの世界で、妙なもんが現れたから、無関係って話じゃなかったんだ」

「それって」

カノンノの言葉に、レイアは頷く。

「うん、鉱物でできた人間……ううん、人形。いま他の仲間、ガイアス達が討伐してるんだ」

「言葉もなにもない、ただの石です……」

「ポリバー怖かったよ〜」

その言葉を聞き、ルミナシアメンバーは複雑な顔、ユーリと龍だけはあからさまな怒りを見せた。

ジルディアの民、それを利用した行動。彼らの逆鱗に触れるには十分すぎる。

「そのあと向こう、グラニデのアドリビトムの方々と出会うことができました」

「それで、ニアタから貴方達や、彼女の話を聞いて、来ることにしました」

「彼女？ デイセンドーのあのこのことか」

「はい」

ジュード達は頷く中、そこはわからないままであり、そう言えばと、

「そう言えば、ちっこいのと、猫はどこだ」

なにがしたいわけではない。

ゲーデを消せ。

それ以外を求めた。

ゲーデを滅ぼせ。

それはもう、偽りの使命だと分かっている。

ゲーデを討伐しろ。

違う、やめて、それは私の意志じゃないッ

この世の負の原因である、彼を殺せッ!!!

それは、間違っている。

殺せ、劍崎龍、ゲーデをッ。

「・・・」

彼女はつたない手で、調理室で鍋の中、スープを煮込んでいる。

なにも考えていないと、頭の中で彼を殺すことが何度もよぎるため、なにか手を動かしたく、こうして手を動かしていた。

なんとなく味見をして、食べられるものだなと思いつながら、これをどうするか考えて

いる。

そのとき、がちやと扉が開き、なぐおくと鳴き声が聞こえた。

「ねっ？」

「……」

小さな少女が、猫と共に現れた。こちらを見てびつくりしていたが、彼女は首を傾げていた。

「小さい子って、エルフナインって子以外、いないんじゃない？ アドリビトム、他の子？

まあ、この関係者なのは間違いないわね」

「……」

なぜかびつくりしている少女。どうすればいいのか考える彼女。

部屋に引きこもっている間、人間関係と言うものがわからなかったため、文字を教えてもらい、本やテレビなど見たりしているが、やはりどうすればいいかわからない。

「とりあえずスープ作ったから食べる？」

それが彼女の考えた末の答えで、少女はそれに、

「食べるっ」

満面の笑みでそう言って、すぐにテーブルに座った。それにため息をつきながら皿に移したスープを渡す。

「熱いから気を付けなさいよ」

「エル、そこまで子供じやないよっ」

「にや〜お〜」

「あなたはミルクね・・・」

子供のお世話をしながら、エルと言う少女はスプーンのスープを、ゆつくり食べていた。うれしそうに、泣きそうな顔で、

「どうしたのよ」

「・・・大好きな人と、同じ・・・」

泣きそうな顔でそう言われ、彼女は困惑する。この場合どうすればいいかわからない。自分の中には、あとで付け加えた知識以外、ゲーデを消すこと以外ないのだ。

「ちよ、待って泣かないで」

「エルは泣かないよ、我慢するっ」

「泣きたきや、泣けばいいんじゃないかいまは」

そう言いながら現れたそれを見て、一瞬近くに刃物がないか探す自分。すぐに我に返り、それを見た。

「ゲーデ」

「よおディセンサー」

「・・・あなたも、デイセンダー？」

「その腰のは？」

「グラニデのデイセンダー」

「ノワール」

そう言いながら、エルとルルも挨拶する。そこにみんな現れ、挨拶する。

正直、武器を見るたび、それで龍を殺せと頭の中に声が響く。

「・・・あなた達は、なにもないの？」

「!?」

二人のデイセンダーにはなにもない。ということはやはり、

(私の方がまがい物・・・)

その事実にくさきぎ込む彼女に、龍は無視してエルを見る。

「とりあえず、敵さんも負の感情を集めてる。お前のことはともかく、情報が断片しかな

さすぎるな」

「なら、負を消せばいい、あなたを消せば世界を救える・・・」

だが彼女からその気はない。言葉からそう感じながら、響達装者、ジュード達、グラ

ニデのメンバーも黙る。

「そんなのだめだよっ」

「負は害悪でしかない。命を蝕み、人を狂わせ、輝きを汚す。デイセNDERである貴方だつて」

「それでも、それは人の心」

ノワールはそう言つて、龍にだきついていた。

「私は、ゲーデとは戦わない。絶対、だつて、一緒にいられるもん」

「うん、ノワールの言うとおりだよつ。負の、ゲーデとだつて、平和な世界を作れる。私達グラニデは、自由の灯火は諦めないよつ」

イヤハートはそう言い、ノワールはうれしそうに龍にだきつく。

ほほえましいが、セレナとカノンノが不機嫌な、そんな負を感じる（デイセNDERはいまいちわからないが）し、マリアはそんなセレナを見て、こちらを見ている（目が笑つてないし、光もない）

そして彼女は短く、そうと呟く。

「・・・そう言えば、デイセNDERさんは名前なかつたんですね、このままでいいんですかつ」

響が突然そう言い、ジュード達に少しだけ何か言いたいこと、言いたくとも言えないという、状態への苛立ちの負を感じる龍。

（なんだ？）

内心そう思うだけにして、彼女はといえば、

「好きに呼べば」

そう短く返答した。

それに響はみんなを交えて考え出す。当本人はどうでもいいと言わんばかりに椅子に座り、その様子を見ながら、龍にすら求め出す響。それには嫌そうな顔をする彼女だが、龍は少し考えて、

「なら『ミラ』でいいんじゃないかね?」

そのとき、逃さなかった。

ジュード達が、驚愕するという顔を見逃さず、内心疑問に思いつつも、

「ミラ、恒星から取ったのかしら?」

「さすがだなマリア、ラテン語で不思議なって意味だ」

「ふん、身元のわからない私にとっていい名前ね。それでいいわよ」

こうして不思議なディセクターこと、ミラはそう言うが、正直不思議なのはジュード達の反応であった。

(・・・とりあえず、ノワールが少しずつ上ってくるのを何とかしたい)

そんな感じで、今日はお開きになり、龍に至っては外出を禁止された。

「敵の狙いは君である以上、異論は認めんぞッ」

弦十郎の言うとおりなため、仕方なく龍は奥へと幽閉された。アドリビトムメンバーが牢屋に入れろ、手錠しろ、身体を拘束しろと言って来るため、どこの重罪人だろうという状態であったが、隙を一瞬見ては逃げだそうとしたため、装者達はなにも言わなかった。

「さて、あほは拘束したし、私たちは響のパワーアップの件を調べて、少しでも戦局をよくするようにするわよ」

と研究者チームは意気込み、セレナ達は暇になる。

むろん、単独行動はしないが条件であり、連絡も絶やさないことになっている。

そんな中、マリアは少しだけ行動を起こす。

「せ、セレナ」

「は、うん」

セレナにある場所に行くので、貴方も来るか聞く。切歌も調も用事があると言う話し合わせはしていたため、セレナはいと頷き、町へと出かけた。

途中で花を買いながら、セレナはその様子を見ながら、歌手で有名人のマリアは変装していて、その様子を見ながら、

「これからどこにいくんですか？」

「・・・」

少し黙り込み、そして静かに、

「ママ、私や切歌、調にとつて、母のような人よ・・・」

貴方にとつても、そう言えずに、彼女をママのもとへと連れて行く。

人氣が無くなり、静かな場所へとたどり着き、セレナも自前で花を用意して、ママの墓にたむけていた。

「始めまして、セレナです。異世界で救世主してます」

きつとママも驚いているだろう。マリアはそう思いながら、微笑む彼女を見る。

何もかも、仕草や好き嫌い（向こうで改善したらしい）も同じであり、いつも口紡ぐ歌は、セレナがいつも歌う、あの歌だ。

心から、逃れられないほどに彼女のことを妹しか見られない。

そう思いながら、マリアも花を置きながら、それを聴いた。

「~~~~~♪」

それは、当時、あの実験施設にいたとき、いつも歌っていた、あるとき、フロンティア事変でも自分に勇気をくれた歌を歌う。

涙があふれそうになる。セレナだ、この子は間違いない妹のセレナだ。

止まらない、止められない。もう、自分は、

「マリアさん」

それに正気に戻る。

マリアは何を言おうとした。彼女にとってはいい話ではない。

勝手に死んだ妹と重ねて、妹扱いなんてできない。そう思い、すぐに我に戻る。

「なにセレナ」

だが、セレナは、

「・・・」

次の瞬間、彼女は、

「貴方は私を知ってますか？」

彼女の思いを壊すには、十分な一言だった。

私はだれ？

セレナからの言葉に、マリアは、世界が止まったように思った。

セレナは真剣にこちらを見ていて、ただまっすぐに見つめてくる。

「私はあなたを知っている、そんな気がします」

そう、始めて見たときから、知っていると思っている自分がいた。

あるはずもない、龍達はなにも言わないが、なにかあると思う。

だってこの人はいつも、私を見て悲しそうに、うれしそうにしているんだから。

「教えてください、あなたも、私を知ってますか？」

壊れそうになる。もうだめだ。

「セレナ……」

涙が流れ出る。間違いない、間違いであつても止められない。

もう自分は、この子のことを妹、セレナとしか見られない。

そう言い、だきしめようとしたとき、その身体を、

セレナに拒絶された。

なぜ？ そう思った瞬間、鮮血が舞った。

すでにママ達から離れた位置で、イグナイトモジュールを使用して戦うマリアとアガートラーム。

瞳の色が違うだけの二人の戦いだが、それを捌くアガートラームが一枚上手だ。なにより、我を失って、暴走状態になりかかっているマリアなど、敵ではない。

【貴方を殺して、セレナを奪ったこの世界を壊す。だいたいゲーデより、元である貴方から負を取り込んだ方が、確実に強くなる】

蛇腹の剣が交差する中、マリアは暴走すれすれでアガートラームを睨む。

「ならなぜセレナを斬ったのツ!? 貴方は私なら、あの子を斬れないはずよツ」

【あれはセレナではないわ。妄言に囚われないで本物。あの子は殺された、この世界に、ママも同じ。いい加減に目を覚ましなさい】

「違う・・・あの子は、あの子はセレナよっ」

【それはそう思いたいだけよっ】

ぶつかり合う中で、アガートラームは内心微笑んでいる。

それに気づかず、マリアは負をまき散らしながら、暴れていた。

「まずいつ、マリアの奴、負の力をまき散らしてるツ。この距離でわかるっていうか、徒歩きついつ」

「なにも考えずに出ましたからねっ、走るしかないですよっ」

「いつものこと」

響とノワールはそう言いながら、龍も焦る。

元々装者ゲーデは装者の負でできているのなら、装者達からも負を取り込むことは可能だろう。

この状況はまずい、マリアは相手に力を貸しながら戦っている。

「仕方ない、響はイグナイトモジュールでいち早くいけっ」

「わっかかりましたっ」

そう言い、人気がないことを確認したとき、ノワールは盗賊の姿になり、響への攻撃を防いだ。

「!?」

【新しいディセンダーですっ!?】

いつの間にか現れたイガリマの鎌を防ぐノワールは、次に海賊にかわり、銃を乱射しながら、イガリマは後ろに下がる。

「イガリマだどっ!? 響に下半身砕かれたんじゃないのかっ!?」

【シウルシヤガナが貴方を分け分けしてくれたから、早く回復したんですよゲーデ】

【だからいっぱい切り刻むよゲーデ】

そう言つて現れたシユルシャガナに、イガリマもうれしそうに頷く。

【私、切り傷から血を直接飲んでみたいですよ、いいですよねゲーデッ】

「いいわけあるかつ」

【私は少しずつ削りたいな・・・えっへへ、楽しみ♪】

うれしそうにシユルシャガナがほっぺを両手で押さえ、赤らめている。イガリマも楽しそうに頬を赤く染めている。

さすがの響もうわつと言ふ顔になり、ノワールはむうと頬をふくります。

「痛いのか、リュウは、ノワールのツ」

「いつからだディセンダーツ」

そして腰に下げていた（よく考えれば置いていかなければいけない）剣を取り出す龍であり、響はイグナイトモジュールをすぐに発動しながら、シンフォギアを纏う。

その姿はすでに、ゲーデシンフォギアだった。

「力加減間違えるな、サポートするぞノワールッ」

「うん、ガンマンツ」

「行きますッ」

【オリジナルとディセンダーは邪魔ですよ】

【私たちはゲーデと楽しみたいだけなのっ】

そしてぶつかり合う、急いでマリアのもとに出向くためにも、

「くっ」

イグナイトモジュールを纏いながらも、剣と剣がぶつかり合う。

【貴方は所詮逃げてるだけよ。あれはセレナじゃない、もしかすればそれを元に作られた別の者よ】

「そんなの」

【わからないわね、だって、なにか確証はあるの?】

「黙れッ」

その大きな仕草に、アガートラームは邪悪に笑う。

【バカなオリジナル】

そう言った途端、刃にまるで龍が使った、負を剣に纏わせて斬りつけるように、刀身に負が集まり、蛇腹の刃が自分を切り刻む。

「がっ」

その場に倒れ、シンフォギアが解かれる。

アガートラームは遠くの林に飛び、マリアはしまったと自分を呪った。

【所詮貴方は弱いだよ】

そう言いながら剣を構え、アガートラムは近づいてくる。身体を動かしたくても動かない。

【だからセレナは死んだ】

そう言いながら、同じ顔が近づいてくる。

【だからマムは死んだ】

そして剣を構えながら、静かに見下ろす。

【セレナかもしれないと思ったときもそう、あなたは結局、怖くて真実に近づこうとしなかった。そうよね、あの子がいなくなってから私は、人を殺しているのだから】

【!?!】

それに言葉を無くす。そう、自分は敵兵を殺した。多くの人の人生を壊した。

【ねえオリジナル、それであれがセレナだったらどうする？ 話す？】

【黙りなさい……】

震える声、考えたくない。セレナがいまの自分、過去の自分を知られることが怖い。マムを救えず、なにもできなかった自分の罪を、知られることが怖い。

【わかったでしょ、あれがセレナであることが不幸の始まりよ】

その言葉に折れそうになる。そうだ、あの子がセレナでなければいい。そうすれば苦しまなくてすむ。

いつの間にか、自分から黒いもやが出ていることに、マリアは気づかない。

「ねえオリジナル、もういいでしょ？ いい加減にしましょ。甘い幻想なんて見ず、現実を見ましよう」

その様子に口をつり上げて笑う。アガートラム。

これでオリジナルを食らえば、ゲーデを食える。そう確証したら、身体が求める。あの男の全てを、自分のモノにできることへ。

「さあ、貴方の心の底の言葉を見せなさい。妹やママを奪った世界に、その姿を象った偽物に、刃を突き向けなさいッ」

そう言われ、手を差しのばされた。

それを手に取れば、いま楽になる。そう思えてしまう。

そう思ったとき、セレナとセレナが顔を見せた。

「ふざけないで」

その瞬間、黒いもやは消えた。

「確かに私が弱いから、あの子が本物かどうか受け入れない、いまだってそうよ」

そうはつきりと睨みながら、だが、彼女から負はもうない。

「だけど、それでもその手を取る理由にはならない。二人のセレナにも、ママのためにもならないわっ」

少なくとも、あのセレナは自分に向かい合おうとした。それを思えば別の怒りが燃え上がる。もしも邪魔されなければ、ちゃんと話し合えていたはずなのだ。

「・・・そう」

そして無表情な顔になり、剣を振り上げた。

「なら、切り刻んで取り込むわね。メインディッシュがあるの、あまり体力を使わせないでね」

マリアはそれでも諦めない。剣をよけ、アガートラムを回収する。敵もそれはわかっているはずだと思いを巡らせているとき、

「!?!」

歌が、聞こえた。

初めて見たとき、懐かしく思った。

初めて対面したとき、緊張した。

改めて話したとき、心からうれしかった。

わからない。私は違う世界の子、だけど、あの人とは仲良く、ううん。

私はあの人と、家族になりたい。

なぜそう思ったの？ 自分でもわからない。

今日は知らない人の墓参りに、一緒に来て欲しいと言われた。名前を聞いたとき、行かなければいけないと思った。

そして、私は覚悟を決めた。変な子と思われてもいい。だから、姉さんと呼んでいいか、私と貴方の関係はどんなものですかと聞こうとした。だから、

私は傷を癒して、すぐに走った。

目の前には振り下ろされようとする剣を前にしても、抗おうとするあの人がいた。

そしてあの人の力が目の前に光る。私の武器は輝きはある。

なのに私は、それを手に取った。

その瞬間、口が勝手に動いた。

「!!？」

白銀の輝きがアガートラムを押しつけ、マリアの前に現れる。

マリアはそれを静かに見つめる。呼吸すら忘れ、それを見た。

その姿は覚えている。炎の中、血まみれの姿が最後だった。

だけど、目の前にいるのは、

「・・・セレナ」

そう呼んだとき、セレナは涙を流しながら、満面の笑みで、
「ただいま、姉さん……」

その言葉を聞いた瞬間、涙があふれ出した。

ああもう間違いない。

「セレナっ」

二人の姉妹はだきしめ合いながら、二人は名前を呼び合う。

「姉さんっ、姉さんっ」

「セレナ、あなたっ」

「うん覚えてるっ。ネフィリムするとき、絶唱を歌ったこと。ママのこと、施設のことっ。

私は、私はディセンダーセレナ。だけど」

アガートラームを解き、それをマリアに渡しながら、優しく微笑む。

「セレナ・カデンツァヴナ・イブ、前アガートラームの聖遺物装者」

それに涙が止まらない。マリアは微笑みながら、セレナをだきしめていた。

「フザケルナアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

突如、黒い闇をはき出しながら、アガートラームが現れ、辺りを睨む。

「くそッ、あと少してオリジナルを取り込めたッ。ここにきて己を思い出すか忌々し

いッ」

「あなた、この子がセレナだって」

「ああ知っていたさっ、だがそれがどうしたっ。私たちは偽物っ、どうでもいいことだッ」

それを聞き、聖遺物のアガートラムを力強く握りしめる。

つまりこれは、

「セレナと知りつつ、もう一人の私だというのに、セレナを斬ったのね……」

そしてシンフォギアを纏う、だが不思議と軽い気がする。いつもより、心が広い気がする。

その隣でセレナも、デイセンダーの力を纏う。

「姉さん、つもる話はあと、いまは」

「ええ、ともに戦いましょう」

セレナにそう言うが、それを笑うアガートラム。

「忘れたのオリジナルっ、もしその子がセレナなら、その子がデイセンダーになった理由をッ」

「……」

そうだ。この子がデイセンダーになった理由、憶測の中にあるのは、龍を殺すと言う使命だ。それがいま確証に近くなった。

だが、

「もしそうだとしたら、また世界を敵に回して、龍を助けないといけないわね」

そう微笑みながら、セレナが生きるきっかけを作った龍を思い出し、ほんと嫌になると思いつつ、叫ぶ。

「イグナイトモジュールツ、抜剣ツ」

その瞬間、美しい黒い輝きが、マリアから吹き出た。

【それはっ!?!】

黒いドラゴンは周りを飛び、マリアへと纏われる。

黒い翼はマントのように、紫の炎をまき散らしながら、美しく白銀と黒曜石が鎧のようにマリアを包む。

その剣もまた、白銀の黒曜石でできた剣へとかわり、美しく髪をなびかせて現れた。

【バカなっ、貴方はゲーデのことを】

「妹が世話になってるのよ、それなりには信頼してるわ」

「いくよ、姉さんっ」

「ええっ」

騎士の姿のセレナがアガートラムを押し込み、その穴を縫うように、剣が舞う。

歌が響く、二人の歌、同調して、身体の早さは二人とも早くなる。

「そんなつ、貴方はシンフォギアではないのにつ、なぜ力が増すつ!?!」

驚愕するアガートラームは、銀の布を取り出し、逃げだそうとするが、それをセレナが矢で貫き、アガートラームは睨む。

その瞬間を見逃さない。

マリアの刀身が伸び、双頭龍のように、あまりの早さで二本あるように錯覚する。

黒と白のロンドが舞い上がり、アガートラームを砕いた。

【ぐっ】

「これでおしまいだよ」

【!?!】

剣が光へとかわり、セレナは静かに告げる。セレナだけの技、世界を輝きへと染める剣撃であった。

『レイディアント』

振り下ろされた輝きは、アガートラームを包み込む。

その光を見て、イガリマとシユルシャガナはすぐに撤退し、彼らもまた走る。

「ばっかものツ!!」

弦十郎に怒られた飛び出したもの達。

そしてセレナの方は、説教後話し合いが始まった。

彼女は、セレナ・カデンツァヴナ・イブとしての記憶を持っていた。

だから、彼女はマリアに言う。

「ただいま……」

それにマリアは静かにだきしめながら、

「お帰りなさい、セレナ……」

こうして姉妹は再会し、その様子を一人を除き、優しく見守った。

真夜中の港、龍は星空を見ていた。

「どうしていないの?」

セレナが後ろから話しかけながら現れ、座り込む龍を見つめる。

「……気に入らないからだ」

「私の、世界樹がしたこと?」

まだわからないが、やはり原因があるとすれば龍、ゲーデだろうと思う。

セレナを自分の防護策にするため、家族から引き離れた。それが気に入らない。

「私は、少し感謝かな? 絶唱って、使うと肉体に負荷がかかるから、死んでたと思うよ」

「それでもだよ」

「そう」

隣に座り込むセレナに、龍はため息をつく。

「姉さんと再会したのに、いいのか？」

「いまはいつでもできるし、今日は思いっきり甘える気だよ。ママのことや、私がいなくなつた話も、まだ少ししないといけないからね・・・」

育ての親のような人がもういない。セレナは顔を曇らせた。

それ以上はなにも言わず、龍は側にいるだけだった。それだけでうれしいセレナ。

「ねえ龍」

昔の記憶を取り戻したいま、セレナは龍に近づく。

「なん」

そのとき、やわらかいものが、唇にふれた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ・・・・・・・・」

なにが起きたか分からず、龍は黙り込む。目の前には頬を赤く染めながら、優しく見つめてくるセレナがいた。

「かわらないから、ディセクターセレナも、セレナ・カデンツァヴァナ・イブでも。この想いはかわらないからね」

そうほほえみ、肩に頭を乗せてうれしそうにするセレナ。

龍はさすがに面食らいながら、なにいつても自爆かと思ひ、星空を見つめるのであつた・・・

番外編・嵐の前の静けさ

『とういわけで』

暗闇の中、イチイバルは叫んだ。

【つて、番外編で一番先はなんで私らなんだッ!? 普通は出ないだろッ】

【落ち着けイチイバル】

天羽々斬がそう言いながら、刃を整備していた。

【そうですよイチイバル、出られるんなら番外編でも出たいものですよ】

【そうだねイガリマ】

片方は盗撮写真をプリントアウトし、もう片方は切り刻む。交互に繰り返す二人に、イチイバルは叫ぶ。

【つていうかお前らはなにしてるっ!?!】

【ゲーデを切り刻む練習ですっ】

【今度は私の番だよイガリマ】

【ですっ】

そう言いながら、刃物を使い、頬を赤く染めながら龍の写真を切り刻む二人の少女。それについてはなにも言わずにおいて、イチイバルは天羽々斬を見る。

「お前もお前でなにしてるんだよ」

「むろん、いつでもゲーデと死合えるよう、刃を磨いているんだよ。ふふっ」
「こちらもちちらで、その瞬間を愛でるように、刃を優しく撫でている。」

ゲーデが大元の自分達だが、オリジナルのデータもあるからわかる以上、異常な出来事なのはわかる。だが、自分もゲーデである。

「まあいいや、私はゲーデ捕まえたときように、鎖と首輪のストック増やしておくか」
その行為もまた、異常だと気づかず、首輪と鎖を恋する乙女のように集めて楽しむも
の達。今度は牢屋などの準備もしなければと、楽しそうにその日を待つのであった。

『色々な後始末』

天羽奏、ディセンダーミラ、異世界の来訪者達。色々な出来事に雑用に走る人々達を見ながらも、響は少しだけ居心地が悪い顔になる。

「なにかお手伝いしたほうが」

「お前とマリアはゲーデでのイグナイトモジュールができるんだ。この中でセレナ、ノワールに続く最大戦力だ。むしろ休め」

「そうだよ響」

未来がそう言い、ううつとわかっているが、忙しそうな人達を見ながら、ユーリはリ
ンゴをかじる。

「まあどつしり構えてたり、ハロルド達が呼びに来たら指示に従えばいいんだよヒビキ
先生」

「私、先生つてがらじやないんですけど」

「そういえば寢室だけど、異世界組は部屋数とか多いから、すでにあるカノンノ達や俺の
とこで寝泊まり決定だ」

「クリスちゃんはだれ泊めるんだろう?」

「クリスは自宅だから外してやれよ・・・」

まあ、ルルとクイツキーは寝泊まりそうだなと思いつつながら、響を見ながら未来が淹れ
たお茶を飲むのであった。

『姉妹』

セレナの自室前、カノンノの部屋に遊び、いや、妹に会いに来たマリア。

アガートラムを纏った際、セレナは記憶を取り戻した。彼女はもう、自分の妹なの
だから、おかしくないのだ。

もう迷わない。セレナと居られなかった時間を埋めるため、できる限り一緒にいると心に決めたのだ。扉をノックするマリア。

「セレナ、私よ」

『あつ、マリア姉さんっ。手が空いてないけど、それでもいいなら入っていいよ』
「わかったわ」

内心スキップしそうなほどうれしい。セレナと仲良くするため、扉を開けた。

「いらっしやい姉さん」

「・・・」

セレナが翼のポスターを壁に貼っているのを見て、少しだけ黙り込む。あれは確か新作についてる限定品のものだ。

よくみると音楽関係は翼が多い。マリアは黙り込み、首を傾げるセレナ。

「どうしたのマリア姉さん？」

「なんでもないわセレナ」

精一杯内心を悟られないようにするマリア。

一方。

「さてと、逃げるか」

隣の部屋から希望を失った、嫉妬などの負を感じ取った龍は、飛び火しないうちに逃

走を開始したのであった。

『翼と奏』

「しっかし、死んだ記憶あるって変な話だよな」

「奏は少しお気楽すぎだよ」

「お気楽って、こんななんになっても、かわらないのもどうかと思うけどな」

色々検査したところ、デイセンサーとゲーデと言うより、精霊やホムンクルスと言ったようなものに近いらしい。

奏は成長もするし、普通の人間とかわらない身体。周りの人達も気にしていないので、天羽奏として、また生きることにした。

「けど、もう奏と一緒に歌えないよね・・・」

悲しそうに呟く翼。それに奏もそうだなと呟く。

「けど、よく考えたらルミナシアやグラニデがあるんだ。そっちでまた歌おうぜ」

そう言って、だきついてくる奏。翼は少し真っ赤になるが、うんと頷く。

ちなみに龍とユーリが、少し甘えている翼のこと気遣ってか、通せんぼしていることに、奏はあとで感謝したという。

「よかったな奏、翼っ」

「司令、カメラで見るのもどうかと思いますよ……」
緒川はそう言い、苦笑するのであった。

『異世界人の食事会』

「で、なんで私の部屋なんだ」

クリスの文句を聞きながら、今日の料理当番の龍が聞きたいと顔になる。

アルヴィンとジュードは、司令室の方で手伝いなどしているため、事実男性は自分だけという事態なのも気になる。

ノワールはクイツキーとルル、エルとともに楽しくし絵本を読んだりしていた。

「けどまあ、お前って料理できたんだな」

「アドリビトムは当番制だからね」

「あつ、うちのアドリビトムも当番制なんだよ」

イヤハートとカノンノ、双子のような二人はそう言う中で、龍はあーといいながら、料理をテーブルに運ぶ。さすがに『マリア』も手伝う。なぜいるんだろう？

(……………)

そしてある、クイツキーとルルの寝床。クリスは無自覚で、二匹を優しく撫でたり、膝に乗せたりしている。

この先に待つ未来を考え、早いうちに手を打たなければ、夕焼けに照らされた部屋で寂しくしてるクリスを幻視しながら、料理を運んだ。

『異世界人の料理会・ルミナシア』

「向こうは大丈夫かしら」

そう言いながら揚げ物を食べるアンジユ。アドリビトムメンバー全員が料理を食べながら、異世界のことを考える。

「向こうにはユーリ、フレン、リタ、ハロルドもいるんだ。心配ないさ」

「ワイール、クイツキーもいるよ」

そう言う中でご飯を沢山食べる。カノンノがいなくなり、仕事してないと心配で心が避けそうな育て親のためだ。

「そうね、私たちはどっしり待っていきましょう。きっと彼らなら、道を切り開くわ」
そして全員が真実決意をして、時間が過ぎる。

そして、入浴時間。女性陣は戦慄する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・太った・・・・・・・・」

「なんでお前の料理、ヘルシーよりなんだ？ うまいから別にいいけどな」
(ルミナシアで俺が調整しないと、毎晩毎晩ダイエツトによる負の声聞くからだなんて、絶対に言えない)

「ふふふふふふ．．．みなさんにはもつといっぱい食べてもらわないとですね」

『対策』

エルフナインが休憩中に頼むことにした。

「俺達が帰ったら、寂しがるクリスのために、これつけて住んでくれ」

そういつて猫みみをエルフナインに装備させる。恥ずかしがるうえ、わけがわからな
いエルフナイン。可愛いと思い、なでくりまわしてやった。

『対策・後』

結局断られたので、猫みみ持ってリタのもとへ。

「リタ、これやる」

『ファイヤーボール』

『響と龍』

色々話し合った。父親と家族の和解など聞きながら、龍はそうかと言う。

考え方は簡単には変わらないが、いい人と響は認識して、龍から響と呼ばれるようになったことに、うれしいと思う。

話をしていたら、家族と話したくなり、いま話している。

まだ国家機密のようなもので、話せないことが多いが、龍を紹介したい。だから、

『それじゃ響、身体、大事にしなさい』

「うんっ、それじゃまたっ。あっ、そうだ」

そして、

「今度男の人紹介するからっ、楽しみに待っててねっ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・えっ』

そう言つて電話を切り、よしと意気込み、みんなのもとに出向く響。

「!? 響がなにかやらかした気がするっ」

「どうした小日向さん? まあ、俺もそう思うが・・・」

戦慄する未来と龍であつた。

嵐は動き出す

何事もない日々というのは憂鬱だ。

龍はそう思いながら、いまの日々を考える。

セレナはセレナ・カデンツァ・ヴナ・イブという、この世界の少女。

アガートラームを纏い、記憶を取り戻した少女は、姉と日々を過ごす。

だが、本当の問題はまだ残っている。

なぜ彼女はルミナシアのディセンダーとして生きており、そしていまこの世界で起きている異変とはいったいなんなのか？

わからない問いかけに、苛々しながらも、一人雲を見る。

「あれ？」

響は本部で右往左往しているノワールを見つけ、イヤハートも見つける。手を握りあつて、この世界の衣類を着ている少女達。本部であるためか、腰には愛用の武器を下げている。

「二人とも〜」

「ヒビキ」

「リュウウいない・・・」

ノワールの一言に、響はああと納得する。

「龍さんってよく一人になるよね、一人はよくないよ」

「うん、私もそう思っつて、カノンノと一緒に探してるの。他の人も探してる」

「そうなんだ。なら私も探すよっ」

人を捜す中で、ミラは部屋で静かにしていた。

鍵はかけられていないが、静かにしていた。

そんな中、エルはルルと共に、ミラの側にいる。

「・・・・・・・・」

なにも言わずに側にいる。エルは何か言いたげに、けど、なにも言わずに側にいる。いや、ではなかった。むしろ、その方がゲーデを考えずにすんでいる自分に驚いていた。

平和な時を過ごす中、ミラは少しだけ小さく、

「このまま・・・」

静かに、祈るように、

「このままならいいのに……」
そう確かに呟いた。

「なにもない、嵐の前に静けさか」

弦十郎はコーヒーを飲みながら、緒川達、オペレーターとも共にいる。

ジュースのエルフナインは、リタ達と共に飲み物を飲みながら、ため息をつく。

「やっぱり、ヒビキ達のイグナイトモジュールの進化は、リユウのゲーデの影響で、聖遺物の拒否反応が無ければ、無尽蔵に強化された結果がああ姿ね」

「ですが、やはり龍さんへの信頼関係が高くなければいけないのですが、その基準はわからないままです……」

エルフナインがへこむ中、それをリタがぼんぼんと頭を優しく叩く。

「人の信頼関係なんて、数字で表せるものじゃないの。マリアだって、セレナのことでもリユウのことでもよく思っていないのに、二回目も成功してたじゃない」

この日々の中、成功者達だけで二回目も成功させていた。そのうえ、奏もディセンドラーのような力を使える。

「敵に対して有効なのが五つの力、ディセンダー3人に、イグナイトモジュール二人か……」

そんな中、難しい顔をする弦十郎に、緒川は疑問を投げかけた。

「どうしたんですか？」

「げせん」

そう一言、切り捨てた。

「まるでシナリオのように進んでいる」

「それは・・・確かにそうね」

リタも納得して考え込む。

「話のおかしなところは、まずはセレナくんや龍くんという存在から、その後の展開だな。向こうからすればすでにガングニールは倒されたうえ、敵になり、アガートラムは倒されたんだ」

だというのに、自分達は敵の存在が全く分からない。

わかっているのは心に関するなにかができて、それによるゲーデ制作とジルディアの民もどき、はてはディセンダーを生み出している。

そしてそれは終わっていないうえ、世界樹の無い世界も侵攻されている。

負の感情を集められ、敵は全ての負を集めるため、龍と思われる、原初の負を手に入れるのが目的。

「やはり現段階では原初の負は龍くんを指しているとして、その先はなんだ？」

「負で起きることは、疫病の蔓延や、大地の衰退化。人も影響を受けて争いが耐えなくなるわ」

それが目的？と言われればわからない。

「なにより龍くんを取り込んで、本当にどんなことが起きる？ 確かに装者達はあり得ないほど強くなっているし、本人も強いが」

「おかしいわよね・・・」

考え込む中、緒川はまだ考えることがある。

「ディセンダーといえば、ミラさんですね。滅ぼそうとする辺り、彼女の考え方は彼捕獲を考える、敵側の意志と逆だと思われまます」

全員が頭を痛める中、弦十郎は乱暴に髪をかいた。

「・・・」

変化とは、望む望まないと関わらず起きる。

龍はそう思いながら、ははつと苦笑した。

『あーだりい、眠い。もうやだ』

『彼奴何様だよ、客だからってえらそうに』

『なんであんなブスがモテモテなのよ』

絶えず聞こえる悲鳴じみた、身勝手な声の中、

【待ってるです】

【来なきや、色々なもの切り刻むよ】

そう聞こえたのだった。

「・・・」

カノンノは龍を探す間、おやつの時間になり、おやつを作っていた。

イヤハート達は手を止めたカノンノを見て、首を傾げる。

「どうしたのカノンノ？」

「・・・少し、やっぱり弦十郎さん達に頼んで、彼を捜してもらおうっ」

なにか嫌な予感がする。

彼らしく、またなにかする。

確信めいたそれに、カノンノは焦り始めた。

とある海辺近く、声の気配を頼りに、龍は剣を下げて現れる。

目の前にはすでにイグナイトモジュールの姿の、イガリマとシユルシャガナが待っていた。

無数の切り刻まれた写真が周りにあり、うれしそうに刃物で切っている。

「・・・いつの間」

【ゲーデっ!! 来てくれたですっ】

【ほんと・・・一人で来てくれて、うれしい】

写真の龍に刃物を突き刺して、立ち上がる二人は、頬を紅く染めて、龍を見る。

【もう我慢できないですっ、ゲーデっ。切り刻むですっ】

【大丈夫、優しく殺るから・・・】

構える二人を見ながら、ゲーデの力を僅かに使う。

(・・・吸われてるな)

その様子に、ゲーデは使えないのを確認して、彼は剣を構えた。

剣があれば負けない。彼はそう決めて戦い始める。

「つたく、あの問題児はっ」

弦十郎は頭を痛め、姿を消した龍を徹底的に探す。

「カメラにも痕跡らしきものを残していませんっ」

「まずいわね、そういう風に姿消すつてことは、厄介ごとに突き進んだ証拠よ」

ハロルドの言葉に、全員が龍を探すために集まり、アルヴィンはアドリビトムメン

バーに尋ねた。

「おたくらのところの奴、そんなに問題児なの？」

「彼だけじゃなく、メンバーの誰かがなにも言わずに姿を消すのは、十中八九問題を一人で解決しようとするってことですよ」

フレンの言葉に、お前が言うなとアドリビトムのメンバーのほとんどが睨む。

ジュード達は似たもの同士なのかと苦笑しながらも、すぐに切り替える。

「ということは彼一人でいま戦っている可能性は高いッ。装者達並び、デイセンサー達のサポート。君達は龍さん搜索。他の者は武器のたぐいのことを考え、敵がここを攻めたときのために待機だっ。そのときは頼むぞ」

「了解」

弦十郎は全員に指示を飛ばし、ユーリの言葉を聞き、全員が動き出す。翼はバイクに乗り動き、クリス達はサポートを受けて、ヘリや車に乗る。

「セレナ、彼をお願いね」

「任せてカノンノッ」

そう言い、セレナはマリアと別れ、行動に出た。

魔術の爆発や歌の旋律が辺りを包む空間。人気はなく、なぜと思うが、敵がなにかし

ているのか誰も来ない。

おかげで存分に戦える。そう思いながら、風を剣に集め、サイクロンもどきを放ちながら、イガリマの鎌を受け止める。

【おとなしく切り刻まれてくださいっ、戦う気はないんですっ】

【楽しいことしよゲーデ】

「楽しくない楽しくないっ」

龍の叫びなど無視して、楽しそうに戦う二人。

【ずっと貴方を想っていたですっ、貴方の腕を切りたい、貴方の血が舞い上がるのを見たい、ずっとずっとっ】

【もう我慢できないですっ、もう我慢なんかしたくないんですっ】

「なんだこの状況ッ『紅蓮剣』ッ」

炎で牽制するが、無視して来る。やはり人でないためか、瞬きなどの一瞬の隙はないのに舌打ちする。

【あの方の作戦なんて知らないですっ、私たちが貴方を取り込めば世界の負は手に入りますっ】

「!？」

イガリマは何か口を滑らしている。この二人に、内心苦笑する。

（所詮はゲーデのまがい物、欲望以外考え無しか、なら）

情報を引き出す。そのために戦闘を防御に移行して剣を振るう。

「世界の負？ なんのことだっ!？」

【言葉通りですつ、全ての可能性、時間軸、別軸、ありとあらゆる可能性つ。有する世界に無き世界、未来も過去も現代も、全ての負を一つの世界につなげるツ。その力を一つの形にするんですよゲーデっ】

「・・・」

いまなんて言ったという顔になりながら、イガリマは狂ったように口元をつり上げていた。

【そのためには、負の原初が必要なんですつ、けど関係ない、私は貴方が欲しいですつ。殺して、シウルシヤガナと仲良く分けるですつ】

【私もだよイガリマつ、一緒つ、一緒に一生愛するよゲーデ】

「色々と間違ってるツ」

二人の攻撃に、二人だけがテンションを上げていく。

【男の人にはわからないですよつ、私たちの想いつ。貴方を手に入れて世界を壊すですつ、ずっと一緒ですよゲーデ】

【もう放さないつ、あなたは私たちの・・・世界を一緒に壊そうゲーデ】

【もう絶対に放さない、ずっと切り刻んで愛してあげる】

そう微笑みながら、これを喜ぶほど龍はとち狂っていない。

すぐに刃と刃がぶつかり合う。剣があれば問題ないが、気を抜けばやられると思いがらも、彼はイガリマ達に叫ぶ。

「つていうか、あの方つて誰だつ。そもそも何者だつ」

【興味ないですつ】

【いまは楽しもうゲーデつ】

そんなやりとりの中、刃が空を切った。

「……なんの騒ぎ？」

ミラはエルと共に、慌ただしい司令室へと来た。ジュード達は始めどうするか考えた
が、ちゃんと答えた。

ミラは気にもとめず、モニターに映る装者達を見る。

「……なにも言わないんですね」

「……もう私はなんなのかわからないからね」

そう呟きながら、それでもと付け加える。

「私の中で、彼を殺せと囁く。なにかがある……」

「でも、やらないんですよね？」

「ええ……」

エルの手を握りしめ、そのときだけミラは微笑む。

エルも少しだけうれしくなり、少しきこちないが微笑む。

「けど、どうしてここまで私に、ゲーデを討たせたかったのかしら？」

「それはわかりません、なにか思い当たりますか？」

ジュードの言葉に、ミラは首を振る。

「私を知るゲーデは、負の固まり。人の心を荒み、大地を衰弱させ、病魔を広げる害悪としかないわ」

「……」

ジュードはその言葉を聞きながら、少し考える。

その様子に首を傾げるミラ。何かおかしいところでもあるのだろうかと思った。

「いえ、僕の世界。オリジンは、負もまた人の心。行き過ぎた人のエゴという見ていて、浄化するのではなく、悪い部分を押しさえ込むという選択をしました」

「負もまた人の心……」

ミラは信じられない顔をするが、装者達も、探索中に、彼らの話を聞いている。

「確かにな、人の心。怒りも憎しみも、悲しみ。どれもこれも結局は、我々人間が生み出

したものだ」

弦十郎は頷き、アルヴィンも言う。

「俺達の世界、オリジンはある試練を人間に与えた。どんな内容かはいまは割愛させてもらうが、その試練のうち勝った男がいてな。オリジンは人間、俺達の可能性を信じてくれたんだ」

「負に負けず、世界をよりよい方へと作る。精霊オリジンはそう信じてくれた。僕らもまた、彼のために、彼が守った世界を守ると決意しています」

「彼？」

ミラはその言葉に、エルは強く手を握る。

「エルのアイボーだよっ」

そう言われ、ミラは戸惑う。

「負は害悪よ、あるだけで世界によくもないもの。オリジンがどう思おうとかえることはないわ」

「それはわかってます、それでもやるしかないんです」

まっすぐな瞳に、ミラは見られず顔を背ける。

だが、

「違うよ」

カノンノだけはそう言う。

アドリビトムメンバーだけが、なにか言いたげにしている。

「負が害悪って言うのなら、その元である人間なんてもんも、害悪だ」

ユーリはそう言い、フレンも頷く。

ミラはそれに首を振る。

「人間は負を生み出すだけの人だけじゃないわ、なにより人に」

「人間の方が負よりたちが悪い、うちのゲーデの言い分だぜ」

ユーリはミラの言葉を遮るように言う。そのまま続ける。

「彼奴はいつも言ってるぜ。どんな人間にも、サボりたい、彼奴が憎い、羨ましいって感情がある。人を見下す奴もいるし、他人事のように可哀想って言葉で見下す奴もいる。たちの悪いのは、よくも知りもせずに、相手が悪いって言う第三者らしいぜ」

その言葉に響の心臓が飛び上がる。

それはもしかしたら自分の件じゃないかと、全てのきっかけ、彼が世界を、人であることを嫌った理由。

「彼奴は前に言っていたぜ、人間じゃなくってよかったってな。人間の悪いところは、他人を理解できないこと、自分のしていることが悪と自覚しないことだよ」

「・・・」

ミラは黙り込みながら聞く。だからとフレンは付け加える。

「だから彼は願ったんだ、そんな人間なんかになりたくない、俺はゲーデだって、彼は受け入れて生きている」

人であることを嫌い、化け物として生きる。受け入れたのではなく、選んだが正しいかと、みんなが思い、響の心が締め付けられた。

そうなるきつかけは、自分の事件だから。

唯一知る奏はそれを思い、黙り込む。

「なら」

その沈黙を破ったのは、ミラだった。

「なんでゲーデは戦うの？」

その言葉に、ユーリ達アドリビトムは、

戦いの中、向こうはどうやら永続的にイグナイトモジュールが使える。もう夜遅い、勘がいいアドリビトムのチームのことだから、もう動いているだろうと思いつながら、

「仕方ないッ」

少し賭に出る。剣を空へと投げ、無防備になる。

二人はそれを見ても、すぐに動かない。彼にはゲーデと言う奥の手がある以上、無防

備でも近づけない。

だからこそ、格闘技は放てた。

『戦迅狼破ッ』

イガリマに狼を模した闘気を放ち、シウルシャガナへとぶつける。

彼の戦いは基本剣であり、剣を軸に、様々な姑息な手を使うのがスタイル。

相手を騙すためなら、このような手も使う。

剣をキャッチして、少しびっくりしたイガリマ達を見る。

二人とも構えたを見ながら、刀身を握る。

「ほらよ」

手のひらを切り、その鮮血を目つぶしのようにまいた。

二人とも驚きながら、その甘い血に、一瞬警戒を解いたのを見逃さない。

(欲望の忠実なものも考え物だな)

ゲーデの血に酔った瞬間、彼は畳みかける。

剣の秘奥義。ありとあらゆる角度からの同時斬撃。

『剣ノ世界』

ただ同時に、連続で斬り続けるだけの技だが、それはほぼ同時であり、13回もあれば秘奥義と言っているだろう。それがアドリブトムメンバーの意見であった。

「だつ、はつ」

これをするときさすがに疲れるため、一気に空気を吸う龍。

「なんとかなった」

そう言い、斬ったイガリマ達を見る。

悲鳴する前に口もとを壊したからか、少しずつ身体が砂に、シユルシヤガナからは気配はない。

(シユルシヤガナは倒したか)

そう思いながら、イガリマを見る。彼女からはまだ意識、気配はある。

彼女たちの鉋物の身体、さすがにマリア達が見たら、少し睨まれそうだなと思うが、苦笑する龍。

「嫌われ者が気にすることじゃないか」

まだイガリマには警戒しながら、それに近づく。

逃げられないように、気を付けながら、イガリマに剣を向けながら、その胸辺りに手を置く。

「ドクメント見せてもらうぜ、ついでに負としてどうなってるのかも確認させてもらう……」

切歌がいたら殺されそうだなと思いつつ、ドクメントと負、彼女達の肉体を形成す

る何かを見ようとした。

「……はあ？」

それにひどく驚いた。

「お前ら、ゲーデじゃないっ!？」

彼女たちには僅かに負はある。だが、根本は違う。

その根本に触れて、龍は驚き、意識に隙ができた。

ザシユ、という音が鳴り、龍はまた驚く。

「……ぐふっ」

「……あつは♪ おいしいですよ、ゲーデっ♪」

彼女の腹から腕が生え、刃の腕が腹を貫く。

イガリマは笑い、その髪が伸びた。オリジナルと同じ金髪は、ツインテールへとかわ

り、身体も変化して、押し倒された。

それと共に、両手両足にも鎌の刃で拘束され、剣を握りたくても、馬乗りで顔にかかっ

た吐血の血を指で取り、なめるイガリマ。いな、

【おいしいです、やはりゲーデの負はいいもの】

シユルシャガナとイガリマ。両方の気配と力を感じ取りながら、二人が合わさった存

在は、ぎゅと龍をだきしめる。血をそれでゆっくりと搾り取りながら。

顔を片腕で押さえ、すりすりとして身体へほおずりする。それだけで切り傷ができる龍は、たまったものではない。

「始めから私たちはこれしていればよかったです、私たちはザババ。ゲーデの妻ですっ
♪」

そう言つて、吐血して流れ、頬を伝う血をなめた。おいしそうにほほえみ、頬を紅くしてゲーデを見る。

「ゲーデはこれから私たちのものです、もう決定です。逃がさない、ゲーデの血は一滴も残さず、全部私たちの♪♪」

その言葉の通りか、鎌の刃から血が吸われている。すぐにゲーデで硬化させたが、それでも力は吸われている。だが血よりかはマシかと、頭を動かすが、腹の刃が刺さったままなのがまずい。全身に力を入れられない。

本当に流れる血も自分達のものと言わんばかりに、ザババは吐血して流れる血を手で受け止めながら飲んでいる。

いや、触れているだけで血を通して、負を取り込んでいた。

「……口の中もいっぱいあるです」

そう言つて、顔を固定させて、近づけてくる。

(待てッ、それは別の意味で待てッ)

そう思うが、なにもできず、口と口が触れそうになる。
だが、

「私達の姿で妙なことしないで」「デスっ」

そう言って、斬撃が飛び、ザババはすぐによけ、距離を取る。

その瞬間、すぐに傷口を負で覆い止血、すぐに肉体を活性化させて回復を始める。こ
ういうとき、人間じゃなくて助かるとつくづく思う。

「暁、月読か」

「なにしてるんデスっ、人の偽物でいちゃいちゃしないでくださいデスっ」

「いまのはセレナに報告する」

二人はそう言うが、果たして俺が悪いのかと問いかけたいが、正直吸われた血も負も
多く、それでも立ち上がる。

「とりあえず助かったが離れろ、お前らじゃ、戦えば俺は死ぬから」

そう言って立ち上がる。少し咳をして血を出す、その様子に、複雑そうに見る二人。
なんだろうと思いつながら、立ち上がるザババを見ながら、二人は、

「死にたくないんデスか？」

切歌は投げやりに聞いてくる。なにかあったかと思いつながら、

「ルミナシアのギルドマスターに、帰るって約束したからな。死にたくても死ねないん

だ俺は」

「・・・」

彼は戦う、始めはもう終わりを求めていた。

聞きたくなかった。もう聞きたくないと彼は言った。

もう、

あの子のような泣き声は聞きたくない。

だから滅びたい、死にたく、倒されたい。

それが、ゲーデの望みだった。

そう言い、世界を愚かで醜いと切り捨てた男は、前に出て戦い。倒されることを心のどこかで望んでいた。

だがいまは違う。死ねない理由ができ、それでも戦う理由がある。

二人はそれを聞いて複雑そうにしていた。

「なんで一人で戦うんデス？」

「別に、死ななきやいいだろ」

「死にかけてたのに」

「ああ助かった、悪いサンキュー」

そんな軽口で、まだ戦う気の龍。その傷口は硬化されても痛々しい。二人はそれを見る。

「痛くないの？」

「・・・」

それにしばらく黙り込み。

「・・・あの叫びを聞くよりかはマシだ」

二人は分からない返事をされた。だが、その顔はユウリ達、アドリビトムにも秘密の事件。世界を見切った事件に関係するのだろうと察する二人。

アドリビトムは深く聞かない。ただ一つ、本当に人が嫌いになるきっかけになったのだろうかと思っていると伝えられている。

それがどんな事件かは知らないし、だからと言って、ママ、彼女たちの大切な人が救った世界が、滅んでいいと言いのける彼を許すきっかけにはならない。

（・・・だけど）

静かにザババは構える。両手に鎌を、ツインテールの丸鋸を構える。まるで自分達が合わさったように見えるが、二人はお互いの手を取り、ブローチに触れる。

「待て待て、俺は死ねないんだだけど」

「黙るデス」

「けが人は大人しくしてて、私たちが戦う」

その言葉に龍は気づく。気づいて、ため息を吐き、座り込む。

「・・・わかったよ」

彼女たちから、負は感じなかった。

「イグナイトモジュール・抜剣ッ」

二頭の飛竜が舞い上がり、彼女達にザババは驚愕した。

【なっ】

二人は左右合わせて、肩の鎧が強化され、ドラゴンの頭部のようなもの。切歌は黒と緑の鎧に、ドラゴンが鎌の形になったような武器を握りしめ、左腰に緑と黒の大きなリボンをつけている。

反対に調は切歌とは別の肩の鎧が強化され、ピンクと黒のリボン。ツインツールは竜の頭部のようなもので、髪が守られている。

「進化完了デスっ」

「ここで倒すよ切ちゃん」

「おうデスっ」

【ゲーデは渡さないッ】

「いらない(デスっ)」

そして二人の歌がぶつかり合う。

龍はなにか二人にあつたんだらうなと思いつながら、剣を握る。

「はあ、ユーリ辺りか。過去バナしたところで、いい奴にならないと思うんだけどな俺は・・・」

そう思いながらも、ニヤリと笑い、剣を振るい、戦う。

歌の邪魔にならないが、二人が睨んでくる。

ゲーデの出現に、飛び跳ねるように斬りかかるザババに対して、やれやれと肩をすくめた。

「それじゃ、ファイナーレ頼む」

【!!?】

瞬間、切歌の肩、ドラゴンから無数の鎖が放たれる。調からも放たれて、ザババを拘束した。

瞬間、巨大化した鎌に乗る切歌。それに鎖で繋がる調は車輪のようなもので、迫り来る。

黒い刃はお互いの色を混ぜ合わせて、ザババへと迫る。

【くっ】

今度こそ碎け散るザババの気配に、やっと龍は一息ついて、海へと吐血した。

「大人しくしてつて言った『デスっ』」

二人から怒られる中、硬化のおかげで、致命傷はなんとか回復する。近くに負を吸収する人もいないから、その力を自然治癒に一気に回す。

「あゝこういうとき、人間じゃなくつてよかつた」

「なに言つてるんデスカもうっ」

「これもセレナに言わなきや」

「やめて、カノンノやセレナ、キレると大人しくするのに時間かかる」

彼女たちもシンフォギアを解き、仲間達に連絡。他の人達も辺りで色々していた。

ケガの方はこちらでどうにかできるで、いまは砂浜に座り込む。

「とりあえず、私達の偽物でいちやいちやしていたこと謝るデスっ」

「すいません、刃突き刺されることつていちやいちやと分類されるんですか?」

抗議したいのだがなと思いつながら、いつの間にかの反応に、ユウリ達、お節介に負を送る。まあ届かないが、

(・・・響や奏には知られてなきやいいが)

唯一知り得るであろうもの達に、難しい顔をする。

奏は誰かに言いそうだし、響は誰にも言わずに抱え込む。

その場合、言わなきゃいけないが、言いたくないのが龍である。

そう思い立ちあがった瞬間、まだ文句言い足りない二人をどうするか、

「!?」

考えた瞬間、押した。

「!?!」

突然突き放されたことに驚くと共に、龍の背中が誰かに切られた。

「!?!」

調達はすぐにシンフォギアを紡ごうとしたが、その前にそれは切歌へと迫り、拳を溝にたたき込む。

調は焦り、すぐに斬りかかるが、それは切歌を持って飛んだ。周りに蒼ノ一閃をまき散らしながら、

「させないよっ」

調がすぐに盾のように丸鋸を広げ防ぐ。

先ほどの技で誰か分かる。気絶した切歌を抱え、うつすらと笑い、青い布を取り出して叫ぶ。

【もらっていくぞ】

「切ちゃんっ」

調は叫んだが、その前に消える天羽々斬。まさかと思いつながら、呆然となる。

『調くんっ』

弦十郎からの通信が届き、調はすぐに叫ぶ。

「みんな、切ちゃんが、切ちゃんがッ」

『落ち着くんだッ』

落ち着けと言った翼だが、一番腹が立つのは翼である。

『翼も落ち着け、お前いま自分の姿した奴が不意打ちにいらだつてる時じゃねえぞ』

『・・・ああそうだな』

それでも怒気が込められており、全員が急いで現場に急ぐ。

だがアドリビトムは違った。

『待って、リュウの怒り声とか聞こえないっ、リュウは!?!』

「っ!?!」

そうだったと調は自分を恨んだ。

彼は自分達をかばい、背中を切られた。それを言いながら振り返るが、

「・・・えっ」

彼の姿はなく、血だけは舞っているが少量である。近くになにか、ステンドガラスの

ような、青色のガラスの破片がある。

それを手に取ると、そこに亀裂のように、『待つ』という言葉が刻まれている。
「……まさか」

彼はいま気配を消して疾駆する。すぐに顔を上げた際、切歌はさらわれたあと。

目の前には青いガラスの文面。

『ここに一人で来いゲーデ、待っているぞ』

すぐに手に取り、動き出す。まずは負を察しするディセクターから逃れ、指定された場所まで走る。

剣がある、あとは維持と気合いでカバー

「無理ゲー」

そう苦笑しながら、それでも彼は迷いなく動いて走り出した。

闇と狂気と防人

気が付いたら、ドームのようなところで、ど真ん中に寝かされていた。

「デス……」

手足が綺麗な鉋物で繋がれていて、身動きができず、青い布で身体を覆い、椅子に座っていた天羽々斬が、こちらに気づく。

【目が覚めたか】

周りは蒼いドーム、東京ドームくらいか、あとはうつつすらと濡れている岩場の足場。不愉快極まりない状況、天羽々斬はイガリマのペンダントを見せる。

【悪いがこれは預かるぞ】

「返すデスっ」

そう叫ぶが、口を大きく開く天羽々斬。なにをと思つた瞬間、ごつくんと聖遺物イガリマは天羽々斬に食べられた。

【これでお前は戦えない】

「……」

翼と同じ姿だが、やはり人間じゃないと、戦慄する切歌。

辺りを見渡してもどこかわからず、仲間と連絡できない。

「私でなにする気デスっ!？」

【ゲーデと死合う】

間髪入れずに答え、はあと甘いため息をつく。

【早く死合いたいものだ・・・】

「背中から不意打ちしておいてない言うデスっ」

その言葉に、天羽々斬は首を傾げた。

【何を言う、隙を見せたゲーデが悪いし、彼奴は一手気づいていた。斬られたのはよけいなことをしたからだ。防御されたがな】

「・・・」

それはつまり、自分達を突き飛ばした所為で斬られたということかと、切歌はムツとなる。にを考えているんだと。

(そんなに仲がいい訳じゃないんデスから、気にしなくてもいいんデスっ)

確かに納得できる部分があるがと思いつながら、天羽々斬は切歌に気にせず、剣をうつとりとしながら見る。

【ゲーデ、早く来てくれ・・・私がお前を殺してやる・・・】

「解析結果を急げッ」

龍の行動に、司令室は焦り、ガラスの手紙を拾い集め、急いで解析などするが、

「これは」

念入りに粉々にされたうえ、別々の場所に捨てられたそれを回収して、直したが、肝心の場所がわからない。

その様子を見たハロルドは冷静に分析する。

「やられたわね。彼奴のことだから、わざとわかりやすいところに文章の欠片を置いて回収されている隙に逃走。場所の欠片は全く別の場所、しかも念入りにばらばらに捨てているでしょうね」

「変なところで知恵をつかいおつてッ」

弦十郎は怒鳴り、フレン達も黙り込む。

「彼一人で対処させるしかないのか」

「そんなことさせられるかッ、治療班が見たが、だいぶ失血しているんだぞッ。五体満足動けていること自体おかしいッ」

弦十郎の言葉に、リタはすぐに動く。

「セレナ、カナデッ、リュウはゲーデの力で無理矢理身体の器官を補助している可能性があるわッ。その反応を追って」

『了解ッ』

「エルフナイン、聞いたでしよつ。この世界で妙なエネルギーを何でもいいから見つけたしてつ、それが彼奴のはずつ」

「わかりましたつ」

「それは我々オペレーターにもお任せあれつ」

そう言い、彼らもまた動き、弦十郎はやれやれと思いながら、別の指示を飛ばす。

「装者達は現時点で別々に待機、各自、どこであろうといち早く動けるように、サポート班は装者達を運べるように準備に取りかかれつ」

こうして彼らもまた、動いている。調は静かに祈る。

(切ちゃん……)

切歌は静かに、横たわり、天羽々斬はうれしそうに鼻歌を歌っている。

「その歌は翼先輩のデス、お前が歌うなつ」

その言葉を無視しながら、天羽々斬は気にしない。

もう戦う準備をしながら、あとは待つだけだと、にしても遅い気もする。

(……だいたい時間が経ってる気がするデス)

夜から朝日くらい昇っていてもいいが、自分はどれくらい気を失っていた？

それが分からないし、あのあとのことがわからない。

「・・・少し下準備しすぎたか？」

そう言い、初めてやってしまったと天羽々斬は思う。

「下準備？」

切歌も聞き返し、ああと頷く。

「お前を助け出すために、ゲーデをおびき寄せた、こここの場所ではない場所にな。今頃は、コピーされたジルディアの民と混戦している頃だろう。まあそのあともわかった場所と混戦してるが」

「・・・」

つまり龍は自分を助けるために罠にかかり、罠をかくぐり、また罠に飛び込んでいくということか。

「ふ、ふざけるなデスっ。そんな疲労した龍と戦う気デスかっ!？」

「ああ、きつと私が一方的に勝つだろう」

そう言いながら、不適に笑う。

「だからどうした」

それは天羽々斬、翼と違うとはつきり分かる。

「・・・翼先輩の偽物のくせにッ、卑怯者デスッ」

苦々しく睨む仲、あつははと笑う天羽々斬。

【武士として当然だろう？ 相手を徹底的に弱らして斬る、剣として生まれたからには敵は必ず殺す。私は本物と違い、本当に身体は剣だツ。剣はただ、敵を殺せばいい】

そう言い、イグナイトモジュールの姿で、そろそろ来てもいいのに来ないゲーデに、天羽々斬は考える。

【さすがに殺されたと言うのは考えすぎだな。あれはその程度で終わらない、よくて……ああ】

天羽々斬は何かに納得して、切歌を見る。

そしてその上着を掴み、それを引きちぎった。

「ゲ、ゲスっ!？」

さすがに驚き、離れようにするが、天羽々斬はそれを押さえつけて、切歌に言う。

【もしかしたら様子を見ているかもしれないな、悪いがお前を傷付ければ出てくるかもしれないし、早まるかもしれない。傷付けさせてもらうぞ】

そう言いながら、どう傷付ける気かわからないが、身の危険を感じる切歌。

そのまま衣類に手を伸ばす天羽々斬。切歌は内心、心の中で助けを呼んだ。

瞬間、ドームの頭上から何かが入り込み、それは天羽々斬に斬りかかる。

【ようやく来たかゲーデっ】

「りゅ」

その姿はボロボロで、所々から血を流す、自分の嫌いな男だった。

「・・・龍・・・」

頭からも血を流し、ああくそつと眩きながら、剣を向けた。

「余裕ないんでな、さつさと終わらすぞ天羽々斬」

【ああつ、死合おうぞつ】

その瞬間、二人は一気に迫り、剣と剣がぶつかり合う音が鳴り響く。

とある一角で、精神を統一する翼。

(・・・このままでいいのか)

自分の偽物が、仲間をさらい、卑怯な手段を駆使している。

どうすればいい。そう考え込みながら、拳を強く握っていた。

(あれは私・・・この身を剣と言い聞かせ、意地を張っていた頃だろう)

自分の負について思いつくことがある。あのころの間違いが仲間を苦しめている。

翼はそう思っていると、通信が入る。奏からだ。

「どうした奏？」

『ん？ いや、翼のことだから、昔の自分がって一人で抱え込んでいるって思ってた』

それを言われ、黙り込む翼に、凶星かと呆れる奏。

『まあ、そうなったのは私の所為か』

「違うっ、奏の所為じゃないッ。私が勝手に、一人で抱え込んだから」

『それでもだよ、相棒に全部任せて死んだ私の責任だよ、つたく・・・』

お互い黙り込みながら、それでも奏は静かに、

『翼は彼奴、龍のことどう思う?』

「どうって・・・」

彼は言った、世界が滅んでいて欲しいと。

彼の仲間は言う、それでも彼は世界を守ると。

「私は少なくとも、彼は仲間を裏切らないと思う。どんなことがあると」

『ああ、そうだ。翼・・・』

そして語る、ライブの裏、響が抱えていた問題。それに僅かに関わった龍のこと。

それを聞き、愕然となる翼。

奏もまた、複雑そうにしていた。

『私たちはあのライブで、多くの人を守れなかった。そのあとも、な』

「・・・」

そして奏ははっきり告げる。

『けど、いまは違うツ。私はいまは生きてるし、翼も昔の翼じゃないんだっ』
「・・・ああ、そうだな」

そして静かに決意する。そのとき、ふとっ考える。

「・・・装者ゲーデは、私たちの偽物」

そうつぶやき、何か考え出す。

血が舞う、動くたび、剣を振るうたび、血が流れ、飛び散り、それが天羽々斬の身体にかかれば、それは天羽々斬の力となり、吸収される。

「3カ所もハズレ用意しやがって・・・」

そんな文句を言いながら、彼は動かない。動けない。

【あつはははは、だいぶ弱ったなゲーデッ】

そう言い、切歌に斬りかかる天羽々斬。それに切歌は気づいていた。

「私のことは気にせずに戦うデスっ」

「こいつは本気で殺す気だッ」

【ああつ、かばうのをやめればイガリマ装者を斬るツ】

そう宣言して、時には距離を取り、遠距離などを駆使して、龍を無駄に動かしたりと、わざと疲労させて戦わせている天羽々斬。

始めからトドメは刺さず、確実な瞬間が来るまで弱らせる気らしい。

【ああ楽しいつ、この瞬間が来るのを待っていたつ】

返事はせず、それでも闘争心は消えず睨む龍に、つばぜり合いをする天羽々斬。

【これぞ剣の本懐ツ、相手を殺すことこそ、剣として、もののふの本能ツ】

「違う……」

虫の息の龍は、天羽々斬を睨む。

「翼は防人だ、武士じゃねえ」

【本物なんてどうでもいい、剣はただ敵を斬ればいい】

そう言い構えた。

【どんな手を使ってもな】

それは後ろの切歌に呼びかけているのか、それを守る体制に入る龍。

「龍ッ」

「……」

呼吸をやめて、前の敵だけを見るが、周りに対しても警戒している。天羽々斬のことだから、目の前だけに集中するのはまずい。

(確実に致命傷を与えなければいけない)

そろそろまずい、血が、負が足りない。

呼吸するたび、喉が切れてる気がするし、左腕の感覚が薄い。

(なら)

そう考えつき、天羽々斬は斬りかかる。

真つ正面の斬りかかり、だがそれにすぐに左腕を剣から放し、戦迅狼破を放つ。

それで防がれたと思われた瞬間、

「・・・片腕はくれてやる」

いつの間にか肩に剣を置き、左腕を引つ込めることもなく、右腕で全力で切り裂いた。

自分の左腕ともども。

!!?

鮮血が舞い、さずかに天羽々斬も致命傷に斬られたが、続けざまに『瞬迅剣』を放ち、

傷口を貫いた。

【ぐっ、だがまだまだッ】

「・・・エイミング」

!!?

背後から炎を感じ取り、突き刺さる身体のまま見た。

切り落とされた左腕は、ゲーデの腕で、炎を集めていた。

【そんな芸道がッ】

『ヒイイイイトオオオオオオオ』

炎が爆炎と共に舞い上がり、天羽々斬を粉々に砕いた。

「な、なに考えてるんですかッ」

叫ぶ切歌に、腕を広い、繋げる龍。ゲーデの力で神経など繋げるが、ほぼ無理矢理であり、正直そうそうしたくない手だ。

龍はそっぽ向きながらなのも気に入らず、切歌は叫ぶ。

「こつち見るデスっ、話は終わってないデスっ」

「いやだって・・・」

「デス?」

そのとき思い出す。自分は上着をはぎ取られた。

つまりいま、下着が見えている。

真つ赤になり、口をばくばく動かし、龍はため息をつく。

「あとで文句聞くから、あとにしろ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・デス・・・・・・・・」

それを見ながら、龍は身体を動かすが、正直立っているのでやつとだ。

「ここから出るのに、力を使うしかないか」

「そもそも、ここつてどこなんデスか？」

「海底、日本海だ」

「・・・マジデスか？」

そう言うが、日本海付近にその手のドームを作り、巡った龍はああとしか言えず、そしてドームの壁は異常に堅い。

「まあ、剣あればいける」

「少し休んで助けを待つのは」

「場所を教えないから来ない」

「バカデスかあなたはッ!？」

頭部の血が目にかかり、片目を瞑る。仕方ないだろと雑談した瞬間、

強烈な殺気に気づき、剣で防いだ。

「なん・・・」

「・・・まだだゲーデ」

ニヤリと笑う天羽々斬に、切歌も驚いていた。

「どうしてまだ、さっきのは」

【偽物だッ】

刃が切歌に迫り、それを右腕で遮る。腕だけをゲーデ化させているが、それでも血が

僅かに流れ、離れる。

「イガリマ飲んだのはさすがに偽物でな、あれのおかげで、バレずにすんだぞ装者」
「イガリマ飲んだっ!? 反応を誤認してたのかくそっ」

それに切歌は青ざめながら、血を流す龍を見る。明らかに限界間際だ。

「ここまで弱らせれば問題ない、さあ死合いの続きだ。楽しもうゲーデ」

「ふざけやがって」

「ふふっ、もう立つことしかできないか。なら、ここで死ねえええええええ」

高く飛び上がり、斬りかかるが、正直剣が重いと初めて思う。

（こうなればやけだ）

全身ゲーデ化して斬られて、チェーンソードのカウンターを狙うかと力を全身から放つ。

だが、龍は気づいた。

（・・・あつはは）

それは最も最良であった。こちらを見ながら、天羽々斬は叫ぶ。

【終われッ 【千ノ落涙】】

無数の剣を見ながら、はっと腹で笑う。

「聞こえないのか」

!!?

そして放たれるのは、

『天ノ逆鱗』

巨大な剣が千ノ落涙をなぎ払い、ドームを切り裂き、乱入する。

それに斬られたが、僅かなものであり、身体をよけて、それに驚愕する。

【オリジナル・・・】

「・・・」

剣の真上に立つ防人は、卑劣な武士を見下ろしていた。

「すまない、送れた」

そう言つて現れる奏。ガングニールの槍を持ち、龍はようやく剣を手放して、その場

へ倒れ込む。

切歌が動き、それを支える中、翼は天羽々斬を睨む。

【どうしてここに】

「私が外道に身を置き、どう考えるか必死に考えた。結果からして当たりだったただけだ

天羽々斬」

それに驚愕する天羽々斬。忌々しく翼を見る。

「己……剣の分際で、防人などのたうち回る弱者の分際で、武士の戦いに口出しするなッ」
「……もののふだと？ 笑わせるな」

人質を取つてもなおそんなことを言う天羽々斬に、翼はイグナイトモジュールへと手を置く。

「貴様なぞより、彼の方がよほど、剣として、防人として、武士として立派だ。貴様はどれも名乗る資格なぞ無いッ。イグナイトモジュール、抜剣ッ」

黒い飛竜が舞い上がり、それを纏う翼。

頭部の部分が強化、ドラゴンの角のようなヘットギアと髪留めをつけながら、黒と蒼の剣を握りしめ、歌を紡ぐ。

「さあ、私の歌も聴けッ」

奏も参戦し、天羽々斬は忌々しく迫る。

切歌は僅かに身体全体で龍を支える。流れる血の暖かさや肌感覚から、彼は限界が近いとわかる。

「……」

いま上着がなく、下着だけだが、そんなこと気にしていられないほど、弱々しく呼吸する龍を心配する。

その目を見る。その目は3人の戦いを見ていた。

二人の歌に翻弄される天羽々斬。

だが決定打がないことに、天羽々斬は笑う。

【どうやらここまでするのにも時間がかかったようだな、息が荒いぞ】

「仲間と共に戦えば問題ない」

「ここであんたを倒すツ。翼の過去、いや、それを汚す偽物ツ」

二人に注意が向いている。

それを見た瞬間、

ゲーデは笑った。

瞬迅剣。ただ全力で放ったのだから、

全員が戦慄する。天羽々斬は身体を貫く刃に瞳孔を開き、ゲーデを見た。

それは笑っていた。

「忘れていたお前が悪い」

そして翼はすぐに、蒼と黒を纏いながら、離れたゲーデに続くように、剣を杭のよう

にして斬撃をたたき込む。

轟くは外道の武士が放つ雄叫び。こうしてまた一つの戦いが終わった。

「はあ、どうして私まで」

「そういうなって、人手が足りないから、あんたの監視も同時進行なんだ」

そう言つてミラに笑いかけるアルヴィン。レイアやエリーゼもまた、離れたキャンピングカーで待機していた。

「ま、会う訳じゃないからいいけどね」

ミラはそう言い、エルと共に食事の準備をする。これは非戦闘員には喜ばれており、ミラもエルと共に楽しそうにしている。

離れた位置で、龍の上着を着ている切歌は、調に泣き付かれて困っていた。

「切ちゃんっ、切ちゃん」

「調落ち着いてくださいっ、私なら大丈夫です」

「一番無事じゃねえのは俺だ」

朝日を浴びながら、海辺の太陽を憎々しく睨む龍。

セレナ達はむしろ龍を睨む。

「色々と言いたいことがあるけど、なんでキリカはリュウの上着着てるの？」

カノンノの目が笑っていないので、翼と奏に任せた。

「ああ、天羽々斬に上着はぎ取られて、下着むき出しだから、龍から借りてるんだ」

「デースっ?!」

俺死んだと思ったとき、セレナ、カノンノ、マリア、調がこちらを見つめる。瞳から光がないのは気のせいです。

切歌は気にしないで欲しいデースと止めてくれるが、できれば、

「トドメ刺す前に聞いてくれ、敵がなんなのかわかった」

「?!」

全員が驚きながら、龍は立ち上がる。その身体から血を流しながら・・・

「彼奴らは、いや、敵の正体は」

そのときだった。

時間は少し先戻る。

ミラは静かに料理しているとき、不意に、そう不意に、顔を上げた。

ゲーデを殺せ。

「・・・えっ」

ゲーデを消せ。

「・・・」

ゲーデを滅ぼせ。

いままで以上に身体が硬直する。

(い、いや……)

だが身体が、刃物を手に取る。そして、

「? ミミラ?」

エルが気づき、首を傾げ、ジュード達も気づく。

ゲーデを

「とめ、て……」

泣きそうな顔で、彼らにそう告げた。すぐに気づき、動いたが、

ゲーデを滅せよツ。

響達は、それを見て唾然となった。

「……………えっ……………」

いま自分の顔にかかったのはなんだろう?

なま暖かく、自分だけじゃなく、他の人にもかかっていた。

「……龍」

セレナが眩くと同時に、光の刃が消え、龍はその場に倒れた。

その光に先にいる人物は、車などを無視して、彼を貫いたことを知り、

真っ白な世界か真っ黒な世界か

真っ白な空間、彼はいるだけだった。

考えることもなく、いるだけだった。

はずだった。

僅かに何か聞こえた。真っ白な世界で、確かに聞こえた。

「……」

難しい顔をしたまま、モニターには二人の人物が写る。

腹を貫かれ、いまだ傷が癒えず、出血を止めるので精一杯で、意識が回復しない龍という少年。

もう一人は、完全に錯乱してあり、地下室で引きこもり、誰とも会おうとしないミラと言うデイセンサーである。

「すいません……」

苦しい顔をしていたのはジュード達だった。彼女の異変に気づき、止められなかった。彼女もそれを望んでいたのにもかかわらず。

「気にすることはない、我々も甘く見ていた。彼女にかけられた使命、いやもう呪いだ」
吐き捨てるように言う弦十郎。それにはここにいる関係者全員が頭に來ている。

ゲーデが瀕死だからだろうか、ミラの意識がほとんどおかしくなるほど、無理矢理使命を果たさせたのだ。おかしいと一言に尽きない。

「けど、リュウが言う正体ってなんなの・・・」

リタが考える。龍はどうやら敵の正体を知ることができたようだが、いまだ油断できない状態の龍。この状態では何もできない。

「傷の手当ては？」

クリスもさすがに聞くほどの状態であり、それにノワール、ディセンドー達は苦しそうに首を振る。

「あれはディセンドーの輝き・・・リュウの身体というより、存在そのものを貫いたの・・・自己回復以外、リュウは治せない」

それを聞き、黙り込む一同。そして、エルは前に出る。

「ミラは」

それに、また全員が黙り込む。

弦十郎はエルのためにも、ちゃんと言う。

「彼女の意志を尊重して、いま地下に隔離している。むろん、なにかあれば」

「なにかつてなにつ?!」 ミラを傷付けないでっ」

その少女の要望に、弦十郎は険しい顔になる。

だが、混乱し、錯乱する中で彼女は、

『誰か私を殺してっ』

そう言うほど、彼女はいま、自分の行動を止めたいと願っている。

「エル」

カノンノはそのエルを優しくできしめる。

「いまは難しい話ばかりだけど、大丈夫。リユウもミラさんも、なんとかするよ」

そんな理由も、確証もないことを言うカノンノ。だが、

「おう、彼奴のことだ。悪い刺されたってミラに謝るだろうよ」

「そうだね、それも問題ではあるのだけど。彼はこの程度で死ぬほど、身勝手じゃない

よ」

ユーリとフレンはそう言い、ハロルドはうつつふふふと笑う。

「それもそうね、彼奴のことは死ななきやいいっしょ」

「まあね、その前に無断で動いたんだから、しばらくベットの上がいいわ。それよりミラ

の方ね」

「だね」

リタの言葉に、セレナは頷く。クイツキーはエルフナインの頭の上で両腕をあげていて、みんなの様子に驚く一同。

「龍なら自分のことより、ミラさんのことを考えるよ」

セレナはそうみんなに言う。カノンノもうんと頷きながらエルを撫でる。

「いま大変なのはミラさんだよ、エル、ミラさんのこと大好きでしょ？」

「うんっ」

少しの迷いなく言うエルに、カノンノは微笑む。

「なら、ミラさんのために行動しないと」

「あのリュウ大先生なら、すぐに起きる、いや、あの性格なら必ず起きる。なにより敵さなんだってまだいるんだ、なにがあってもいいように、動かないとな」

彼らは信じている。龍は刺されたことを一切も気にせずに、そして必ず生きて現れると信じている。

その様子にノワールとイヤハートはほほえみ、その信頼感に、装者達も信じる。

「彼奴の」と信じてるんだな」

クリスの言葉に、クイツキーはジャンプして、頬スリし出す。

最初は恥ずかしかったが、仕方なくのど元を撫でてやりながら、クリスは微笑む。

「・・・」

地下室で座り込むミラ。

なにも言わず、頭の声を無視している。

(助けて・・・)

泣きそうになる。自分がゲーデを殺す存在。だから知らないが、いまはゲーデを殺すことしか考えられない。

だけど、それをしようとすると、エルの顔が思い出す。

きつと、彼を殺せば、あの子を傷付ける。

嫌だッ。だから、殺して欲しい。だけど誰もそうしてくれない。

「誰か・・・私を殺して・・・」

「そんなこと誰も喜びません」

響がそう言いながら、扉を開けて入る。その手に鍋を持ち。

「・・・ヒビキ」

「これ、エルちゃんか未来、私の友達に習って作ったスープです」

「・・・だから」

「ミラさんあのあとなにも食べてませんよね？ なにか食べないと体が持ちません」

「けど、私は、私は・・・」

「ミラさんっ」

響はミラの手を取り、力強く握る。

そして、

「平気、へっっちゃらですっ」

「!?!」

「龍さんはこの程度じゃ死にません、きつと謝る機会があります」

「謝るって、そんなこと」

「許してくれますっ、絶対、あの人はそういう人ですっ」

その言葉に、ほほに暖かい涙が流れる。

スープを置いて去る響。ミラはスープを見つめた。

「私は・・・私は」

頭の声はまだ続く。だけど、負けるわけにはいかない。この暖かいもののためにも。

その暖かい空間は、あざ笑うように、警報を聞くまで続いた。

「ノイズ反応多数ッ、同時にジルディアもどきも多数出現ッ。しかもここを取り囲むように出現しましたっ」

「予想できなかったのかくそっ」

弦十郎達は苦虫を噛むが、リタ達は冷静に分析する。

「元々防壁とか無意味なのかも、相手は空間移動できると仮説した方がいいわね」

「こつちの防衛機能完全無視かつ、全く役に立たないな俺達は」

そう言いながらも、すぐに装者達に連絡して迎え撃たせる体制を整えつつ、非戦闘員並び民間人などの安全確保と、フレンやユーリも動く中、エルの方は、

「ミラくんの料理で、未来くんと一緒にいる。カノンノくとイヤハートくんがいるから問題ない」

そう言いながら、彼らは動く。

「ちっ、数だけが多いな・・・」

クリスは悪態を付きながら、ノイズは簡単に吹き飛ばすが、ジルディアもどきだけは簡単にはいかず、苦戦する。

他の装者達は、イグナイトモジュールはゲーデの恩恵を受けており、ジルディアもどきも大量に倒している。

「!？」

そう思っているとき、歌が聞こえて、空を睨む。

「攻撃来るぞっ、マシマシだッ」

「デ、デスっ!？」

ミサイルの雨が、敵味方関係なく降り注ぎ、クリスはそれを同じ技で最低限防ぐ。その様子に、イチイバルは睨む。

「デメエ、邪魔すんじゃねえよホンモン」

「ニセモンツ」

偽物の手には鎖と首輪があり、装者達は構える。

「首輪と鎖って・・・」

「私のゲーデ用だつ、やつといいのあつたし、他の奴いなくなったから、飼うスペースもあるからな」

得意げに言うが、自分の偽物がそんな性格なのに、クリスは怒り、強く銃を握る。

「デメエ、人の姿形で妙な趣味持つてるんじゃねえよツ」

「ハツ、イガリマとシュルシャガナと一緒にするなツ。彼奴らのように盗撮したもん切り刻んだり、アガートラームのように衣類盗んだりしてねえよツ」

「待って、アガートラームってそんなことしてたのっ!？」

「つていうか、他の奴らゲーデの写真で。ドン引きすることしてたし」

「色々聞きたくないデスツ」

そんな叫びの中、イチイバルはイグナイトモジュールの姿になり、また虚空からノイ

ズやジルディアもどきが出てくる。

「彼奴も最終段階に入る気らしいからな、出し惜しみは無しだッ。ゲエデを食べさせてもらうぜッ、大事にするから安心しろッ」

「させないよッ」

響はマフラーを光へと変えて、なぎ払いながら突き進む。

それが合図に、戦闘が始まる。

イチイバルへの印象は、まずいの一言だった。

ノイズ達、ジルディアもどき達が完全に統一された動きをし、イチイバルの壁となり盾となり、銃撃がうまいくらいに放たれる。

(クリスにはない動き……)

仲間を盾にし、仲間を犠牲し、確実に敵を殺るスナイパーのように、時たまに無差別に攻撃して攪乱している。

響のように接近しても、格闘術もあるためか、防衛のみに集中して、ノイズ達で防いでから距離を取り戦う。

(他のゲエデ装者は自分の欲望に一直線だった)

ガングニールは獣、ザババは切り刻む、天羽々斬は死合う。アガートラムはわから

ないが、全員が欲望のまま動いていた。わかりやすいほどに動く。

だがイチイバルは逆に冷静沈着だった。

目的のためなら、確実性を取っている。

（力はゲーデの力を持つ我々の方が上、だが）

非戦闘員などがいる戦場の中、周りに気を配りながらの戦闘故に、うまく機能していない。

ユーリとフレンなどは避難班でがんばっているが、彼らもノイズは対峙できない。カノンノ達がそこをフォローしていると指示が出ている。

つまりイチイバルには自分達しか相手がない。だが攻めきれない。

「苛々するデスっ」

「やろう、うまく立ち回る・・・」

クリスも苦々しく睨むが、イチイバルはハツと笑い飛ばす。

「これが戦闘だツ、パパやママを奪った世界のやり方だホンモン」

「うるさいぞニセモンツ」

しかも時折、こちらの緊迫した糸を切るように、挑発してくる。

【第一私のゲーデの独占欲はお前からなんじゃねえのか？ お前って、好きなもん独占して監禁癖があるんじゃないやねえ？】

「私にんな趣味はねえッ」

「心を落ち着かせるんだっ、相手の思うつぼだぞっ」

【「そう言う天羽々斬のオリジナルだって、天羽々斬がゲーデの写真であんなことしてたんだ、お前もそういう趣味か？」

「な、なななんのことだっ」

「翼、貴方も」

【「一番はアガートラムだけだな」

「っ!!？」

そんな感じで戦局を混乱させたりと、完全に向こうのペースだ。

そんな感じだが、効かない子がいる。

「でっやああああああああああああ」

響がイチイバルに突貫し、それには舌打ちする。唯一妙なネタがないのは、響だけだったのだ。

【「やりずれえぞガングニールのホンモン。これでもニセモンだぞ、平気なのか殴るのッ
!？」

「許可はもらってますッ」

【「チッ」

そして戦いはノイズなどの数でうまく立ち回るが、じり貧だ。

【この男つ気ないもんでもがツ、ドーセテメエらは百合百合してればいいんだよつ。人の行動邪魔すんじゃないやねえツ】

「?」

【よくわかんねえ顔すんじゃないやねえよツ】

響の反応だけはイチイバルは読めないようであり、さっきの言葉は装者達の方に響くものであった。

「あのパチモンが・・・」

「必ずここで倒すわよ」

「・・・」

「デス・・・」

「・・・」

少しは気にしていたらしい装者達は、ノイズとジルディアもどきを倒しつつ、確実にイチイバルを押ししていた。

【いい加減に、遊ぶのはやめだツ】

そう言いながら、イチイバルはノイズを集める。

それは鏃のように鋭く、尖っており、イチイバルはそれを構えた。

響が向かおうとするが、ノイズやジルディアもどきが壁になる。

【させねえよ百合娘っ】

そんなこというイチイバル、全員が困惑する。

「お前の目的はゲーデではないのか？」

【アア？ 別に飼えれば死体でもいいし、冷凍保存すればいいだろ？ 散歩とかの必要

もないしな】

何を言っているのかわからない、わかりたくもない。

だが、イチイバルはミラの反応にいらだっていた。

【自分が改造されたくせに、役に立たない道具が、少しは役に立てよな】

「改造だどっ!？」

興味ないように、ああと頷くイチイバル。

【彼奴が時空の狭間で死にかけ見つけて、保存してたもんだよ。ディセクターとして変化できやすいからってな】

「彼女もセレナと同じ、元は人間なのツ!？」

その言葉に、イチイバルは興味ないと言う顔で構えた。

【あとは彼奴にゲーデを殺させればいい。さて、お前らは私と遊べ。女と遊ぶのは好きだろテメエら】

(なら)

光の剣を見て、覚悟を決める。

その剣を自分へと向けようとするが、

「だめっ」

その腕に張り付くのはエルだった。

「え……る……」

『魔神拳』

ジュードが辺りのノイズを吹き飛ばし、アルヴィン、エリーゼ、レイア、カノンノやイヤハートも現れ、エルは腕に張り付く。

「だめだよミラっ、そんなのだめッ」

「放してッ、このままじゃ私は、私はゲーデを殺すッ」

「そんなことはさせねえよッ」

アルヴィンは声を高くして叫び、ジュードも拳を構える。

「今度こそあなたを止めますッ、絶対に」

「私たちを信じてミラ」

「今度は私たちがいますッ」

「テイポ達にお任せあれ」

全員の思いを受け、カノンノやイヤハートも頷く。

その様子に涙を流しながら、それでも鳴りやまない声に、ミラは首を振る。

「どうして……どうして私を」

「……貴方は」

そのとき、ジュードの言葉を遮るように、イチイバルの弾丸が飛び込むが、イチイバルのものど知り、ジュードは殴り、アルヴェインは防ぐ。

「ハッ、テメエらその女の、前の知り合いかッ」

「前の……」

ジュード達の側にいる。歯がゆい顔で装者達はノイズと対峙している。

「そいつは時空の狭間で死ぬはずだったのを、彼奴がデイスンダーにしてやったんだよッ」

「!? それじゃ」

「私は……ジュード達の」

「いまはそんなこと関係ないっ」

みんなの驚愕の中、一人だけはつきりと声を上げるエル。

「ミラが『ミラ』だろうと関係ないっ、エルたちはここにいるミラを守るッ」

「ああそうだなっ」

アルヴィン達はすぐに切り替えて、武器を構える。

ミラはその様子に困惑しながらも、頭の声はまだ響く。

「死にかけてたところ、彼奴に救われたんだ。そもそも害悪殺すの邪魔すんじゃないやねえよ……」

禍々しいものを放つが、ジュードは拳を固めて、構える。

「救われたからって、この人がいやがることを強制することは間違ってますッ」

「そんなことさせるかっての」

「私たちの仲間だろうと、違うても関係ない」

「困っているなら助けますっ、それが友達、仲間ですッ」

「どんと来いや〜」

「私たちも」

「邪魔させてもらおうよッ」

カノンノイヤヤハートにも、睨みながら、ノイズとジルディアもどきを出すイチイバ
ルだが、彼らはひるまない。

「エルはミラさんとツ、僕らはッ」

「お前らを守るッ」

だから引かない。彼らもまた無謀に向かう。

「あの馬鹿者達はッ」

弦十郎はモニターを見ながら、デイセンダー班を見る。こちらもこちらで手こずっている。誰もミラ達の方に向かわせられない。

なによりユーリやフレンも同じようなことしている。全くと頭を痛める。

「・・・まづいわね」

リタはそうつぶやき、コンソールを操作して、エルフナインは同じ画面を見て青ざめていた。

「やっぱりかあのバカッ」

「オツラアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

その間に割り込むように、剣撃を放つ。バカがいた。

「おっいッ、お前が来るなッ」

アルヴィンも叫び返し、死にかけてがイチイバルと対峙する。

【ゲーデ来てくれたか、ご主人様が迎えに来てやったぞッ】

「お前はそつちかッ。そんな趣味はないッ、帰れッ」

龍を見たミラは焦る。自分は彼を貫いたのだ。彼だつて分かっているはずだ。

そう思っているとき、

「悪い悪い、死んでたわ。あとで聞くから謝るなよ。気にすることでもねえし」
そう笑いながら、剣を構える龍。

ミラは頭の中が真っ白になる。

「君、死にかけてたのに・・・思ってた以上の人だね」

「人じゃねえ、化け物だよ」

ジュードと笑い合いながら、武器を構える。

イチイバルもその様子に苛々していた。

「ふざけんな、ご主人様の言うこと聞けよゲーデッ。テメエもいま生きてるのはゲーデを殺すためだッ、そのために生きろよッ」

「こいつの生き方はこいつが決めることだッ、勝手なこと言うな」

ぶつかり合う戦いの中、龍はノイズを蹴散らす。

ジルディアもどきはジュード達が相手取り、その様子をエルと共に見る。

(・・・私は)

ゲーデを殺せ。いや。ゲーデを消せ。負けない。

ゲー負けないッ。

「私は負けないッ」

そして視界が真つ暗に染まる。ゲーデを消すと言う思考が頭も視界も覆い隠す。ミラの悲鳴が轟く中、それでも、

「負け、ない……」

苦しい、エルが泣きそうな顔でこちらを見る。

龍もまだ本調子ではない。死にかけていたのだからそうだろう。

(誰か……)

【ちつ、この役立たずがッ】

銃口が光り、まっすぐ向かってくる。エルをかばうように、突き放す。

それを静かに見ながら、ミラは目を閉じた。

そのとき、真つ暗な世界で光が差し込む。ある言葉と共に。

「」

それを短く、呟いた。

さあ、目を覚まして

「だれだ……」

君はいまから、世界の害悪を滅ぼすために生きるんだ

「世界の、害悪？」

君ならできる。だから、こっちに来て

差しのばされた手を見ながら、それを取ろうとしたとき、

「？」

真つ暗な世界が見えた。後ろにある、真つ暗な世界に、声は叫ぶ。

ダメだッ、そつちは君の世界じゃない。君がいるべき世界じゃない。

この手を取るんだッ。早く。

その言葉に、そうだと思った。

暗闇の世界は禍々しく、醜いと思った。

だけど。

『 』

その瞬間、手を払いのけて飛び出した。

光が交差した。

土煙の中、エルは呆然とその光景を見た。

「・・・ミラ・・・」

だが、エルは聞こえた。

「えっ」

ある時計から、僅かな鼓動を感じ取り、煙がはれた。

「……………」

息をのむ。それはジュード達もだった。

【誰だテメエはッ!?】

「……………」

一人ただずむそれは、黒い鎧に身を包み、側に槍を地面に刺してたたずむ。

ミラを抱き上げ、ゆっくり下ろす。

「……………」

その姿を見て、黒の世界が消える。

目の前にいる黒い戦士、彼の姿を見て、涙がたまる。

「任せろ」

彼はそう言い、槍を構え、龍は驚愕するが、なぜか、仲間と思った。

「ジュード、アルヴィン、エリーゼ、レイア」

彼らも呆然としていたが、その言葉に我に返る。

「行くぞ」

その言葉に全員が叫ぶように返事をして、イチイバルへと向かう。

その猛攻にイチイバルは驚いていた。

【お前、まさか、彼奴が用意してた、宿命を越えた者かっ!?!】

「関係ないッ、いまはお前を倒す」

「俺も忘れるな黒いのッ」

龍も参戦して、イチイバルを追い込む。

その姿にクリスは眺めていた。

「彼奴・・・ポロポロのくせに、まだ戦うのか」

その様子を見ながら、クリスは歯を食いしばる。

(・・・まだ彼奴の言った言葉は許せない)

だが、

「だけど、このまま彼奴を放っておく方が、もっとゆるせられっかつ」

そして赤い飛竜が舞い上がる。

【!?!】

イチイバルは驚愕する。それはクリスの変化、それを見て龍はなんぞと思いつながら苦笑する。

「どいつもこいつも、俺への評価間違ってる」

現れたクリスは足の装甲がドラゴンの足のように、赤と黒で強化されていた。

武器もまた、重火器であり、一気にぶつ放す。

弾幕の雨が降り注ぎ、ノイズも敵全て吹き飛ばす。

【くっそ、まさか、ここで彼奴が失敗するなん】

そう愚痴ついているとき、光の槍が刺さる。

「うっおおおおおおおおおおおおおおおお」

光の槍が乱舞して、最後の一撃が自分に突き刺さる。

【ぐっ】

『マター・デストラクト』

槍に貫かれ、粉々に砕け散るイチイバルに、槍の戦士は空を見上げた。

戦いが終わり、全員が集まる。

龍はその場に座り込み、セレナとカノンノが飛びついてくる。

「リユウっ」

それに（一部の反応に）恐怖を感じる龍。なにより体力がないために、やめて欲しい。切歌もすぐに近づいてきた。

「やっど起きたデスっ、どんだけ心配したと思ってるんデスカっ」

切歌は泣きそうな顔で、それでもうれしそうにしている。その様子のまま、ノワール

も参加して困ったことになる。

その様子に弦十郎達も現れる中、黒い戦士は静かにただずむ。

「君は」

「すいません、俺はまず」

彼はジュード達を見る。なにか言う前に、

「貴方の顔を見るのは、あの子が先に、名前もね」

そう言ったのはミラだった。

「ミラ……」

「全く……お互いしづといわね……」

その言い方に、ジュード達は驚く。

「まさか」

「貴方のおかげよ、彼奴の書き換えられた記憶を取り戻したのは……だけど、貴方と始めに会うのは、あの子よ」

そう言い、身体をどけて、一人の少女を見せる。

時計を持ち、降着する一人の少女。

それを見る戦士は、静かに、

「~~~~~♪」

鼻歌を歌う。エルはそれを聴き、体を震わせて、同じ歌を歌う。

そして静かに鎧を解きながら、少女に近づく。

涙を流す少女をだきあげ、優しい微笑みを見せながら、青年は言う。

「ただいま、俺のアイボー」

「おかえり……るどがー……」

その様子を見守る彼らは、状況はよくわからないが、龍は静かに、

「……居心地悪いな」

苦笑しながら、そう愚痴った。

さあ、終わりを始めよう

ルドガーと言う青年の説明を始める瞬間、空が割れた。

「……」

龍は驚かず、全員が空を見た。

そして一人の女性を睨む。

「どうして……」

一人の女性、髪は長く、透明と言っているほど綺麗な白、瞳も銀色であり、ただ空に浮く。その存在に、苛立ちを持っていて龍が前に出る。

「やって表舞台に出てきたか」

「ゲーテ、なんで彼は君側にいるの？ 貴方は光、正義であるこちら側なの？」

15〜6くらい、ワンピースにマントを羽織った少女は無表情に聞く。

ルドガーが首を振りながら、その槍を構える。

「君は間違っているんだよ、だからもうやめるんだ」

「やめる？ 私は正しいよ、だって私なんだから」

「……そういう性質か」

龍、ミラ、ルドガー達だけは相手がなんなのか知り、全員が集まり、武器を構える。

「誰なんですか」

「あれは」

響の言葉に、龍は少し間をおく。その間も空が割れ、白い世界、白い惑星が現れながら、空の様子を睨みながら言う。

「自然に、偶然に生まれた純粹のデイセンダーだ」

その言葉に全員が黙り、翼は剣を構えながら首を傾げる。

「自然にとは」

「言葉通り、偶然生まれた。ただ害悪を倒すための存在、それが彼奴」

精霊でもなく、救世主でもない。

精霊でもあり、救世主である。

それが目の前にいる、救世の精霊とも言える存在。

「救世だどつ、こいつがしていることがんなこと言えるかよっ」

クリスが叫び睨み、団員が構えるが、彼女はなにも言わず、ルドガーを見る。

「なぜ黒い世界を選んだの？ 貴方はまた傷付け、傷付き合うの？」

「・・・俺はミラを、エルを守る」

「なら私が正しい、守るためにいる、救うためにいる、助け出すためにいる」

歌うように空の星、白い世界を見る。

空中でくるくる舞うが、なぜかみんな攻撃しない。まるで攻撃してはいけないと心の底で思うほど、龍だけはなにか違う。

「・・・いい加減にしろ」

それはゲーデ故なのか、龍だけは違う。

「お前の正義は正義であって正義じゃないッ」

「私は正義から生まれた、私は正義、救い、奇跡。だから私は貴方を、全ての負を消さなくてはいけない。ルドガーの力を借りたかったけど、それでも私は諦めない。必ず貴方を滅ぼし、全てを救う。それが私」

それを聞きながら、なに言っているのかと思う面々だが、全員が黙り込む。

「ゲーデ、これ以上貴方は存在してはいけない。白の世界、全ての負を集め、滅ぼす私の空間に招待する。準備は整った、あとは貴方を消せば、世界の負を消せる」

「どういうことだっ!?!」

その問いかけには答えず、彼女は姿を消す。

空の異変に町はパニックになる故、彼らはまずそれを止めるために行動する。

「状況の確認よ」

リタの言葉に、司令室に緊張が走る。

町の方は世界中規模であり、いまオペレーターおよび、多くの機関が押さえ込んでい
る。弦十郎もその話しに耳を傾けながら、ルドガーは頷く。

「彼女は言ったとおり、たまたま生まれたディセクターなんだ」

「たまたま生まれたディセクター？」

首を傾げたノワール。ミラは続けて答えた。

「彼女は、世界の外から生まれた感情、誰かを思い、誰かを救い、誰かを助けたいと思う
純粋な思いから生まれた、純粋なディセクターというより、精霊に近いものよ」

「そんな奴が、どうして敵になるんだよ」

「世界から負を消すためだよ」

ルドガーの言葉に、意味が分からない装者達だが、ジュード達はなんとなくわかる。

「完璧な世界なんて存在しない。負もまた人の心、それを消すことはできない」

「ああ、だけど彼女は本能でそれを成そうとしているんだ。たとえ世界がとんでもない
ことになろうとも」

「はあ？」

全員に疑問が浮かぶが、龍だけはなんとなくわかる。

「全ての負をまとめて消すんだ、世界もなにかも巻き込んで、どんな結果が起こるか分

からない」

「その通り、彼女は結果だけをなそうとしている。過程もその後も何も無い。負だけ消そうとしているんだ。その結果、君が邪魔なんだ。同じ理由で生まれたゲーデが」

それに全員が龍を見る。龍は分かっていた。

「俺の生前、純粹、世界の悪意から偶然条件が整って生まれたゲーデ。向こうもか」

それら二人は頷く。

「二つの黒と白の純粹な存在か」

「ですけど、片方は黒から人へと変わりました。白は白のまま、黒を全て消すため、全てにあの世界、空間につなぎ合わせようとしています」

ルドガーの言葉に、エルフナインは手を挙げる。

「全てと言うと？」

「言葉通り、異次元、可能性、過去の歴史、全ての世界、その負を消すんです」

ですがと言葉を止め、龍を見る。

「その全てを防ぎ、それと繋がる負がいます」

「俺か」

原初の負がそれらを止めている。だが逆に原初の負を消せば、世界の負を消せるらしく、その話を聞きながら、もう一つの疑問を聞く。

「あの人の言っていることがわかりません。ミラさんの記憶を都合良くしたり、ジルディアの人達の偽物を作り出したリ」

「それは簡単だよ」

ルドガーは静かに、

「彼女は負を感じることはない。自分のしていることを悪とわからず、行動して居るんだ……」

全員が戦慄する。ミラは静かに、

「本当よ、それ以外の感情はない。あるのは人々の心の光、それだけ」

「なんじゃそりゃッ」

これ以上の話は無駄だと、叫ぶクリス達に告げてから、龍は宣言する。

「明日、あの空間に挑む。俺達がしなきゃいけないのは、間違いを認識できないバカを叩いて止めるだけだ」

それに全員が頷き、

龍を投獄させた。

「いいんですか？」

「リユウはああいつて、準備中に出向いたの」

「前科持ちだから、マリア姉さん、逃がさないように一緒に見張ってね」

「最後の戦い、私たちはどうすればいいんでしょうか。どう思います?」
「殴れ、以上」

そう即答する。響はえくと言うが、龍は、

「何度でも止めてやればいい、彼奴の善意は間違っているだけで正しい。それを直してやればいいだけだ」

「できると思うの? そんなこと」

マリアが真剣な顔をして聞くが、それにセレナが答える。

「できるじゃなくってするんだよ姉さんっ」

「アドリビトムは、敵を倒すんじゃないっ。間違いを正してあげるんだっ」

「うんっ、あとはそのためにがんばるだけだねノワールっ」

「おー」

アドリビトムメンバーはそう宣言して、ユーリもフレンも苦笑する。

「まあバックアップは任せな、俺らがいる」

「君達は君達の戦いを、後ろを任せてくれ」

「やってもらわないとなユーリ先生」

「わかってら〜リユウ大先生」

お互い笑い合う中で、響はその様子を見守る。

未来だけは何かに気づき、アドリビトムはディセクターを正すために、明日に挑む。装者達はそれを見ながら、明日を見る。

響は少し黄昏れていた。

「ひびきつ」

「未来・・・」

後ろから現れた親友に、少しだけ難しい顔をする。

「なに考えてるの響？」

「んくとね・・・」

未来に全て話す。

龍と自分の関係。龍はこの世界、人間に見切りをつけた理由は、自分だと知った。

それを静かに聞きながら、それだと思ふ。

「もう龍さんはそのことを気にしてないんだけど、私がね・・・」

「引きずってるんだね響・・・」

「・・・うん」

彼女は知らない、彼の戦う理由。

もう聞きたくない声がある。それを知る者は少ない。

「響はどうしたいの?」

「・・・もうできることはないんだよね」

苦笑しながら、あの光景を思い出す。楽しそうにしている龍。

もうやることはない。ないのだ。

「・・・あれ?」

少しだけほほに暖かいものが流れた。未来はハンカチで拭きながら、微笑む。

「悲しいな・・・」

本当はこの世界でしなけいけいけないことを、異世界に任せてしまった。

彼は失った、見失ったものを全て異世界で見つけた。傷付けたのはこの世界、自分な

のにと思う。思ってしまう。

「私・・・もうなにもできないんだよね」

「響・・・」

「だいじょうぶ・・・へいき、へっちゃら・・・いまだけだから、未来・・・」

未来へとだきつく響。その思いを未来が受け止めながら、優しく微笑む。

ルドガーはミラと共にキッチン室を占拠していて、リタは呆れながら、アルヴィンを見る。

「なあにしてるのよ」

「まあ、決着つけるんだよ。二人ともエルコンだから」

「そうなの」

エルは楽しそうに二人を見ながら、おいしい料理を作っている。いいにおいにエルフナインもはつふう〜と言いなながら休憩と共にやってくる。

「エルフナイン、異世界の方は？」

「他の世界でも同じ現象が起きてるようですよ。ですがアドリビトムや他の世界の方々ががんばってるようです」

「ハロルド達、私たちは異世界の混乱を収めるしかできない。なら、がんばるしかないわね」

料理はスープ対決であり、ミラはルドガーを睨む。

「お互いブランクがあるからって手を抜いたら斬るわよ」

「お手柔らかに頼む・・・」

苦笑するルドガーに、エルはスープを楽しそうに食べてる。ミラは得意げに腕を組み、ルドガーは苦笑する。

「二人ともおいしい〜」

「二人ともっ!? 私の方がおいしいわよっ」

「まあまあ」

「ミラさん落ち着いて」

そんなやりとりを見ながら、エルフナインは微笑む。

「はあ、色々あったデスね」

「そうだね切ちゃん」

切歌と調はお互い身体を休ませながら、気になることがある。

「・・・」

『あの叫びを聞くよりかはマシだ』

その言葉はなんなのかわからないが、なぜか重く、なぜか心に刺さる。

「・・・死ぬことよりも聞きたくない叫び・・・」

「・・・あの人にはあの人なりの重みがあるんデスね」

「なんの話だ」

クリスマス、響以外の装者の登場にデースと驚きながらも、調が説明する。

その話を聞き、翼とマリアはなんとなく頷く。

「最初はともかく、結局彼なりの世界を見て、世界を歩いたってことね」

「私も最初の言葉には含むところはあるが、龍は龍なりの正義があるんだということだ

な」

いつも世界の悪を見る龍。それでも、

「それでも、私は完全に悪と彼を見ることはできないな」

翼の言葉に、クリスはけつと言いながらも、同意する。他の二人もまた同意する。

「ま、まあ、私は助けられた恩があるデスから」

そう言いながら、少しだけ頬が赤いことに、むっと調は気づく。

「どうしたの切ちゃん？」

「デス？ どうしたんデス調」

「少しあの人の肩持つから」

「べ、別につ、なんもないデスよっ」

そのやりとりを見ながら、マリアはだけどと、

「だけどセレナのことだけは許さないわ」

「ま、マリア・・・」

「お前、目がマジだぞ・・・」

クリス達も若干引きながら、マリアは鋭い怒気を放つ。

「セレナを泣かしたら、次元を引き裂いてでも彼を討つわ・・・」

「ん？」

セレナはカノンノ達と共に、龍を見張る。龍は剣の整備しながら、
「どうしたセレナ？（あとはなにこの殺気）・・・」

「んく少し、姉さんが少しね」

そう言いながら、カノンノ達、アドリビトムメンバーと共に、明日を見る。

白い世界が広がる世界で、龍ははあとため息を吐く。

「一人で行くのはダメだよ」

「・・・」

龍の考えを見透かされ、龍は黙り込みながら、

「つたく、もういやになる」

そう思いながら、龍はゲーデの力で世界を見る。

白い世界に怯え、不安がる悲鳴。

それでも、

（響の声に比べれば届かねえ）

その言葉に怒気が、殺意が、全てが込められている。

いまだ許せない悲鳴。あの声が全てを、否、本当の自分を知らせてくれた。

壊す、滅ぼす、殺す、倒す。

絶望、嘆き、憎しみ、殺意。

それが己であり、根本である。

それらが血であり、肉体であり、魂であり、心である。

かわらない、変えられない。それこそ自分、それこそ劍崎龍、原初のゲーデだ。やつとわかった。あの瞬間、悲鳴を聞いて、己がなんなのか知り、そして、

「・・・？」

カノンノは首を傾げ、龍はははっと苦笑する。

受け入れた仲間達、世界に笑う。

「ねじ曲がった害悪と、純粹すぎる正義。どっちか勝つか・・・」

そう空を獣のような顔で睨みながら、

「決着つけようぜ、希望」

白い世界、白しくない世界。

空間の中、無表情に少女は願う。

「全ての世界に、平和を・・・」

こうして静かに、全てが始まり、終わる。

狂いきった黒と真っ直ぐ過ぎる白の激闘

異次元に渡るために、リタとハロルド、エルフナイン達が用意した転送装置（仮）に戦闘メンバーが集まる。

向かうは天空にある、別次元の白い世界。その世界に人々は恐れ、怯える中、モニターなど、他の機材も確認する。

「どうやら、他の世界、異次元の現状を知る組織は、モニターで様子を見ることはできるけど、手は貸せないわ」

リタの言葉に、そうかいとゲーデ状態の龍は言い。盗賊のノワール、剣士のセレナ。そしてガングニールの奏は槍を構え、ミラは剣を何度も振るう。彼女の剣はデイセンダーの力がある。

装者達もすでにゲーデイグナイトモジュールであり、その力に不思議な顔をする。

「不思議だな、この姿は通常のイグナイトモジュールよりも安心する」

「デスっ」

「負の力ってわりに、嫌な気分じゃねえよな」

「それは負もまた心の一部だからだよ」

ルドガーがそう言い、あとは彼が外殻になればゲートを開き、突撃するだけ。その言葉を聞きながら、ジュードは頷く。

「君達が自分の負を受け入れたから、その力が君達を守る力になったんだよ」
「私たちの負が、守る力……」

それに獣のような姿の龍を見る。なぜかいる未来や彼女と同じ、響の友達達が龍に驚くものの、怖いと言うのではないのに、龍は嫌そうな顔をしている。

響は龍を見ながら、カノンとセレナが龍を見ていることに気づく。

(どうしたんだろう?)

(……まさか、響さんもっ!?)

そんなこと考える中、龍の背に乗って戦ってみるデスとか言って話しかけてくる切歌に、調はむうと頬をふくらませて、龍を見る。

龍は微妙な負を向けられながら、ため息をつく。

「もういいだろ、そろそろ切り替えるぞ」

「だな……準備はいいかッ」

弦十郎の言葉に、全員が力強く返事をして、彼らは白い世界へと出向く。

『止めてやるッ、待ってろバカディセンサーッ』

真っ白な世界、建物らしき壁や床があるが、少し違うだけで、全てが白でできている世界。

綺麗な純白なのに、彼女たちは嫌な気持ちになる。

「なんでデスカね？ こんなに綺麗なのに・・・」

『綺麗過ぎるんだよ、不気味なほどにな』

「そういうもの？」

調が聞き返す。それにああと龍は告げる。

『響を考えろ、自分が色々やらかしたのに、忘れたようにつきまとってくるん。それを思い出せ』

「どういうことですかそれっ!？」

響の言葉を無視して、クリスはああと納得する。

その様子にセレナ達もまた、世界の様子を見ながら、

「たぶんこの先だね」

「うん」

デイセンダー二人の言葉に、まがい物達も頷く。

「記憶書き換えられたのは、その先よ」

「私もそれだけはわかる、ここに来たからか？」

ミラと奏はそう言い、ルドガーが槍を構えて見る。

「急ぐう」

歩き出す道は、途中で窓のようなものを見る。

それを見ると、それは星が移っていた。

「まるでテレビ番組で惑星見てるみたい・・・」

響の言葉に、龍は窓のように移る星々を見る。そして、

『これは実際ある世界だな』

「実際ある世界って」

『いま現在、この白い世界に侵略されてる世界ってことだ』

「・・・」

負を感じる、白い世界に不安な世界の声。

だが龍にとってはどうでもよく、その先に行き。青ざめる。

「・・・」

全員が黙り込む。まず部屋なのだが、壁らしきものに鉄格子、鎖があり、首輪がいつ

ぱいあり、ボールなど大型犬でも飼うような部屋だ。

『なんの部屋か考えたくない』

「同感だ・・・」

クリスはそう言い、そのときに進むと、今度は、

「ひっさ」

「・・・デス・・・」

滅茶苦茶切り刻まれた龍の写真。壁一面も刃物が突き刺さられたりと、怖い部屋である。誰の部屋かわかるのだが、もう目を閉じて走りたいと思う。

「この部屋の中にいなくてよかった」

奏がそうつぶやき、ミラもそうねと同意する。

というか、古い男性の衣類、下着もあるのだが、龍はなにも言わない。考えない。

『先に急ぐぞ』

「はい」

そして走る中で、扉が見え始める。

「あれは」

『よし』

そう言って、蹴り破りはいる龍。全員おいつと思ったが、そのまま流れ込む。

白いドームのような空間が広がり、その真ん中にクリスタルのような球体が浮かんでいる。それだけが水晶のような輝きを持ち、白色以外のものだった。

「・・・ゲーテ」

『よお、救世』

綺麗な少女だが、何も感じない。気持ちというものを感じることはなく、彼女の周りに白い剣と盾など、武器と防具が現れ、浮遊する。

「結局争うの・・・」

それを悲しそうに呟くが、表情は変わらず、感情も感じない。

悲しい、そう言った感情を感じられない響達は、背筋に冷たいものを感じた。

「終わらせる」

そう静かにデイセクターは言う。

「全ての世界から負の終わりを」

こうして白と黒は激突を始めた。

戦いの様子は、ルミナシア側も見えていた。赤髪の王子、ルークが舌打ちをする。

「くっそッ、見てるしかないのかよッ」

「黙れッ、お前だけじゃないッ」

同じ顔の弟はそう言うが、ジエイドと言う軍人がモニターを見ながら首を傾げ、キールと言う学者達も気づく。

「なにをしてるんだ彼女たちはっ!？」

戦いの中、攻撃は龍へと集中する中、彼女へ攻撃するのは、ルドガーと龍だけだった。その様子に、響達装者全員、困惑している。

「まるで自分達も分からない顔をしています」

すずと言う少女の言葉に、ヒスイもなんなんだと思い、モニターに叫ぶ。

「テメエらなにしているんだッ、その赤いのっ、持つてる銃は飾りかつ」

「・・・なにかおかしい」

クレスの言葉に、セレナもまた困惑している。

ルミナシアのメンバー達は静かにモニターを見ながら、その様子を見守るしかできなかった。

(・・・なんで)

響達は攻撃しようと歌おうとするが、なぜか歌が胸の奥底からわき上がらない。

なにより、握りしめた拳を、彼女に向けられない。

「ど、どうしてデスッ!?!」

「なんで・・・」

全員攻撃しようとすればするほど、なぜかできない。

それを見ながら、龍は一人納得する。

『・・・そうか、デイセンサーだからか』

「そうみたい・・・俺達がやるしかないのか」

「・・・」

少女は無表情で浮遊しながら、ゲーデを見つめる。

「私は救世の輝き、世界が望みし希望であり、正義。故に私は負けることはない。争わず、全てを助け出す」

『この状況でそれを言うかお前ッ』

どうやら彼女を攻撃対象にできない。することすら考えられないらしい。

その枠組みの中にいる響達もそれを理解するが、くそつと抗うクリス。

「なんでこんな」

引き金を引けず、切歌達もどうしてと思う。

「どうして争おうとするの？ 私は世界を救うためにしているのに」

「世界を救うためって、どうして龍さんを消さないといけないのっ!?!」

響の叫びに、彼女は真っ直ぐに答える。

「彼は負だから」

そう簡単に答えた。

「彼は怒りから、嘆きから、恨み、嫉妬、妬み、辛み、苦しみ、絶望。ありとあらゆる世

界の負より生まれた存在。いてはいけない、あつてはあらぬ。争いの元凶」
「それは違うッ」

翼は叫び、それに装者達も叫ぶ。

「確かに私らは最初、こいつが嫌いだった。けどな」

「だから死んでいい、消えていいって思ったことはないデスッ」

「好きになれないからって、消えていいとは思わないッ」

「貴様のしていることは間違っているッ。龍がいったいなにをしたという」

「負の原初、だからと言って、妹の大切な人、消させはしないッ」

その言葉を聞きながら、静かに首を振る。

「なにを言っているの？」

彼女はここで、本当にわからない顔をした。

「貴方達は争いを止めたいと願っている」

その言葉に、装者達やセレナ達は戦慄する。

「貴方達は絶望を止めたいと祈っている」

手に持つ武器、握る拳から力が抜けていく。

「貴方達は悲しみを消したいと思っている」

その瞬間、彼女たちは武器を落とした。

「だから私は戦う、貴方達の願いを叶えるために、それらを消す」
そう言って、彼女は銀色の瞳を黒へと向ける。

手には武器を持たず、静かに構えて、

「私は救世の輝き、世界の願いにより生まれた存在だからッ」

そして放たれる攻撃に対して、

黒は、

『だが届かない』

邪悪に笑った。

黒い魔剣のようなギザギザの刀身を振るい、より強大な負へと変わり果てる。

獣の雄叫びを上げ、人の原型などは無く、口を開く。その口は真つ黒な闇しかなく、紅

と金の瞳、刃の髪を振るい、白の奇跡を砕く。

『お前は真つ直ぐすぎる、俺を滅ぼせない』

紫の炎をまき散らし、獣は疾駆して希望を砕く。

『力無き希望は絶望に負け』

光の魔術が放たれるが、ただの雄叫びが、それをはじき飛ばす。

『祈りなど、無慈悲な力の前では何者にも届かない』

刃を向けて、槍のように盾へと突き刺す黒。

『ただ助かりたいだけのもの前に、癒しなど現れない』

それを砕き、初めて彼女を刀身で吹き飛ばした。

『そして憎しみは、けして消えず、燃え上がり続ける』

そして獣は最終形態のように、巨大な龍神へと変わる。禍々しき、魔なる存在。

『貴様は何も救えず、守れず、助けられることはなく消えるだけの存在だ』

原初のゲーデはそう言い、ルドガーはみんなをまとめて、その様子を見る。

「どつちが悪だよ……」

誰かがそう呟いた。

「くっ……」

悔しそうに立ち上がるディセンドーに対して、はあとため息を吐く。

『無駄だ、貴様じゃ俺は倒せない』

「私は諦めない」

『諦めなければ奇跡が起きる？ 無駄だ、奇跡は貴様には訪れない』

「……そのための」

そのとき、水晶が輝く。頭上の水晶を見上げ、ゲーデは静かに睨む。

『貴様ツ』

「準備はしたツ」

突如色の付いた鎖が装者達に放たれ、ルドガーが槍を振るう。

だが、それと共にジルディアの民が現れ、ルドガーを止めた。

「くっ」

「放せデスっ」

装者達がドームを六角形に囲むように、魔法陣に繋がれた。

その真ん中にいる龍は剣を構え、飛翔して水晶へと剣を突き刺そうとしたが、その前に歌が流れる。

「これはっ!？」

エルフナイン、司令室に戦慄が走る。

それは世界を壊す歌、ある錬金術師が歌った滅びの歌。

それをいま、装者達が歌い始めている。

「なっ」

ゲーデの鎧が消え始め、舌打ちしながら、地面に降りる。

そして水晶の中に眠る少女を見る。やはり、

「エルフナイン？　なんでエルフナインが水晶の中で歌う？」

そして無理矢理響達も同じ歌を歌う。それを聴くと、頭の中で雑音が頭の中をかき巡る。

頭痛なんて生やさしいものではなく、そこに白い閃光が放たれる。

「おっと」

それをよけながら、少女はルドガーを見る。

「いまのゲーデを貴方に倒して欲しかった」

そう呟きながら、装者達は口を閉ざそうとするが閉ざせず、歌を歌う。

「貴方を滅ぼすための準備はした」

そう言いながら、無数の武器を作り出す少女。

「まずは力を集めた。滅びの歌い手、次元に落ちた子、そして宿命を越えた者。滅びの歌を強化するための力」

その話を聞き、龍はかみ砕き考える。

つまり、水晶の中の子が歌う歌を強化するため、響達の力が欲しかった。

次元の落ちた子はミラであると知りながら、ため息を吐く。

「・・・負が使えない」

「この歌は貴方を滅ぼすための歌、本当は作り出した子達は歌いながら貴方を倒させるつもりだったけど、仕方ない」

そして静かに、水晶を背にしながら、

「もう終わりだよゲーデ。奇跡はいつだって、勝つの」

そう言い、無数の閃光が、雨のように放たれる。

フ・ザ・ケ・ル・ナツ

白い閃光を剣のみで切り伏せ、龍は前進する。

「なっ……」

「初めて感情らしい顔見せたな」

そう言いながら、ジルディアの民もまた向かってくるが、それもわかる。

「コピーか、んなもんに負けるか」

拳を握りしめて、粉々に砕く。これはもう身体能力のみ。それに驚愕する。

「そんな、どうして」

「どうしてだと？ 簡単だ」

白い閃光を切り伏せながら、龍は彼女を睨む。

「お前の正義は薄っぺらいを通り越して、意味がない」

ただ頑丈な剣だけで戦う龍に、セレナは微笑む。

いつだってそうだと、セレナは確信する。

「うん、お願い……私の、私たちのデイセンサー」

そう龍に告げる。

「お前は犠牲を持って、世界を救おうとする。その時点でお前は俺に勝てない」

そう言いながら近づく。それに驚き、攻撃を強めるが、届かない。

「正義とはこの世に存在しない。なぜならば、誰かを救おうと戦う者、それを見て悲しむ者がいる限り、絶対な正義など存在しない」

そう言いながら、どんなに攻撃の嵐が強まろうとも引かず、前に進む。

「お前は戦うのを、傷付けるのをやめた者達を戦場にかり出させた。そして、負を消す名目のもと、彼らを使い、他の世界までその手を伸ばした」

彼女は驚く。初めての感情、龍はただ剣を振るい続ける。

「お前は俺を滅ぼすために、犠牲を生み出そうとした。それがどれほど身勝手な偽善であろうとも、いな、それすらわからない。哀れな救世主」

そして静かに、

「俺を殺せるのはただ一つ」

剣ではなく、彼女の前に立ち、

「こんな俺を仲間と言う、優しい言葉だけだ」

そう言つて、チョップを頭に放ち、そのあと剣を担ぎ、飛んで水晶をたたき壊す。

その様子にセレナ、そしてカノンノは思う。

(やっぱり、貴方らしい・・・)

そう微笑みながら、そのあと、彼女に着地する龍を、セレナが殴つた。

「もう、龍っ」

「いやだつて、いちおう敵だろこの子」

そう言つて、お姫様だつて持つエルフナイン似の少女を床に置く。

「この子だれや? 見た限り、奏さんみたいに、肉体がないのを無理矢理器作つて押し込

めたようだが」

「それじゃ」

響達も近づき、その言葉に驚き、名前を呼ぶ。

「キャロルちゃんっ」

そう言つて揺さぶると、かすかに反応を見せて、目を覚ます。

「・・・」

そして響の顔を見て、

「見たくない顔を始めに見たな」

「キャロルちゃんっ」

うれしそうにだきしめ、だきくつくなと怒鳴るキャロル。

「とりあえずそつちはいいが、もう片方は気絶してるか」

顔に足跡を付けたディセNDERを見ながら、やれやれと思う。

「お前、このままでいいのか？」

だきつく響を睨みながら、キャロルは龍を見る。

「わかるのか？」

「俺は始まりからこいつの暴走を見てたからな、こいつがなんであり、そのためにあろうとしたかわかる」

それに龍はそうかと頷く。

「それって」

「こいつは善意で生まれたが、吐き気がするものだ」

キャロルは静かに、立ち上がり語り出す。

「希望、正義、慈愛から生まれたが、どれもこれもひどいものだ」

希望は自分は助けられ、救われる。といった、根拠無い何かに期待するもの。

正義とは、自分は正しいと思いがった思い。

慈愛は、結局のところ、相手を可哀想、助けなければいけないと言う、見下し。

「そいつはそういう、第三者や当事者の心境なんかお構いなしで生まれた、白と言う名前を借りた奇跡だ。俺が最も嫌うものだ」

自分しか救えないと言う正義感など、彼女はそういった思いから生まれた救世主。

「身勝手な人達の思い、こいつも被害者か」

「お前もそうとう歪んでるがな」

キャロルはそう言いながら、気絶している少女を見る。

「とりあえずこの世界を壊すか、そうすれば」

「またやるだろう、ここでこいつを殺せゲーデ」

「断る」

キャロルの言葉を見無視しながら、龍は剣を肩に置く。

その言葉になぜだと見ると、

「そんな、めんどくさいからだ」

「・・・」

世界すら巻き込んだ、偽善者の処罰を、面倒と言つてやらない龍。なによりと、

「こいつの偽善は世界が背負わなきゃいけないもんだ、無いことにするなんて許されな

いぜ」

そう言い、セレナはそれに微笑む。

みんなもまた複雑そうな顔をして、セレナは彼女を背負う。

「それじゃ、この子はアドリビトム、ルミナシアが預かりますっ」

「それでいいだろ、人手不足でマスターが喜ぶ」

「・・・いいのか？」

クリスがつい聞いてしまう。世界を巻き込んだ偽善者、それに対して、邪悪に笑う。

「文句があるなら滅ぼすだけだ、そいつを。俺は世界の害悪だぜ」

その言葉に、全員が啞然となるが、セレナは得意げに胸を張る。

「こいつは間違っていた。だが、悪として裁く権利は誰にもない」

そう告げて、ルドガー達は苦笑する。

「君は強いな」

「勝手なだけだ」

そういい、響だけその様子を見て、顔を伏せた。

彼は前を向いている。生まれた世界で傷付き、異世界で顔を上げて歩いていった。

それを直視できない。

「んじやま、外から壊せるか、色々・・・」

そう思ったとき、世界が揺れた。

「なん」

そのとき、龍以外の足下に魔法陣が現れる。

「えっ……」

響達は驚き、辺りを見渡す。どこかの岬、全員が警戒する。

空には白い世界が広がっていた。

「これって」

「!?!」

翼はすぐに通信機を取り出し、コールに出る。

『全員無事か?!』

「司令ツ、これはいつたい」

『わからんっ、だがいま君達が居るのは俺達の世界だ』

「なぜ龍はいないんデス?!?!」

セレナは背負っている少女を見るが、彼女は意識を取り戻していた。

「……何が起きてるの」

彼女も驚き、そのとき、誰かが現れる。

「!？」

弦十郎達、ルミナシア、グラニデを始め、異世界に関われる者達が驚く。

それは、

『我らは精霊、大儀であつた、戦士達よ』

「異世界の精霊達つ!？」

それに驚くセレナ、火の精霊は代表のように叫ぶ。

『貴殿らのおかげで、世界の異変を回避、そして災いを納めることができた。礼を言う』

「お礼……いや待てつ」

ルドガーが叫ぶと共に、何かが放たれ、火の精霊達は怪訝な顔でそれを防ぐ。

『……どういふことだ、他世界の原初の精霊よ』

『それは僕らのセリフだ、火の精霊』

「オリジンツ!？」

白い少年が、ある精霊達と共に現れる。その一人はミラと同じ姿をしていた。

「ミュゼ、ミラ」

「ごめんなさいルドガー」

「いま話している暇はないツ、そのこの精霊達の暴挙を止めるツ」

そう言つて飛翔するが、土の精霊が岩の壁を張る。

だがミュゼと言う精霊がそれを吹き飛ばし、剣を振るうが、水の精霊が槍で止め、時の精霊クロノスは、ルドガーのもとへと来る。

「やはり我らでは白い世界には関われない、白きディセンダーよ、お前の力でゲーデを呼び起せ」

「なにを」

「このままでは原初のゲーデはお前の世界ごと消えるっ」

全員が驚き、精霊を見た。

『いまこそ世界の始まりたる負を消す。それが世界のためだ』

「なにを」

そのとき、白の世界に違和感が、閉じていくように空間が閉じていく。

『白き世界へと幽閉し、負を永劫の時に閉じこめる』

「どうしてそんなことするんですかっ!？」

響の問いかけに、精霊達は、

『負だからだ』

そう答えた。

「ふざけんなっ、彼奴は精霊に頼まれて、異変を終わらせようとしてたんだぞッ」

クリスが銃器をぶっ放すが、風の精霊がその機動を変える。

精霊ミラは水の精霊と戦いながら、

「始めからそのつもりだったのだっ、彼女、純白のディセクターを利用して世界の負を消すのが目的。ルミナシアの精霊すら騙したんだっ」

そう言われ、全員が驚く。オリジンは、彼は怒りのように彼らを見つめる。

『君達は世界を越えて、別の世界に関わり、変える権利はない。それくらいわかるはずだろ』

『ならばこそ、全ての世界の汚点たる負を消すのに何が間違いがあるオリジンよ』

『むしろ貴様がおかしい。なぜ負を受け入れる』

『なら君達の世界はどうだ？ 負を否定して平和な世界かい？』

オリジンの問いかけに精霊達は黙り込む。

『それが答えだよ。負を一方的に否定した結果、世界はねじ曲がったんだ』

『違うッ』

火の精霊が燃え上がりながら、辺り一面に放つ。それに翼とマリアが剣を取り向かう。

「少なくとも、貴方達が敵なのはわかったわっ」

「龍は消させはせぬッ」

「・・・」

その様子を見ながら、少女はわからない顔をする。

「どうして争うの」

「どうしてって」

響は彼女は困惑しているのがわかる。その手を握り、響に聞く。

「貴方だって恨まれ、憎まれた。悲しい思い、辛い思い、苦しんだはず」

「それは・・・」

それに黙り込む響、そして言う。

「あなたは彼を目覚めさせた」

「えっ・・・」

それに世界が歪んだ気がした。

「貴方の心の悲鳴が、彼のゲーデを目覚めさせた。父親が居なくなつた日、心の悲鳴が

ゲーデを起こした」

「わた、しが・・・」

それに全員が驚く中、世界が閉じようとしていた。

「まずい、純白のデイセンダーツ、原初のゲーデをこの世界に呼べツ」

「断ります、彼は消えるべき存在です」

「違うっ」

響が叫ぶ。だが彼女は、

「彼がいなくなればもう悩む必要はない」

そう優しく、響に語りかける。

「もう父親が戻ってきて、家族が貴方は傷付く必要はないんだよ」

そう言った。

そのとき、響は、

「違うッ」

はつきりと響はやつと、答えを得た。

「私の所為で傷付けたんなら、私は龍さんとお話したいッ、向かい合いたいッ」

「どうして？ 辛いだけだよ、苦しいだけだよ？」

「それでもッ、私は逃げないッ」

そう叫び、響は彼女の手を取る。

「私は向かい合うッ、彼に向かい合いたいッ。だからお願いッ、龍さんを」

『させるかああああああああああああ』

炎の剣が、響達へと振り下ろされる。

「響ッ」

爆音が轟き、炎が舞う。

響は、立ち上がり、辺りを見た。

『なぜだ純白のディセンダーよ』

彼女は傷付き、精霊を見る。響を突き飛ばし、響を守った。

「・・・私は」

『まあいい』

いつの間にか世界の空が、元に戻っている。

全員がそれに、絶望した。

『これで原初の負は消えた』

『君達は・・・』

オリジンは悲しそうにそれを見て、精霊ミラとミュゼは精霊達を睨む。

『なぜ怒る？ 災いが消えたのだ、これで我らの世界もまた救われっ』

『愚かな、君達の世界の問題を、彼に押しつけて・・・』

オリジンはそう言うが、精霊達は聞かない。

セレナは呆然と立ちつくしていた。

そのとき、

凶戦士バルバトス、精霊が純白のデイセンドーが失敗したときに利用しようとした力が、いま裏目に出て世界に出現した。

自由の旋律

現れた男は手当たり次第に暴れ出す。

その男は凶戦士バルバトス、かの者はありとあらゆる次元と時空、可能性の中で英雄を殺し続けた実績を持つ、邪悪な人間だ。

そう考えていた精霊達は、驚愕している。

『バカな、ただの人間が、どうしてあれほどの力をッ!?』

大量の瘴気を全身からはき出し、斧を振るう。

この場所は人気の無い砂浜だが、海水が汚染され毒水へかわり、魚が次々と浮かぶ。木々は枯れていき、空気を吸う装者達は立っているのでやつとであり、いまバルバト

スと戦うのは、ルドガーとセレナ、ノワールの3人。奏とミラはみんなを守るために、参戦できない。

「くっ……」

顔を歪める翼だが、ミラ・マスクウエルを始めとした精霊達が結界を張る。

『どうなっている異世界のオリジン、なぜ人が、これほどまでの負を自在に操るッ!?』

『彼がそういうものだからだよ』

オリジンが困惑する精霊達に、装者達を始め、この光景を見るもの達に説明する。

『彼は君達がつなぎ合わせた負のたまり場に幽閉されていた、その場は原初とも言える自然発生させる、ゲーデやデイセンダー製作所と言っている場所だ』

『ああ、その場所で純白のデイセンダーは、ジルディアの民、装者のゲーデを己の力で作り出した』

その言葉に、彼女は目の前の光景に驚いていた。

精霊は間髪入れずに、オリジンに聞く。

『だがどれも彼女には逆らえないし、彼女以上の存在に昇華することは無い。負や宿命を越えた者以外、彼女に危害を加えられる存在はいないぞ』

『いや違うよ』

オリジンはそれを否定して、純白のデイセンダーを悲しそうに見つめる。

『彼はたまり場に放置されながらも意志保っていた。もう一度英雄と戦いたいと言う、願望だけでね』

『そんなこと、できるはずがない……』

彼女は驚きながら聞き返すが、それに首を振る少年オリジン。

『事実だよ、彼は君の力を越えて、原初のゲーデのように器を得てた』

白の世界が閉じ、一瞬、その一瞬負を抑える力が消えた瞬間を、彼は見逃さず、この

世界に顕現した。オリジンの言葉に、彼女は青ざめる。

「なら私が彼を倒します」

『君は無理だ、彼はディセンドラーにより生まれたゲエデ、だから』

戦いの中、セレナの一撃、ノワールの連撃はまるで意味が無く、ルドガーの隙を作るのでやつと。そこに連携が取れない彼女が入るのは悪手でしかない。

『いや、純白のディセンドラーならば、人間の負なぞ簡単に』

『いい加減にするんだッ』

オリジンの言葉に、精霊達は黙り込む。

ミラ・マスクウエルもまた、それに同意する。

「まだわからないようだな、この事態はそもそも人から生まれた負がいくらあろうと問題ない、そう判断したお前達が引き起こした異変だぞ」

『それは・・・』

言葉を失う精霊と彼女。

『・・・なぜだ』

精霊の一人がその状況下で、静かに戦いを見る。

『なぜ一人の人間風情の負が、世界をかえられる・・・』

そう呟く中、オリジンは静かに答える。

『負に大小なんか関係ないんだよ』

誰かを見下す、誰かの思いを無視する。

身勝手な者一人居るだけで、世界はこうもかわる。そうオリジンは告げる。

『僕はかつてオリジンの審判なる試練を、人類に与えた。答えとなるものが存在しないという、理不尽なものだ』

「オリジンの審判・・・」

ミラはかすかにオリジンを見る。その目には少しばかり殺気がある。

『僕の試練は多くの人の人生を狂わせた、人から見れば僕は悪だろう』

「どうしてそんなことをしたんですか」

響が苦しみの中で、オリジンに問うたとき、オリジンはすぐに、

『必要だから』

「えっ」

『僕の世界では精霊と人の間に深い溝があった。そしてその溝をほおっておけば世界はどつちに傾こうと、最後には破滅しかないことを知り、それを防ぐための試練だった』

オリジンは語る。たとえ争う関係になったとして、精霊が勝とうと、人が勝とうと待つのは破滅だと断言する。

それは、

『それはお互いの中に、自分とは違うものを否定する、心があるからだ』

『だからこそ負が害悪だろうッ、それがなければ』

『だが、負を害悪と言うのも、負だろう?』

それに精霊達は衝撃を受ける。

響達を静かに見つめながら、彼らに示す。

『彼女達は最初のゲーデと、自らの負を受け入れ、その力を守るために使っている。この力は世界にとって害悪かい?』

『そ、それは・・・』

『君達は負を利用しているように見えていたようだけど、ここからは彼女達の言葉がいいか。頼めるかい?』

オリジンの問いかけに、響達装者は、静かに精霊達と、彼女を見る。

『私は最初、パパとママが大切にされた世界を否定した彼奴が嫌いだった』

クリスはそう言い、切歌と調も静かに頷く。

「デスが、あの人にも、あの人なりの理由があるとわかったデスし、嫌いだからと言って、嫌いのままじゃないデス」

「まだちゃんとお話ししたい、少なくとも、ゲーデなんてことは、私たちには関係ない」
そう言われた後、マリアは少しだけ複雑そうに、

「私の妹、セレナの大切な人よ。嫌いだけど、あの子が大好きな人なんだから、邪悪ではない。それ抜きにしても、私は彼の存在が悪と思えないわ」

「ああ、仲間のために血を流す、防人の一人だ」

そして響は胸に手を置きながら、静かに、

「私は、あの人を嫌いにはなれません：私がゲーデを、あの人を傷付けたのなら、ちゃんと話がしたいです」

精霊達は愕然とする。なぜだと呟くことすら無意識に。

『なぜゲーデが受け入れられるツ!?!』

『ゲーデを受け入れてるんじゃないよ』

オリジンは、軽く微笑む。

『剣崎龍という、人間が受け入れられている。こんな風にね』

『戦迅狼破』

戦いの中、真横から現れたユーリに、バルバトスがムツと顔を変える。

「貴様か剣士イイイイイイイイイイイイイイイイ」

「僕もいるし、どうやら、もの凄いことになったみたいだよ」

「!?!」

「キュツキュウ エネルギーチャージ完了っキュウ」

「いくでも撃てますっ、ジエイドさん船長命令です」

「はい撃ちますっ♪」

仲間がいるのもお構いなく、敵へ一斉砲撃する船。

仲間達が一番驚いた。

『マダダ、マダオワラヌハッ』

煙の中、黒いもやを出すバルバトスに、無数の影が現れた。

『冥空斬翔剣ッ』

『皇王天翔翼ッ』

『極ツ光ツ剣ッ』

『斬ツ空ツ、天翔剣ッ』

『天翔ツ、蒼破斬ッ』

『セルシウスキャリバーッ』

『殺撃ツ幻竜陣ッ』

『レイディアント・ハウルッ』

『ピーストブロウッ』

『魔王灼滅刃ッ』

『天翔光翼剣ッ』

『アイン・ソフ・アウルッ』

『翔旺神影斬ッ』

『獣破轟衝斬ッ』

弾幕の中と共に、彼らは全員、各々の技をたたき込む。

「あのっ、馬鹿者どもがッ」

魔術師組が術式を完成させて、どうするか思案するが、

「お仕置きもかねてだッ、覚悟しろッ」

躊躇いもなく、

「ウチらもやるよッ」

「オッサン前衛じゃなくってよかつた〜」

矢弓もまた、放たれる。

「って、仲間ごとかよッ」

「ど派手だね〜」

奏も苦笑する、容赦ない攻撃の中、それでも前衛は駆ける。

「どうして」

彼女は困惑する。

それにアルヴィン達、ジュードも現れ、ミラ・マスクウエルは微笑む。

「どうやら、彼らは信頼しあっているようだな」

「しんらい?」

彼女はそうつぶやき、アルヴィンは苦笑する。

「攻撃はたから見れば、敵味方問わずだけど、不思議だな・・・絶対に当たらないって確

証できるな」

「相手と相手、すつごく信じ合ってますっ」

「うんっ、凄いやアドリビトムっ」

全員が信じている。不思議とそう感じる戦いに、オリジンは問う。

『君達の間から見て、彼らはどう映る?』

『・・・信頼しあっている、少なくとも、彼らから負は感じない、むしろ』

『むしろ、希望の、救世の輝きを感じるだろ?』

それに精霊達が頷く。彼女もまた、

『そして彼らは信じている』

そう、信じている。

『立花響』

「え、は、はいっ」

突然話しかけられた響に、オリジンは伝える。

『君に原初のゲーデがどんな存在か、教えてあげるよ』

それは暗闇の中で生まれた。

暗闇の中、顔を上げれば光り輝く星々があった。

それは自分を呪った。自分と言う存在を呪う。

それは自分を食い始めた。何度も食った、自分自身を。

上を見上げれば星々の輝きが見えた。それがまぶしく、それから逃げるように暗闇の中で、自分を食べ続けた。

自分を憎んだ、自分を嘆いた、自分に絶望し、自分で苦しんだ。

憎しみを憎み、嘆きに嘆き、絶望に絶望し、苦しみに苦しみ続けた。

そして、それは負を食べ続けた。

「はあああああああああああ」

セレナは戦う、自分の攻撃が意味もないのを感じながらも、それでも戦う。

『ジャマダコムスメえええええ、オレハタタカウ、エイユウウヲコロスうう』

「邪魔するよ、彼が来るまで」

「うんっ、諦めないッ」

カノンノと共に剣を構え、クロスさせて斬りかかる。

光の斬撃を片手で止めるが、それでも仲間達の援護は尽きない。

『ナゼオキラメナイいいい』

「それは」

「彼が来る前に終わらせたいからッ」

その真っ直ぐに告げて、彼らは駆けた。

『ありえんッ、永劫と化した空間から抜け出すことなぞできぬッ』

『それでも信じている、彼が来ると』

「・・・」

響がそれを聞きながら、オリジンは訪ねる。

『君はこのまま止まるかい？』

「えっ……」

響は白い精霊、オリジンに見つめられながら、考える。

「わた、しは……」

瞬間、翼達、装者のゲージデ装甲が外れた。

「時間切れかッ!?!」

響のも外れたが、響は動じずに考える。

「私は」

立ち上がった瞬間、黒い闇が吹き出す。

赤い目となり、響は獣のようにバルバトスを睨む。

『コチラガワニキタカ、コブシノ』

その言葉に、

「違うッ」

装甲が闇の中に入り込み、獣と化した響は叫ぶ。

「私は立花響だあああああああああああああああッ」

その瞬間、赤い目の響が闇から現れる。その全身が、ゲージデ装者の鎧に身を包み、髪

の毛も伸びて、背丈も少し大きく成長していた。

その目はゲーデと同じ、金と紅の瞳に変えて、

「彼が来る前に、貴方を倒しますッ」

そして黒い閃光が、凶戦士へと迫った。

「……もう無理かよ」

ユーリ一同、全員が歯がゆくその光景を見る。

二人して空を飛びながら、戦っていた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお」

『フンツヌウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ』

大気が揺れ動く中、響は真っ直ぐにバルバトスを見る。

『ドコカラソナチカラヲダスっ!?!』

「私、わかりましたっ。ゲーデの、原初のゲーデが人間になったのがッ」

そう叫びながら、蹴りが巨斧の一撃を塞ぐ。

「あの人は怒りに怒り、憎しみを憎み、悲しいことを悲しんでくれた。他人の、もして関係ないことでも」

拳と闇の槍が交差するが、拳が闇を粉々にする。

「あの人は、誰かのために怒り、憎み、苦しみ、悲しんでくれる……だから人になったんだっ、間違いないッ」

そうはつきり、満面の笑みで答え、拳を構える。

「だから私は、彼とまたお話ししたいッ。その前に、貴方を倒さない」と

その一撃に、全てを込めて、

「あの人が貴方と戦うからッ」

放つ拳、だがバルバトスが巨斧を折り下ろす。

激突する中、響の顔が歪む。

その瞬間、

『だから、勝手に美化するなッ』

そう言い、空間から巨大なドラゴンが現れ、バルバトスへブレスを吐く。

現れたそれに、精霊達は驚く。

空間を無理矢理壊して、それは現れた。

禍々しいのに、その背中を見たとき、装者達は安心する。

「龍さん」

『つたく、出るのに苦労した』

現れたのはもはやドラゴン。どっから見ても悪しきドラゴンなのだが、怖いとかそんなことはなかった。

『んじやま、歌い手なんだから歌え、アドリビトム面々、俺を足場ってツ、誰かすでに背中上ってるなツ?!』

巨大なドラゴンを足場に、第二ラウンドと言わんばかりに戦う準備する面々に、龍は文句を言うが、まあいいと呟く。

「みなさん、力貸してくださいッ」

「おおつ、異世界のかわい子ちゃんに頼まれちゃ、お兄さんがんばるしかないねえ」

「あんたはいつもがんなっ」

「がんばろうねっ」

全員が乗り、セレナが剣を構える。ゲーデに乗りながら、セレナが、

「・・・ちなみに、スカートの中見えてないよね?」

『見えるかッ』

そんなことをいいながら、そして、

『全力で飛翔するッ、その瞬間全部の力で殺れッ』

『おうッ』

「わかりましたッ」

原初の負が闇を、セレナが光り、響は歌を纏いながら飛翔する。バルバトスはそれを真つ向から砕くと、武器を構える。

そして、

一人の凶戦士と、仲間を持つ闇がぶつかり合う光景を見ながら、

「・・・私は・・・」

静かに涙を流しながら、

「ただ世界を、救いたかっただけなのに・・・」

間違いに気づき、膝をつく。

砕けた上半身がまだ動くが、闇のドラゴンが姿を化し、人の姿になる。

その姿はまるで、

『闇のディセクター・・・』

オリジンはそうつぶやき、バルバトスを砕く。

その後何名か海に見捨て、何名かを髪の毛で守るゲエデであった。

こうして、異世界の希望と絶望の争いは、希望の絶望が勝利を収めた。

黒の輝き

結局その後、全てが終わった後は関係なかった。

まずは事故処理だが、それは司令ごと、弦十郎達の仕事であり、自分達はあとは帰るだけだった。

それも、早急にだった。

『もともと無理して君達を呼んでしまった。その辺りはすまないと思っている』

オリジンはそう言い、むしろ早く帰らせないといけないからいい。アドリビトムは問題児が多いし、エステル王族達もいるのだから、響が遊びに連れて行きそうなのを止め、未知なる輝くに触れようとするもの達を止めたりと、大変だから一日も早い、もう帰りたい龍であった。

そして話を進めて、わかったことは、ミラはミラの世界に滞在できないらしい。

『彼女の身体は無理矢理作られた。ミラ、キャロル、奏、そして彼女は世界樹がある世界でしか、身体を維持できない』

「・・・そう」

短く返事をして、悲しそうにルドガーを見る。ルドガーはどうやら問題ないらしい。

「なぜだオリジン」

『簡単な話、彼はそういうものを持ち越えた存在だからだよ』

「そう言えば何でも在処よ」

詳しい話をすれば、時空間の問題らしい。

彼女は本来、青い色の世界のものを、赤い世界に呼んだようなものだと言明する。

別の世界の色が混じり合えば、世界は悪い方へとねじ曲がるが、白の力である彼女はそれをねじ曲げた。

だが、その根本たる世界が消えた以上、元々の世界、もしくはそれに近い世界にいないければ生きられないと説明する。

『次元と別次元の波長を合わせること、むしくば繋げることができればいいんだけどね・・・』

そう呟いた後、少しだけ微笑む。

全員が怪訝な顔をしたが、結果、こうなった。

ジュード、アルヴィン、レイア、エリーゼ、ティポ、エル、ルル、ミラ・マスクウエル、ミュゼはオリジンとクロノスの力でもとの世界に戻り。

ミラとルドガーは、ルミナシアで過ごすらしい。

「どうしてそうなるのよっ」

ルドガーに怒鳴り散らすミラだが、エルは、

「大丈夫、エルは一人で、二人の帰り待ってるからっ」

「エル……」

「そういうことだよ、ミラ」

その後、彼らは彼らで話し合いが始まり、彼女達の物語も終わりが近づく。

「……………」

「キャロルちゃんキャロルちゃん、お洋服買いに行こうよ」

キャロルはモニターでエルフナインの仕事を手伝っていた。

不機嫌な顔をしながら、響から顔を逸らす。

「つたく、俺まで生き返る形になりやがって……ご丁寧に、失った記憶やその後もあるし、あの女、一度分解してやろうか……」

かなり物騒なことを言いながら、響にまとりつかれ、ぶち切れるまで耐えるのであった。

「つてわけだから、向こうでトップアーティストでもなるわ」

「……そんな簡単に……」

翼達、司令官は奏の言い方に呆れながらも、奏はあつははと笑う。

「ん〜まあ、なんか、あのギルドの面々見てれば、なんとかなる気がしてな。あんまり深刻に考えられないんだよこれが」

「それもそうだね」

翼はそう言いながら、奏はだきつく。

「まあそういうわけだから、泣くんじゃねえぞ翼っ」

「ちよ、泣くわけないでしょっ」

そんなやりとりの中、彼女たちの物語も終わりに近づく。

ママ、ナスターシヤ教授の眠り場所で、セレナは長い話をしながら、一息つく。

「・・・疲れた？」

「姉さん、うん、少しね」

そう言いながら、切歌と調もいる。

実はオリジンから聞いた。自分の本当の役割、予想通り、龍を殺すための素材にして器、それ選ばれただけだった。

「・・・少し辛いな、好きな人を傷付けるために、いまこうしてここにいるの」

「・・・する気はないし、あれはほおっても問題ないわよ」

そう微笑むマリアに、セレナはうんと笑顔で返す。

「それじゃ、もつと向こうの話、聞かせてデス」

「切ちゃん、龍の話を聞きたい訳じゃないよね？」

「ツ!？」

セレナの反応に違うデスと答える切歌。マリアは今度ママの手みやげは彼の方がいかと、アガートトラームを強く握りしめる。

こうして、さまざまな思いを残したまま、異世界の人達は帰っていった。

「・・・はあ」

クリスはため息をつく、クイツキーとルルのベット。いまさらちゃんとしても、もう使うものはないのにと、ばかばかしいと思う。

ピンポンと誰か来たが、なんだと思う。ここに来る人間は、ほとんどチャイムを鳴らしたりしない。

扉を開けて、出てみると、

「にゃ、にゃ〜」

猫耳をつけたエルフナインがそこにいて、クリスはしばらく黙り込む。

「やっぱり、龍さんの作戦だめなんじゃ・・・」

「響が同意してたじゃないっ、怒る前に止めるよ」

「待ってくださいデスっ」

「・・・奥に上げられたよ」

そしてしばらく膝の上に乗せて、終始無言のまま、猫エルフナインを膝に乗せている。扉の隙間からその様子を見守る一同は何も言えず、ただ傍観していた。

「はあ・・・」

「マリア、少し気が抜けすぎではないか？」

マリアはセレナが帰ってから、ずっとこの調子であり、翼は心配するが、

「貴方にはわからないわ、私の気持ちなんて・・・」

「それは違うぞ。私とて、奏が」

「そうじゃないわよっ」

机を強く叩き、翼の襟を掴むマリア。

その様子に驚き、困惑する翼。

「どうして貴方の歌ばかり持って帰るのっ!? しかも限定品でポスターだって持って持ってっ、私も出してるのよセレナ」ポスター用意するわよっ。なのに、なんで自分の

お金じゃないと意味がないっていうのっ!?　そしてどうして翼のが多いのっ!?

「おち、おちつ、落ち着いてくれまり、マリアっ」

翼の首をかくかくと揺さぶりながら、マリアの愚痴は翼から龍へとかわり、収集がつかず、緒川が来るまで泣きそうなマリアであった。

「ただいま〜」

「お帰りなさい。試験はどうだった?」

「問題ないよアンジュ」

キャロル達は、試験のための鉱物をぞろぞろと机に置き、ミラはふうと息を吐き、キャロルは盛大に舌打ちする。

「なんで俺までこんなことを」

「まあいいじゃないか、そのわりに楽しんでたぞ」

「う、うるさいっ。とりあえず、これで正式なメンバーだな」

「えっ、まだだよ」

引率のセレナがそういうと、ルドガーを始め、新メンバー達がえっと言う顔をする。アンジュことマスターだけは、

「各国に戻った人達が多いから、次は急いで討伐クエストお願いね〜♪♪」

「だーくつそがつ、いいだろう。全部分解してやるつ、さっさと次のクエストを教えろッ」

「落ち着いてキャロル、怒るのはダメな負だよ」

彼女はそう言いながら、キョロキョロしている。まだ名前は保留されているが、いずれ綺麗な名前をつけようと決めている（本人は龍につけて欲しいと言って、カノンとセレナから戦慄された）

「・・・彼はどこ？」

「えっ？ きつとどこかでサボりだと思うけど・・・」

その場に龍はいなかった。

「・・・」

ある場所に来ていた。読んでいたと言わんばかりに、オリジンとクロノスがそこにいて、静かにたたずむ。

『世界樹は始め君の負を恐れていた、だから世界は近くにいるルミナシアに頼み込み、彼女をディセクターに変えて、準備した』

君を倒すその日に備えてねとオリジンは言う。

『記憶を消すのは忍びなかったから、奥底に封じ込めた。そして君はジルディア、ラザリ

スの声を聞き、まさかこの世界まで来た。ラザリスが君に気づいたのは、セレナで関わった所為だろうね』

「・・・」

そんな話を聞きながら、そうかと興味なく聞き流す。

『まあ、世界にとつて、君の性格は読めなかつただろうね。まさか記憶を失つたデイセンドーと、自分か何者か知らない君が、恋仲になるなんて』

「違う」

いま次元を越えてマリアの殺気を感じた龍。

オリジンはその様子をほほえましく見ながら、告げた。

『ルミナシアの世界樹からの伝言だよ、君の願いは、行けるようにするだけだそうだよ』
「問題ない」

それを聞きながら、前を進むとき、後ろを振り返る。

そこにいた少女に、ため息を吐く。

「カノンノ」

「なにしに出かけるの?」

少し不機嫌な顔のカノンノに対して、龍は静かに空を見る。

「・・・純白のデイセンドーが白の世界を作り、無理矢理世界を繋げられた」

ならばと思い返す。そして思い出した。

「俺には剣があった、人々を傷付ける武器で、刃物の代名詞、最も多く使われた武器である原初のゲート、その剣がある」

『彼はそれを取り戻して、異世界と異世界を行き来する術を得ようとしているんだ』

オリジンの補足を聞き、次元を切り裂き、次元を繋げる剣を得ようとする。そうなんだと納得した。

「みんなのため？」

「・・・」

そういうとき黙る龍に、微笑むカノン。

だが、どこか悲しそうな顔をする。

「私は手伝えない？」

『これから行くかの地は、黒の世界。人の身で出向くのは危険な場所だ』

クロノスがそう言うのと、龍は黒い闇を纏う。ゲートの闇、彼が彼である証のように、それを纏おうとする。

「そういうことだから」

「・・・そう」

それじゃと言って、だきつく。

「おいかの」

そして、紡がれる言葉を止められる。

カノンノは少しずるいかなと思いつながら、唇を放して、いたずらっぽく言う。

「戻ってきてね、私もセレナは、まだ聞いてないよ」

「.....」

負が消え、真つ赤な顔の龍。その場に座り込み、しばらく考え込みながら、切り替える。

オリジン達はその様子に微笑む。

「.....んじゃ、こんな終わり方壊すために、剣取ってくる」

「行ってらっしゃい♪♪」

それはずっと自分を食べていた。だって、居ちやいけないんだ。

悲しかった、自分が自分であることが悲しかった。

苦しかった、辛かった、もうわからなかった。

終わらない。ずっとそう思っていた。

憎い、自分が憎い。だから壊しつづけた、自分を。

いつもそうして、いつもそう過ごす。

そしていつしか剣が生まれたが、無視していた。
それを振るう日なんて、欲しくなかった。

「つて、前世の俺はこんなんか?」

それはそう言ってきた。同じと思つたけど、違うとも思つた。

「よお俺、悪いが、終わりが来たぜ」

それを聞き、本当か疑つた。だけど、なんだかそう思えた。

やつと悲しいのが、絶望が、苦しみが、辛い思いが終わる。

だけどそれは笑つた。

「違う、これからだ」

そう言つて、剣を取る。

「絶望も、悪意も、害悪も何もかも背負つて生きる」

だけど、その顔は上を向いた。

「だが俺のあり方は俺が決める」

絶望を壊す絶望、滅びを苦しめる滅び、害悪を殺す害悪。

「俺の名前は剣崎龍ツ、自由の灯火アドリビトムの黒い輝きツ」

剣を構え、俺は俺を見た。

その言葉を聞き、剣が自分を砕いた。

「んじや、またな俺」

「・・・」

真つ黒な世界に、暖かい日差しと、空が広がる。

それを見て、黒は初めて暖かいものを感じて、何かが頬を伝う。

「・・・きれい・・・」

『善悪なんてもの、はつきり決められない』

オリジンは世界を調整しながら、かの精霊達に告げる。今回の後始末、彼らは世界を見下ろしながら、オリジンは告げる。

『それを決めるのは、世界に、いまに生きる者だ』

その言葉を胸に秘めて、彼らは彼らの世界を見る。

今度こそ間違えない。そう思ったとき、

「手貸すか？」

意地悪な黒が現れ、精霊達は驚く。

禍々しい剣を持つが、彼らは静かに、

『いい、のか・・・』

「報酬は高いぜ、とりあえずテメエらの世界のんまいもん食わせろ」
そう言って、オリジンは彼と精霊達を見送った。

『言っておいで、黒の救世主』

きつとかわれる、そう確信しながら、調律を再開する。

物語はこうして幕を閉じた。

最終回は番外編・オチは決まってる

「というわけでルミナシアだあああああああ」

響はうれしそうに叫び、未来はもうと落ち着かせる。

切歌や調は異世界にはしやぎ、マリアはセレナにだきしめていて、翼は奏と握手しながら、龍はアンジュに報告する。

「とりあえず、問題児は隔離したぞ」

「ああありがと♪」

という話をしながら、それじゃとアンジュは微笑む。

「温泉に行きましようか」

『おぉ〜』

こうしてアドリビトム女性達は、温泉地へと、問題児など置いて飛び立っていった。

ある日のこと、ゲーデは無人島で温泉を発見。キュツポ達と共に、自分用にしていたのだが、ある日、女性達に見つかった。

結果奪われ、現代に至る。

「温泉かく気温もなかなか寒いし、なんだかちようどいいねっ♪」

「ああそうだな・・・」

キャロルはだきつく響を引き離しながら、船は近く無人島に移動する。

「だからって止められると思うなよ」

ゼロスを始め、温泉覗き隊が、無人島へと集まる。

「まさか前日三日前に行動するとは思わなかったぜ・・・」

ここにいる面々は名前は伏せておこう。だが願いは一つ。

いま前にそびえる山、その山頂にある秘湯に集まる女性達の素肌、それを拝むための
み考えながら、彼らはいま集まった。

「だが、準備は俺達の方が早い、こうなることを予測して脱出経路と進入経路、こちらの方が上手だったぜ」

「よしいくぜテメエら、敵にこつちの動きを悟られちゃ、意味がないぜ」

「おう」

ぞろぞろで動く中、いまはまだ昼間、視界良好。

そんな中、突如暗闇が吹き出す。

「!?」

「これは」

「負か? なんだこいつらっ!?!」

武器を構えながら、それを見る。武器を持つ者、獣のような黒い装甲に、それは龍ゲ―デ時に似ている。

まさかと、

「あの野郎、負で魔物を創造して、使役しているのかッ!?!」

番外編だからね。

「おいしいおいしい、いまの声だれだああああ」

「くっそが、だがオチは決まっているんだッ。なら俺達は突破できるはずッ」

何人か終わるけどね。

「また聞こえたぞおおおおお」

「幻聴だッ、気にしたら負けだッ」

「オッサン、ここで終わる気はないのよね・・・」

そして彼らは、負の魔物達に立ち向かった・・・

んなむさ苦しい戦いが眼下で起きている頃。

「うっわああああ、ひつろ〜いっ♪♪」

響達の前に広がるのは、青い空と海、澄み切った空気の中に湯気と、すがすがしいものであり、響以外にも顔が笑顔になる。

「クイツキー」

「よしよし、いいのか？ クイツキー私のところで」

「はいなっ、クイツキークリスマス好きだよっ。だから会えないぶん、いまいっぱい大好き伝えるっ」

そう言って、クイツキーをだきしめるクリスマス。

一部クイツキーを見る際、クリスマスのある部分を見て愕然となる者が現れたが、割愛でお風呂に入る。

「私が入るのは水風呂だから、気を付けて」

「セルシウスさん、わかりました〜」

エルフナインは返事をして、湯気が出ているところを気を付けてはいる。

「よあ響くせつかくだから、先代と現役ガングニール使いで、後で歌おうぜ〜」

「えっ、いいんですか奏さんっ」

それに翼も驚き、手を伸ばすが、その前に、手を上げるセレナ。

「あっ、なら翼さんっ、私とデュエットお願いしますっ」

「!!?」

マリアが衝撃を受けて、翼も突然のことに困惑している。

キャロルは呆れながら、水風呂に果物まで入れている面々に呆れながら、ゆつくりと身体を伸ばす。

「いい湯だな・・・」

「くつそつ、ヒスイつ、回復魔術をッ」

「ゼロス無事かつ、回復使える奴を守れッ」

彼らを追いつめる負の魔物達。なかなか強く、何人か心折れそうになっていた。

「諦めるなッ」

そこにレイヴンが前に出て、魔物の攻撃を防ぐ。

「レイヴンッ」

「ここで俺達が終わって何になるッ、いまここで志を捨てて、俺達は俺達でいられるかッ

!?! いなッ、断じて否ッ」

そして胸の機械へ手を伸ばす。それに仲間達は叫ぶ。

「待つんだレイヴンッ、さっきも使ったばかり何だッ、これ以上使えば」

「安心しろッ、この命・・・凛々の明星、仲間達のために、あるッ」

レイヴンの力は限界を超えても尚輝きを放ち、魔物達を撃つ。

それを見た男達は、武器を握りしめて走り出す。

「負けてたまるかあああああああああああああ」

「ソフイ、果物食べる？」

「えっ？」

「シエリア、私はこつち。その子シラベだよ」

「ああごめんなさい」

「ううん、平気です」

同じ顔と背丈も似ている二人に、切歌はデスデスといいながら現れた。

「二人ともよく似てるデス、あがるとき、洋服交換してみたいデスっ」

「シラベがいいなら」

「私も別にいいよ、切ちゃんも誰かの借りよ」

「私もデスカ、楽しみデス」

そんな話をしながら、キャロルは響を引き離す。

「いーいーかーげんにしろおおおおおおおおお」

「えええっ」

「つていうか、その手に持つカチューシャはなんだっ!？」

「猫耳カチューシャだよつ、エルフナインちゃんとお揃いだよつ」

「ふざけるなつ、誰がそんなもんつけるかつ」

「似合うと、いいでしょ、ねえねえねえねえねえ」

翼達も翼達で、お風呂を楽しんでいた。

「セレナ、こつちでの暮らしはどう？」

「楽しいよ、この前はエステルの国で、歌ったしね」

「エステルの国？」

「ああ、私はこの国で王族で・・・セレナさんに、コンサートをお願いしたんです」

「そうだったの・・・」

「うんつ、龍も・・・彼も聞いててくれてね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「くつそ・・・くつそおおおおおおおおおおお」

レイヴンは力無く倒れていて、それを支えるゼロスは空へと吼えた。

「レイヴンつ、お前」

「どうやら俺はここまでだ・・・俺を置いて、お前達だけでも」

「わ、私とて無理だっ」

「あつ、お姉ちゃん、二人のミラと一緒に歌いたいわね〜」

「いいね〜記事になるよっ」

「ピンク、衣装はピンクがいいですっ。調さんのシンフォギアみたいなピンクですよっ」

「そ、そんなこと言われてもっ」

山頂付近まで魔物を払いのけたが、アイテムが少なくなる。まさかここまで猛攻がひどいとは、思わなかった。

「だがまだ、あと少しだ・・・」

そう思ったとき、一人の男が背を向けた状態で現れた。

「若いな、わからないわけではないが」

「貴方は・・・」

警戒するが、彼はこの世界の人間ではない。男達はそう思い、Yシャツネクタイの男を見つめる。

彼は弦十郎、ここの守護を任されていた。

「だがうら若き乙女の入浴を覗くこと、俺が許すと思うか？」

「悪いが、俺達は本気だぜ・・・」

「ああ、たとえその時に地獄があろうと、そんな地獄を進んでやるよツ」
「諦めてたまるか」

「・・・そうか」

そして弦十郎は腕組みしながら、静かにたたずむ。

その姿はまるで、背中で語るように、

「ならば、容赦するのも野暮だなツ」

その瞬間、彼の背中が語る。その勢いはまるで・・・

「ん?」

「響、どうしたの?」

「未来くいま師匠が『弦十郎ビーム』とか叫んだ気が」

「? 教官みたいな人?」

ソフィがそう聞き返す中、カノンノとイヤハート、彼女とノワールを止めていた。

「彼とも入りたい」

「だめだよ」

そんなコントを見ながら、おでんを食べるパティなど、皆を見て、

「大きい者は大きいのう」

ある一部のものは気にして隠し、ある一部のものは、すくと自分を見て、それを憎々しくにらみつけた。

「ま、まさか・・・異世界の人間が魔術を・・・」

彼らの周りに魔物、弦十郎もいる中、弦十郎は静かに告げる。

「これで終わりだ」

ここで終わる。彼らはそう思ったとき、弦十郎はその場から急いで離れる。

無数の槍が彼がいた場所に振り落ち、それを放ったものを見た。

「お前は・・・」

「待たせたのう、皆々集」

「お前はテイルズオブレジェンディアのモーゼスツ!!」

そう、槍を構え現れた男は、ワールドでは出てこない男だった。

「こんなおもしろしげな祭り、ワイが出てこないと思っただか?」

そして負の魔物達は、鎖のようなもので消し飛ばす。それは風だった。

「この風は」

「穢れ相手に、俺が必要だろ?」

帽子をかぶった男が、ペンデュラムを構えながら、ニヤリと笑う。

「お前は、テイルズオブゼステイリアのザビーダっ!」

彼らは困惑した。本来作者はレジェンディアはともかく、ゼステイリアは未プレイに近いというのに、彼がここにいることに驚いていた。

「おいおい、いまはどうでもいいだろう?」

「いまワイらがしなきゃいけないのは、理想郷へ向こうこと、違つかッ!!」

その言葉に、男達は最後の力を奮い立たせる。

「まだ立ち上がる、だと・・・」

弦十郎も驚き構える中、彼らは言う。

「それに、ここに俺達がいるってことは」

「向こうにも・・・」

「あれ、グリユーンネさんも来たんですか?」

シャーリーの言葉に、あらあらと微笑む。

「わたくし達もご一緒してもよろしいでしょうか?」

「つていうか、天族見える人いるの、ここ?」

ライラ、エドナに続き、騎士としてクロエなどに、色々訪ねるアリーシャもいて、お湯に入る。

「はあ楽しいな、やつぱりお風呂はみくんなどで入ると楽しいね〜」

響の言葉に、一人の女性がむすつという顔をしている。

他の人達もいたが、ミラ・マスクウエルが言う。

「ベルベツト、君も入りなさい。女主人公として、助言くらいする」

「・・・」

静かに頷き、湯に入る。

『・・・うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお』

彼らから光り輝く力を放つ。

弦十郎はそれに押され、負の魔物達も後退する。

「マジかつ、っていうかえつ、マジかつ!!?」

「番外編だからってやっついていのかやっついていいんですツ」

「うおおおおおおおおおおおここで引けるかつ」

「ちなみにハーツもイノセント、テンペスト、不参加の面々もおるでええええ」

モーゼスの叫びに、彼らの志気が高まり、弦十郎は驚く。

「まさかここまでとは、だが、通すつもりは、ないツ」

「悪いが通してもらおうツ、たとえその先が地獄だろうがなツ」

男達は弦十郎へ向かっていく。その先が破滅でも、彼らは彼らであるために、戦うことをやめられなかった。

「……………長かった」

誰かがそう呟いた。

竹で作った脱衣所があり、その先に、女性の楽しそうな声が聞こえる。

男達は気配を消そうとしたとき、声が聞こえた。

「ねえねえ一緒に入ろ、リュウ」

それに全員が驚愕した。

「あのな、入れないって言ってるだろノワール」

「もう、龍を困らしちゃだめだよノワール」

「セレナ、そう言っただけで見るの、ずるい」

「み、見せてにやいよっ」

囁むセレナに対して、全員がえつと言ふ顔をしていて、風呂場からブラシを持って、発掘機を持つ龍が現れ、驚く。

「あつ、生きてた」

「おまつ、どうして」

「……」

哀れな者を見る目で、龍は男達を見る。

その声に気づき、女湯から声が、怒声が響く。

「バカなのつ、ちゃんと整備されてないところで裸になる分けないじゃないツ。水着着用風呂よここッ」

「まだ整備中だからね〜」

アンジュの言葉に、膝から崩れ落ちる男達。愚か者を見ながら、つるはしを置く龍は、ため息を吐く。

「むしろ俺の放った負の魔物や、弦十郎さんとよく戦うなお前ら」

「だってツ、だってツ」

血の涙を流す者もいて、龍は引く。

というわけで、

「いやだああああああああああ、何も見ずに倒されるのは嫌だああああ」

「せめて水着ツ、水着見せてくれツ」

「お兄ちゃんサイテー」

「ぐふっ」

「ヒスイiiiiiiiiiiiiiiiiiiii」

少し哀れだなど思いながら、龍はトドメ刺しました。

地面と共に落下する男達を見下ろしながら、キュッポ達もお風呂に入る。

「気持ちいいっキュ」

「はあ、俺は作業で疲れたよ」

「水着着て入るデス？」

少し意地悪そうに切歌が聞くが、それに領けば自分も彼らと同じ道なのでいいと首を振る。

よろしいと、アンジユも意地悪に微笑む。

（私はいいんだけどね・・・）

セレナの思いに、マリアは気づき、ギロツと龍を見る。

（まあ、盛大ではあるな・・・）

みんな美人だからなくと、水着姿の美少女美女達を見ながら、男はキュッポ達除けば自分だけなので、居心地悪い。

そう思っていたとき、

「わっわっ」

コレットが、竹の壁、倒れた際に盛大に破壊した。

「!? コレットっ」

龍達があわてたが、なにかふわふわしたものが顔にかかる龍。

「なん……………」

「……………えっ……………」

竹で作られた場所は更衣室であり、その壁が壊された結果、更衣室が壊された。

オチは決まっている。ラッキースケベがひどい目に遭うんだ。

「……………」

顔にかかった布状のものを手に取る。周りにも似たものがあり、何人かが真っ赤にして龍を見る。

「……………」

響が特に顔を赤くして、龍が手に持つものをすぐ取る。

そして響く、彼女たちのシンフォギアの歌。そしてゲーデイグナイトモジュール、フルパワーバージョン。

「あああ、当たると痛いこの拳っ、いまはそれで十分っ」

「……………」

「覚悟……………いいね……………」

「……………」

セレナとカノンノの目が怖く、これで貴方を殺せると、目が語るマリア。切歌達も歌う。奏か何人か納められないから、冥福を祈られる。

響は真つ赤な顔のまま、拳が迫る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ひでえ・・・・・・・・」

その後、龍はもはや語れないレベルでボコボコにされ、男達は戦慄するが、「それでもいいから見たかったです」

そう言った奴もまた同じ末路を辿る。

横になって白目で空を見る龍は、セレナとマリアのデュエットなどはちゃんと聞く。

「楽しいね」

彼女はそう言い、微笑む。

「・・・・・・・・」

その微笑みは、普通の女の子のようだったため、ため息を吐きながら、「ああ、これで終わりだ終わり」

そう言つて、これにて幕を下ろさしてもらいます・・・